

ほん ごう やま さき い せき
本 郷 山 崎 遺 跡
ほん ごう い せき
本 郷 遺 跡

2019

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
長門市教育委員会

序

本書は、長門市油谷向津具下地内にある本郷山崎遺跡・本郷遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、ほ場整備事業の実施に先立ち、山口県長門農林水産事務所から委託を受けて、公益財団法人山口県ひとづくり財団が長門市教育委員会と共同で実施しました。

発掘調査は、開発事業等に伴い、やむを得ず消失することになる部分について、関係機関が協議を行い、記録保存を図るために実施するものです。

発掘調査は、平成 29 年度の本郷山崎遺跡と、本年度の本郷遺跡の 2 か所で実施しました。

本郷山崎遺跡では、溝や土坑などの弥生時代前期の集落の遺構が確認され、これに伴い多量に出土した土器・石器等により、弥生時代前期における北部九州から本州への稲作伝播ルートにおいて重要な拠点集落であったと考えられます。さらに、掘立柱建物などの遺構から、本郷山崎遺跡周辺は弥生時代以降の古代から中世においても向津具半島において中心的な地域であったことも明らかとなりました。

また、本郷遺跡では古墳時代後半の集落跡が発見され、同時代の祭祀遺物等が多量に出土し、当時の人々の祈りの一端が垣間見えてきました。

本書が郷土の歴史や文化財保護への理解を深める資料として、また、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成に、御指導及び御協力をいただきました関係者の皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成 31 年 3 月

公益財団法人山口県ひとづくり財団
理事長 原 田 尚

序

本書は、長門市油谷向津具下地内での農業競争力強化基盤整備事業に係るほ場整備を行うにあたり、同地区内に所在する本郷山崎遺跡・本郷遺跡において、公益財団法人山口県ひとつくり財団と長門市教育委員会が、平成29年度から平成30年度にかけて共同実施した発掘調査の最終年度の報告です。

長門市は、多くの歴史・文化的遺産に恵まれた環境にあります。両遺跡がある向津具半島においても、弥生時代・古墳時代の遺跡が数多く点在し、近くからは、弥生時代中期のものとされる国指定重要文化財「有柄細形銅剣」も出土しており、今回の発掘結果も顧慮すると、当地における古代文化の隆盛が偲ばれます。

調査で得られた成果は貴重かつ重要であり、当時の人々の生活や社会を知る上で非常に大きな役割を果たすと考えております。これらの成果は、市民をはじめ多くの方々に広く公開してまいりたいと思います。

本書が考古学研究に活用されるのみならず、市民の郷土に対する理解と愛着を深める一助となることを願っております。

報告書刊行にあたり、調査にご理解とご協力をいただきました土地所有者、及び事業主体者である山口県長門農林事務所をはじめとした関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成31年3月

長門市教育委員会

教育長 松浦正彦

例 言

- 1 本書は、平成 29・30 年度に実施した本郷山崎遺跡・本郷遺跡（山口県長門市油谷向津具下地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとつくり財団が山口県長門農林水産事務所の委託〔契約名：農業競争力基盤整備事業 本郷地区 平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査業務、平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査業務 2 号、および平成 30 年度埋蔵文化財発掘調査業務 3 号〕を受けて、長門市教育委員会と共同で実施した。
- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター 長門市教育委員会		
調査担当	調査第一課課長	岩 崎 仁 志	
	同 主任	宮 下 孝 優	
	調査第二課主任	岡 田 裕 之（平成 29 年度）	
	文化財専門員	井 上 広 之（平成 30 年度）	
	調 査 員	森 田 孝 一（平成 29 年度）	
	同	大 矢 健太郎（平成 30 年度）	
	埋蔵文化財室長	国 近 昌 則（長門市教育委員会・平成 29 年度）	
	同	西 本 達 夫（同 平成 30 年度）	
- 4 本書の第 1 図は、山口県山口農林事務所提供の地図を元に作成した。第 2 図は、国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「阿川」「仙崎」「小串」「西市」を複製使用し、第 3 図は、2 万 5 千分の 1 地形図「阿川」を複製使用した。
- 5 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北、標高は海拔高度（m）で示している。
- 6 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell 方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SA	: 柵列	SB	: 掘立柱建物	SD	: 溝	SK	: 土坑	SP	: 柱穴	SX	: 性格不明遺構
----	------	----	---------	----	-----	----	------	----	------	----	----------
- 9 出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。
- 10 報告書作成の過程で、縄文・弥生土器は田畑直彦氏（山口大学埋蔵文化財資料館）、石製品の石材については赤崎英里氏（山口県立山口博物館）に御教示を頂いた。
- 11 資料の鑑定・分析に関して、放射性炭素年代測定（AMS 測定）、樹種・種実同定、花粉分析、プラントオパール分析などの土壌分析を業者に委託した。以上の成果は第 V 章に掲載した。
- 12 本書の作成・執筆は、岩崎・宮下・大矢が共同で行い、編集は宮下が行った。なお、本書の執筆分担は、次のとおりである。

I	宮下	II	大矢	III	岩崎・宮下	IV	岩崎	V	業者委託
VI	宮下・岩崎								

本文目次

I	調査の経緯と概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の概要	1
II	遺跡の位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	4
III	本郷山崎遺跡の調査成果	7
1	遺跡の概要	7
2	1区の遺構	9
3	2区の遺構	13
4	3区の遺構	23
5	4区の遺構	23
6	遺物	28
IV	本郷遺跡の調査成果	55
1	遺跡の概要	55
2	1区の遺構	55
3	2区の遺構	57
4	3区の遺構	65
5	4区の遺構	69
6	遺物	70
V	自然科学分析	85
1	はじめに	85
2	炭化材のAMS法による放射性炭素年代測定	85
3	炭化材の樹種同定	89
4	種実同定	90
5	花粉分析	93
6	プラントオパール分析	98
7	まとめ	101
VI	総括	107
1	本郷山崎遺跡	107
2	本郷遺跡	110

挿図目次

第1図	本郷山崎遺跡・本郷遺跡の調査 範囲	1	第37図	2区出土遺物実測図(10)	42
第2図	遺跡の位置と周辺の主な遺跡	3	第38図	2区出土遺物実測図(11)	43
第3図	本郷盆地と周辺遺跡	4	第39図	2区出土遺物実測図(12)	44
第4図	本郷山崎遺跡全体図	7	第40図	2区出土遺物実測図(13)	45
第5図	1区遺構配置図	8	第41図	3区出土遺物実測図	46
第6図	SD 1・2実測図	10	第42図	4区出土遺物実測図	47
第7図	SK 1～3実測図	11	第43図	本郷遺跡全体図	55
第8図	SX 1実測図	12	第44図	1区遺構配置図	56
第9図	2区遺構配置図	14	第45図	2区遺構配置図	59
第10図	SD 1実測図	15	第46図	SA 1～3実測図	60
第11図	SD 1断面実測図	16	第47図	SK 8実測図	61
第12図	SK 1～3実測図	17	第48図	SP43・44・52・54・87実測図	62
第13図	土坑群(西群)実測図	18	第49図	SX 1実測図	63
第14図	SK16実測図	18	第50図	3区遺構配置図及び湿地・ 流路土層略図	64
第15図	土坑実測図(1)	19	第51図	3区グリッド別ミニチュア土器 出土数	65
第16図	土坑実測図(2)	20	第52図	祭祀跡遺物出土状況図	66
第17図	土坑実測図(3)	21	第53図	祭祀跡遺物出土位置図	67
第18図	3区遺構配置図	23	第54図	4区遺構配置図及び溝土層 断面図	68
第19図	3区トレンチ・土層断面実測図	24	第55図	SK 1・SP 1～2実測図	69
第20図	4区遺構配置図	25	第56図	1区出土遺物実測図	71
第21図	SB 1・2実測図	26	第57図	2区出土遺物実測図(1)	72
第22図	SB 3～5実測図	27	第58図	2区出土遺物実測図(2)	73
第23図	SK 3・SP56実測図	28	第59図	2区出土遺物実測図(3)	74
第24図	1区出土遺物実測図(1)	29	第60図	2区出土遺物実測図(4)	75
第25図	1区出土遺物実測図(2)	30	第61図	3区出土遺物実測図(1)	75
第26図	1区出土遺物実測図(3)	31	第62図	3区出土遺物実測図(2)	76
第27図	1区出土遺物実測図(4)	32	第63図	3区出土遺物実測図(3)	77
第28図	2区出土遺物実測図(1)	33	第64図	3区出土遺物実測図(4)	78
第29図	2区出土遺物実測図(2)	34	第65図	3区出土遺物実測図(5)	78
第30図	2区出土遺物実測図(3)	35	第66図	3区出土遺物実測図(6)	79
第31図	2区出土遺物実測図(4)	36	第67図	4区出土遺物実測図	79
第32図	2区出土遺物実測図(5)	37	第68図	瓦実測図	80
第33図	2区出土遺物実測図(6)	38	第69図	暦年較正年代グラフ(参考)	88
第34図	2区出土遺物実測図(7)	39	第70図	花粉分析ダイアグラム	97
第35図	2区出土遺物実測図(8)	40			
第36図	2区出土遺物実測図(9)	41			

挿図目次

第 71 図	珪酸体分析結果	99	第 76 図	弥生時代の遺構（本郷山崎遺跡 1・2区）	108
第 72 図	本郷山崎遺跡の木材	103	第 77 図	長門北浦地域における弥生時代 前期主要遺跡分布図	109
第 73 図	本郷山崎遺跡の種実	104	第 78 図	祭祀関連遺構配置図	111
第 74 図	本郷山崎遺跡の花粉	105			
第 75 図	本郷山崎遺跡の植物珪酸体	106			

表目次

第 1 表	2区主な土坑一覧表	22
第 2 表	本郷山崎遺跡出土土器・土製品観察一覧表	48
第 3 表	本郷山崎遺跡出土石器・石製品観察一覧表	52
第 4 表	本郷遺跡出土土器・土製品観察一覧表	81
第 5 表	本郷遺跡出土石製品観察一覧表	84
第 6 表	放射性炭素年代測定結果	87
第 7 表	放射性炭素年代測定結果（暦年較正用、較正年代）	87
第 8 表	樹種同定結果	89
第 9 表	種実同定結果	93
第 10 表	花粉分析結果	96
第 11 表	珪酸体分析結果	99

図版目次

本郷山崎遺跡

- 図版 1 本郷盆地遠景（上空から）
- 図版 2 本郷盆地遠景（南上空から）
本郷盆地遠景（西上空から）
- 図版 3 遺跡遠景（南から）
調査区全景
- 図版 4 1・2区遠景（南から）
1・2区全景（北から）
3・4区全景
- 図版 5 1区全景（西から）
1区SD1土層堆積状況（西から）
1区SK1土層堆積状況（南東から）
1区SK3完掘（南西から）
1区SK2土層堆積状況（南西から）
- 図版 6 1区SX1と2区SD1
1区SX1土層堆積状況（北西から）
1区SX1遺物出土状況（南から）
- 図版 7 2区全景
2区全景（北東から）
- 図版 8 2区SD1全景（北東から）
2区SD1完掘（南西から）
- 図版 9 2区SD1中央部遺物出土状況（南から）
2区SD1中央部遺物出土状況（西から）
- 図版 10 2区SD1弥生土器壺出土状況（南から）
2区SD1石器類出土状況（西から）
2区SD1メノウ出土状況（南から）
2区SD1下層自然木出土状況（西から）
- 図版 11 2区SD1土層(b-b')堆積状況（南から）
2区SD1土層(c-c')堆積状況（南から）
2区SD1土層(d-d')堆積状況（北から）
- 図版 12 2区SK1・2検出状況（東から）
2区SK1土層堆積状況（南から）
2区SK1ドングリ出土状況（南から）
2区SK1完掘状況（南から）
- 図版 13 2区SK2検出状況（南西から）
2区SK2土層堆積状況（南から）
2区SK3土層堆積状況（南から）
2区SK3完掘（南から）
- 図版 14 2区土坑群（北西から）
2区SK6土層堆積状況（南から）
2区SK7土層堆積状況（南から）
2区SK10土層堆積状況（南から）
2区SK11土層堆積状況（南から）
- 図版 15 2区SK64土層堆積状況（南から）
2区SK64完掘（西から）
2区SK10完掘（西から）
2区SK20完掘（西から）
2区SK11完掘（南から）
2区SK34完掘（西から）
2区SK16完掘（南東から）
2区SK16土器出土状況（南東から）
- 図版 16 3区全景（南西から）
3区南西部土層堆積状況（東から）
- 図版 17 4区全景
4区SP57根石検出状況（南東から）
4区SP56詰石検出状況（東から）
4区SP100根石検出状況（東から）
4区SP69根石検出状況（北から）
- 図版 18 本郷山崎遺跡出土遺物（1）
- 図版 19 本郷山崎遺跡出土遺物（2）
- 図版 20 本郷山崎遺跡出土遺物（3）
- 図版 21 本郷山崎遺跡出土遺物（4）
- 図版 22 本郷山崎遺跡出土遺物（5）
- 図版 23 本郷山崎遺跡出土遺物（6）
- 図版 24 本郷山崎遺跡出土遺物（7）
- 図版 25 本郷山崎遺跡出土遺物（8）
- 図版 26 本郷山崎遺跡出土遺物（9）
- ### 本郷遺跡
- 図版 27 本郷盆地と油谷湾（北上空から）
本郷遺跡及び本郷山崎遺跡遠景（南上空から）
- 図版 28 調査区全景（南上空から）
調査区全景（上空から）
- 図版 29 調査区全景（西上空から）
調査区全景（東上空から）
- 図版 30 1・2区全景（南西から）
3・4区全景
- 図版 31 2区全景（西から）
2区SA1・2全景（西から）
2区SA3全景（西から）
- 図版 32 2区中央部柱穴群
2区SK8完掘状況（西から）
2区SP54土器出土状況（南西から）
2区SP44土器出土状況（東から）

図版目次

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|---------------------|
| 図版 33 | 2区 SP43 土器出土状況（西から） | 図版 38 | 4区 SD1 全景（北東から） |
| | 2区 SP87 土器出土状況（南から） | | 4区 SD1 土層堆積状況（南西から） |
| | 2区 SP52 遺物出土状況（南から） | | 4区 SD2 全景（北西から） |
| | 2区 SP100 土器出土状況（西から） | | 4区 SD1 杭列検出状況（北から） |
| 図版 34 | 2区 SX1 全景（南西から） | 図版 39 | 4区 SK1 土器出土状況（南西から） |
| | 2区 SX1 集石と土器出土状況（北から） | | 4区 SK1 土器出土状況（南西から） |
| | 2区 SX1 集石下の土器出土状況（南から） | | 4区 SP1 土器出土状況（北から） |
| | 2区 SX1 下層土器出土状況（南から） | | 4区 SP2 土器出土状況（南から） |
| 図版 35 | 3区祭祀跡全景（北から） | 図版 40 | 本郷遺跡出土遺物（1） |
| | 3区祭祀跡土器出土状況（北から） | 図版 41 | 本郷遺跡出土遺物（2） |
| 図版 36 | 3区祭祀跡土器出土状況（北から） | 図版 42 | 本郷遺跡出土遺物（3） |
| | 3区祭祀跡土器出土状況（北から） | 図版 43 | 本郷遺跡出土遺物（4） |
| | 3区祭祀跡土器出土状況（北から） | 図版 44 | 本郷遺跡出土遺物（5） |
| | 3区祭祀跡土器出土状況（南から） | 図版 45 | 本郷遺跡出土遺物（6） |
| 図版 37 | 3区祭祀跡須恵器・ミニチュア土器出土状況
（北から） | 図版 46 | 本郷遺跡出土遺物（7） |
| | 3区祭祀跡ミニチュア土器出土状況（西から） | 図版 47 | 本郷遺跡出土遺物（8） |
| | 3区祭祀跡土師器鉢出土状況（北から） | 図版 48 | 本郷遺跡出土遺物（9） |
| | 3区祭祀跡ミニチュア土器出土状況
（北西から） | | |

I 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

山口県長門農林水産事務所は、長門市油谷向津具下における農村の活性化や農業の競争力強化を図る目的で、農地整備事業（経営体育成型）および農業競争力強化基盤整備事業を進めている。山口県教育委員会は、事業の実施に先立ち、対象地内の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成27・28年度に試掘調査を行った。その結果、土坑や柱穴等の遺構のほか、弥生土器、土師器や瓦質土器等の弥生時代から中世の遺物を確認し、弥生時代から中世を中心とする広範囲におよぶ集落跡の存在が推定されるに至った。これを受けて、山口県教育委員会と事業主体である山口県長門農林水産事務所は遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事により遺構が削平される約6,900㎡について、平成29年度から記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成29年度は、本郷山崎遺跡（4,088㎡）、平成30年度は、本郷遺跡（2,785㎡）について、いずれも山口県長門農林水産事務所の委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターと、長門市教育委員会が合同で発掘調査を実施した。調査の結果、本郷山崎遺跡では弥生時代前期から中世にかけて、本郷遺跡では古墳時代から中世にかけての集落跡の様相がそれぞれ明らかとなった。なお、本郷山崎遺跡・本郷遺跡については、それぞれ調査区が4地区に分かれることから、東側から1区、2区と呼称している。

2 調査の概要

平成29年度の本郷山崎遺跡の調査は事前の諸準備を経て、平成29年10月16日には発掘作業員説明会を実施し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図り、同日には旧長門市立向津



第1図 本郷山崎遺跡・本郷遺跡の調査範囲

具小学校の用地内に仮設事務所を設置した。

調査は10月10日から11月8日まで重機による表土除去作業を実施した。表土除去と並行して、10月26日から機材搬入を行い、発掘作業員による壁面清掃や客土除去、遺構検出作業を開始し、業者に委託して国土座標杭の設置を行った。27日から2区の調査に着手し、遺構の掘り込みを行い、11月21日からは調査員によるトータルステーションを用いたグリッド実測図の作成を開始した。調査員が必要に応じて、各遺構の実測図作成や記録写真撮影等を行い、2月23日には空中写真撮影を実施した。2月24日には現地説明会を開催し、地元住民を中心に約120人の方々に参加していただいた。遺構の掘削・実測図作成等の終了後、3月15日には発掘作業員の稼動を終了した。同日に機材の搬出、16日にすべての現地作業を終了した。出土遺物は、調査中より随時、山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の整理作業を進めて、調査後は出土遺物の実測図作成および写真撮影を行い、本報告書作成のための資料整理を行った。

平成30年度の本郷遺跡の調査は、平成30年5月10日から6月4日まで重機による表土除去作業を各区で実施した。5月16日には発掘作業員説明会を実施し、5月23日から機材搬入を行い、6月4日から4区の遺構検出を行い、各区の遺構検出により調査区全体の遺構分布状況を把握し、業者による国土座標杭設置に続いて、グリッド測量図の作成を行い、遺構の掘り込みを開始した。9月8日には現地説明会を開催し、地元住民を中心に約50人の方々に参加していただいた。9月22日には空中写真撮影を実施し、10月4日には発掘作業員の稼動を終了した。同日に機材の搬出、遺構の実測図作成等の終了後、24日にすべての現地作業を終了した。なお、調査期間中、報告書作成に向け、本郷山崎遺跡の資料整理も並行して実施した。

出土遺物は、随時、山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の整理作業を行い、炭化材や採取土壌から良好な試料を抽出し、業者委託による自然科学分析を実施した。



重機による表土除去（本郷遺跡）



作業風景（本郷遺跡）



作業風景（本郷山崎遺跡）

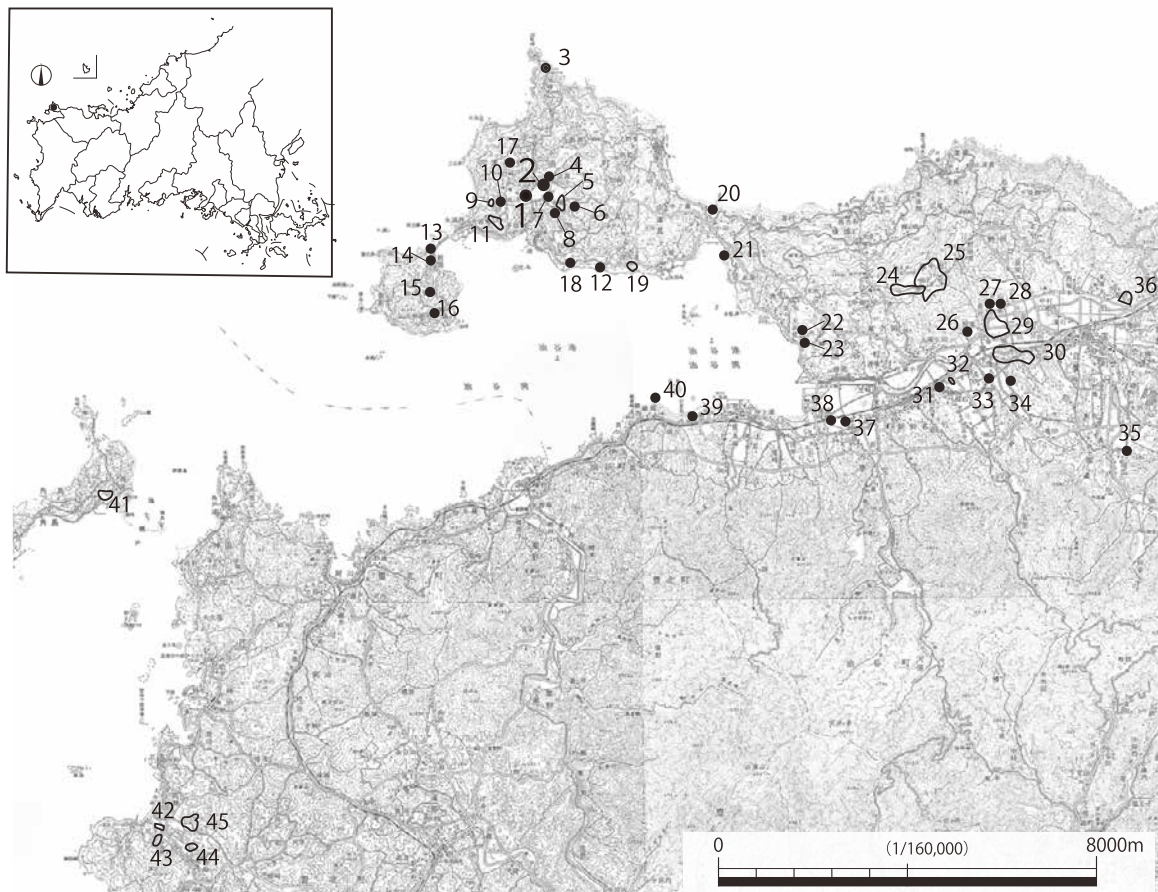
本郷遺跡の現地作業終了後は、調査中に進めていた記録類の整理に本格的に着手し、調査資料の整理・検討を行い、出土遺物の実測図作成および写真撮影を行った。あわせて挿図・写真図版の作成、原稿執筆などの作業を継続し、本報告書を刊行するに至った。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

本郷山崎遺跡・本郷遺跡は、長門市油谷向津具下に所在する。長門市油谷は、山口県の北西部に位置し、向津具半島の西半を占め、油谷湾南方では、西は下関市豊北町、南は同豊田町、東は長門市日置に隣接している。

本郷山崎遺跡・本郷遺跡（第2、3図1・2）は、東西約1km、標高約20mの向津具半島最大の本郷盆地内に位置し、周囲を標高100m以上の山々に囲まれており、盆地を流れる本郷川が日本海に注ぐ。盆地は、本郷川による谷底平野としての性質もあるが、玄武岩丘に囲まれた旧湖盆に由来する。向津具地区は、半島基部の小田地峡より西側にあり、半島最北端の川尻岬、西端の油谷島を含む。地区の大半を半島最大の玄武岩地域である向津具火山が占め、道元山東方を最高点標高とする。油谷湾側である同地区の南側の丘陵部で、南から東にかけて標高約100m以下に、砂岩・頁岩・凝灰岩等からなる第三紀層があらわれ、その上部に玄武岩がのり、境界付近から海岸にむかってゆるやかな斜面をつくる。丘陵の一部には地すべりによって生じた馬蹄型の緩傾斜地があり白木・田久道・



- | | | | | | | | | |
|-----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|------------|----------|---------|
| 1 本郷山崎遺跡 | 2 本郷遺跡 | 3 川尻岬古墳 | 4 宝珠山石棺群 | 5 王屋敷遺跡 | 6 吉祥寺古墳群 | 7 本郷亀山古墳 | 8 市ノ坪遺跡 | 9 南方古墳群 |
| 10 南方北側古墳 | 11 一軒堂古墳群 | 12 平島下古墳 | 13 神鎮山古墳 | 14 越の浜古墳 | 15 則国古墳 | 16 本油谷古墳 | 17 岡の平古墳 | 18 白木遺跡 |
| 19 道手遺跡 | 20 無田多遺跡 | 21 赤崎古墳群 | 22 大川尻遺跡 | 23 大川尻古墳 | 24 上岩原遺跡 | 25 雨乞台遺跡 | 26 国常古墳 | 27 長行古墳 |
| 28 長行古塚跡 | 29 長行黒川遺跡 | 30 峠山古塚跡 | 31 人丸神社遺跡 | 32 岡の鼻遺跡 | 33 荒人遺跡 | 34 亀石遺跡 | 35 高畑遺跡 | 36 堀田遺跡 |
| 37 亀山古墳 | 38 ケヶ森古墳 | 39 前方古墳 | 40 伊上海中遺跡 | 41 沖田遺跡 | 42 土井ヶ浜遺跡 | 43 土井ヶ浜南遺跡 | 44 森広遺跡 | 45 片瀬遺跡 |

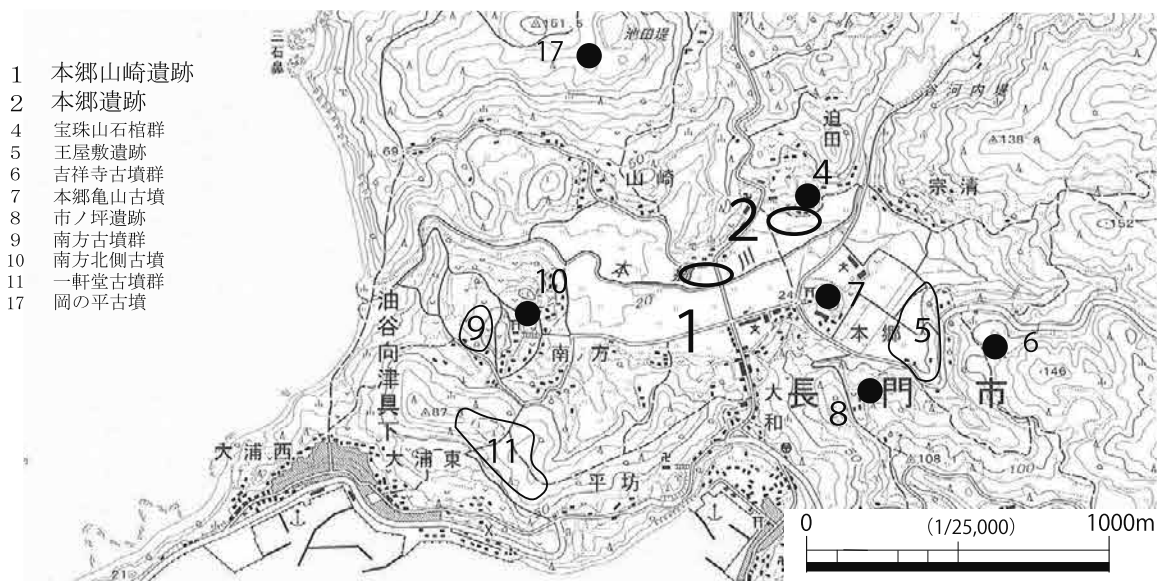
第2図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

中の森地区等の集落が立地している。向津具地区は、山麓付近に玄武岩との間に礫層を伴うところが多いこと等から水利条件等に恵まれており、水田化されている所が多く比較的恵まれている環境である。

2 歴史的環境

旧石器～縄文時代 向津具地区周辺では、サザエ、アサリなどの貝類と条痕文土器の細片が出土した亀石遺跡(34)、爪形文・条痕文の土器片が採取された無田多遺跡(20)等があるが旧石器・縄文時代の遺跡は数少ない。長門市日置に、旧石器後期～縄文前期における雨乞台遺跡(25)が存在し、旧石器後期のものとされる国府型ナイフや晩期とされる有舌尖頭器に加え、縄文早期から前期にかけての土器や石器類が出土している。出土した土器片には、撚糸文はじめ、山形押型文、平行沈線文、貝殻条痕文等が確認される。上岩原遺跡(24)は遺物散布地とされ、縄文早期～前期における雨乞山関連の人々の行動範囲地であったと想定されている。

弥生時代 本郷山崎遺跡・本郷遺跡から南東約600mに弥生時代中期とされる有柄細形銅剣が出土した王屋敷遺跡(5)がある。有柄細形銅剣は、佐賀県の吉野ヶ里遺跡や福岡県の三雲南小路遺跡等、弥生を代表する遺跡から出土している貴重な遺物である。岡ノ鼻遺跡(32)は、弥生末期～古墳時代初頭の遺跡であるが、弥生時代終末期とされる周溝墓状遺構が1基検出されている。遺構に伴うものではないが羽状文を持つ前期の土器も出土している。響灘沿岸まで範囲を広げると、弥生前期に関連する遺跡が複数存在する。下関市豊北町の角島に所在する沖田遺跡(41)は、遺構は確認されていないが遺物包含層から大量の土器が出土しており、突帯文土器や初期遠賀川式土器が多数出土している。縄文から弥生への移り変わりを考える上で重要な遺跡である。土井ヶ浜遺跡(42)は、前期中頃～中期にかけての埋葬遺跡であり、保存状態の良い300体以上の人骨が発見されており、弥生人の形質、埋葬習俗や墓制、社会構造を考える上で重要な遺跡である。近年、遺跡の周辺に土井ヶ浜に埋葬された人々の集落とされる遺跡も複数確認されている。土井ヶ浜南遺跡(43)、森広遺跡(44)、片瀬遺跡(45)等である。土井ヶ浜南遺跡は前期後半～中期初頭の土器が多数出土し石器類も



第3図 本郷盆地と周辺遺跡

出土している。土坑や貯蔵穴、竪穴建物跡と考えられる遺構も発見されている。片瀬遺跡は、前期前半～中期初頭にかけての土器や柱穴群が確認されており、水田跡も発見されている。

古墳時代 岡ノ鼻遺跡では、古墳時代初頭の方形竪穴建物跡が検出され、古式土師器の甕・壺等が出土している。長門市日置では、長行黒川遺跡(29)で建物跡等が検出され、ミニチュア土器、甌、須恵器等が出土している。堀田遺跡(36)では、竪穴建物跡が複数検出され、土師器・須恵器をはじめとして須恵器の有孔平底壺系円筒形土器、ミニチュア土器、土製品等が出土している。

向津具半島周辺では、前方後円墳は現在まで発見されておらず、所在する古墳は後期に属し、小規模の円墳が大半である。これら古墳は、向津具地区に数多く所在し、本郷盆地をめぐる丘陵の頂部や尾根に集中し、これに次いで、半島先端の油谷島や半島基部後畑・角山地区にも分布する。古墳は、その特徴から箱式石棺と横穴式石室の二系統に分かれる。前者には、宝珠山石棺群(4)、南方北側古墳(10)、本油谷古墳(16)、則国古墳(15)、赤崎石棺群(40)等、後者には、南方古墳群(9)、神鎮山古墳(13)、一軒堂古墳群(11)、川尻岬古墳(3)等があげられる。

本郷遺跡の北側の真上にある宝珠山石棺群は、大小の組合せ式箱式石棺が2基ある。本油谷古墳は、組合せ式箱式石棺であるが半壊の状態で見られている。現在は消滅しているが銅製の壺鐙が出土している。南方古墳群は3基確認され、南方一号墳は、南西の方向に開口した小型の横穴式石室墳であり、深い墓坑の中に石室が構築されており、後述する一軒堂古墳(一号墳)にもみられる。玄室内から耳環、鉄製刀子、鉄鏃、玄室外から須恵器の耳付甕、丸底壺が出土しており墳丘や石室の構造から6世紀後半の築造と推定されている。一軒堂古墳群は、4基の古墳が確認されているが、一号墳のみ調査が行われた。一号墳は、小規模な横穴式石室墳である。町史によると玄室は、粘土壁により大小の二室に区分され、鉄剣、須恵器の甕・壺等が出土している。神鎮山古墳は、西側に開口した横穴式石室墳である。須恵器の甕、鉄刀、鉄鏃、鉄刀子が出土している。

古 代 「和妙類聚抄」よると向津具地区は、長門国大津郡向国郷に属していた。向津具の地名は「向国」の名であられる。その後「向津奥」「向津具」へと転じていく。本郷山崎遺跡・本郷遺跡がある本郷の場所は名称から向国郷の中心域であったと想定されている。盆地内には、条里型地割がみられ、盆地の一部に条理制のなごりが、市ノ坪(8)の名で残っている。

荒人遺跡(33)は、8世紀頃の方形竪穴建物跡や掘立柱建物跡等が検出され、土師器・須恵器をはじめ農業に関わる祭祀用具として、土馬が出土している。また、役人が儀式等で正装する際のベルトの飾り具の一種である石鍔が出土している。視野を広げると、長門市日置に峠山古窯跡(30)、長行古窯跡(28)、堀田遺跡がある。峠山・長行古窯跡群は、これまでに峠山地区で3基、長行地区で1基の窯跡が確認されており、古墳時代末期～奈良時代にかけて稼働していたと想定されている。堀田遺跡は、前述した古墳時代の遺構の上層より、多数の柱穴群が検出された。土師器・須恵器をはじめとして布目瓦、緑釉陶器、鞆羽口、鉾滓等が出土している。これらの遺跡は、官衙と関係する遺跡の可能性も示唆され、当時の大津郡衙に関連する遺跡と想定されている。

中 世 奈良・平安時代には、向津具地区においても荘園が成立する。長門市油谷は、当時、向津奥荘・日置荘・大津荘にまたがっており、本郷山崎遺跡・本郷遺跡のある向津具地区は向津奥荘に属していた。向津奥荘は、平安時代も終わりに近い頃、記録上に初めてあらわれる。向津奥荘は成

立当初は藤原氏の荘園であったとされている。荘園は本来、国司の介入が行われないものであるが、向津奥荘では、国司の力が強く介入していたとされている。これを防ぐために永暦二（1161）年、後白河院により京都の新日吉社に寄進される。当地域は、当時の権力者であった平家に連なって在地における支配権を維持していたが、平家没落後は、源氏方であった大江景国が地頭として任命され、その所領を受け継ぐのである。景国も国司のように荘園に対して介入していき、朝廷から反感を買う。そのため、建久八（1197）年に源頼朝は、向津奥荘地頭職を新日吉社に寄進し、当社が向津奥荘一円を支配するに至った。南北朝期では、長門国に向津具地区は含まれ、守護は厚東氏が務めていた。だが、次第に周防の大内氏に圧倒され没落し、大内氏の支配へと移り変わる。

中世の遺跡としては、岡の鼻遺跡から掘立柱建物跡3棟を含む柱穴群が検出され、土坑も2基確認されている。また、今回の調査により本郷山崎遺跡からも中世の土坑や柱穴が検出され、瓦質土器をはじめ備前焼や青磁等の輸入磁器が出土した。本郷遺跡からも青磁・白磁等の輸入磁器が出土しており、両遺跡周辺が、向津奥庄の中心地であった可能性が高まった。

近 世 隆盛を極めていた大内氏であるが、弘治三（1557）年毛利氏に追討され、長門国も毛利氏によって支配される。その後、毛利氏は、豊臣政権の支配下に入る。慶長五（1600）年関ヶ原の戦いでは、西軍に属したが敗戦後、領地を周防・長門の二か国に減封される。のちに萩藩が成立し、藩政の郷村支配では、古代以来の行政単位ではなく新たに「宰判」と称する行政区域を設けた。宰判は、慶安年間には全部で十八の宰判区が設けられた。向津具地区は、その中で先大津宰判に組み込まれている。

引用・参考文献

- 油谷町史編纂委員会編 1990「油谷町史」油谷町
- 日置町史編纂委員会編 1983「日置町史」日置町
- 豊北町史編纂委員会編 1994「豊北町史 二」豊北町
- 油谷町教育委員会他 1990「油谷町の文化財」油谷町遺跡詳細分布報告書 油谷町文化財資料第1集
- 油谷町教育委員会他 1992「神鎮山古墳」-平成3年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告-
- 山口県 2000「山口県史 資料編 考古1」
- 山口県 2004「山口県史 資料編 考古2」
- 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム他 2000「角島・沖田遺跡」山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書18集
- 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム他 2007「干焼田遺跡 片瀬遺跡」
- 国営農地再編整備に伴う田代地区岡林地区埋蔵文化財発掘調査報告- 下関市文化財調査報告書24
- 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム他 2014「土井ヶ浜遺跡」第1次～12次発掘調査報告書「本文編」

Ⅲ 本郷山崎遺跡の調査成果

1 遺跡の概要

(1) 概要

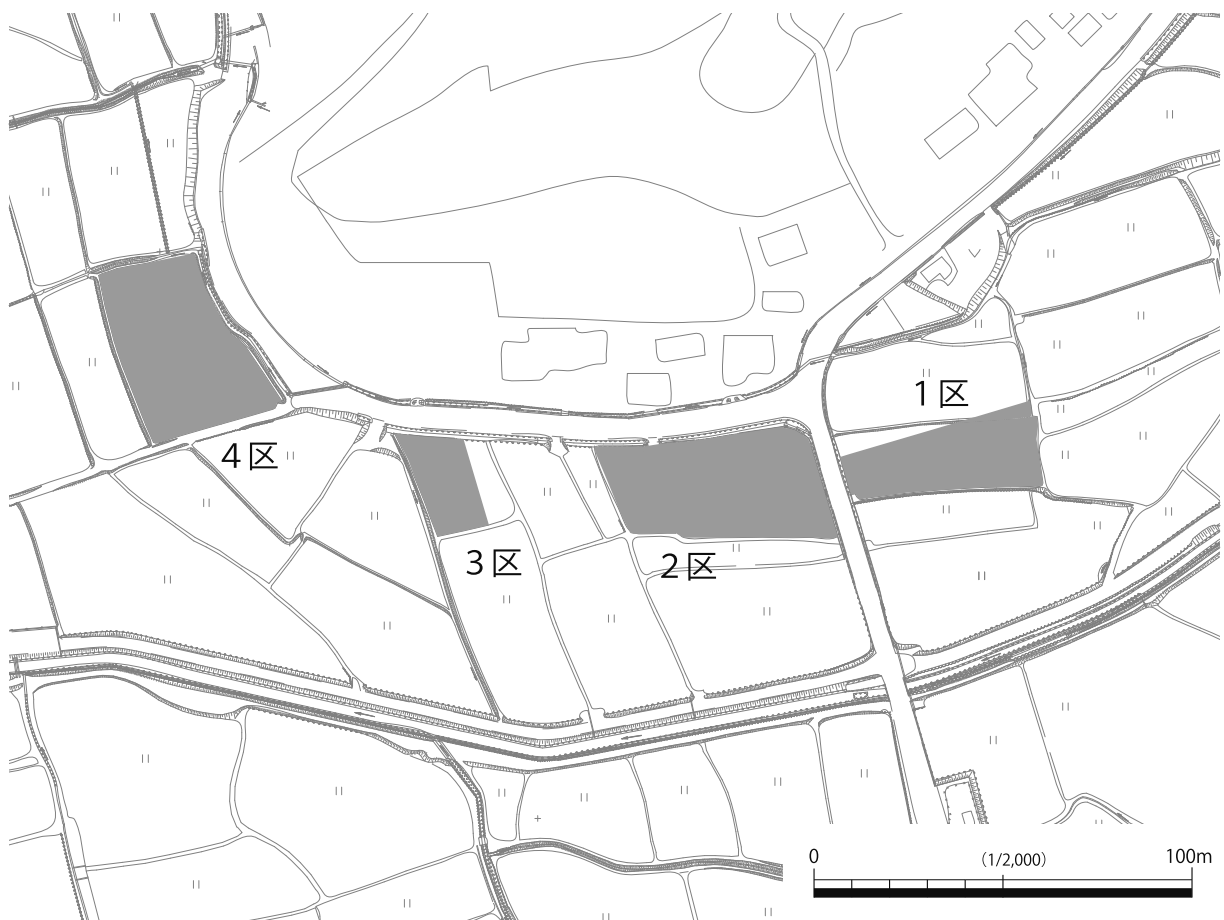
本郷山崎遺跡は本郷盆地の中央北端に立地し、北東から南西に舌状に伸びる丘陵の先端部、標高約 20.5 m～22.5 mの平坦面に所在する。調査区は4箇所に分かれることから、それぞれ東から1～4区と呼称している。

今回の調査では1・2区では弥生時代前期の溝3条、土坑2基、谷（1区 SX1）、1～4区で奈良・平安時代から中世の遺構、掘立柱建物5棟、土坑約70基、柱穴210個を検出した。

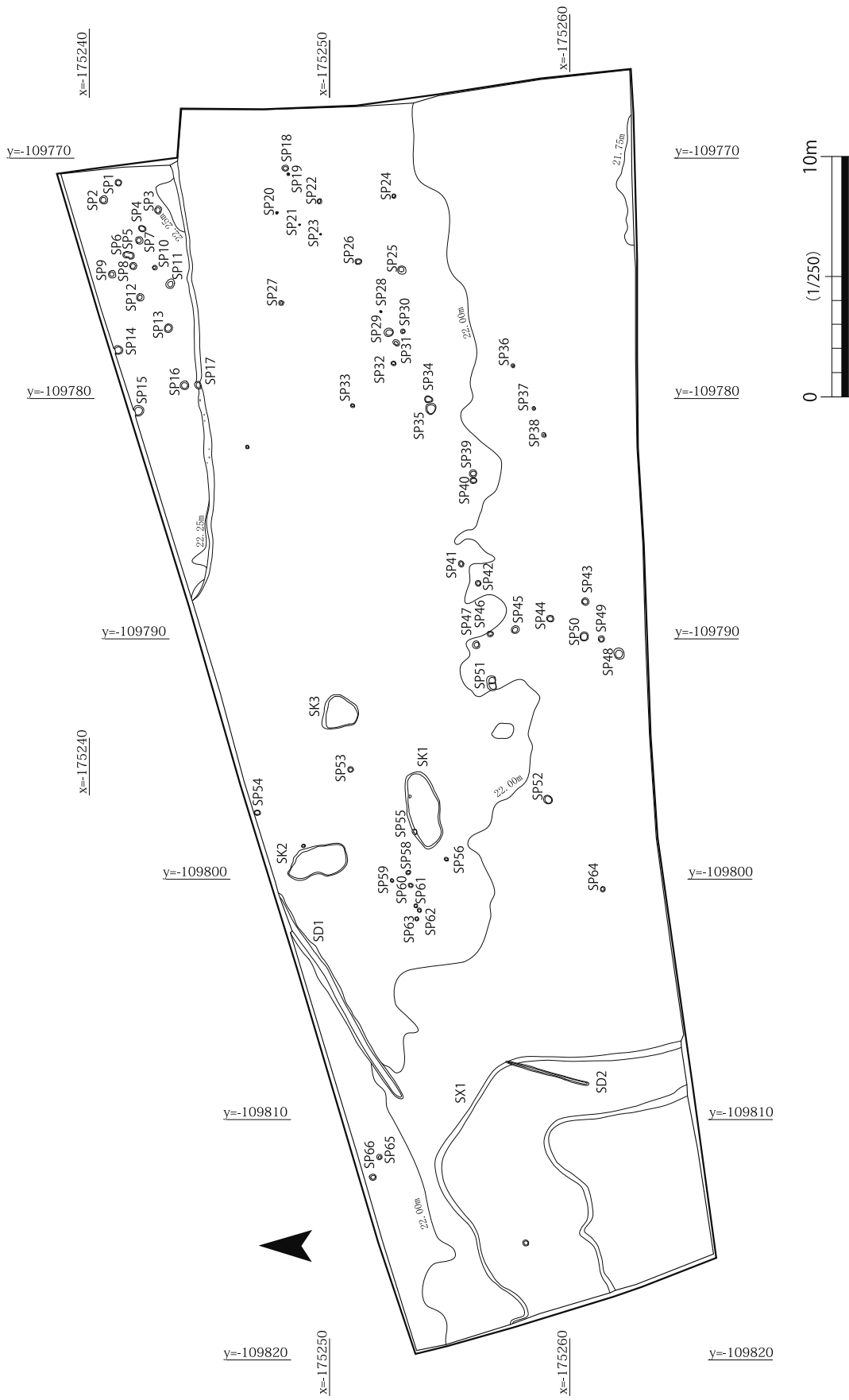
検出した弥生時代前期の遺構からは、縄文時代後・晩期の土器から弥生時代前期前半の土器が多量に出土し、同様に縄文時代から弥生時代前期にかけての石器も数多く出土している。奈良・平安時代から中世の遺構からは、須恵器、土師器、青磁、白磁、瓦質土器など多くの遺物が出土している。

(2) 層序

本郷山崎遺跡では、各調査区の壁面で土層を観察した。その結果、基本層序は、1・2・4区は、耕作土（現代）下に盤土（現代）、地山（粘質土）となる。3区については低湿地となっており、盤土下に遺物包含層が確認されている。



第4図 本郷山崎遺跡全体図



第5图 1区遺構配置図

2 1区の遺構

1区は安定した粘質土の地山が確認されたが、北側が高く南側が低くなり、丘陵端部に位置すると考えられる。調査区全域から遺構が検出され、3基の土坑、2条の溝、70個の柱穴、南西部では谷地形などが検出された。

(1) 溝

2条の溝を検出した。後世の削平によって上流域あるいは上位部が消滅しており、総じて浅く、確認長は3.6～10.0mとまちまちである。いずれも北東から南東方向へ掘削されており、地形の傾斜に沿っているものと想定される。

SD 1 (第6図 図版5) 調査区の北西部から緩やかに西流する。確認長は10.0m、幅40～65cm、深さ10cmである。溝床底面は平坦である。埋土中からは、弥生土器が出土している。出土遺物から、弥生時代前期前半の遺構と考える。

SD 2 (第6図) 調査区の南西部の谷地形であるSX1内で検出され、北西部から緩やかに南流する。確認長は3.6m、幅10～15cm、深さ10cmである。溝床底面は平坦である。埋土中からは、弥生土器が出土している。出土遺物から、弥生時代前期前半の遺構と考える。

(2) 土坑

3基の土坑を検出した。後世の削平によって上位部が消滅しており、総じて浅い。

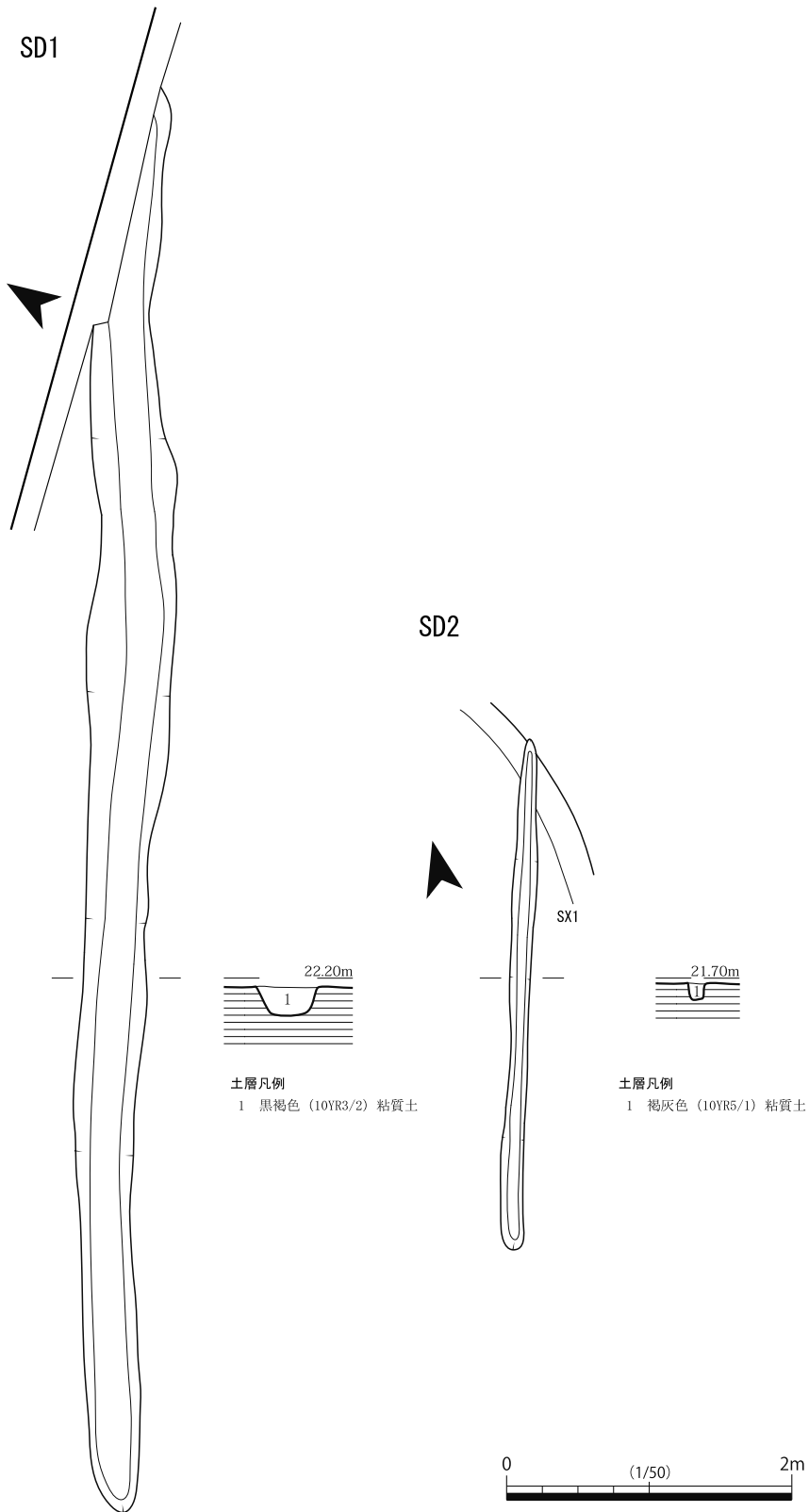
SK 1 (第7図 図版5) 調査区中央に位置する長軸3.2m、短軸1.4m、深さ10cmを測る東西に長い長楕円形で、底面が平坦な土坑である。北側約3mにSK2が隣接するが、長軸方向は異なる。埋土には弥生土器片、焼成粘土塊を含むため、弥生時代前期の遺構と判断される。用途等は不明であるが、出土遺物には焼成粘土塊が含まれ、集落内で土器製作を行っていた可能性がある。

SK 2 (第7図 図版5) 調査区中央北側に位置する長軸2.6m、短軸1.3m、深さ10cmを測る南北に長い長楕円形で、底面が平坦な土坑である。南側約3mにSK2が隣接するが、長軸方向は異なる。埋土には弥生土器片、焼成粘土塊を含むため、弥生時代前期の遺構と判断される。用途等は不明であるが、出土遺物には焼成粘土塊が含まれ、集落内で土器製作を行っていた可能性がある。

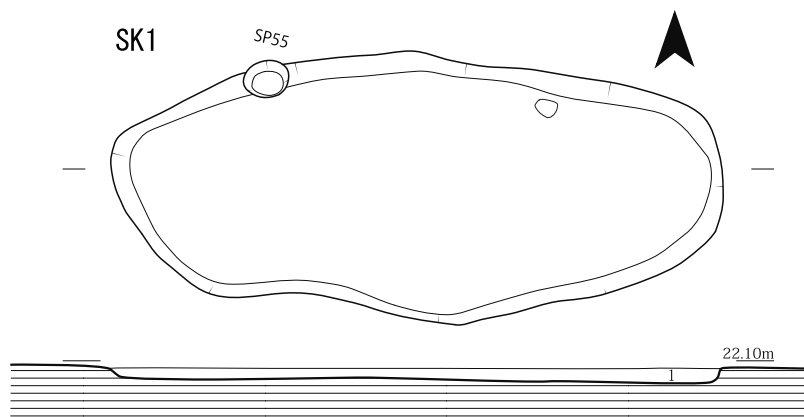
SK 3 (第7図 図版5) SK3は調査区中央に存在する直径約1.4mの土坑で、埋土には弥生土器片を含む。土層堆積状況は短期間に埋め戻されたような状況で、基本的に中世遺構と考えられる2区土坑群と共通することから、この土坑も中世遺構と判断される。用途等は不明である。

(3) 谷

SX 1 (第8図 図版6) 調査区南西部で、南西方向へ傾斜する谷地形を検出した。2区南東端でも一部確認され、さらに南西方向の調査区外へと続いていく。確認長は27.0m、幅13.2mである。深さは1区内では90cmであるが、2区ではさらに30cm深いことが確認され、北端と南端の比高差は1.20mである。埋土中からは多量の弥生土器、石器類が出土しており、土製品陶埴なども出土していることから、集落の生活廃棄物が谷地形へと堆積したものと考えられる。

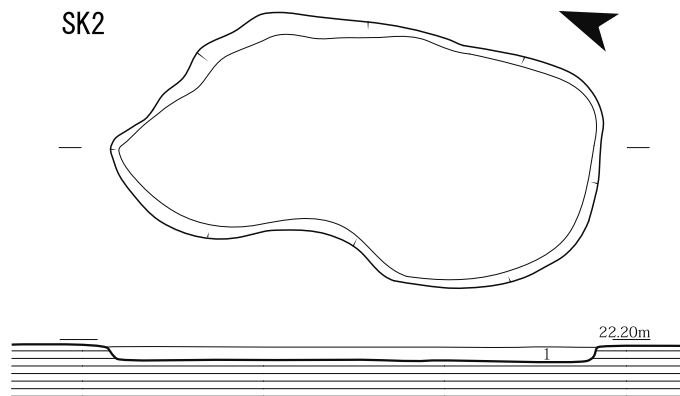


第6図 SD 2・2実測図



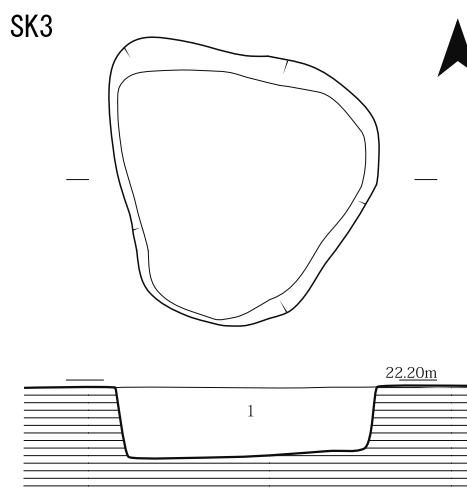
土層凡例

1 黒褐色 (10YR5/1) 粘質土



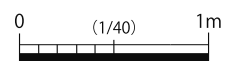
土層凡例

1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土

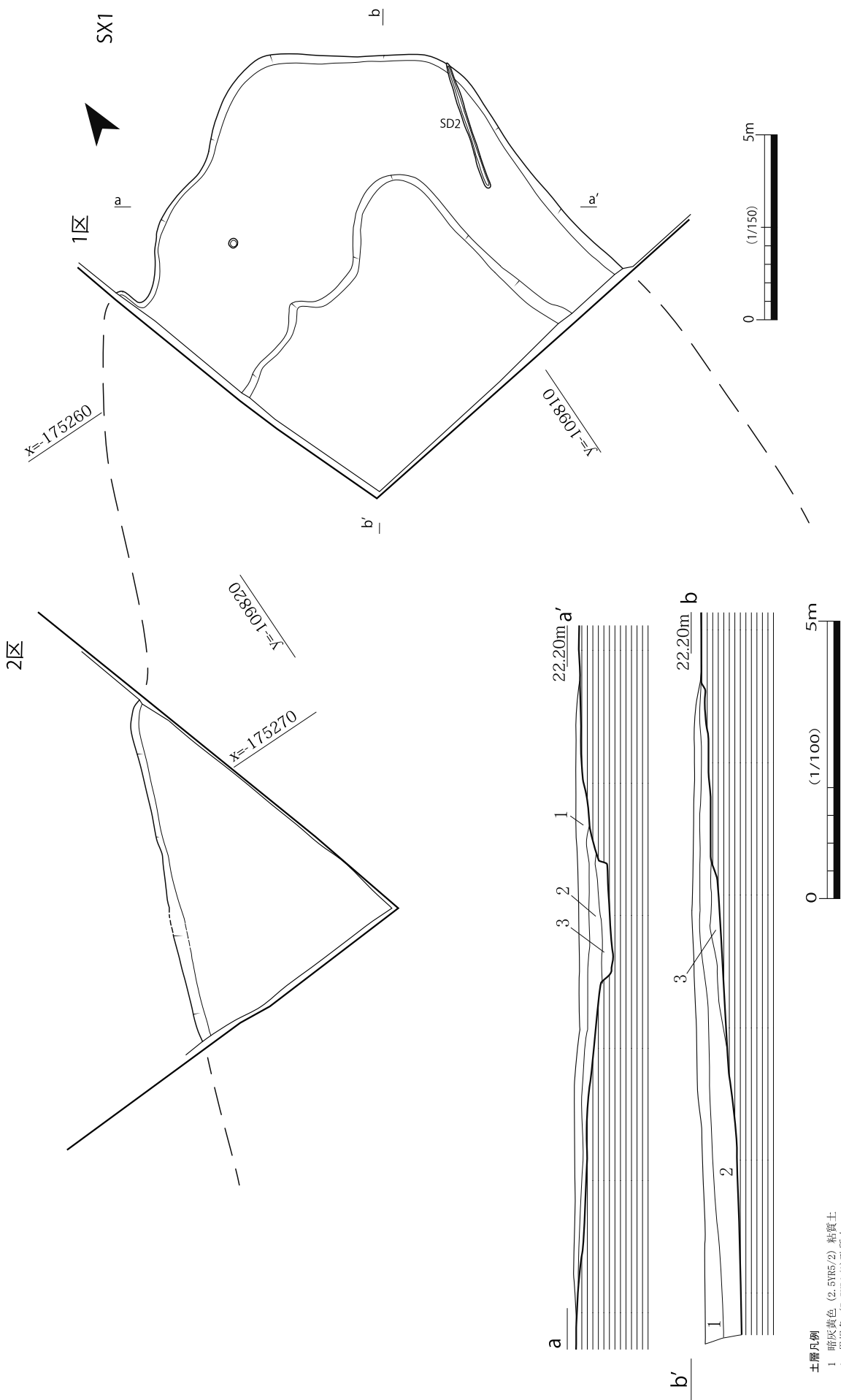


土層凡例

1 灰白色 (10YR7/1) 砂質土



第7図 SK 1～3 実測図



第8図 SX 1 実測図

(4) 柱穴

柱穴は約70個検出されたが、建物跡を復元することはできなかった。SP46で6世紀の土師器片がみられる以外は、埋土に含まれる遺物は弥生土器小片のみであり、基本的に弥生時代集落の痕跡と考えられる。

3 2区の遺構

2区は安定した粘質土の地山が確認され、北側が高く南側が低くなり、丘陵端部に位置すると考えられる。調査区全域から遺構が検出され、64基の土坑、1条の溝、33個の柱穴、南東部では1区で確認された谷地形の南側延長部分などが検出された。

(1) 溝

SD1 (第10・11図 図版7～11) 調査区の東部に位置し、北から緩やかに南流する。確認長は26.0m、幅6.2～8.0m、深さ60～90cmである。溝床底面は北東部で一段高い段差状となるが、おおむね平坦である。底面の標高は北端で21.5m、南端で21.2mと南方向へ30cm下がっており、本郷川へと合流するものと推定される。底面から3基の土坑(SK1～3)を検出している。埋土は1～20層に区分され、大きく上層の粘質土、下層の砂質土に分けて調査を行った。上層部の2・3層中からは、弥生土器と石器が多量に出土した(図版9・10)。それ以下の砂質土層では土器の出土は少なくなり、その中でも縄文土器の割合が増える。また、下層では木質遺物なども残されていた。出土遺物から、弥生時代前期前半の遺構と考える。

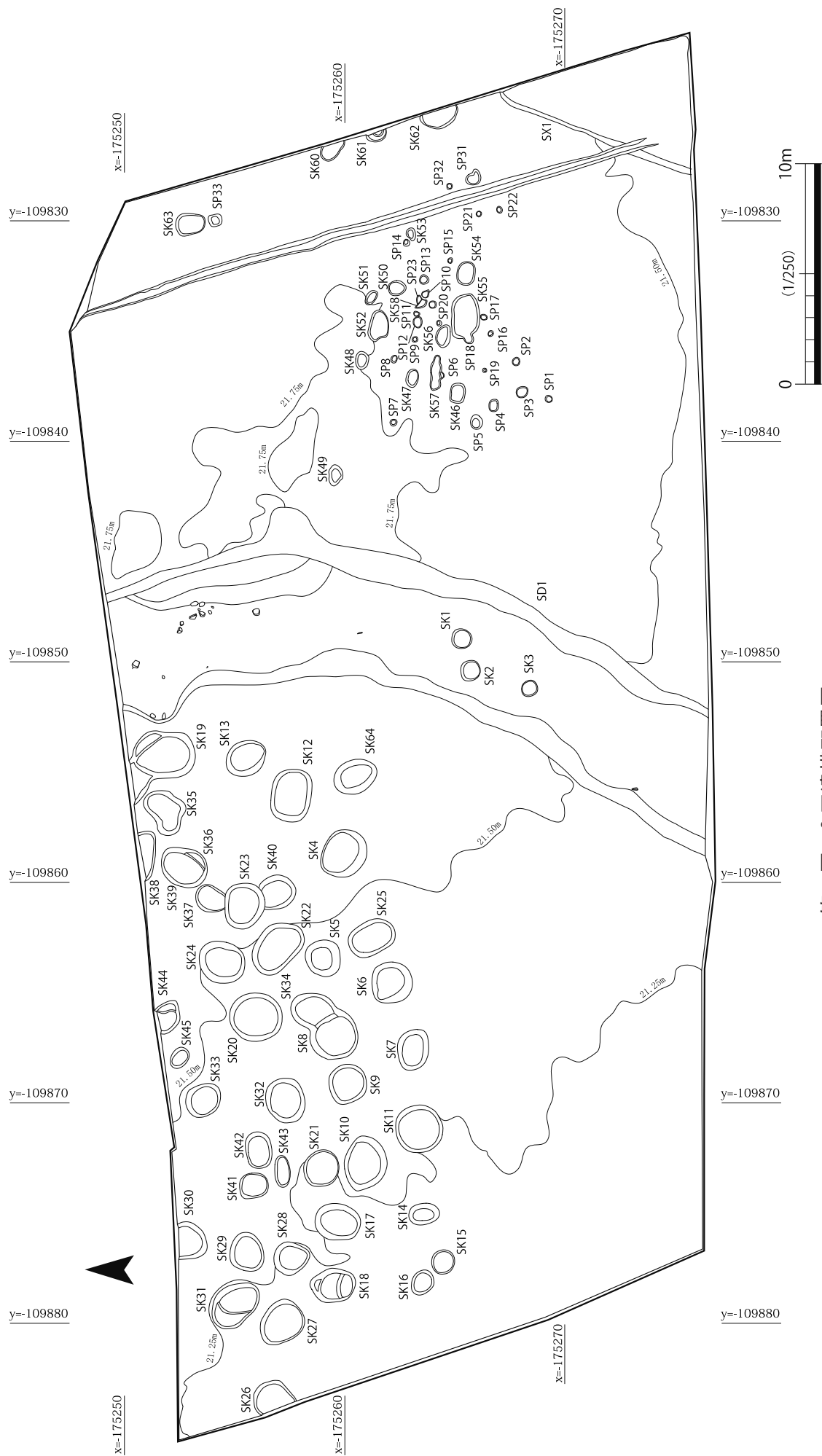
(2) 土坑

SK1 (第14図 図版12) SD1底面、中央部に位置し、西側にはSK2が隣接する。土坑は径85cm、深さ45cmを測る円形で、断面はややオーバーハングし、底面は平坦である。埋土にはドングリを中心とした植物遺体を含む。出土遺物は植物遺体を中心とし、土器は縄文土器深鉢片が1点出土している。弥生時代前期前半と考えられる溝の底面から検出しているため、弥生時代前期の遺構と判断される。用途はドングリ類のアク抜きのための施設と考えられる。

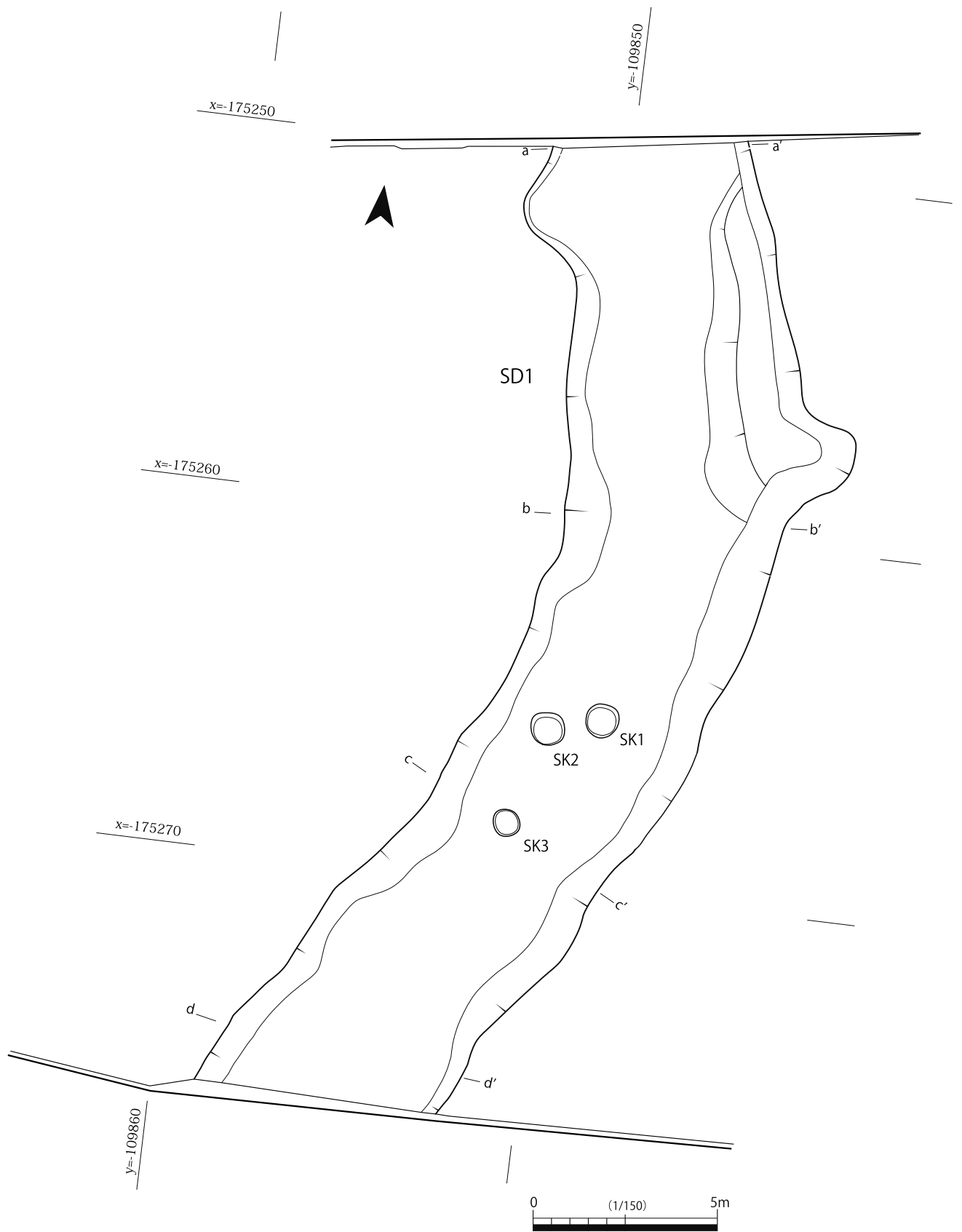
SK2 (第14図 図版12・13) SD1底面、中央部西側に位置し、東側にはSK1が隣接する。径100cm、深さ40cmを測る円形で、底面が平坦な土坑である。埋土にはドングリを中心とした植物遺体を含む。出土遺物は植物遺体を中心とし、土器は含まれない。弥生時代前期の遺構と判断される。用途はドングリ類のアク抜きのための施設と考えられる。

SK3 (第14図 図版13) SD1底面、中央部南側に位置し、北側にはSK1・2が隣接する。径75cm、深さ45cmを測る円形で、断面はややオーバーハングし、底面が平坦な土坑である。埋土にはドングリを中心とした植物遺体を含む。出土遺物は植物遺体を中心とし、土器は含まれない。弥生時代前期の遺構と判断される。用途はドングリ類のアク抜きのための施設と考えられる。

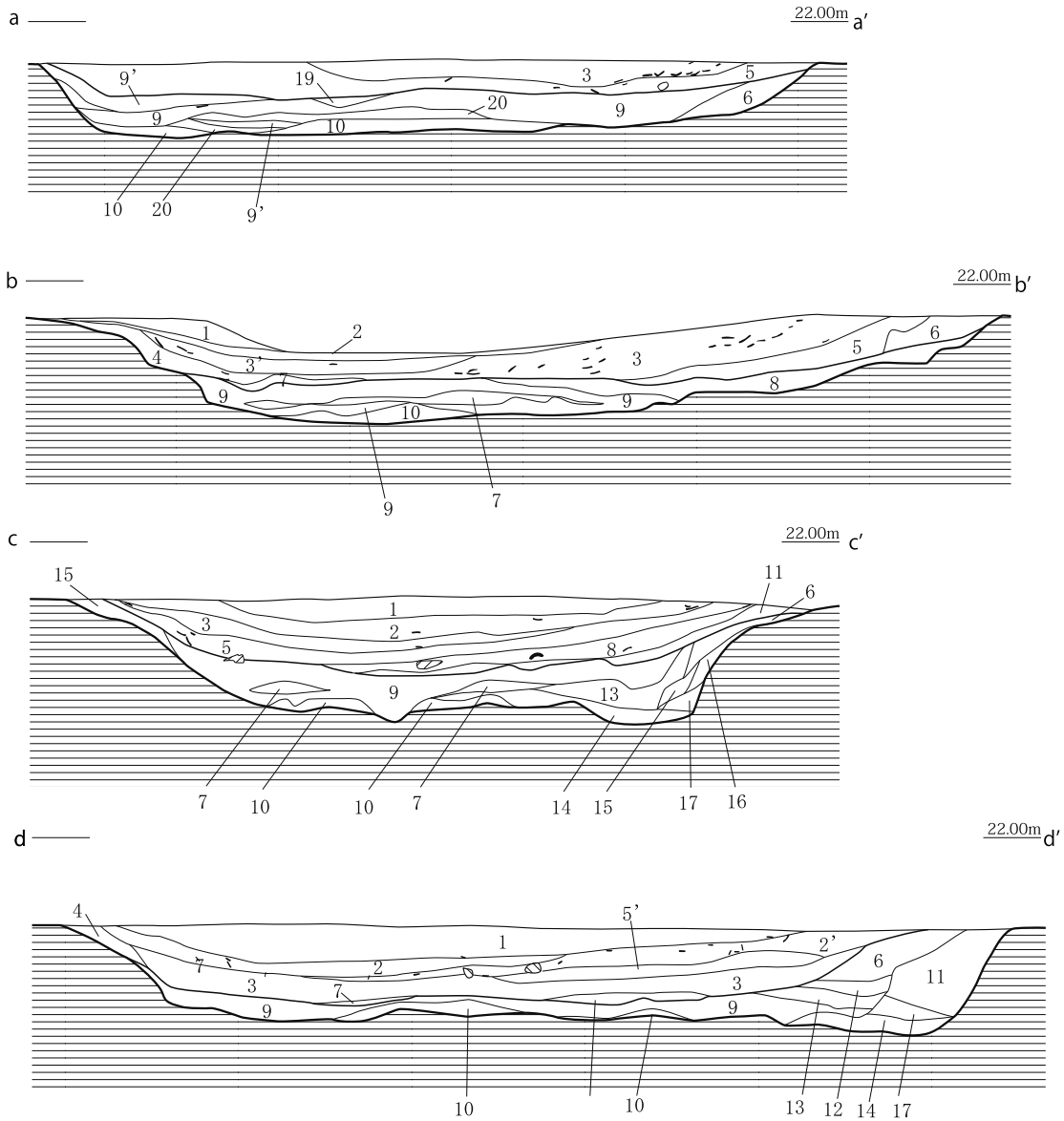
古代以降の土坑(第9図、第1表) 土坑は大きく東西2群に分かれる。このうち西群は古代～中世、東群は近世の遺構群である。



第9図 2区遺構配置図

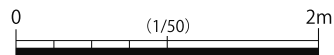


第 10 図 SD 1 実測図

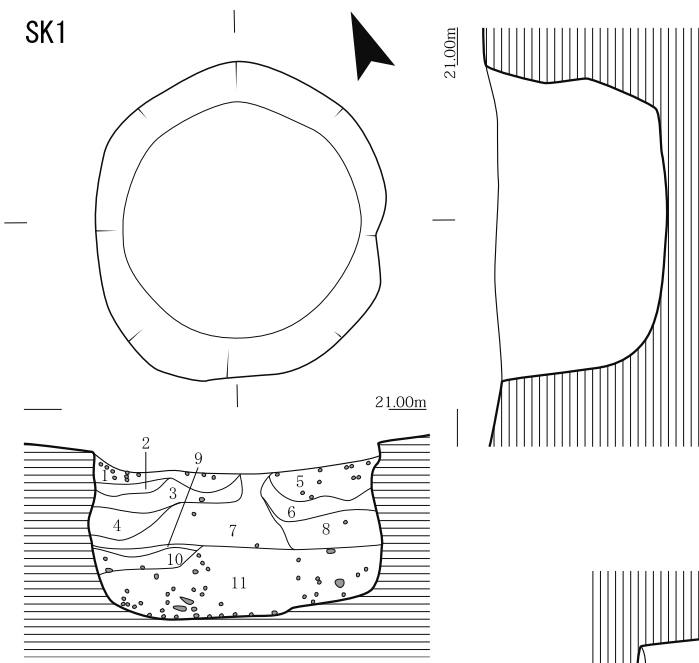


土層凡例

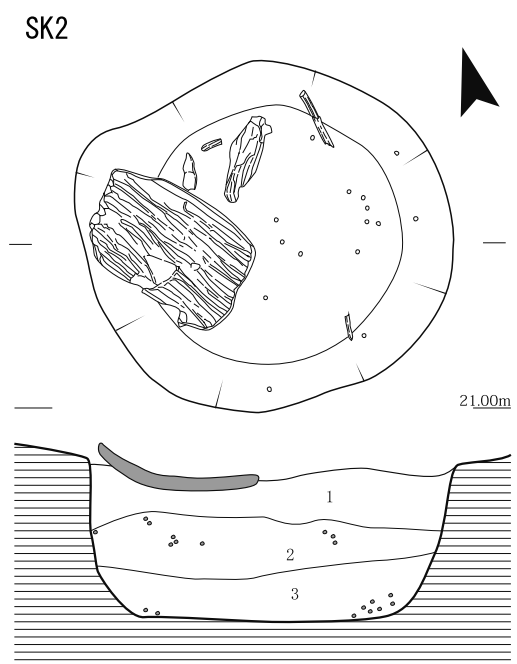
- | | |
|---------------------------|--|
| 1 暗灰黄色 (2.5YR5/2) 粘質土 | 10 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粗砂 |
| 2 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 | 11 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 |
| 2' 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土木炭多量 | 12 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 |
| 3 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 | 13 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 |
| 3' 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 | 14 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 |
| 4 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土 | 15 褐灰色 (10YR5/1) 土・褐灰色 (10YR5/1) 土 |
| 5 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土 | 16 明褐色 (7.5YR5/8) 粘土・明黄褐色 (10YR6/6) 粘土 |
| 6 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土 | 17 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土 |
| 7 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂 | 18 明赤褐色 (5YR5/6) 粘土 |
| 8 黒褐色 (10YR5/1) 土 | 19 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粗砂 |
| 9 黒褐色 (10YR3/2) 土 腐植物多量 | 20 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂 |
| 9' 黒褐色 (7.5YR3/2) 土 腐植物多量 | |



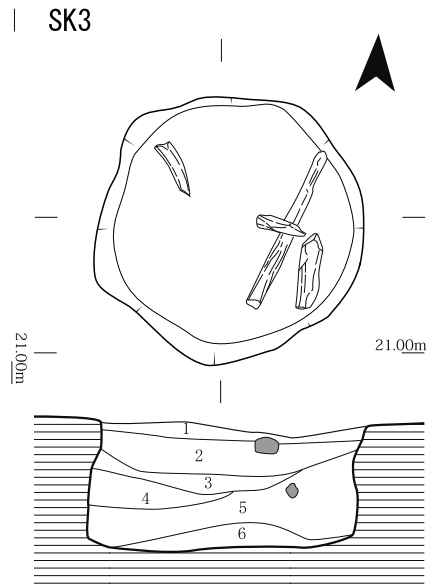
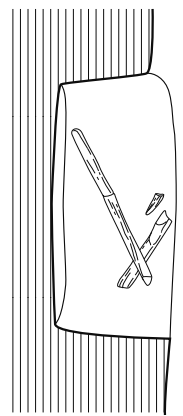
第 11 図 SD 1 断面実測図



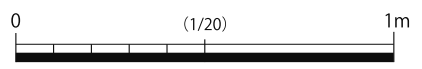
- 土層凡例
- 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土 ドングリ多量
 - 2 淡黄色 (2.5YR7/2) 砂質土
 - 3 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土 ドングリ・植物遺体少量
 - 4 灰白色 (10YR7/1) 砂質土
 - 5 灰褐色 (5YR4/2) 粘土 ドングリ少量
 - 6 灰褐色 (5YR5/2) 砂質土 ドングリ多量
 - 7 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 粘土 ドングリ少量
 - 8 褐灰色 (5YR5/1) 砂質粘土 ドングリ少量
 - 9 灰白色 (10YR7/1) 砂質土
 - 10 灰褐色 (5YR5/2) 砂質土 ドングリ少量
 - 11 明褐灰色 (7.5YR7/1) 砂質土 ドングリ少量
 - 12 灰白色 (10YR7/1) 粘土



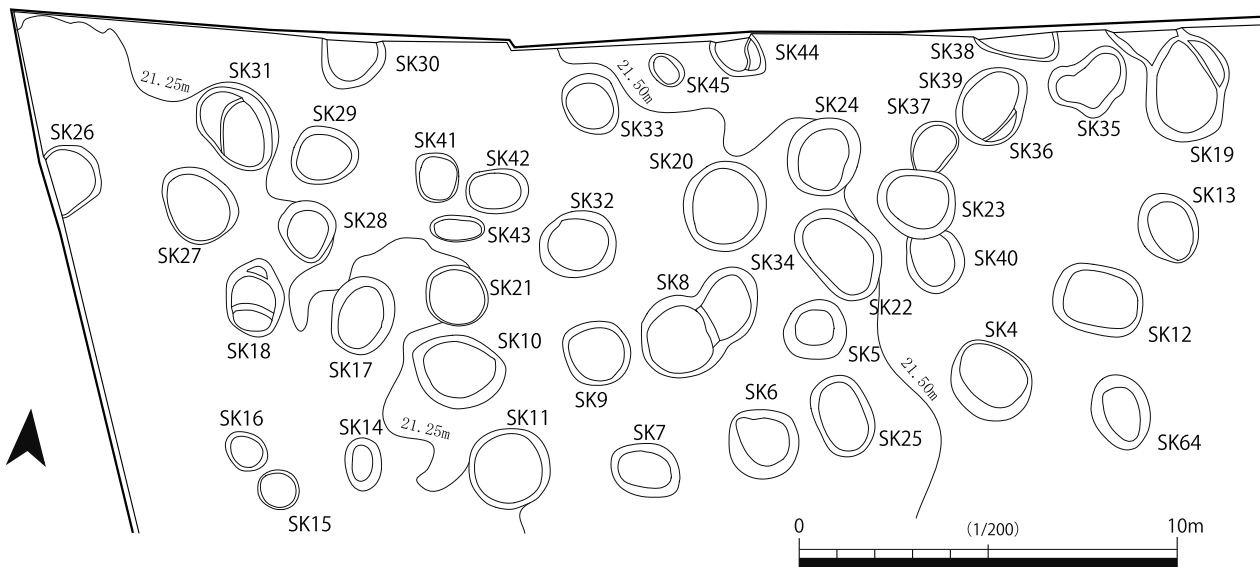
- 土層凡例
- 1 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土 ドングリ・植物遺体少量
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘土 炭化粒・植物遺体少量
 - 3 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 砂質土 植物遺体少量



- 土層凡例
- 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土 細砂多量
 - 2 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 植物遺体多量
 - 3 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土
 - 4 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土 植物遺体多量
 - 5 暗褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 植物遺体多量
 - 6 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂 植物遺体多量



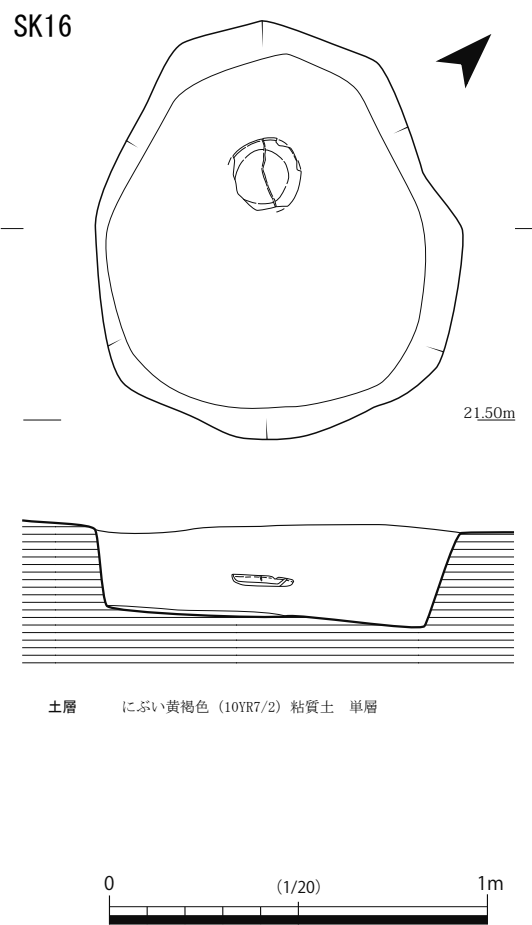
第 12 図 SK1 ~ 3 実測図



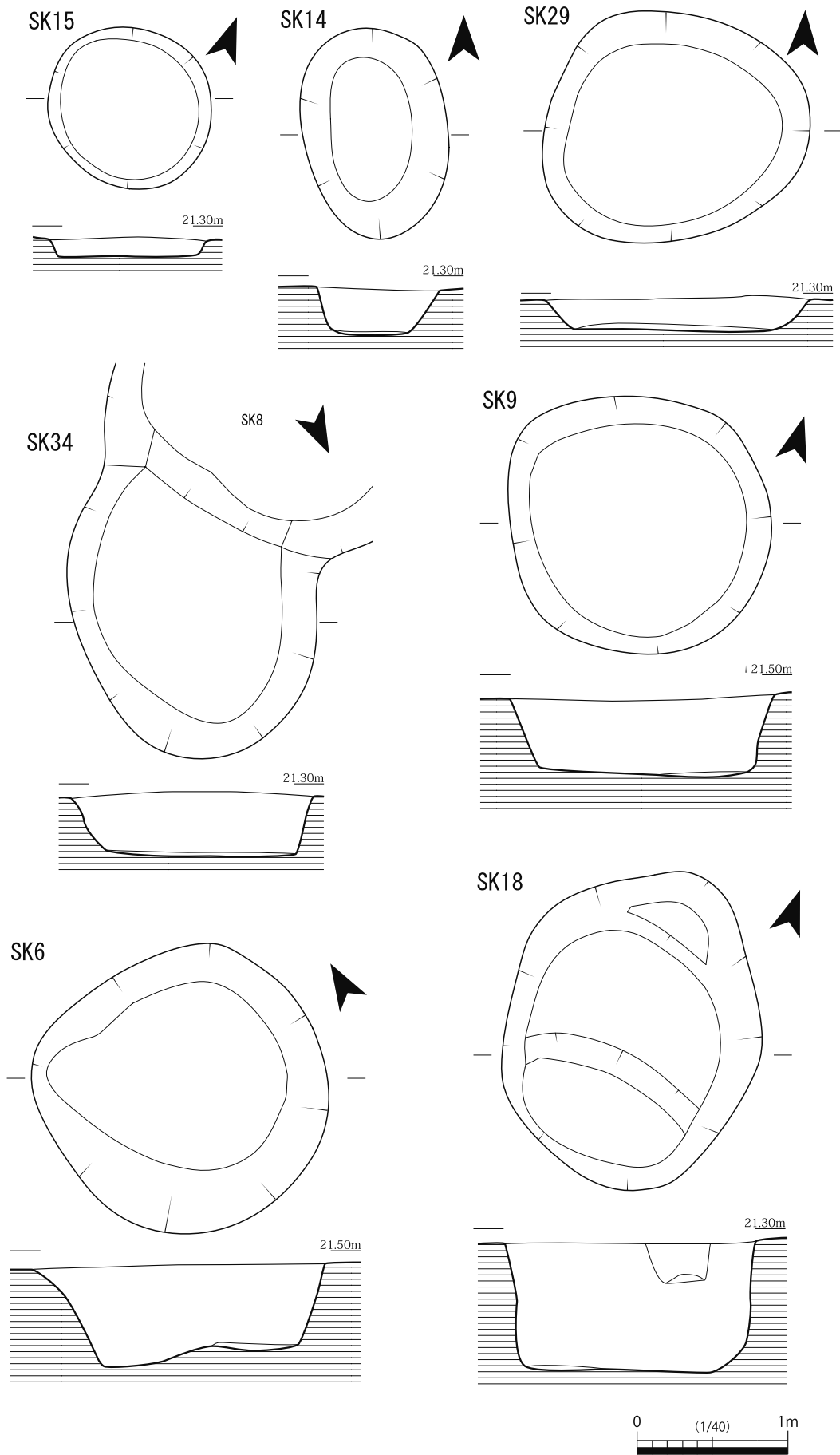
第 13 図 土坑群（西群）実測図

西群 (SK 4 ~ 45、SK64) は東西 30 m、南北 12 m の範囲に 43 基が群集する。(第 13 図)。平面形は円形と長円形を基本とし、長軸 1.1 ~ 2.5 m、深さ 15 ~ 40cm で、切り合いは比較的少ない。埋土は明黄褐色粘土ないし黄灰色粘土の混層で、両者が半々程度のものと後者主体のものに大別できるが、基本的にすべて単層である。なお、土層の違いによるグループ分け等はできない。SK16 については完形品に近い 8 世紀の都城系土師器皿が出土しており時期が明確である。しかし、これ以外の土坑は埋土には微細な遺物しか含まないものの、中世 (13 ~ 15 世紀) の遺構群と理解される。

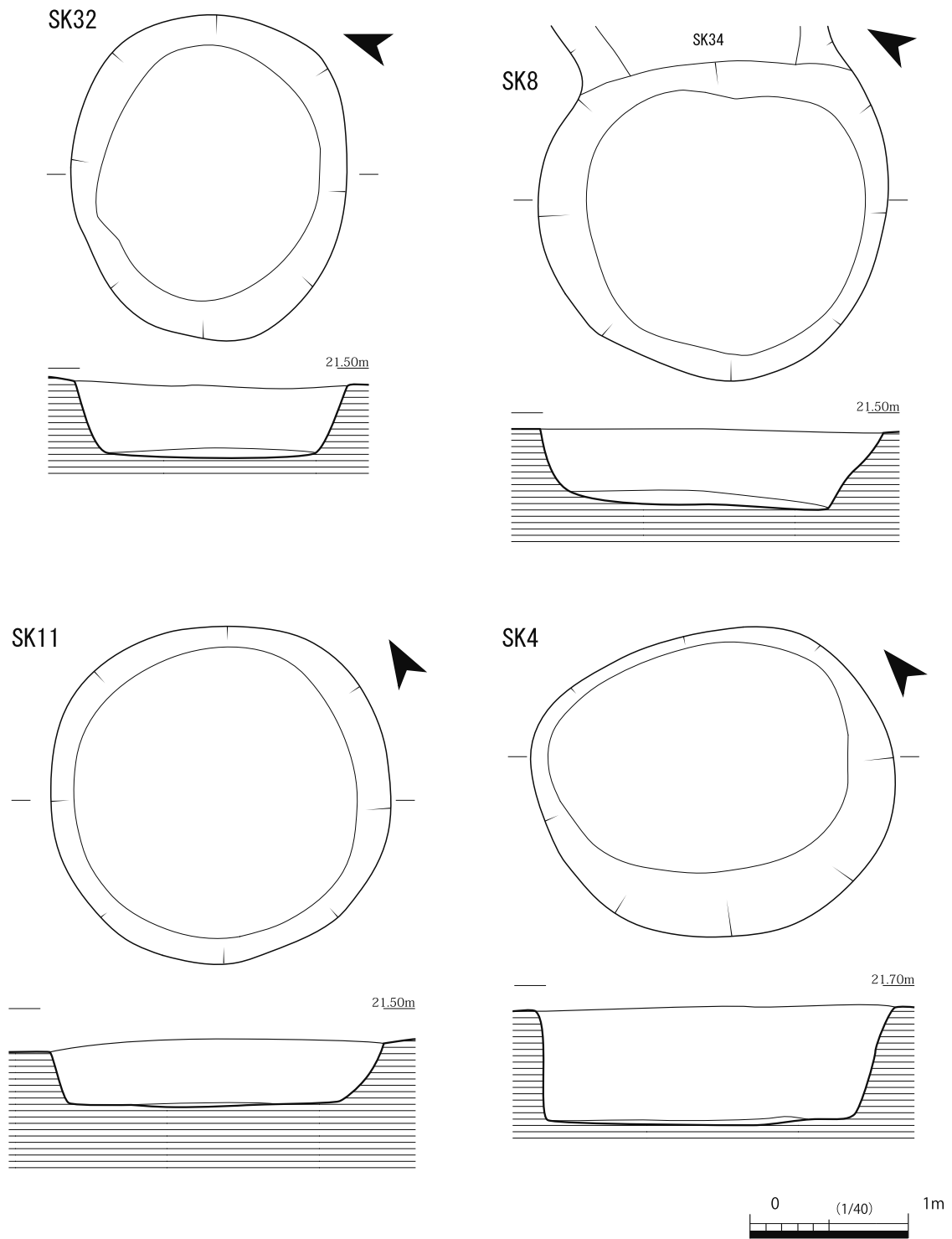
東群 (SK46 ~ 63) は東西 15 m、南北 15 m の範囲に 18 基が分布する。(第 9 図)。平面形は長円形と隅丸長方形を基本とし、埋土は砂質単層である。規模は長軸 0.6 ~ 2.1 m、深さ 10 ~ 25cm で、いずれも西群に比して小型である。埋土に 18 ~ 19 世紀の陶磁器を含むものが比較的多く、西群とは基本的に時期を異にする遺構群とみられる。



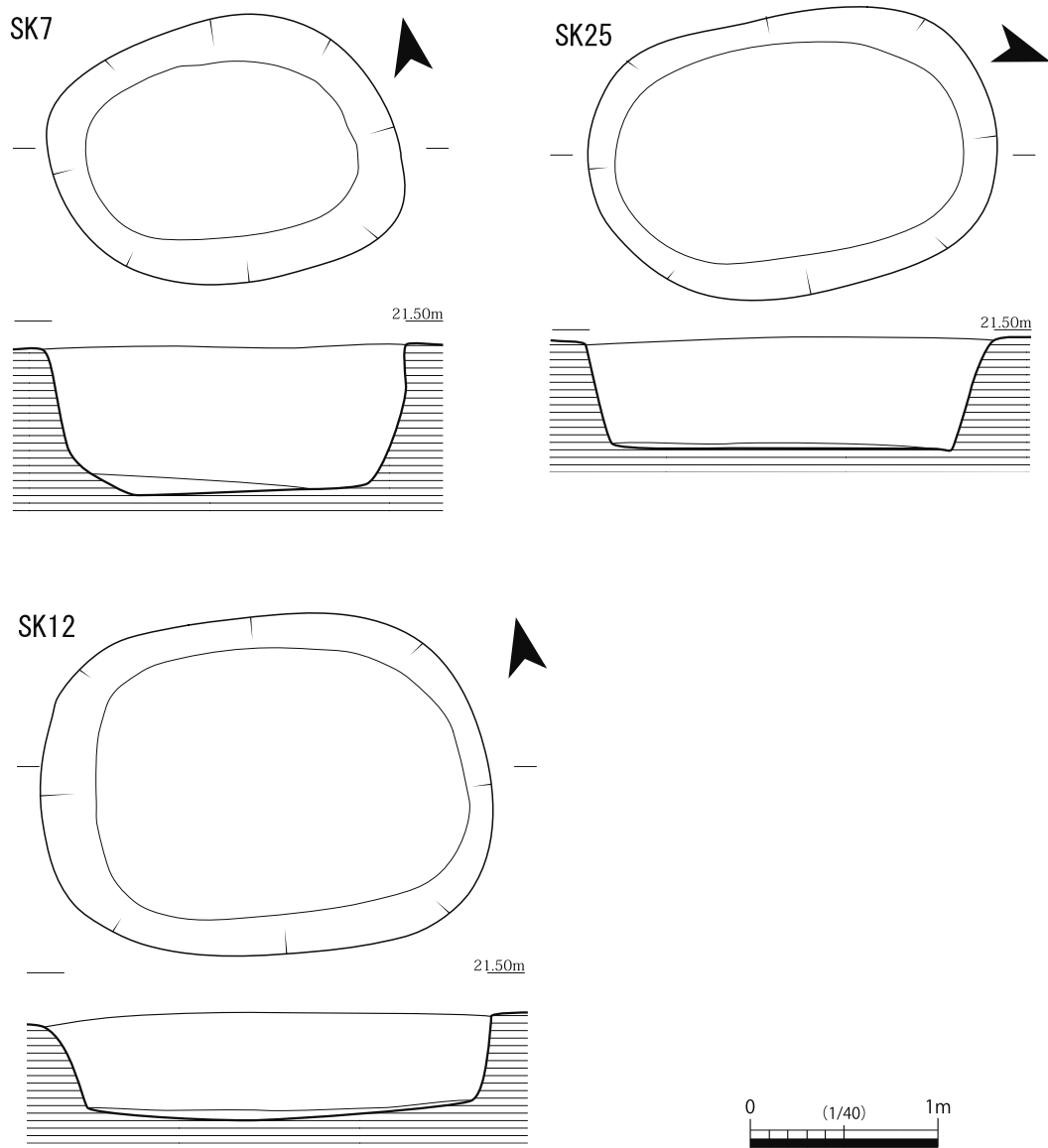
第 14 図 SK16 実測図



第 15 図 土坑実測図 (1)



第 16 图 土坑实测图 (2)



第 17 図 土坑実測図 (3)

(3) 柱穴

土坑西群と同様の分布域から柱穴 33 個が検出されたが、建物跡を復元することはできなかった。基本的に埋土に遺物を含まないものの、その分布状況から土坑西群と同様に近世の遺構と考えられる。

第1表 2区主な土坑一覧表

番号	土層	主な出土遺物（その他出土遺物）	時期	備考
4	①と②が混在（ほぼ同量）	近世陶器片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	近世	
5	①と②が混在（ほぼ同量）	東播系須恵器鉢片（弥生土器・土師器片含む）	13～14世紀	
6	①と②が混在（ほぼ同量） 上位に②が多い	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	13～14世紀	
7	②が主体（①はブロック状）	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	13～14世紀	
8	②が主体（①はブロック状）	白磁皿片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	13世紀	
9	②が主体（①はブロック状）	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	14世紀？	
10	①と②が混在（上位に②が多い）	土師器片（弥生土器・須恵器片、タタキ石破損品含む）	13～14世紀	
11	②が主体（①はブロック状）	瓦器碗片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	13世紀？	和泉型
12	②が主体（①はブロック状）	白磁碗片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	12世紀	
13	①と②が混在	瓦質土器片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	15～16世紀	
14	①と②が混在			
15	①と②が混在	（弥生土器・土師器片）	？	
16	①と②が混在	土師器皿（弥生土器片含む）	8世紀？	都城系土師器
17	②が主体（①はブロック状）	青磁皿片（土師器・須恵器片、石斧片含む）	13世紀？	同安窯系
18	②が主体（①はブロック状）	白磁碗片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	12世紀	玉縁
19	①と②が混在	白磁碗片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	12世紀	玉縁
20	①と②が混在	土師器杯（弥生土器・須恵器・陶器片含む）	12～14世紀	陶器は信楽焼か？
21	②が主体	青磁碗片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	13世紀？	
22	①と②が混在	白磁碗片（弥生土器・土師器・須恵器片、スラグ含む）	13世紀	
23	②が主体	土師器杯片（弥生土器・須恵器片含む）	14世紀	
24	②が主体（①は小ブロック）	青磁碗片（弥生土器・土師器・須恵器片含む）	13世紀	同安窯系
25	①と②が混在	土師器杯（弥生土器・須恵器片含む）	12～14世紀	土師器鍋片あり
26	②が主体	（弥生土器・土師器・須恵器片、安山岩含む）	？	
27	②が主体（①は小ブロック）	土師器杯片	12～13世紀？	柱状高台あり
28	①と②が混在	土師器杯片（須恵器片含む）	12世紀？	
29	①と②が混在	土師器杯片（弥生土器片含む）	13～14世紀？	
30	①と②が混在（①がやや多い）	土師器杯片（弥生土器・須恵器片含む）	13～14世紀	
31	①と②が混在	土師器杯片（須恵器片含む）	13～14世紀	
32	①と②が混在	白磁皿（弥生土器・土師器・須恵器片）	12世紀	
33	②が主体	土師器片（弥生土器・土師器・須恵器片、石斧片含む）	12～13世紀	
34	①と②が混在	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	13～14世紀	
35	①と②が混在	土師器片（須恵器片含む）	12～14世紀	柱状高台あり
36	①と②が混在	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	12世紀？	
37	②が主体	土師器片（須恵器片含む）	13～14世紀	
38	②が主体	土師器片（弥生土器・陶器片含む）	13～14世紀	陶器は産地不明
39	①と②が混在	土師器片（須恵器片含む）	14～15世紀	
40	①と②が混在	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	13～14世紀	柱状高台あり
41	①と②が混在	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	13～15世紀	須恵器平瓶片あり
42	①と②が混在	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	13～14世紀	
43	①と②が混在	土師器片（須恵器片含む）	12～14世紀	
44	②が主体	（土師器・須恵器片含む）	？	古代か？
45	①と②が混在	青磁碗片（土師器片含む）	13世紀	同安窯系か
46		土師器片（弥生土器片含む）	11～14世紀	
47		白磁小杯（土師器片含む）	17世紀	肥前磁器
48		土師器片（弥生土器片含む）	13～14世紀	
55		近世陶器碗片（弥生土器・土師器片含む）	18世紀	萩焼深川窯
57		瓦質土器片	14～16世紀	
62		近世陶器碗	18世紀	萩焼深川窯
64	①と②が混在（ほぼ同量）	土師器片（弥生土器・須恵器片含む）	13～14世紀	須恵器器台片あり

*土層：①明黄褐色粘土（10YR 6/8）

②黄灰色粘土（2.5Y 5/1）

4 3区の遺構

3区は地形的には低湿地であり明確な遺構は存在しないが、弥生時代から中世にかけての遺物を含む遺物包含層の堆積が確認された。したがって、3区周辺にも当該時期の集落が広がっていると考えられる。

5 4区の遺構

4区は山裾の平坦地であり安定した粘質土の地山がみられる。調査により中世集落が確認されたが、遺構検出時に弥生時代から中世にかけての遺物が出土しており、水田開発に伴い当該時期の集落が中世段階で掘削を受けたと考えられる。

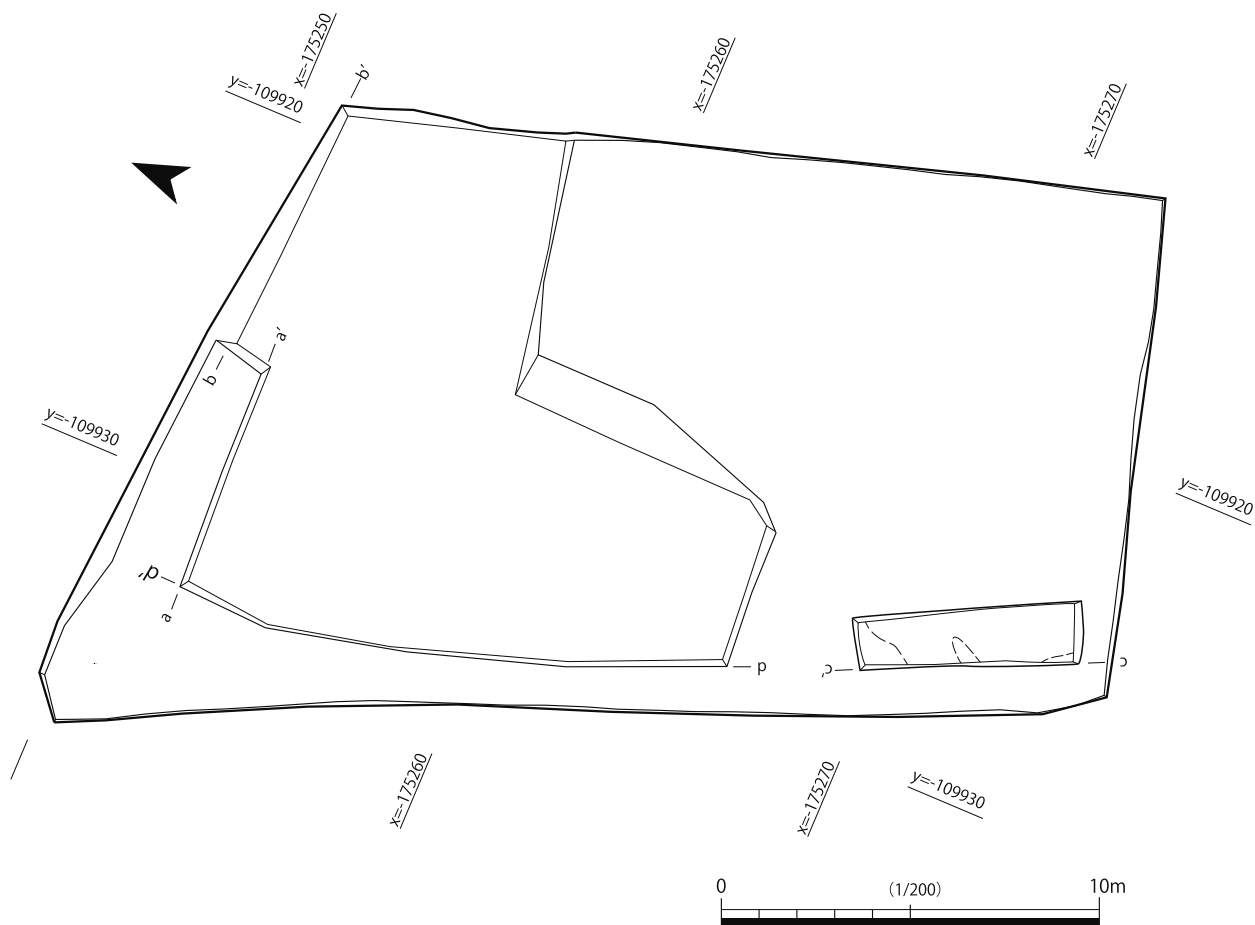
(1) 掘立柱建物跡(第20図、図版17)

5棟を復元できた。いずれも東西棟の小規模な建物である。柱穴埋土の遺物から、中世～近世の遺構と考えられる。

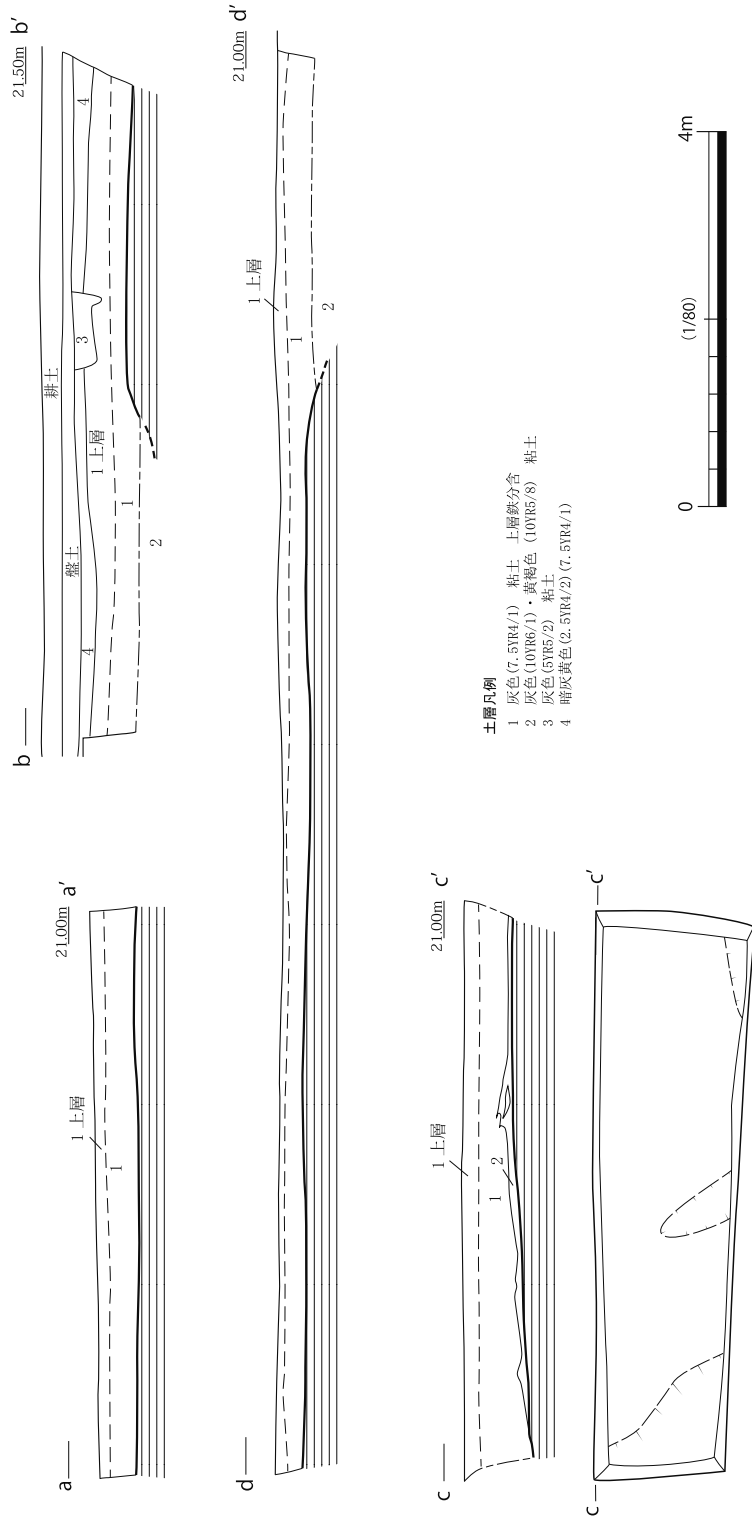
SB 1 主軸方位N 82° Eの1間×2間の建物であり、桁行5.4 m (18尺)、梁行3.0 m (10尺)の規模をもつ。柱穴埋土からは基本的に遺物が出土していない。

SB 2 主軸方位N 90° Eの2間×3間の建物であり、桁行5.0 m (17尺)、梁行2.7 m (9尺)の規模をもつ。柱穴SP 49埋土からは中世土器片が出土している。

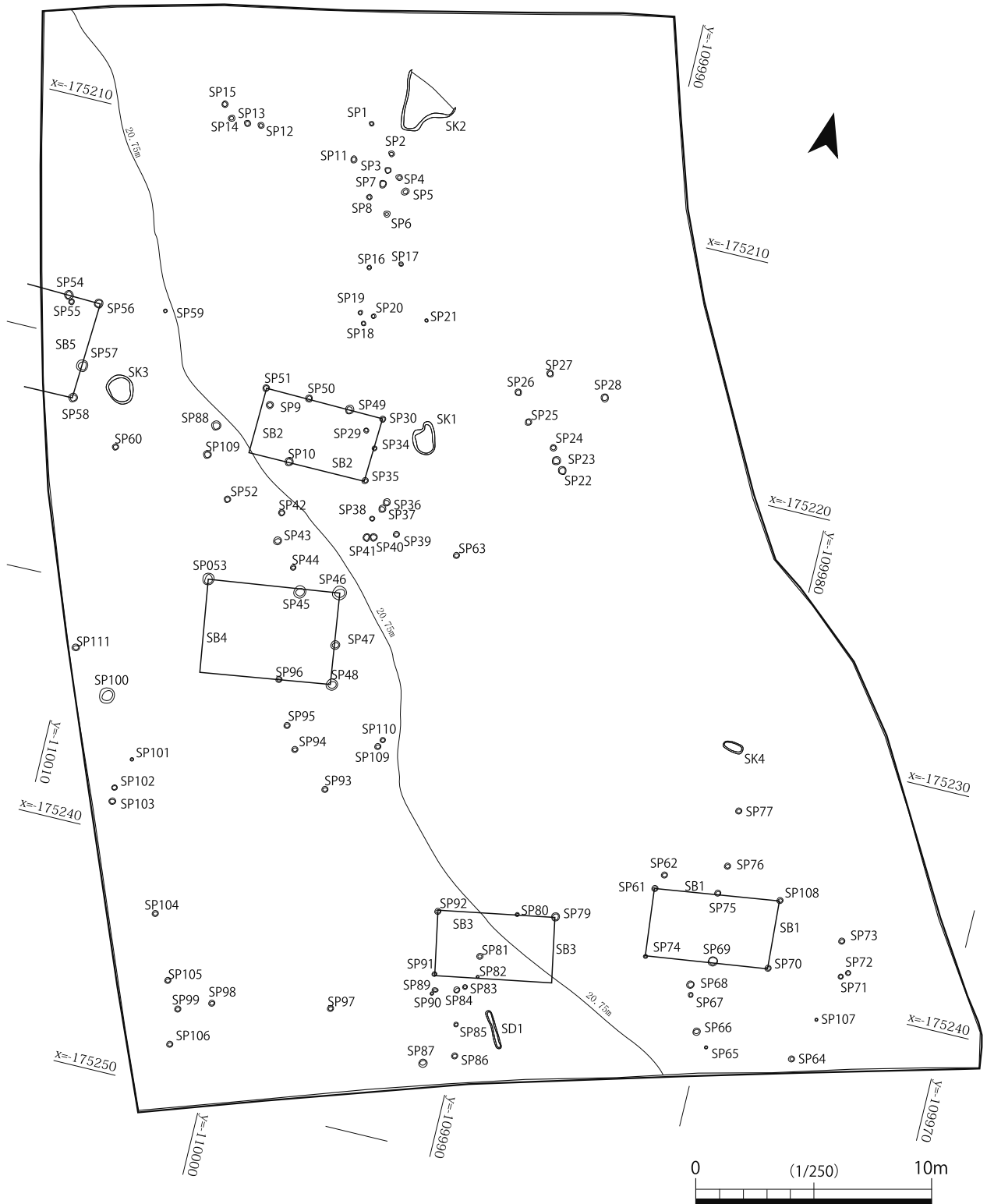
SB 3 主軸方位N 80° Eの1間×2間の建物であり、桁行5.2 m (17尺)、梁行2.7 m (9尺)の



第18図 3区遺構配置図



第19図 3区トレンチ・土層断面実測図

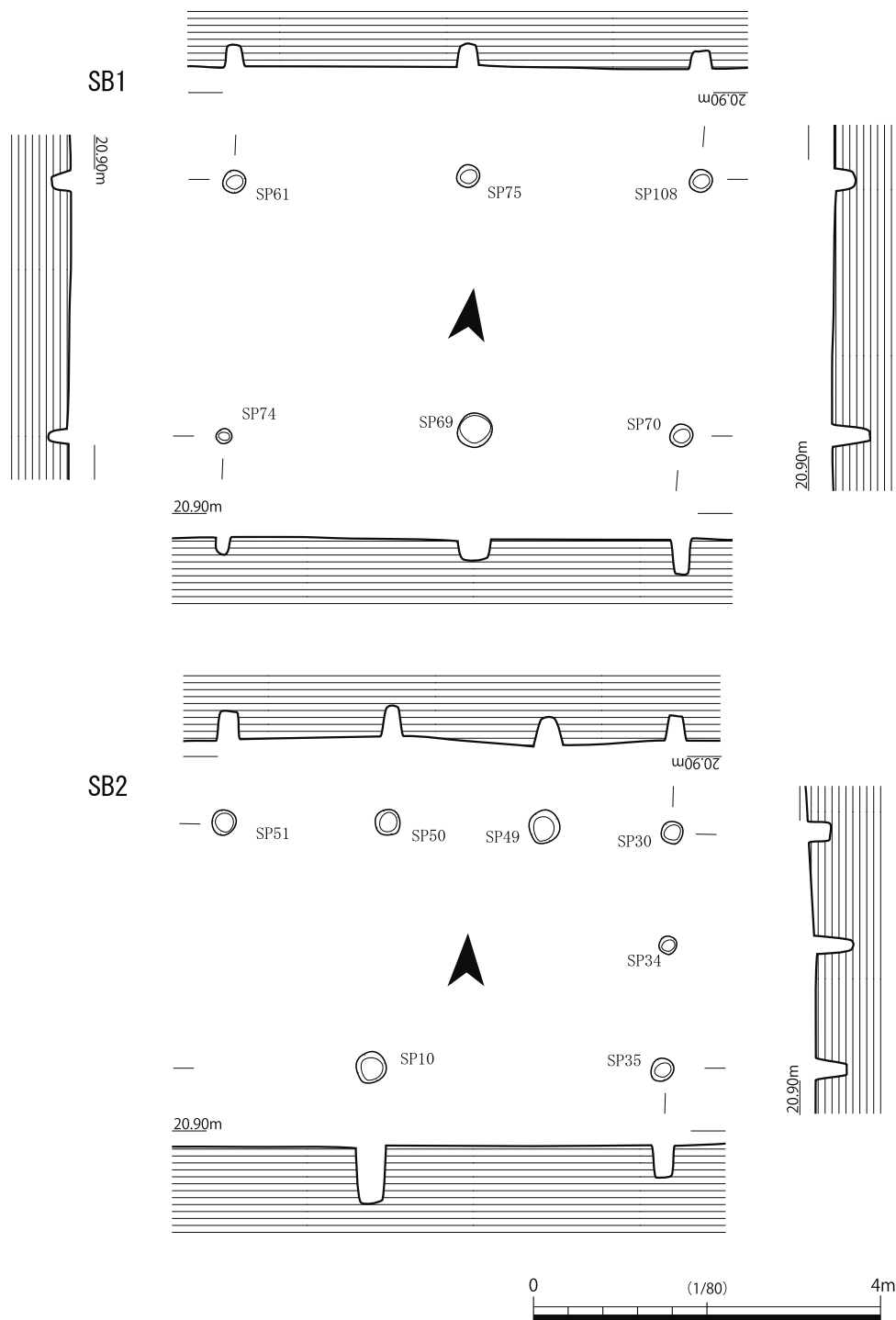


第 20 图 4 区遺構配置図

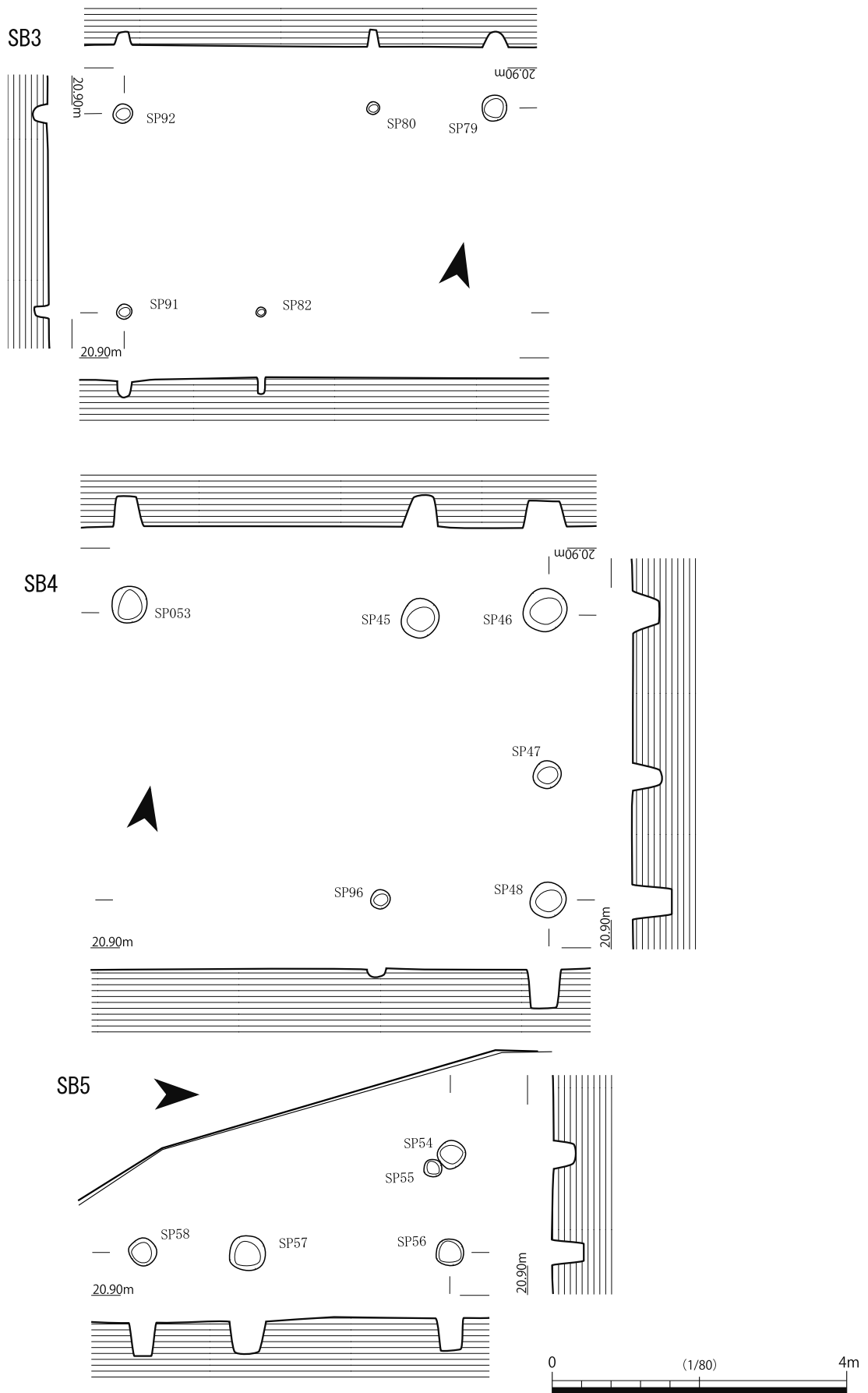
規模をもつ。柱穴埋土からは基本的に遺物が出土していない。

SB 4 主軸方位N 82° Eの2間×2間の建物であり、桁行5.0 m（17尺）、梁行2.7 m（9尺）の規模をもつ。柱穴埋土からは弥生～古墳時代土器小片が出土している。

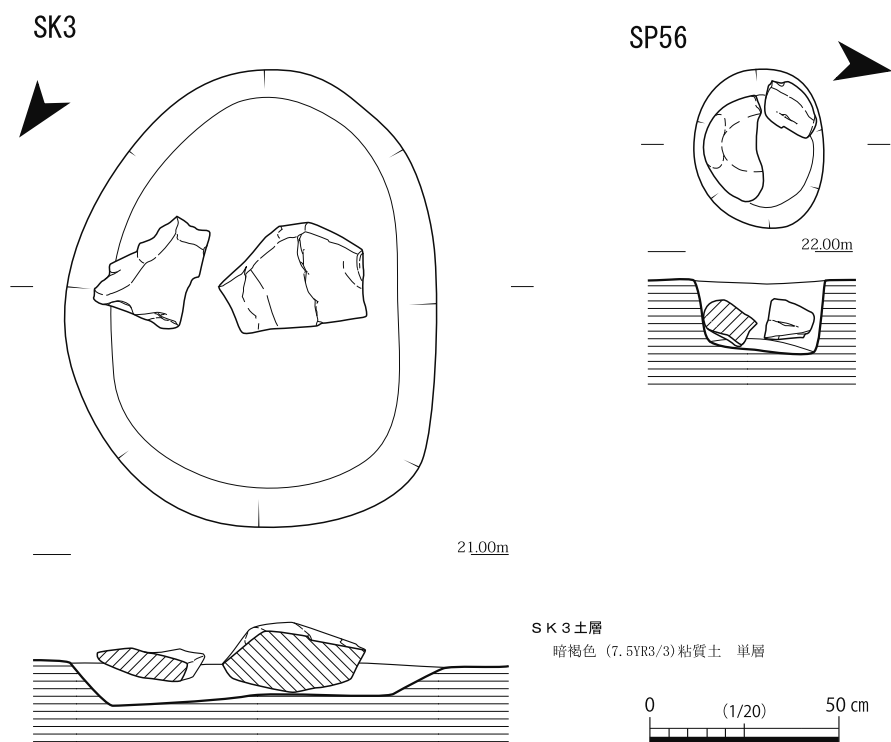
SB 5 主軸方位N90° Eの2間×3間程度の建物と推定される。桁行4.2 m（14尺）以上、梁行2.6 m（13尺）以上の規模をもつ。柱穴S P 56埋土から近世陶器片が出土している。



第 21 図 SB 1・2 実測図



第 22 図 SB 3 ~ 5 実測図



第 23 図 SK 3・SP56 実測図

(2) 土坑

土坑は3基確認された。埋土にはいずれも弥生土器小片が含まれるが、遺構の時期決定資料となる遺物とは考えにくい。

SK 3 長径約 120 cm の、短径約 100 cm、深さ 20 cm の土坑で、底面に 2 個の角礫を据える。用途は不明である。埋土には弥生土器片を含む。土層堆積状況は短期間に埋め戻されたような状況で、基本的に中世遺構と考えられる 2 区土坑群と共通することから、この土坑も中世遺構と判断される。用途等は不明である。

(3) 柱穴

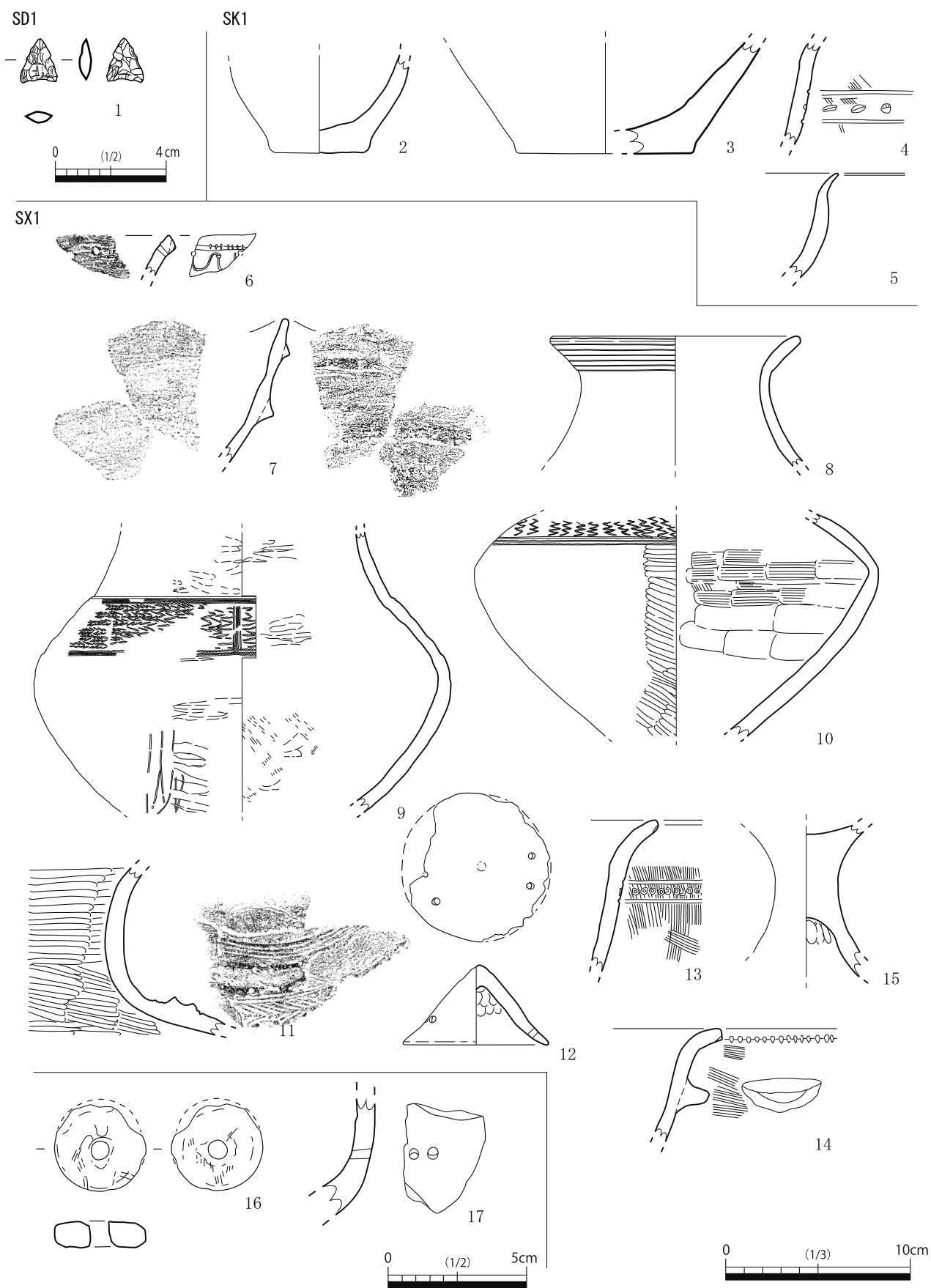
柱穴 109 個が検出された。このうち数個には根石ないし根固め石がみられた (図版 17)。山裾に近い 4 区北東部についてはすでに掘削され、失われたと考えられる。

SP56 根固めに石を配した、長径 40 cm の柱穴である。南側に配された石は約 2 分の 1 を残す石皿を転用したものである。

6 遺物

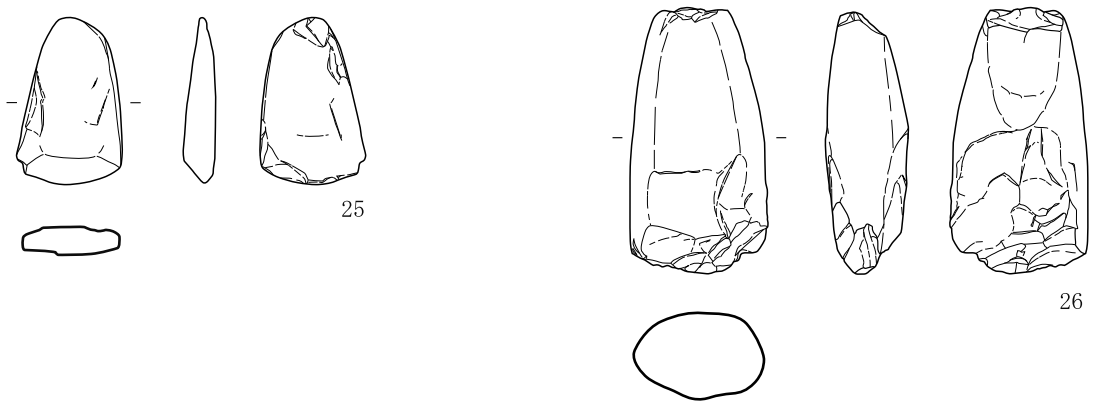
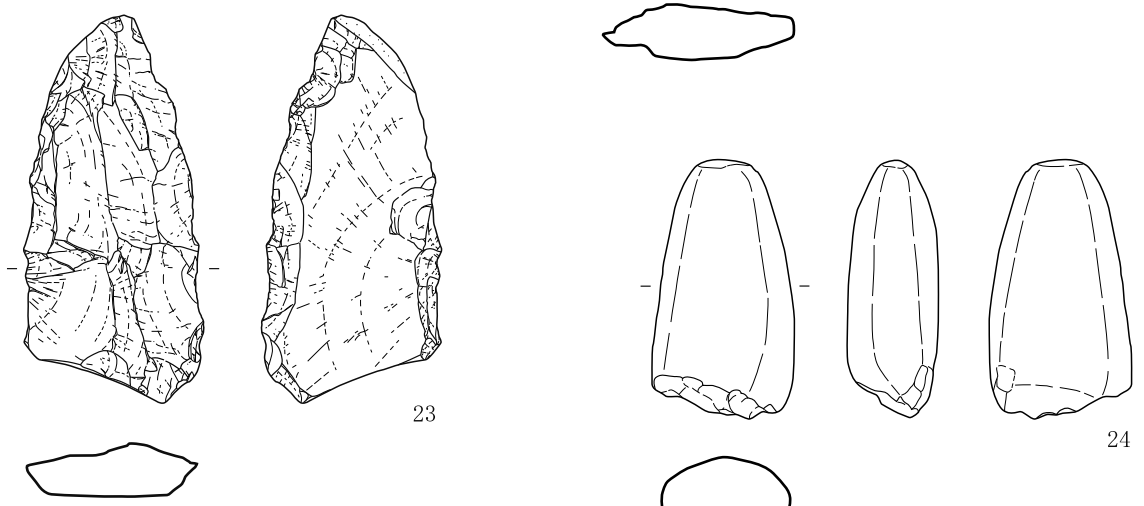
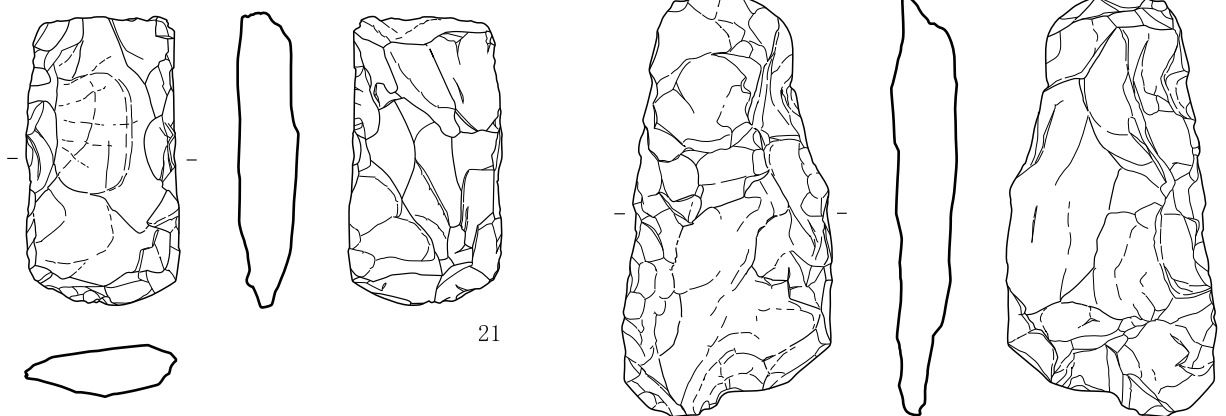
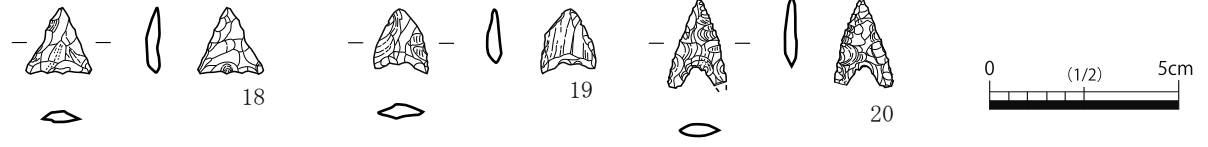
(1) 1 区 (第 24 ~ 27 図)

1 は SD 1 から出土した打製石鏃である。2 ~ 5 は SK 1 から出土した弥生土器の壺底部 (2・3) 甕胴部 (4)、甕口縁部 (5) である。6 ~ 17 は SX 1 から出土した土器・土製品である。6・7 は縄文土器、晩期末葉の深鉢口縁部である。8 ~ 11 は弥生土器壺、12 は蓋、13 は甕口縁部片である。



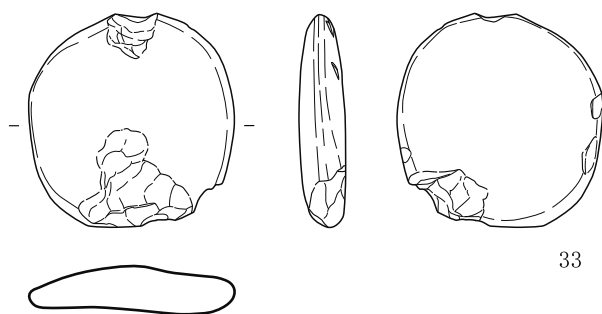
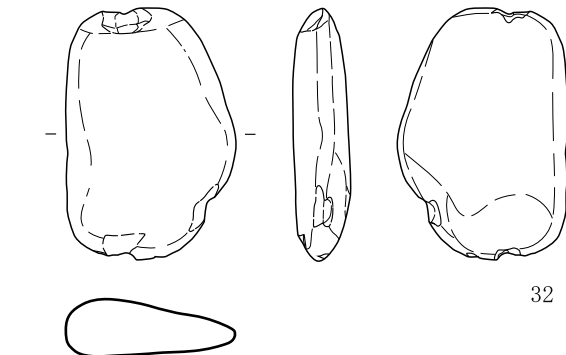
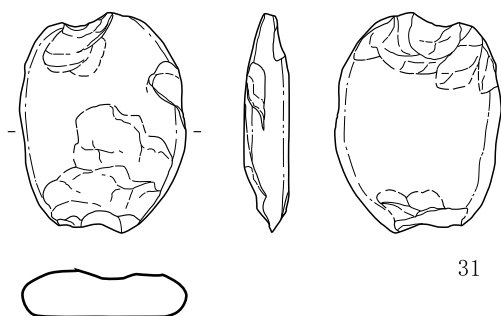
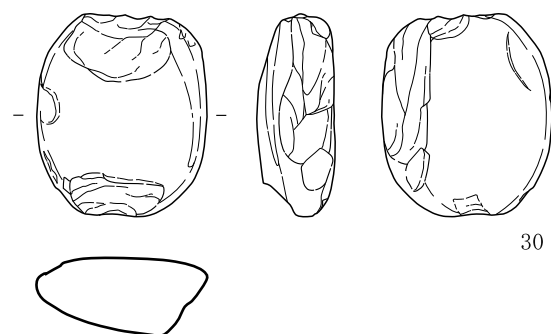
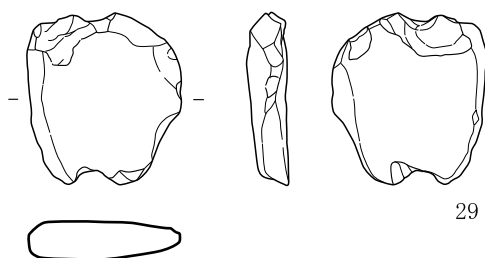
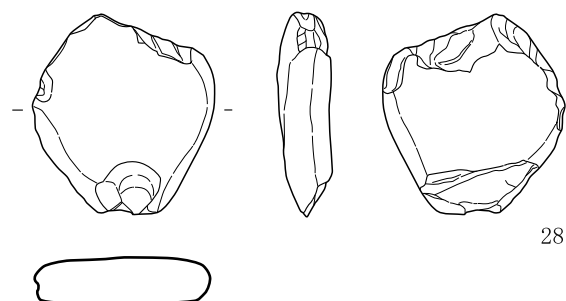
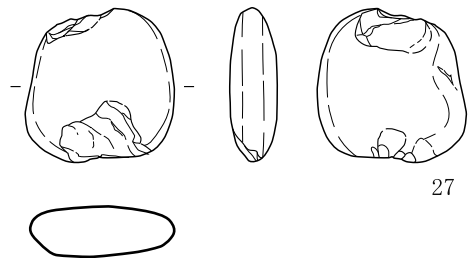
第 24 图 1 区出土遺物実測図 (1)

SX1



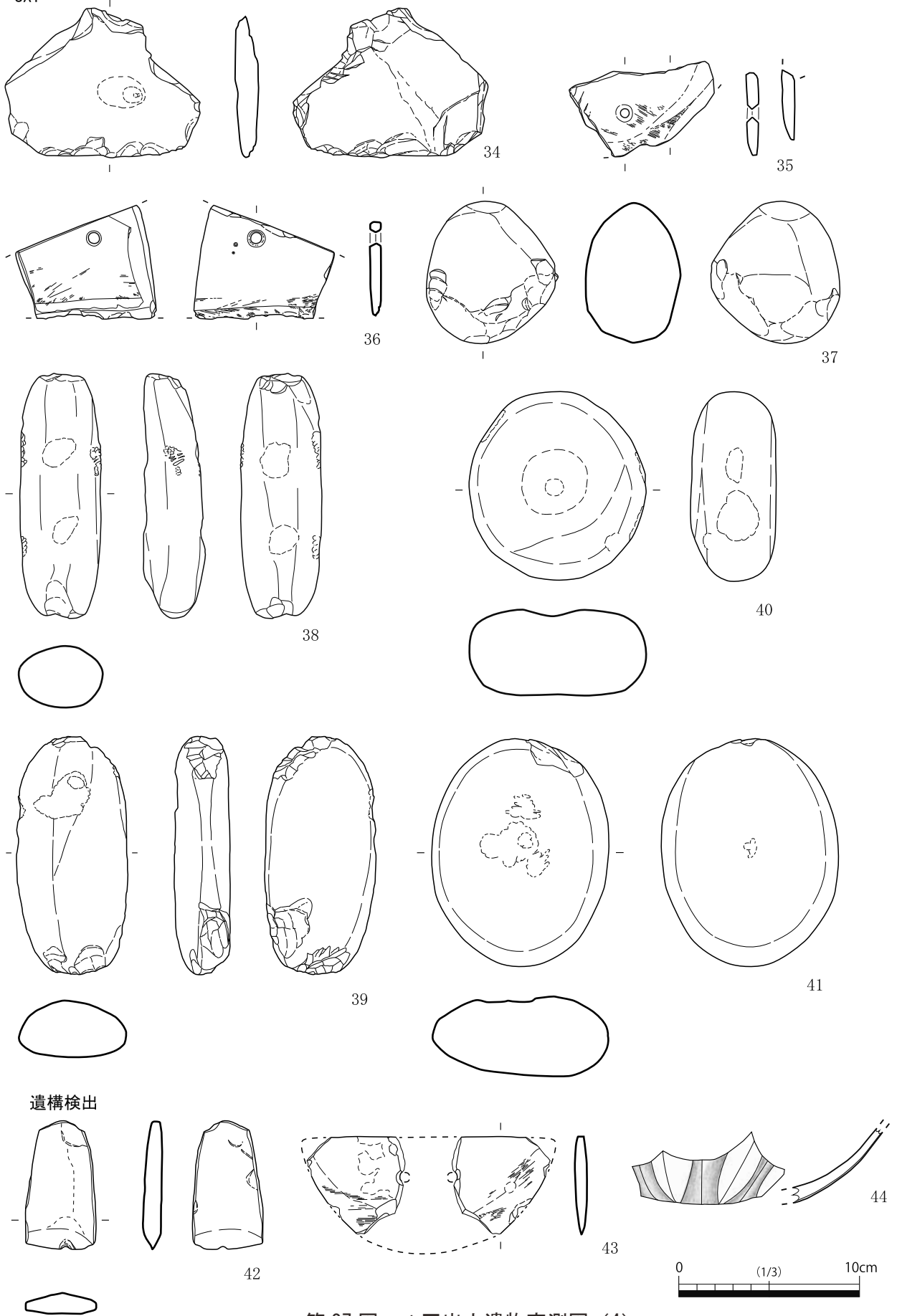
第 25 图 1 区出土遺物実測図 (2)

SX1



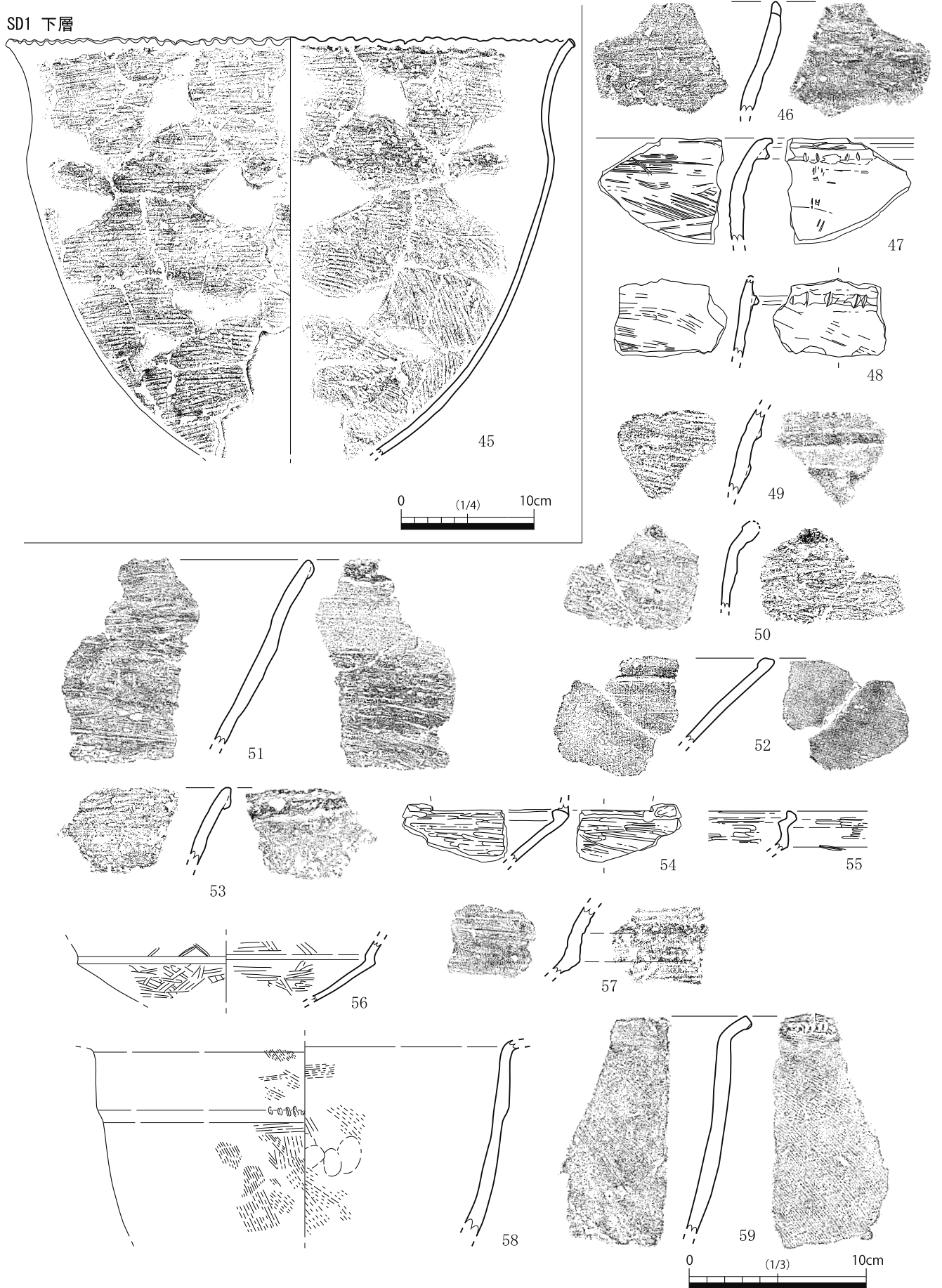
第 26 图 1 区出土遺物実測図 (3)

SX1



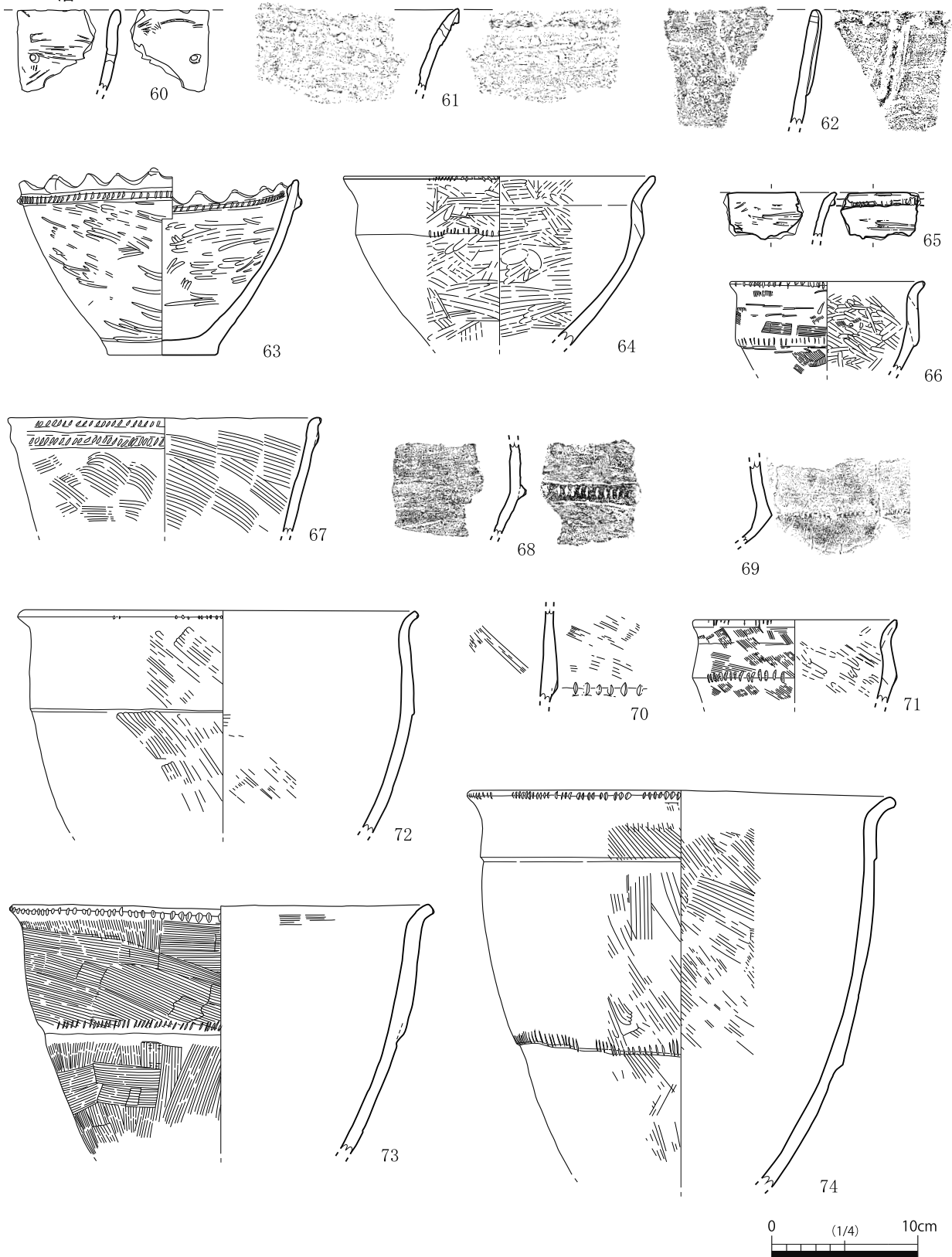
第 27 図 1 区出土遺物実測図 (4)

SD1 下層



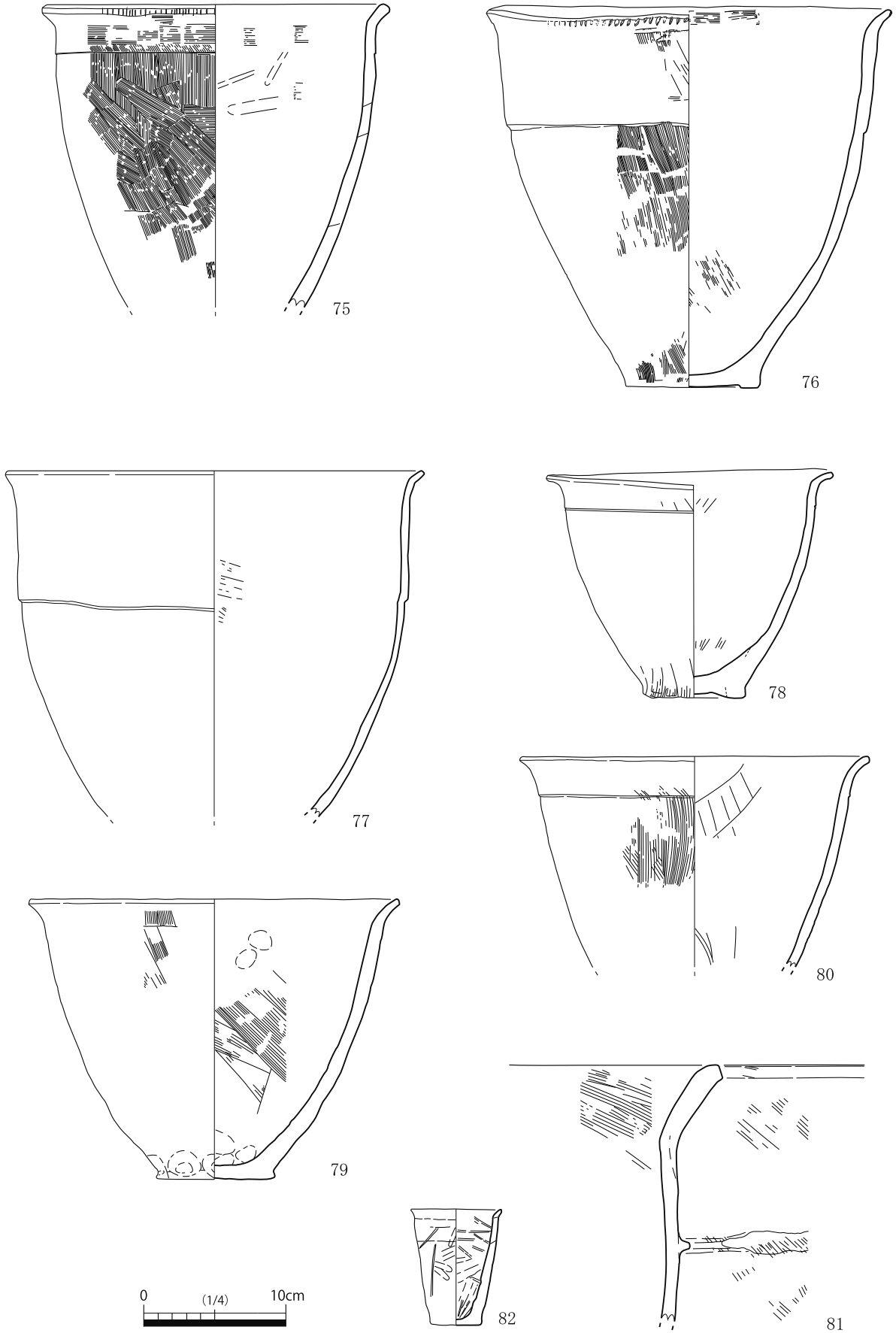
第 28 图 2 区出土遺物実測図 (1)

SD1 上層



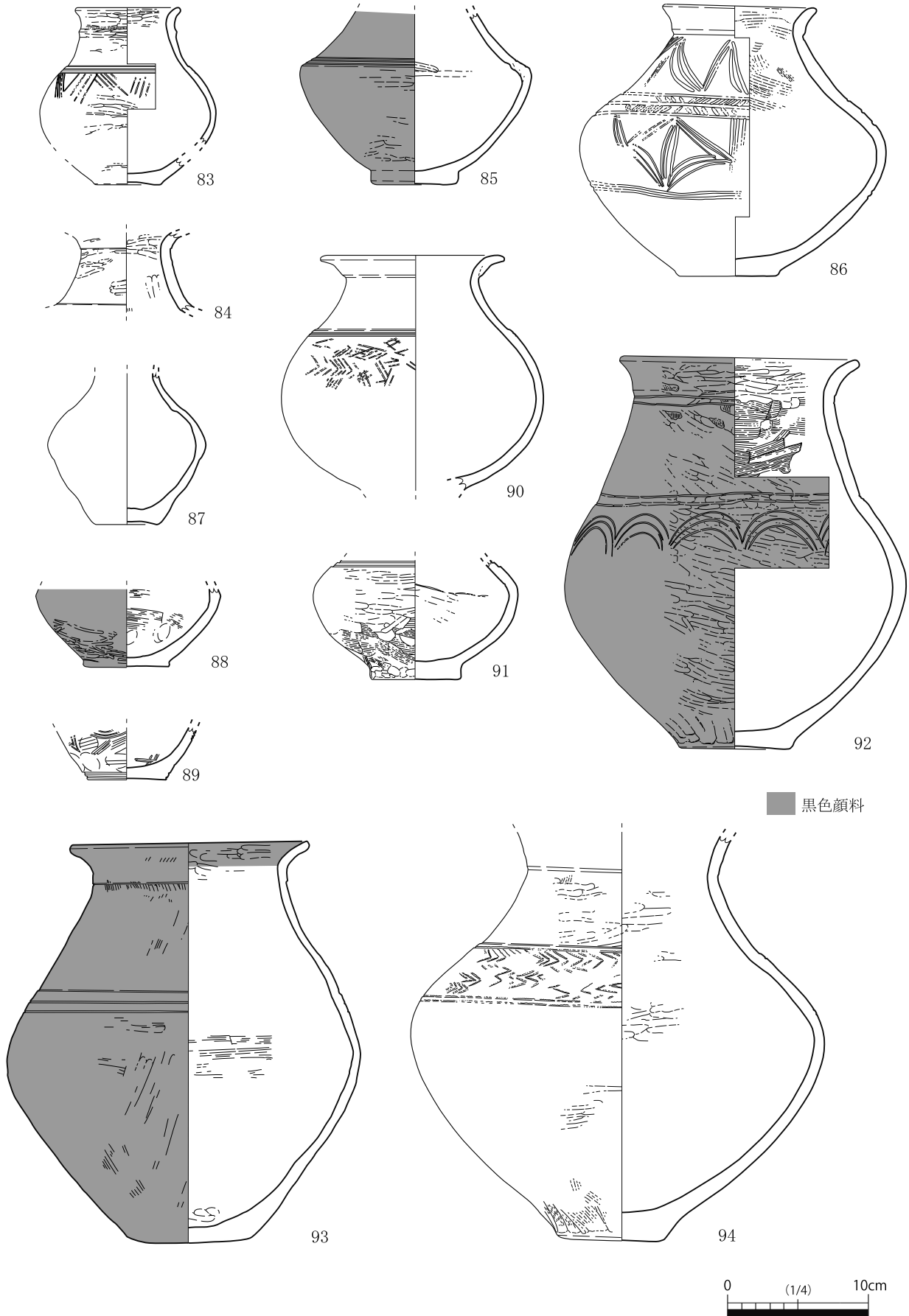
第 29 图 2 区出土遺物実測図 (2)

SD1 上層



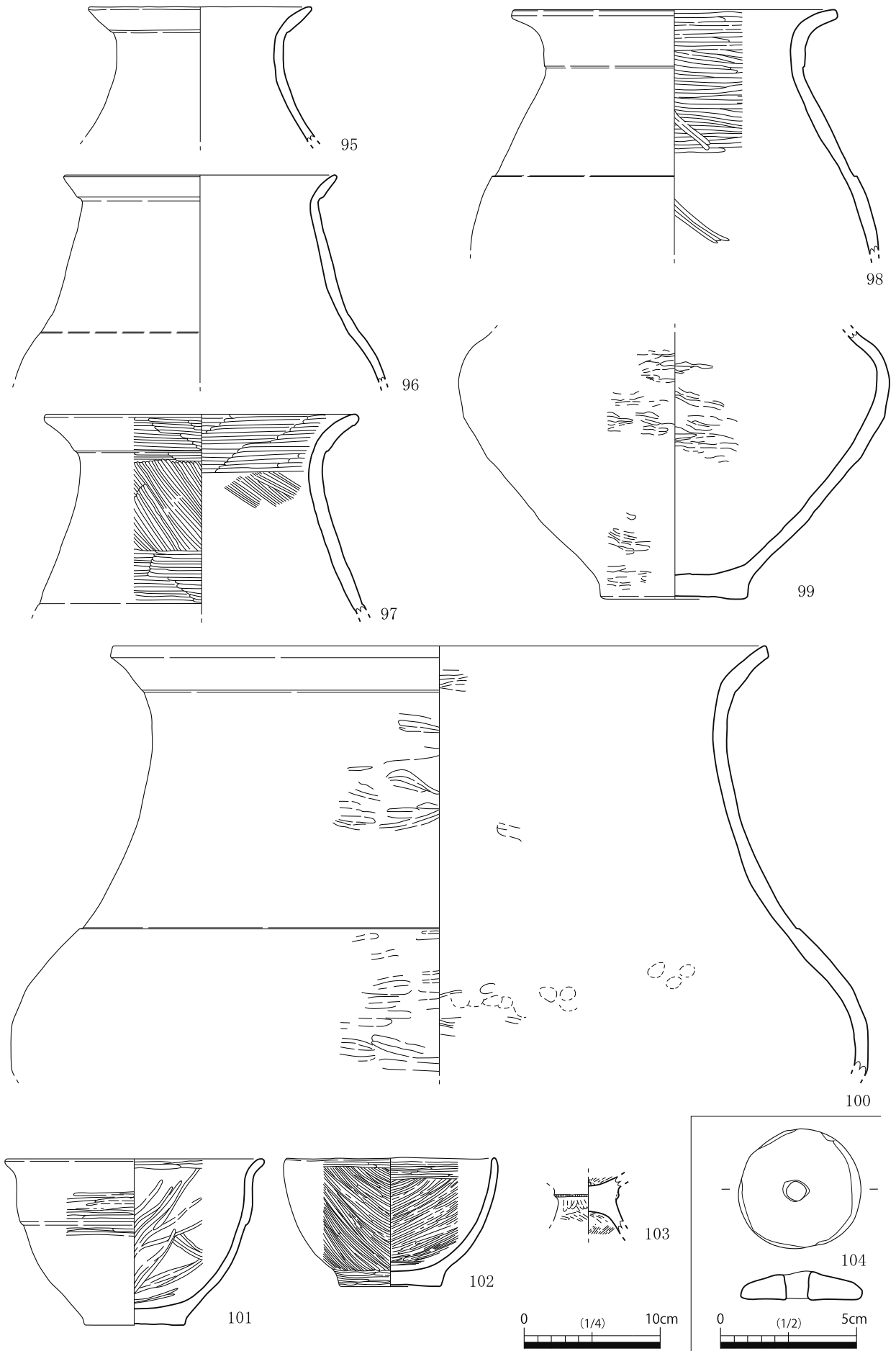
第30图 2区出土遺物実測図(3)

SD1 上層



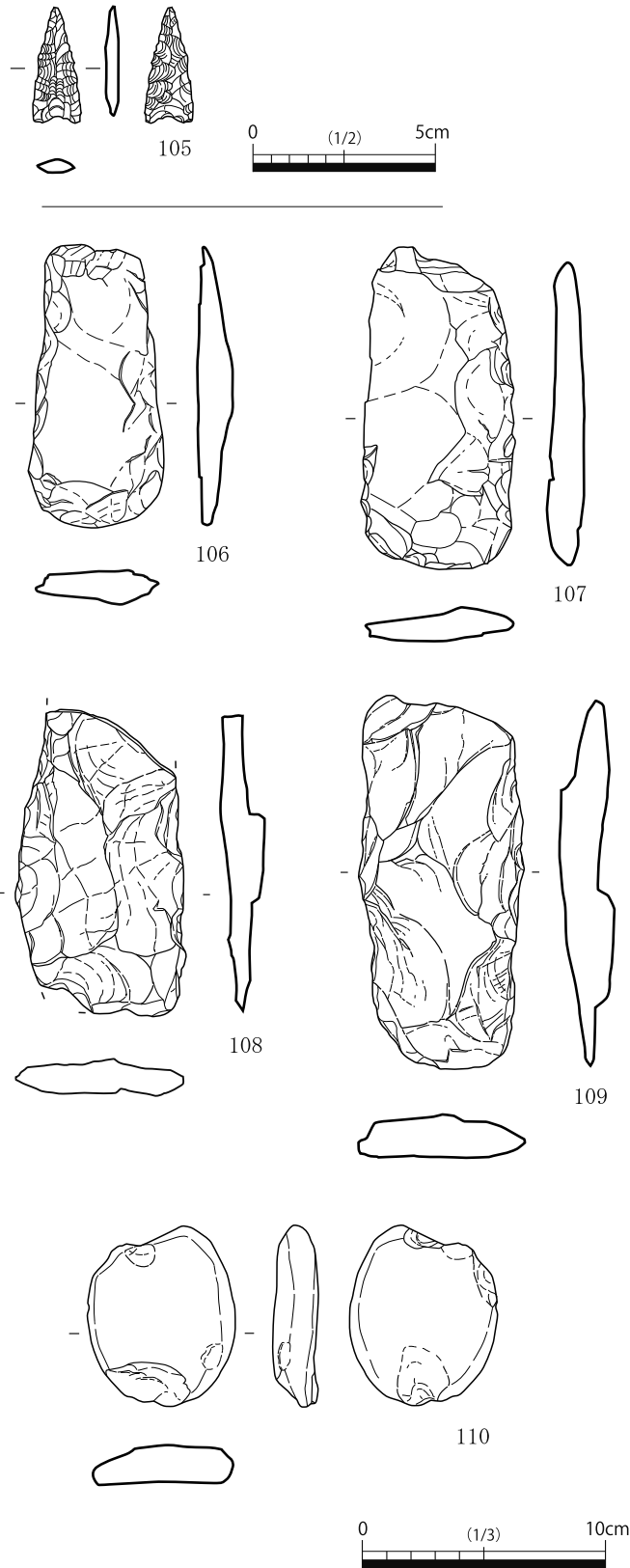
第 31 图 2 区出土遺物実測図 (4)

SD1 上層



第 32 図 2 区出土遺物実測図 (5)

SD1 下層



15は高坏脚部、16は土製品紡錘車、17は土製品陶埴である。18～41はSX 1から出土した石器である。18～20は打製石鏃、21～23は打製石斧、24～26は磨製石斧、27～33は礫石錘、34～36は石包丁、37～41は敲石である。42～44は遺構検出時に出土した資料である。42は磨製石斧、43は石包丁、44は龍泉窯系蓮弁文青磁碗で、13世紀代である。

(2) 2区 (第28～40図)

45～59はSD 1の下層から出土した土器である。45～57は縄文土器である。45は大型の縄文土器深鉢である。口縁部は波状、内外面を二枚貝による貝殻条痕調整を施す。58・59は弥生土器甕である。数量的には少ないが、下層からも弥生土器が出土している。

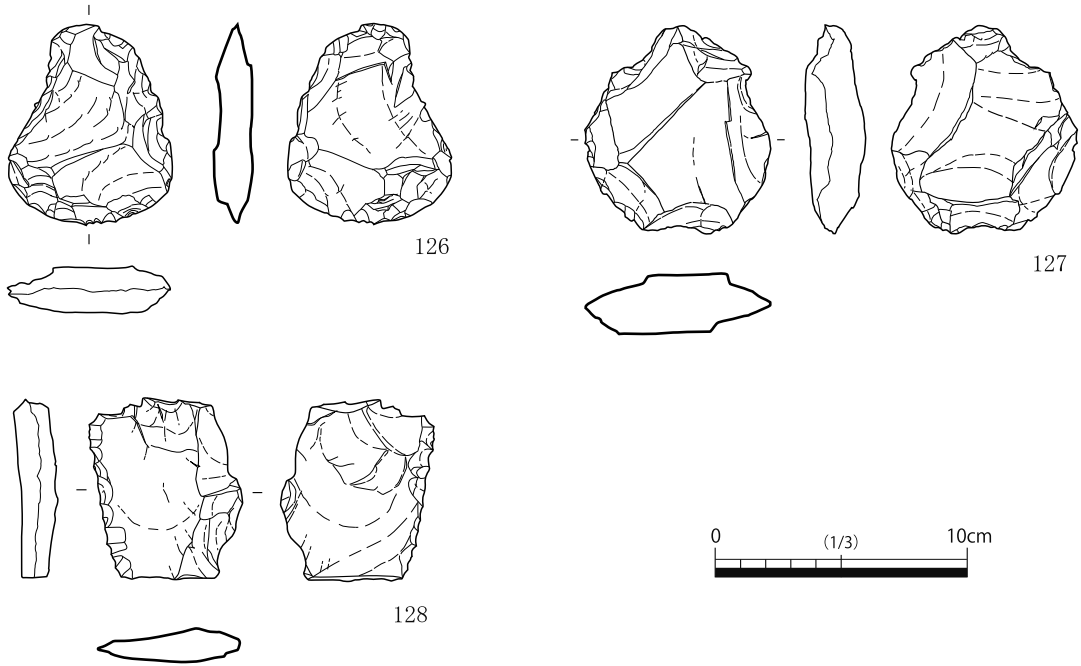
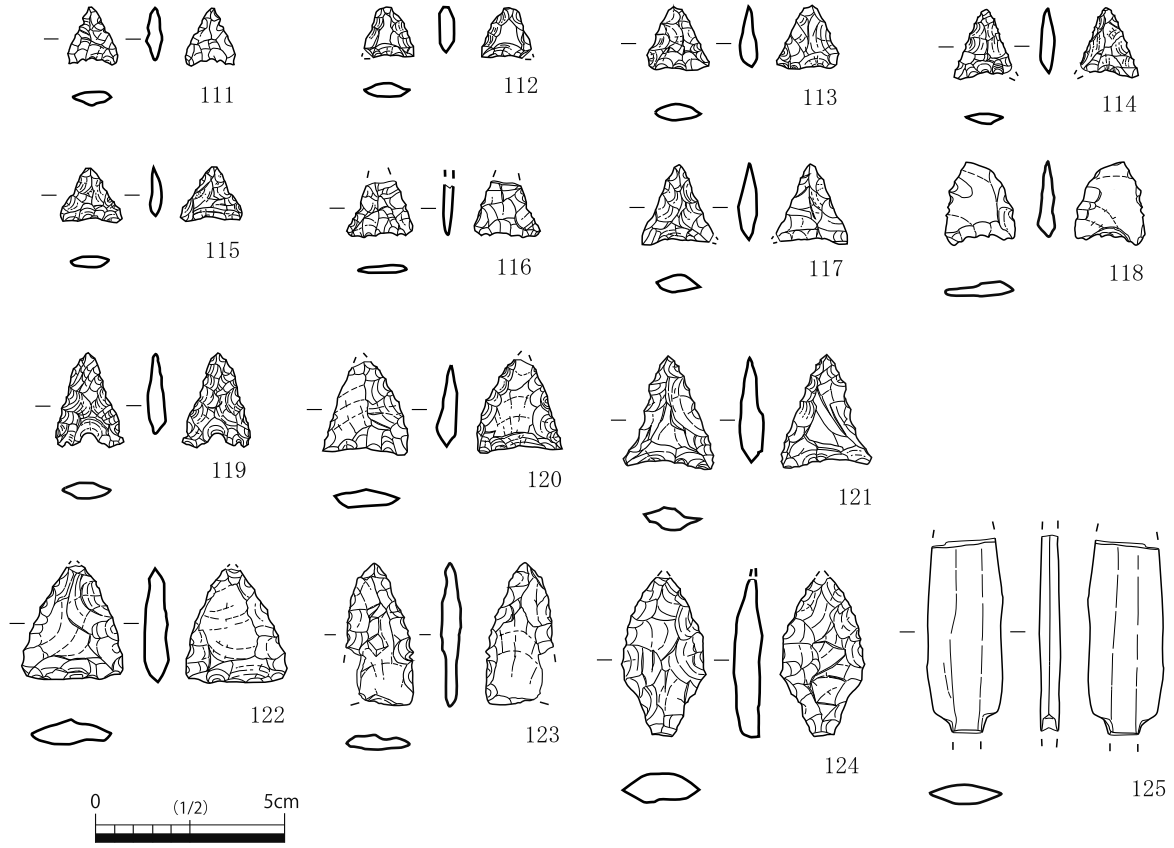
60～104はSD 1上層から出土した土器・土製品である。60～62は貝殻条痕文系の深鉢で、60・61は焼成前の穿孔がみられる。63はほぼ完形の鉢で、口縁鋸歯状、その下に内外面に横位刻目突帯、内外に丁寧なミガキが施された突帯文土器である。66～104は弥生土器・土製品である。66～81は弥生土器甕・鉢である。67は口縁外面に2段の横位刻目突帯が施される。

71は小型の高坏の可能性もある。81はハケ目後に胴部に突帯を貼付ける。82は甕のミニチュアである。

83～100は弥生土器壺である。86はやや頸部が短く、頸部から胴中央下部までの幅広い範囲に横位沈線による2

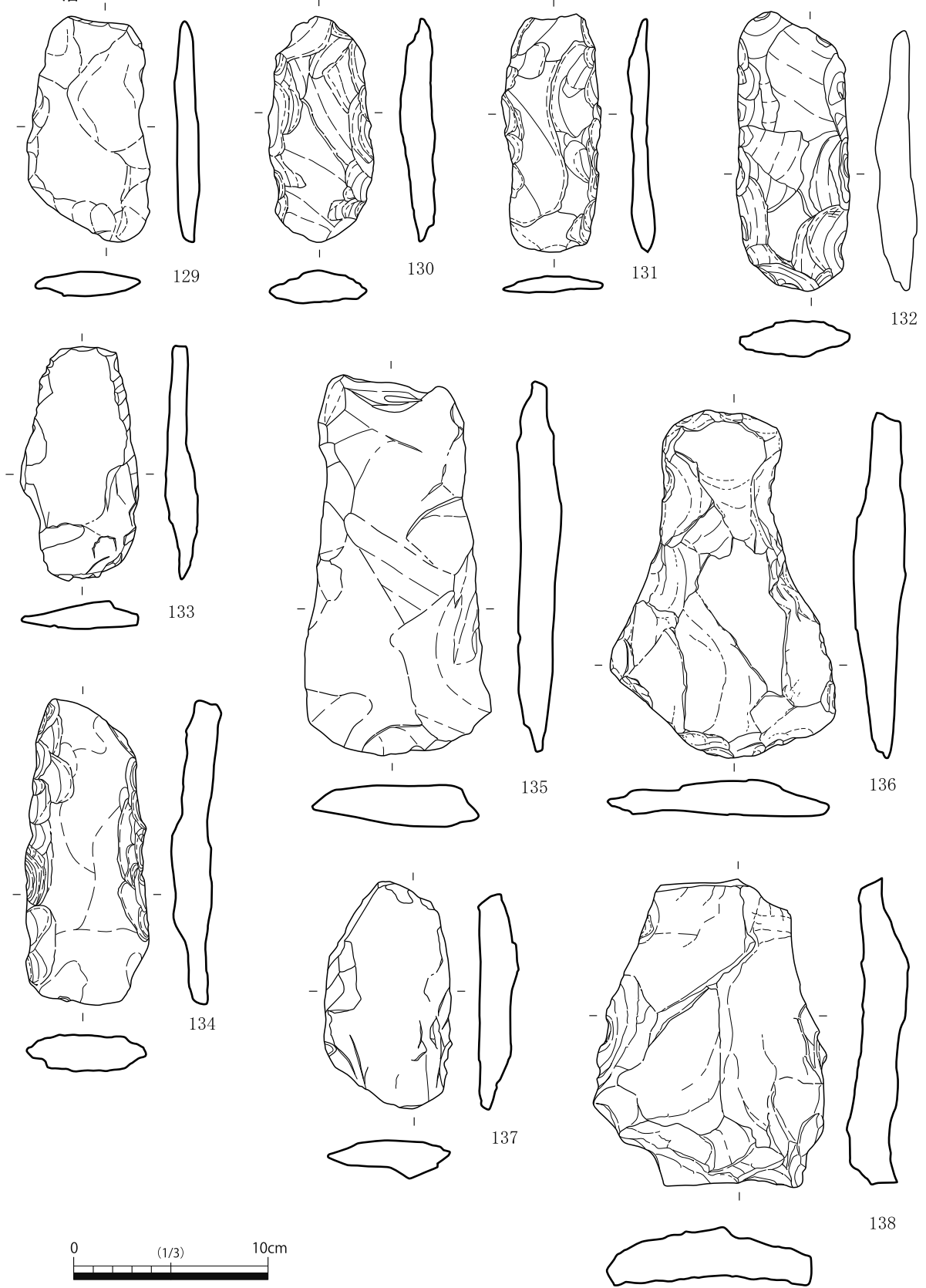
第33図 2区出土遺物実測図(6)

SD1 上層



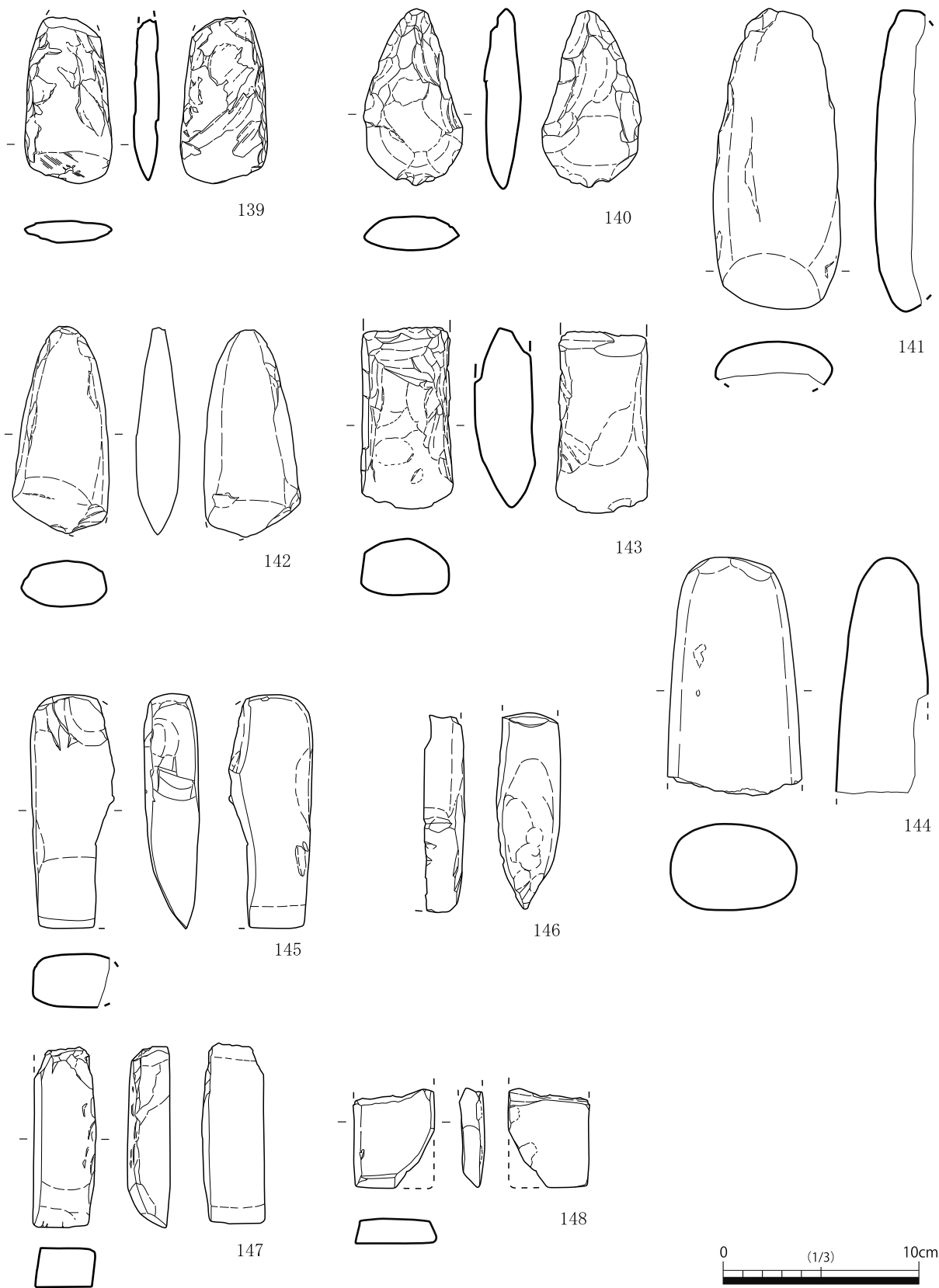
第 34 图 2 区出土遺物実測図 (7)

SD1 上層



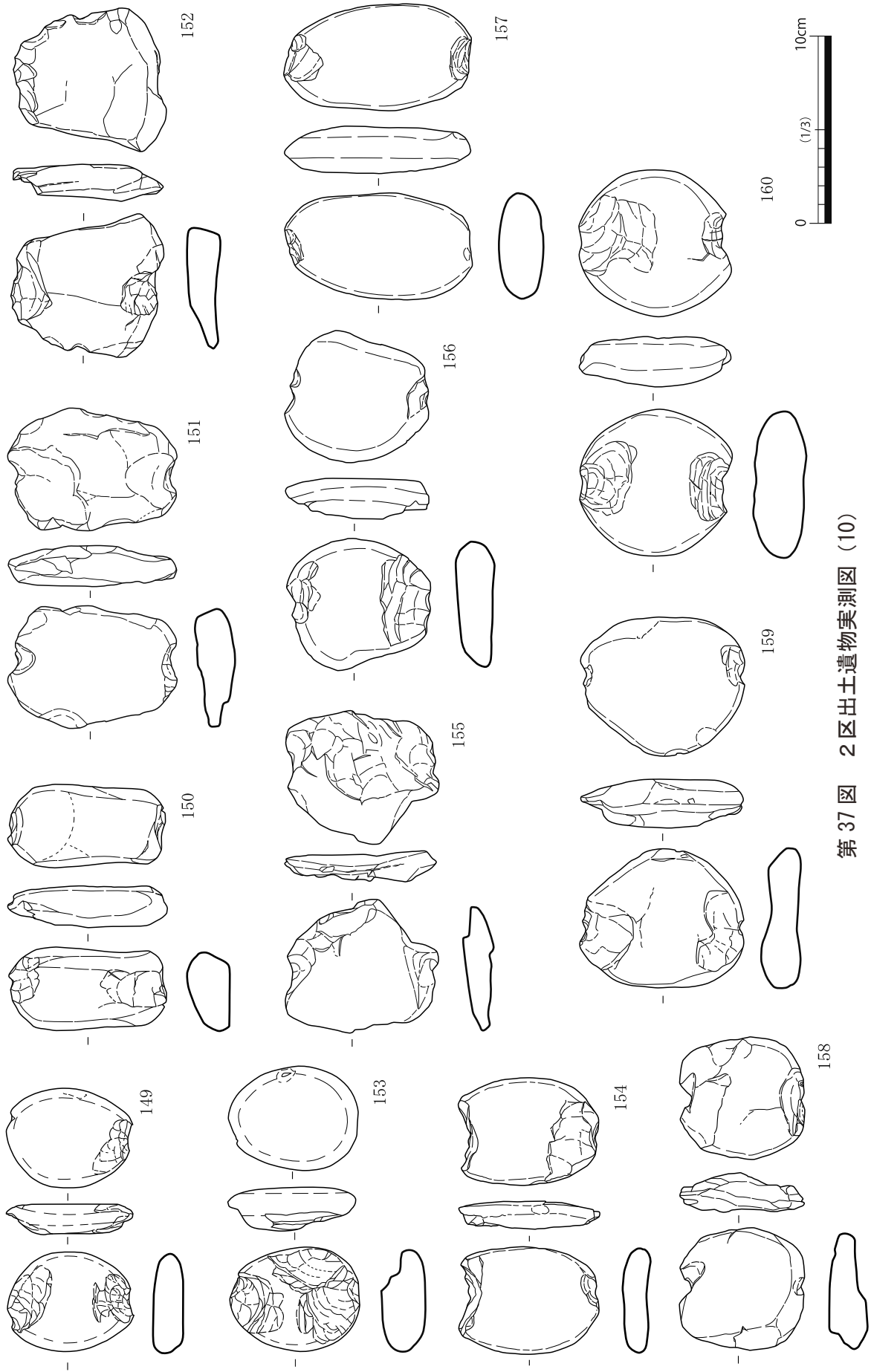
第 35 图 2 区出土遺物実測図 (8)

SD1 上層



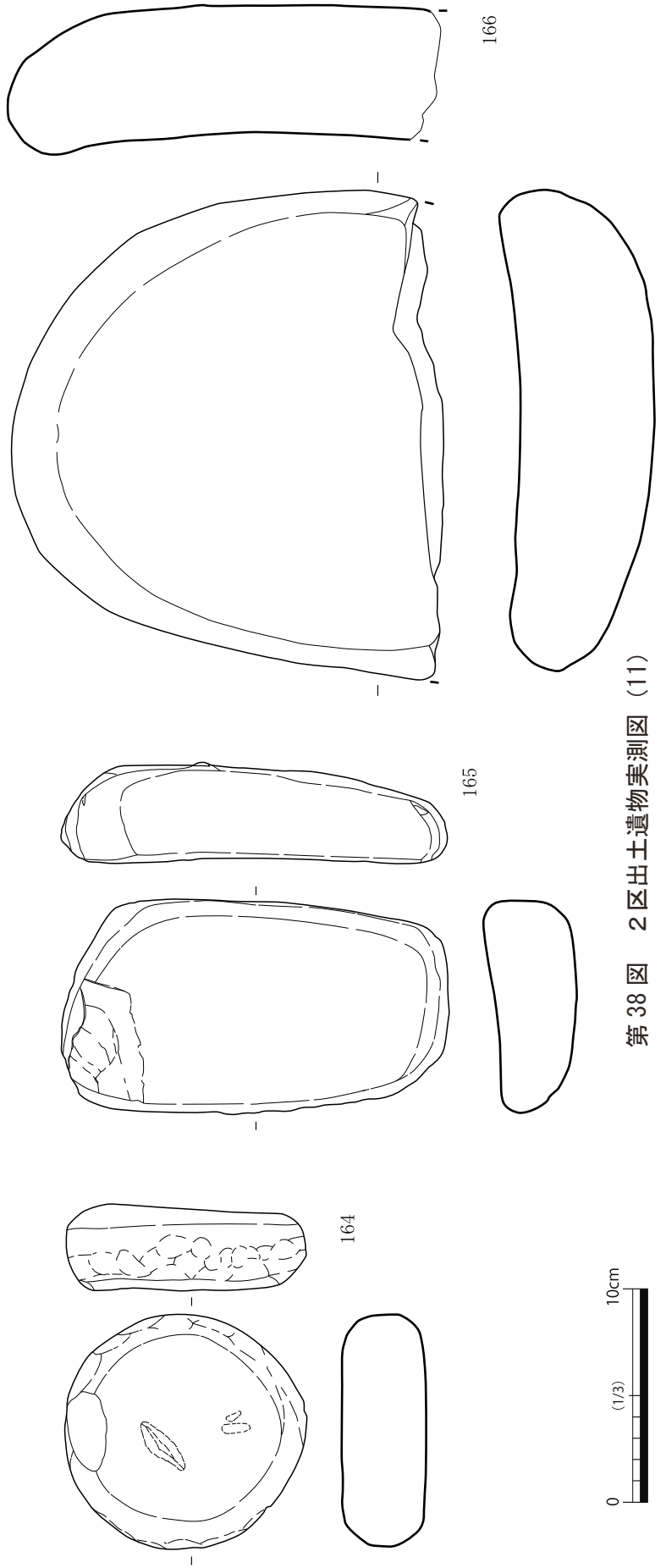
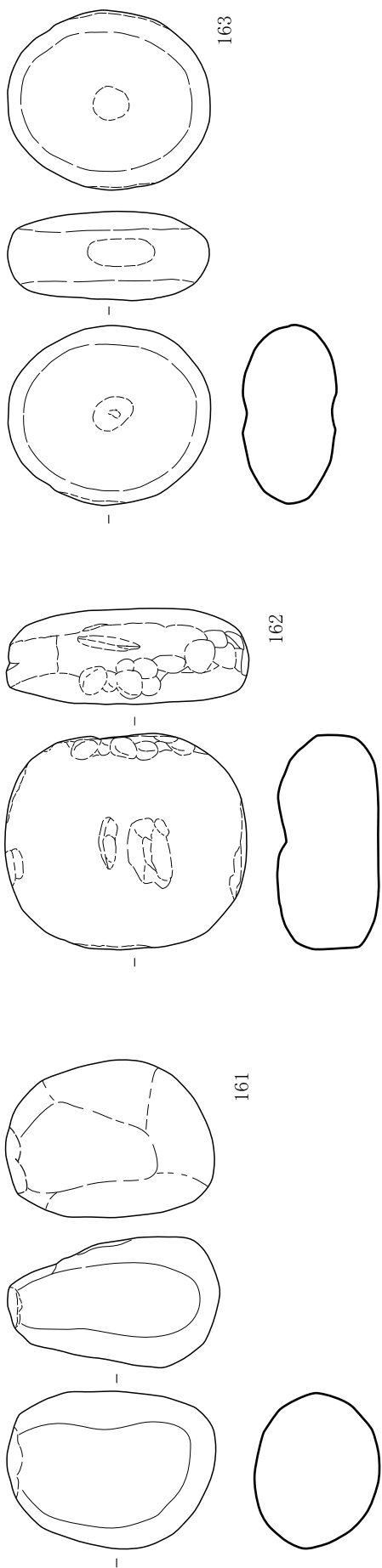
第 36 图 2 区出土遺物実測图 (9)

SD1 上層

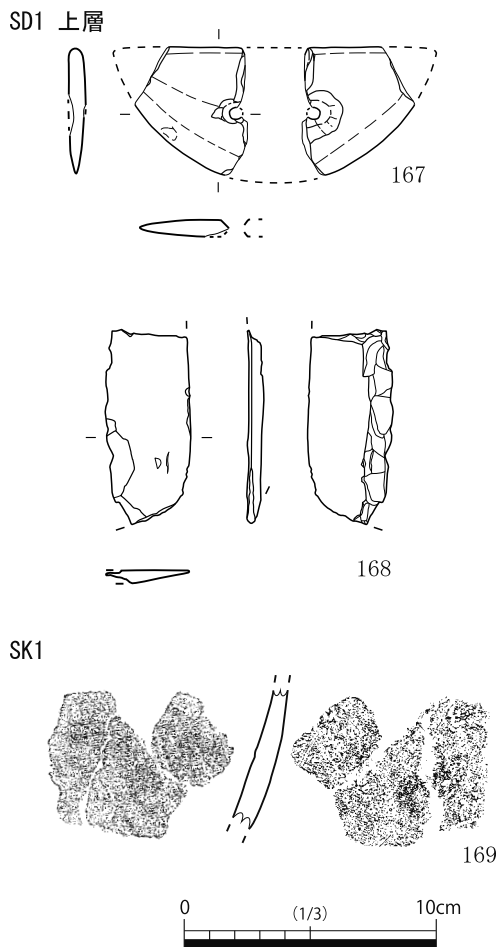


第 37 图 2 区出土遺物実測図 (10)

SD1 上層



第 38 图 2 区出土遺物実測图 (11)



第 39 図 2 区出土遺物実測図 (12)

段区画を設け、区画内に山形文を施す。92 は肩部に重弧文が施され、93 とともに黒色顔料の痕跡が残る。94 は肩部の沈線区画内に貝殻腹縁を用いて羽状文を施す。100 は推定口径 48 cm、胴部径 63cm を測る大型壺である。101・102 は鉢、103 は高坏脚部上位、104 は土製品紡錘車である。

105 ～ 110 は SD 1 下層から出土した石器である。105 は打製石鏃で、姫島産黒曜石である。106 ～ 109 は打製石斧、110 は石錘である。

111 ～ 168 は SD 1 上層から出土した石器である。111 ～ 125 は石鏃で、125 は磨製、他は打製である。安山岩、黒曜石、粘板岩などがみられる。126 ～ 128 は搔器である。129 ～ 138 は打製石斧である。近隣で採取可能な玄武岩が多い。139 ～ 148 は磨製石斧である。145・148 は扁平片刃石斧、147 は柱状片刃石斧である。149 ～ 160 は石錘である。161 ～ 163 は敲石、164 は磨石、165・166 は石皿、167 は石包丁で、粘板岩製である。168 は磨製石剣の関部片である。170・171 は 2 区遺構検出で出土した。170 は打製石鏃、171 は滑石製の勾玉である。古墳時代後半の遺物とみられる。

172 ～ 185 は土坑西群出土の遺物である。172 は須恵器提瓶。自然釉が顕著で、体部は片面が平坦。173 はいわゆる都城系の土師器皿とみられるが、器面の剥落により暗文等は確認できない。官衙関連施設の所在を示すか。

土師器椀・皿・台付皿 (174 ～ 178) および白磁皿 (179 ～ 181)・椀、青磁皿・椀 (182 ～ 184)、褐釉陶器壺 (185) がある。ヘラによる沈線あり。174 ～ 186 は 12 ～ 13 世紀の遺物。荘園管理に関わる施設が存在した可能性を示す。

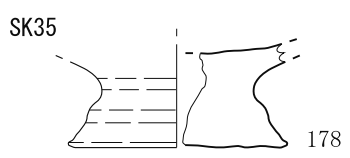
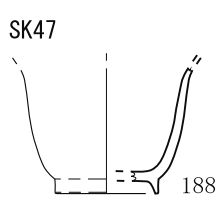
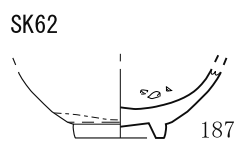
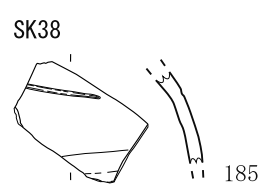
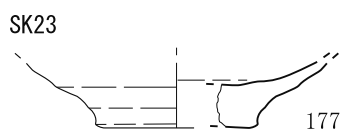
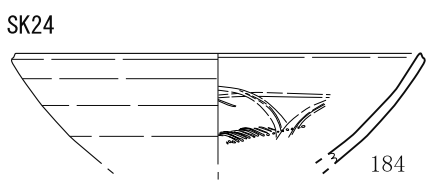
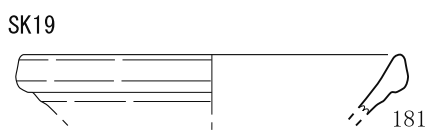
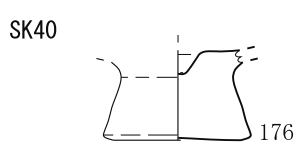
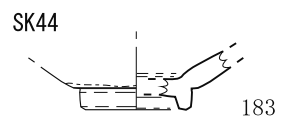
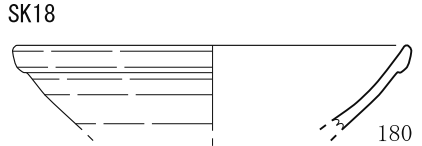
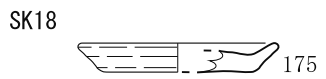
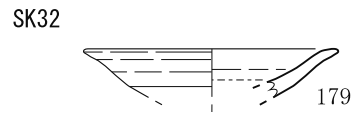
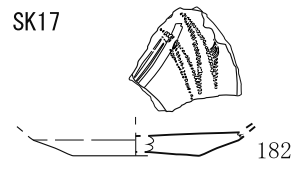
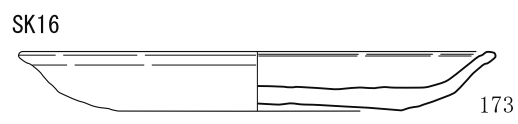
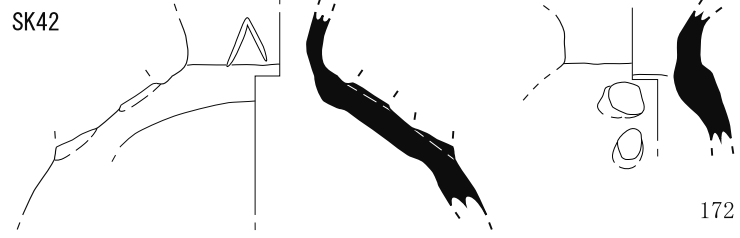
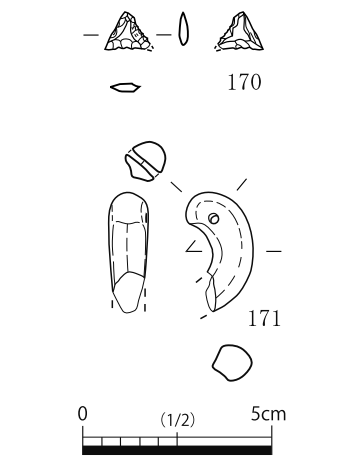
186 は遺物包含層出土の瓦質土器風炉の底部片である。七宝文を押印する。15 世紀の畿内産土器とみられる。

187・188 は 18 ～ 19 世紀の陶器・磁器で、187 は萩焼 (長門深川)、188 は瀬戸白磁である。2 区土坑東群の時期の一端を示す。

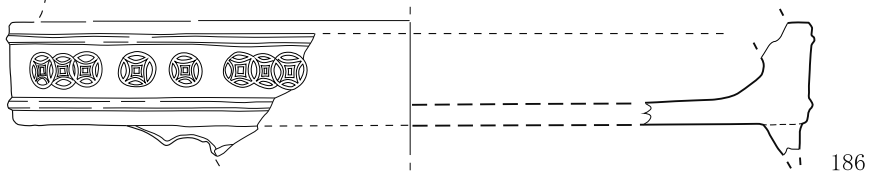
(3) 3 区 (第 41 図)

いずれも遺構に伴わない。189 は側縁にそれぞれ 2 か所の使用痕をもつ敲石。2 区 SD 1 出土品 (38) と同種遺物である。190 は鞆羽口。先端が熔融する。中世の鍛冶に関わる遺物とみられる。191 は備前焼播鉢。これら遺物は弥生時代前期～中世の遺構が 3 区付近に存在することを示す。

遺構検出

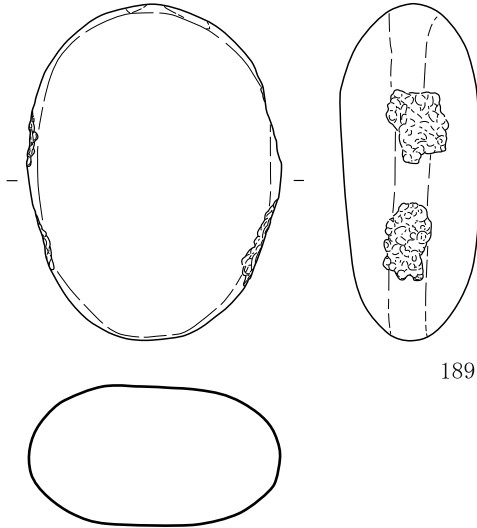


遺物包含層

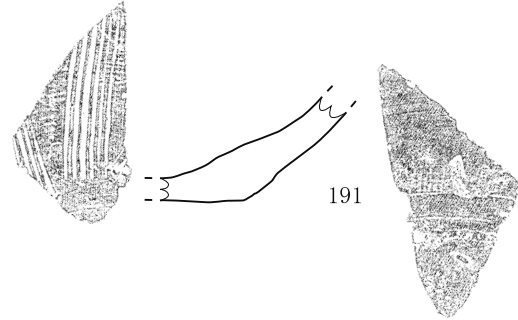


第 40 図 2 区出土遺物実測図 (13)

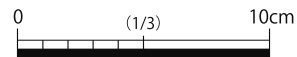
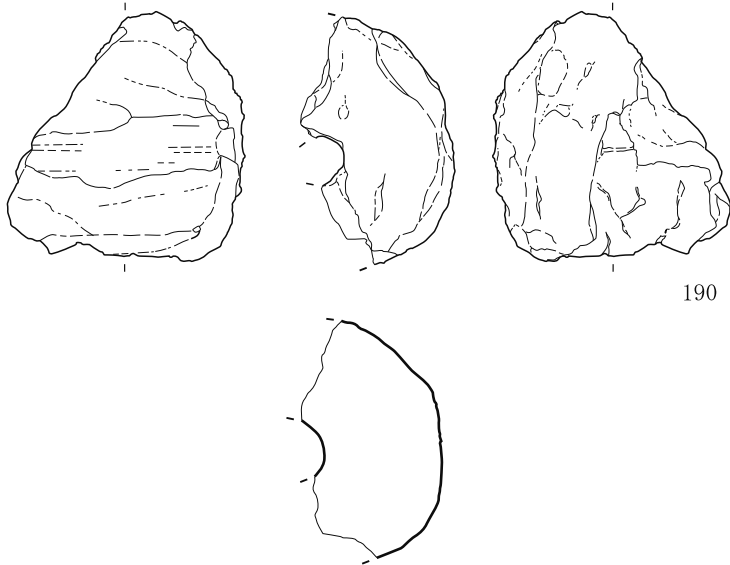
遺構検出



表面採集



遺物包含層



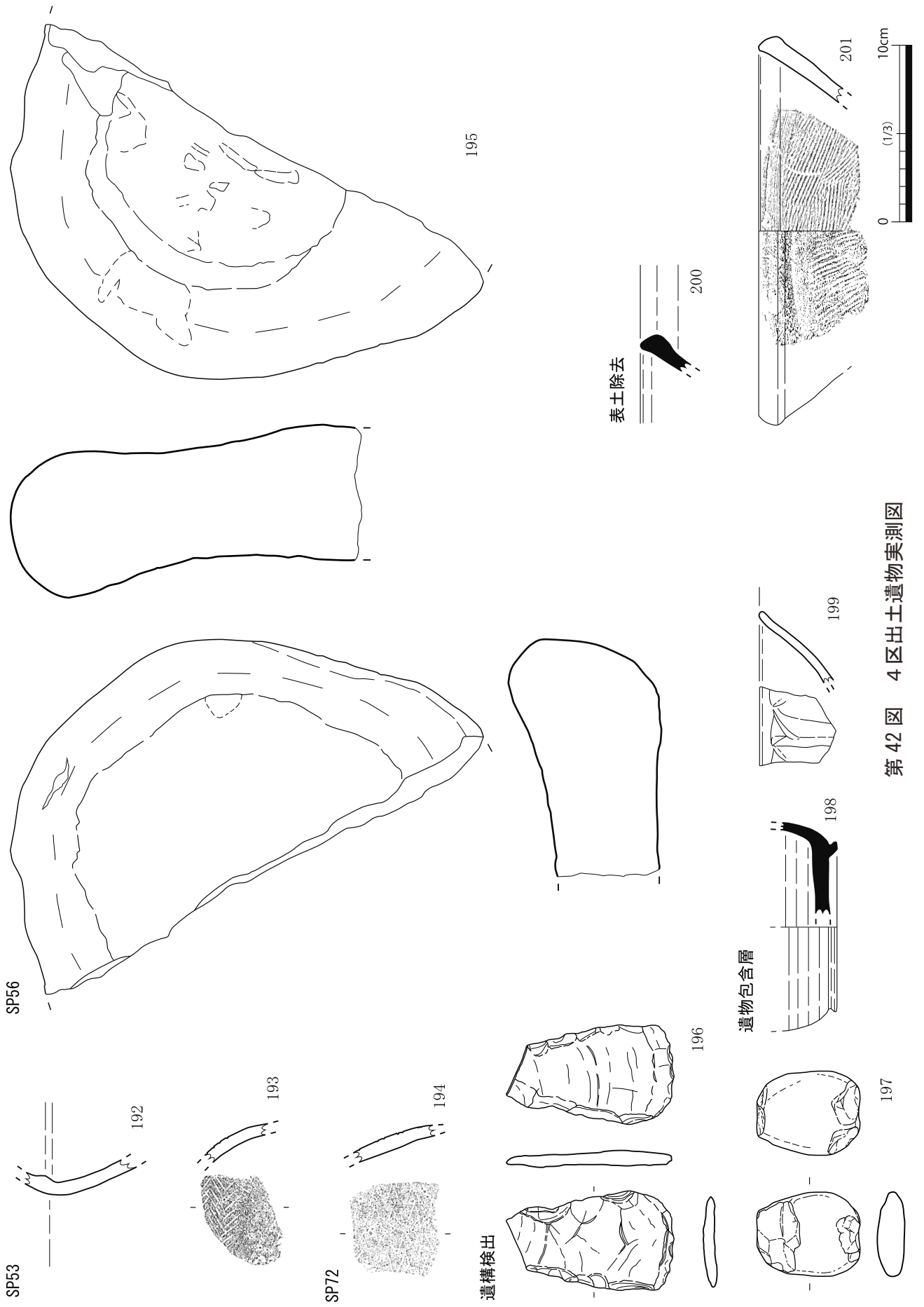
第 41 図 3 区出土遺物実測図

(4) 4 区 (第 42 図)

遺構から出土する遺物のほとんどは弥生土器の小片である。

192～195 は柱穴出品である。図示した弥生土器 (192～194) は器表が磨滅しており、遺構の時期を示すとはみなせない。また、石皿 195 も弥生時代前期の遺物であるが、柱穴の根固め石に転用されていた。

196～201 は遺構に伴わない遺物である。弥生時代前期の打製石斧・石錘に加え、8 世紀の須恵器杯、13 世紀の青磁碗・東播系須恵器鉢・瓦質土器鉢がある。これら遺物は弥生時代前期～13 世紀の遺構が 4 区付近に存在すること、またはかつて存在したことを示す。



第42图 4区出土遺物実測図

第2表 本郷山崎遺跡出土土器・土製品観察一覧表

No.	挿 図	図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
2	24	18	1区 SK1 北西	弥生土器	壺	-	[5.3]	(4.8)	やや 精良	良	黒褐色 10YR3/1 灰白色 10YR7/1		
3	24	18	1区 SK1	弥生土器	壺	-	[6.0]	(4.8)	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/1 灰白色 10YR8/1	- -	
4	24	18	1区 SK1	弥生土器	甕	-	[5.3]	-	やや 精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4	不明 沈線区画内刺突、ハケ 目	
5	24	18	1区 SK1 北東	弥生土器	甕	-	[5.7]	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	- -	
6	24	18	1区 SX1 南最下層	縄文土器	深鉢	-	[2.2]	-	やや 精良	良	黒色 10YR2/1 にぶい黄褐色 10YR6/3	ヨコナデ 口唇横位隆帯上刻み、穿 孔、波状沈線文	波状口縁
7	24	18	1区 SX1 南下層	縄文土器	深鉢	-	[7.8]	-	やや 精良	良	灰黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色 10YR4/2	ヨコナデ 口縁下横位隆帯	波状口縁
8	24	18	1区 SX1 北	弥生土器	壺	(13.6)	[7.0]	-	やや 精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3	不明 口唇下細沈線7条	
9	24	18	1区 SX1 南東下層	弥生土器	壺	-	[20.1]	-	やや 精良	やや 良	浅黄色 2.5Y7/3 にぶい黄色 2.5Y6/3	ヘラミガキ、ハケ目 ヘラミガキ、羽状文	貝殻腹縁による沈線・ 羽状文
10	24	18	1区 SX1 南西下層	弥生土器	壺	-	[16.0]	-	やや 精良	良	明黄褐色 10YR6/6 黒褐色 10YR3/2	ハケ目、ヨコナデ 貝殻腹縁による沈線・ 羽状文	
11	24	18	1区 SX1 南区下層	弥生土器	壺	-	[6.0]	-	やや 精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	ヨコミガキ 貼付突帯、沈線区画内 羽状文	
12	24	18	1区 SX1 南	弥生土器	蓋	8.0	4.3	-	精良	良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	指ナデ -	
13	24	18	1区 SX1 南最下層	弥生土器	甕	-	[8.2]	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	不明 口唇端刻み、沈線2条 内円形刺突文、ハケ目	
14	24	18	1区 SX1 南東下層	弥生土器	鉢	-	[6.1]	-	精良	良	灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色 10YR6/2	ヨコナデ ヨコハケ目、口唇部刻 み、口縁下突起貼付	
15	24	18	1区 SX1 南西上層	弥生土器	高杯	-	[8.2]	-	やや 精良	やや 良	にぶい黄褐色 10YR6/2 にぶい黄褐色 10YR6/2	指オサエ タテナデ	
16	24	18	1区 SX1 南西上層	土製品	紡錘車	幅 3.3	高さ 0.9	-	精良	不良	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい橙色 5YR6/4	ほぼ摩滅 ほぼ摩滅	孔径 (内径) 0.70cm 重さ 10.8 g
17	24	18	1区 SX1 南西最下層	土製品	陶埴	-	[4.0]	-	やや 精良	やや 良	にぶい橙色 5YR6/4 にぶい橙色 5YR6/4	ナデ ナデ	2孔残存
44	27	18	1区 遺構検出	青磁	碗	-	-	-	精良	良	オリーブ灰色 10Y4/2 オリーブ灰色 10Y4/2	- 鎬連弁文	
45	28	18	2区 SD1 中央下層	縄文土器	深鉢	43.0	[30.5]	-	やや 精良	良	黒褐色 10YR3/2 灰黄褐色 10YR4/2	貝殻条痕 貝殻条痕	口唇波状
46	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	深鉢	-	[6.0]	-	やや 精良	やや 良	黒色 10YR2/1 灰黄褐色 10YR5/2	貝殻条痕、ナデ ナデ	
47	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	深鉢	-	[5.7]	-	精良	不良	黄灰色 2.5Y4/1 にぶい黄褐色 10YR6/3	貝殻条痕 貝殻条痕、ナデ、刻み	貼付突帯上刻み
48	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	深鉢	-	[4.4]	-	やや 精良	不良	褐灰色 7.5YR4/1 黒褐色 10YR3/1	貝殻条痕 貝殻条痕、貼付突帯上 刻み	
49	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	深鉢	-	[5.0]	-	やや 精良	やや 良	黒色 10YR2/1 にぶい黄褐色 10YR6/3	貝殻条痕、ナデ 横位隆帯2条、ナデ	轟B式か?
50	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	深鉢	-	-	-	粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/2 褐灰色 10YR6/1	貝殻条痕、頸部ヘラミ ガキ 貝殻条痕	波状口縁 口縁部肥厚
51	28	19	2区 SD1 南側下層	縄文土器	深鉢	-	[8.0]	-	やや 精良	やや 良	黒色 10YR2/1 灰黄褐色 10YR6/2	貝殻条痕、ナデ 貝殻条痕、ナデ、口唇 部横位隆帯	
52	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	浅鉢	-	[3.5]	-	精良	良	黒色 10YR2/1 黒色 10YR2/1	ミガキ ミガキ	
53	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	深鉢	-	[3.5]	-	やや 精良	やや 良	黒色 10YR2/1 灰黄褐色 10YR6/2	ナデ 口唇下横位隆帯、ナデ	

No.	挿 図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	主な調整 (内) (外)	備考	
					口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)						
54	28	19	2区 SD1 中央下層	縄文土器	浅鉢か	-	[3.1]	-	精良	良	黒褐色 10YR3/1 黒褐色 2.5Y3/1	ミガキ ミガキ	口縁部に突起
55	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	浅鉢か	-	[2.2]	-	やや 精良	不良	黒褐色 2.5Y3/1 黒褐色 10YR3/1	ミガキ ミガキ	外面に褐色物付着
56	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	浅鉢	頸部径 (16.8)	[3.4]	-	精良	良	黄灰色 2.5Y4/1 黒褐色 2.5Y3/1	ナデ、ヘラミガキ ナデ、ヘラミガキ	口縁ヘラ描き沈線文 黒色磨研土器
57	28	19	2区 SD1 南下層	縄文土器	浅鉢か	-	[3.75]	-	やや 粗	やや 良	黒 2.5Y2/1 灰黄褐色 10YR5/2	貝殻条痕 貝殻条痕	
58	28	19	2区 SD1 北下層	弥生土器	甕	(25.0)	-	-	やや 粗	やや 良	にぶい褐色 7.5YR5/3 にぶい褐色 7.5YR5/3	ハケ目、ナデ、指頭痕 ハケ目、ナデ	
59	28	19	2区 SD1 中央下層	弥生土器	甕	-	-	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	
60	29	19	2区 SD1 南上層	縄文土器	深鉢	-	[5.5]	-	精良	不良	黒色 2.5Y2/1 灰黄褐色 10YR5/2	貝殻条痕、ナデ 貝殻条痕	焼成前穿孔
61	29	19	2区 SD1 南上層	縄文土器	深鉢	-	[5.1]	-	精良	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい黄橙色 10YR7/2	貝殻条痕、穿孔 貝殻条痕、刻み(口縁)	孔列土器
62	29	19	2区 SD1 北上層	縄文土器	深鉢	-	[7.6]	-	やや 精良	やや 良	黒褐色 10YR3/2 黒褐色 10YR3/2	貝殻条痕、ナデ 口唇下穿孔、波状突帯、 平行沈線文	波状口縁
63	29	19	2区 SD1 中央上層	弥生土器	鉢	18.6	12.6	7.2	やや 精良	やや 良	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄褐色 10YR6/2	口唇下横位刻目突帯、ミ ガキ 口唇下横位刻目突帯、ミ ガキ	口縁鋸歯状
64	29	19	2区 SD1 北上層	弥生土器	鉢	(21.2)	[12.1]	-	やや 粗	良	にぶい黄橙色 10YR7/3 黄褐色 2.5Y5/3	指オサエ、ナデ、ヘラ ミガキ ナデ、ヘラミガキ	口縁端部と肩部に刻 み、調理使用
65	29	19	2区 SD1 中央上層	縄文土器	深鉢	-	[3.0]	-	精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/4	貝殻条痕 貝殻条痕、刻み	
66	29	19	2区 SD1 南上層	弥生土器	甕	(13.2)	[6.1]	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 褐灰色 7.5YR4/1	ハケ目、ヘラミガキ ハケ目、ナデ、部分的 に条痕	口縁と胴部に刻み 弥生早期 板付 I に相 当
67	29	19	2区 SD1 南上層	弥生土器	甕	(21.2)	[7.8]	-	やや 精良	やや 良	灰黄褐色 10YR6/2 黒褐色 10YR3/2	ハケ目、ナデ 口唇隆帯2条、刻み、ハ ケ目	
68	29	19	2区 SD1 中央上層	弥生土器	甕	-	[6.2]	-	やや 精良	良	黒 N2/ 黒褐色 10YR3/2	貝殻条痕 貝殻条痕、ナデ、刻み	内外一部鉄分付着
69	29	19	2区 SD1 南上層	弥生土器	鉢	-	[5.6]	-	やや 粗	良	褐灰色 10YR5/1 褐灰色 7.5YR4/1	ナデ、ミガキ ハケ目、ミガキ、刻み	
70	29	19	2区 SD1 南上層	弥生土器	甕	-	[6.2]	-	粗	不良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	ハケ目、摩擦 ハケ目、刻み	
71	29	19	2区 SD1 南上層	弥生土器	甕	(14.0)	[5.7]	-	やや 粗	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 褐灰色 10YR4/1	ハケ目、丁寧なナデ、ヘ ラミガキ ナデ、ハケ目	スス付着
72	29	19	2区 SD1 中央上層	弥生土器	甕	26.8	[15.2]	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR6/3	ハケ目 刻み、ハケ目	調整不明瞭
73	29	20	2区 SD1 北上層	弥生土器	甕	29.0	[17.1]	-	やや 精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR5/3	ハケ目、丁寧なナデ ハケ目	内外面部分的に炭化 物付着
74	29	20	2区 SD1 中央上層	弥生土器	甕	28.7	27.2	-	やや 精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 灰黄褐色 10YR5/2	ハケ目 ハケ目	内面下部スス付着
75	30	20	2区 SD1 北上層	弥生土器	甕	(23.6)	[21.3]	-	やや 精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 灰黄褐色 10YR5/2	ハケ目、丁寧なナデ ハケ目、ナデ	甕として使用 外面スス付着
76	30	20	2区 SD1 北上層	弥生土器	甕	28.5	26.9	9.2	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい褐色 7.5YR6/3	ハケ目、ナデ 口縁刻み、ハケ目、ナ デ	外面被熱
77	30	20	2区 SD1 北上層	弥生土器	甕	29.2	[24.4]	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10Y5/3 にぶい黄褐色 10YR5/4	ハケ目(判明部分) ハケ目(判明部分)	内・外面風化 刻み有無不明
78	30	20	2区 SD1 北上層	弥生土器	甕	(20.2)	6.1	7.2	粗	良	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 5YR7/4	ほぼ摩擦 底部ハケ	
79	30	20	2区 SD1 南上層	弥生土器	甕	(26.1)	19.6	8.4	やや 精良	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/2	ハケ目、ナデ ハケ目	部分的スス付着 刻み有無不明
80	30	20	2区 SD1 北上層	弥生土器	甕	24.4	[14.8]	-	粗	やや 良	灰白色 10YR8/1 にぶい黄褐色 10YR7/2	ハケ目、ナデ ハケ目	

No.	挿 図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	主な調整 (内) (外)	備考	
					口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)						
81	30	20	2区 SD1 北上層	弥生土器	甕	-	[18.0]	-	粗	良	灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色 10YR6/2	ハケ目 ハケ目	ハケ目後突帯貼付、 口唇刻み有無不明
82	30	20	2区 SD1 北上層	弥生土器	ミニチュ ア土器 (甕)	(6.4)	8.15	3.6	やや 粗	やや 良	黒色 2.5Y2/1 黄灰色 2.5Y4/1	不定方向のナデ 不定方向のナデ、ヘラ ミガキ	棒状工具によるナデ、 指ナデ、ヘラミガキ
83	31	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	(7.4)	[12.6]	4.8	やや 精良	やや 不良	にぶい黄橙色 10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR6/3	ヘラミガキ ハケ目、ヘラミガキ	
84	31	21	2区 SD1 北上層	弥生土器	壺	-	[5.7]	-	やや 精良	良	にぶい黄橙色 10YR7/2 灰黄褐色 10YR6/2	ハケ目、ミガキ ハケ目、ミガキ	
85	31	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	-	[12.4+2]	6.2	やや 精良	やや 良	灰黄色 2.5Y7/2 にぶい黄橙色 10YR7/2	ナデ ヘラミガキ	外面全体に黒漆 肩部に赤漆
86	31	21	2区 SD1 南上層	弥生土器	壺	10.5	19.3	6.9	やや 精良	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい黄橙色 10YR7/2	ハケ目、ナデ ヘラミガキ	
87	31	21	2区 SD1 北上層	弥生土器	壺	-	[10.8]	(4.6)	やや 精良	やや 良	灰黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色 10YR4/2		
88	31	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	-	[5.55]	6.0	やや 粗	良	にぶい黄橙色 10YR7/2 灰黄褐色 10YR5/2	ハケ目、指頭痕、ナデ ミガキ、底ハケ目、ナ デ	外面黒漆塗布 丁寧なつくり
89	31	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	-	-	(5.6)	やや 精良	不良	褐灰色 10YR6/1 黒褐色 10YR3/1	オサエ、ヘラミガキ オサエ、ヘラミガキ	
90	31	21	2区 SD1 北側 I 上層	弥生土器	壺	13.0	[17.5]	-	やや 精良	やや 良	橙色 7.5Y7/6 淡黄色 2.5Y8/3	ヘラナデ、ナデ ハケ目、ヘラミガキ	
91	31	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	-	-	6.5	やや 精良	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/3 灰黄褐色 10YR6/2	ヘラミガキ ハケ目、ヘラミガキ	
92	31	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	16.4	27.8	7.8	やや 粗	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ハケ目、ヘラミ ガキ ヘラミガキ、施文(重 弧文)	外面黒漆痕跡
93	31	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	(16.7)	28.6	8.8	やや 粗	不良	褐灰色 10YR4/1 褐灰色 10YR4/1	ハケ目、ミガキ、指オ サエ ハケ目、ミガキ、沈線 2条	全面に漆塗布
94	31	21	2区 SD1 北上層	弥生土器	壺	-	[29.0]	7.6	やや 精良	やや 良	灰色 5Y6/1 灰白色 10YR7/2	ヘラミガキ ハケ目、ヘラミガキ、貝 殻施文	
95	32	21	2区 SD1 北上層	弥生土器	壺	(16.4)	[9.9]	-	やや 精良	やや 良	明褐灰色 7.5Y7/2 にぶい黄橙色 10YR7/2	摩滅のため詳細不明 摩滅のため詳細不明	
96	32	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	19.8	[15.2]	-	やや 精良	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい黄橙色 10YR7/2	不明 不明	
97	32	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	20.6	[14.7]	-	精良	良	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい黄橙色 10YR7/2	ハケ目、ミガキ ミガキ	
98	32	21	2区 SD1 北上層	弥生土器	壺	(24.0)	[18.0]	-	精良	やや 良	黒褐色 10YR3/1 黒褐色 10YR3/1	ハケ目、ミガキ ハケ目、ミガキ	
99	32	21	2区 SD1 北上層	弥生土器	壺	-	[19.6]	(10.6)	やや 精良	やや 良	灰黄色 2.5Y6/2 灰黄色 2.5Y7/2	ヘラミガキ ヘラミガキ	内側剥落調整不明
100	32	22	2区 SD1 中央上層	弥生土器	壺	(48.0)	[31.5]	-	やや 精良	やや 良	にぶい黄橙色 10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR6/4	ヘラミガキ ヘラミガキ、指頭痕	
101	32	21	2区 SD1 中央上層	弥生土器	鉢	18.8	12.2	7.2	やや 精良	やや 良	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄褐色 10YR6/2	ハケ目、ミガキ ミガキ	
102	32	22	2区 SD1 中央上層	弥生土器	鉢	15.4	9.6	7.2	やや 精良	やや 良	灰黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色 10YR4/2	ミガキ ミガキ	
103	32	22	2区 SD1 南上層	弥生土器	高坏	くびれ 4.7	[4.2]	-	やや 粗	やや 良	灰黄色 2.5Y7/2 黒褐色 10YR3/1	ナデ、ヘラミガキ ナデ、ヘラミガキ、ハ ケ目	くびれ部突帯に細く 鋭い刻み施文
104	32	22	2区 SD1 中央上層	土製品	紡錘車	上面幅 4.0	高さ 1.0	最大幅 4.5	やや 粗	やや 良	にぶい赤褐色 5YR5/3 にぶい赤褐色 5YR5/3	不明 不明	孔径 0.6 cm 重さ 20.9 g
169	39	22	2区 SK1 南東	縄文土器	深鉢	-	[5.5]	-	やや 精良	やや 良	黒褐色 10YR3/2 にぶい黄褐色 10YR4/3	ナデ 貝殻条痕、ナデ	
172	40	22	2区 SK42	須恵器	提瓶	-	[8.1]	-	精良	良	灰白色 10Y8/1 オリーブ灰色 10Y4/2	- 頸部山形沈線文	
173	40	22	2区 SK16	土師器	皿	19.0	2.4	15.5	精良	良	明黄褐色 10YR6/6 明黄褐色 10YR6/6	口唇沈線 底部ヘラケズリ	

No.	挿 図	図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
174	40	22	2区 SK36	土師器	碗	-	-	(6.4)	粗	不良	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	摩滅 摩滅(回転ナデ)	
175	40	22	2区 SK18 北半下層	土師器	皿	(7.7)	1.2	(6.0)	やや 粗	やや 良	浅黄橙色 10YR8/4 浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ 回転ナデ、回転糸切り	
176	40	22	2区 SK40	土師器	台付皿	-	-	(5.9)	やや 粗	不良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	不明 不明	器面剥落
177	40	22	2区 SK23	土師器	皿 (台付皿)	-	-	(6.4)	やや 粗	やや 良	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ、回転糸切り	
178	40	22	2区 SK35	土師器	台付皿	-	-	(8.7)	やや 粗	やや 良	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ、回転糸切り	
179	40	22	2区 SK32	白磁	皿	(9.7)	-	-	やや 粗	良	胎土: 灰白色 N8/ 釉: 灰白色 2.5GY8/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	
180	40	22	2区 SK18 北半下層	白磁	碗	(15.5)	-	-	やや 粗	良	胎土: 灰白色 N8/ 釉: 灰白色 10Y8/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	玉縁
181	40	22	2区 SK19	白磁	碗	(15.0)	-	-	やや 粗	良	胎土: 灰白色 N8/ 釉: 灰白色 7.5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	
182	40	22	2区 SK17 北東	青磁	皿	-	-	(4.9)	やや 精良	良	胎土: 灰白色 N7/ 釉: 灰オリーブ色 7.5Y6/2	回転ナデ 回転ヘラケズリ	同安窯系
183	40	22	2区 SK44	青磁	碗	-	-	(4.4)	やや 粗	良	胎土: 灰白色 N8/ 釉: 灰オリーブ色 7.5Y6/2	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	同安窯系
184	40	22	2区 SK24	青磁	碗	(16.1)	-	-	やや 精良	良	胎土: 灰白色 N8/ 釉: オリーブ灰色 2.5GY6/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	同安窯系
185	40	22	2区 SK38	陶器	壺	-	-	-	やや 精良	良	胎土: 明褐色 7.5YR7/1 釉: 灰黄色 2.5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	褐釉
186	40	22	2区 遺物包含層	瓦質土器	風炉	-	6.3	31.0	精良	良	黒褐色 10YR3/2 黒褐色 10YR3/2	ナデ 円形スタンプ文	
187	40	22	2区 SK62	陶器 (萩焼)	碗	-	-	3.6	やや 粗	良	胎土: にぶい黄橙色 10YR6/4 釉: 明緑灰白色 7.5GY8/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	
188	40	22	2区 SK47	白磁	狛口	-	-	(4.1)	精良	良	胎土: 灰白色 5Y8/1 釉: 灰白色 7.5Y8/1	回転ナデ? 回転ナデ?	型打か?
190	41	22	3区 遺物包含層	土製品	輪羽口	孔径 (2.5)	残存長 [9.4]	-	やや 粗	やや 良	浅黄橙色 7.5YR8/6 灰白色 2.5Y7/1		
191	41	22	3区 表面採集	陶器	播鉢	-	-	-	やや 粗	良	褐灰色 5YR6/1 褐灰色 5YR6/1	回転ナデ ヘラナデ、不調整	備前焼
192	42	23	4区 SP53	弥生土器	壺	-	-	-	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/1 暗灰色 N3/		
193	42	23	4区 SP53	弥生土器	壺	-	-	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい黄橙色 10YR7/2	ハケ目、ナデ ヘラミガキ	
194	42	23	4区 SP72	弥生土器	壺	-	-	-	やや 粗	不良	灰白色 2.5Y8/1 灰白色 2.5YR8/2		
198	42	23	4区 遺物包含層	須恵器	杯身	-	[3.2]	高台径 (9.6)	やや 精良	やや 良	灰色 N4/ 暗オリーブ灰色 2.5Y4/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラ切 り	
199	42	23	4区 遺物包含層	青磁	碗	-	-	-	やや 粗	良	胎土: 灰色 N6/ 釉: オリーブ灰色 5GY6/1	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ	連弁文
200	42	23	4区 表土除去	須恵器	鉢	-	-	-	やや 粗	良	青灰色 5B6/1 青灰色 5B6/1	回転ナデ 回転ナデ	
201	42	23	4区 表土	瓦質土器	鉢	(20.8)	-	-	やや 精良	やや 良	灰色 N5/ 灰色 N5/	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	

第3表 本郷山崎遺跡出土石器・石製品観察一覧表

No.	挿 図 版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考		
				長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]					
89	1	24	23	1区 SD1	打製石鏃	1.6	1.3	0.35	0.4	安山岩	
88	18	25	23	1区 SX1 南セクション 下位	打製石鏃	1.7	1.7	0.3	0.7	安山岩	
87	19	25	23	1区 SX1 北東上層	打製石鏃	1.7	1.4	0.35	0.7	安山岩	
90	20	25	23	1区 SX1 北東上層	打製石鏃	2.35	1.55	0.3	0.8	安山岩	調整は丁寧
124	21	25	23	1区 SX1 南西土器群中 上層	打製石斧	11.3	5.8	1.8	128	砂岩	
107	22	25	23	1区 SX1 南西上層	打製石斧	16.5	8.2	2.5	355	玄武岩	
71	23	25	23	1区 SX1 南西土器群中	打製石斧 (未製品)	15.3	7.0	2.1	291	玄武岩	未製品
96	24	25	23	1区 SX1 南西最下層	磨製石斧	[10.3]	5.7	3.5	321	凝灰岩	
98	25	25	23	1区 SX1 南西上層	磨製石斧	6.6	4.1	1.2	49.2	凝灰岩か?	
94	26	25	23	1区 SX1 南上層	磨製石斧	[10.5]	5.5	3.4	280	砂岩	基部に敲打痕残す 刃部再利用のための整形
91	27	26	23	1区 SX1 北西上層	打欠石錘	6.1	5.9	1.9	104.2	玄武岩	
119	28	26	23	1区 SX1 南西上層	石錘	7.8	7.0	1.9	148	玄武岩	
120	29	26	23	1区 SX1 南西上層	石錘	6.8	6.1	1.6	101	凝灰岩または 斑岩	
73	30	26	23	1区 SX1 西側土器群中	石錘	8.1	6.7	3.0	220	玄武岩	
95	31	26	23	1区 SX1 北東上層	石錘	8.6	6.5	1.8	159	玄武岩	
240	32	26	23	1区 SX1 北東下層	石錘	10.0	6.9	2.2	199	凝灰岩または 斑岩	
66	33	26	23	1区 SX1 南最下層	石錘	8.4	8.2	1.7	168	玄武岩	
97	34	27	23	1区 SX1 南下層	石包丁	[10.7]	[8.2]	1.3	137	赤色頁岩	穿孔なし 片面に敲打による凹み
332	35	27	23	1区 SX1 北上層	石包丁	-	-	最大厚 0.7	34	粘板岩	片面のみ残存 口径(内径)0.45cm
333	36	27	23	1区 SX1 最下層	石包丁	-	-	最大厚 0.6	44	粘板岩	口径(内径)0.6cm 片面2か所に穿孔未遂痕跡
111	37	27	24	1区 SX1 南西最下層	敲石	7.8	7.1	5.3	424	凝灰岩	
104	38	27	24	1区 SX1 南西上層	敲石	13.4	4.5	3.2	350	玄武岩	9か所に敲打痕
106	39	27	24	1区 SX1 南西最下層	敲石	13.1	6.0	3.1	402	玄武岩	6か所に敲打痕
61	40	27	24	1区 SX1 南最下層	敲石	10.45	9.8	4.75	796	玄武岩	
108	41	27	24	1区 SX1 南西最下層	敲石	25.0	9.8	4.3	861	玄武岩	
30	42	27	24	1区 遺構検出上層	磨製石斧	7.0	3.8	1.0	45.7	砂岩	敲打痕残す
20	43	27	24	1区 遺構検出	石包丁	[5.4]	[5.3]	[0.6]	25.4	砂岩	
60	105	33	24	2区 SD1 中央下層	打製石鏃	3.2	1.3	0.35	1.0	黒曜石	姫島産石材
40	106	33	24	2区 SD1 南下層	打製石斧	11.3	5.6	1.3	94.1	玄武岩	
41	107	33	24	2区 SD1 南側下層	打製石斧	12.8	6.1	1.3	146.9	玄武岩	
2	108	33	24	2区 SD1 中央下層	打製石斧	12.4	6.9	1.8	160	玄武岩	
3	109	33	24	2区 SD1 中央下層	打製石斧	15.0	6.8	2.0	230	玄武岩	

	No.	挿 図	版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考
						長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
113	110	33	24	2区 SD1 中央下層	石錘	7.1	6.0	1.5	96	玄武岩	
115	111	34	24	2区 SD1 南上層	打製石鏃	1.3	1.2	0.3	0.3	安山岩	
15	112	34	24	2区 SD1 中央上層	打製石鏃	1.3	1.3	0.35	0.6	安山岩	
77	113	34	24	2区 SD1 中央上層	打製石鏃	1.7	1.6	0.4	0.7	安山岩	
14	114	34	24	2区 SD1 中央上層	打製石鏃	1.9	[1.5]	0.3	0.4	安山岩	
85	115	34	24	2区 SD1 南上層	打製石鏃	1.4	1.6	0.28	0.3	安山岩	
128	116	34	24	2区 SD1 南上層	打製石鏃	[1.3]	1.8	0.2	0.4	安山岩	
84	117	34	24	2区 SD1 南上層	打製石鏃	2.1	1.9	0.5	1.1	安山岩	
116	118	34	24	2区 SD1 南上層	打製石鏃	2.2	1.8	0.3	1.5	安山岩	
28	119	34	24	2区 SD1 南上層	打製石鏃	2.5	1.8	0.4	1.3	黒曜石	姫島産石材
75	120	34	24	2区 SD1 中央上層	打製石鏃	2.5	2.2	0.45	2.2	安山岩	
18	121	34	24	2区 SD1 中央上層	打製石鏃	3.0	2.4	0.6	2.5	安山岩	
1	122	34	24	2区 SD1 中央上層	打製石鏃	3.0	2.6	0.6	4.3	安山岩	
117	123	34	24	2区 SD1 中央上層	打製石鏃	3.8	1.8	0.3	2.3	安山岩	
7	124	34	24	2区 SD1 中央上層	打製石鏃	4.2	2.2	0.7	6.0	安山岩	
13	125	34	24	2区 SD1 中央上層	磨製石鏃	[5.1]	2.0	0.6	6.6	粘板岩	
127	126	34	24	2区 SD1 中央上層	搔器	7.9	6.5	1.6	80	安山岩	
126	127	34	24	2区 SD1 中央上層	搔器	8.1	7.3	2.2	155	安山岩	
125	128	34	24	2区 SD1 中央上層	搔器	7.2	5.6	1.2	63	安山岩	
123	129	35	25	2区 SD1 南側上層	打製石斧	11.5	6.3	1.2	105	玄武岩	
92	130	35	25	2区 SD1 北側上層	打製石斧	11.6	5.3	1.7	126	玄武岩	使用痕あり
93	131	35	25	2区 SD1 中央上層	打製石斧	12.2	5.2	0.8	83.3	玄武岩	使用痕あり
79	132	35	25	2区 SD1 南上層	打製石斧	14.4	6.6	2.0	209	玄武岩	
121	133	35	25	2区 SD1 中央上層	打製石斧	12.1	6.0	1.3	91	玄武岩	
86	134	35	25	2区 SD1 中央上層	打製石斧	15.7	6.2	1.9	243	玄武岩	使用痕あり
46	135	35	25	2区 SD1 北側上層	打製石器	19.2	9.4	2.3	585	玄武岩	
334	136	35	25	2区 SD1 中央上層	打製石斧	17.8	最大幅 11.6	最大厚 2.7	495	玄武岩	
122	137	35	25	2区 SD1 中央上層	打製石斧	11.8	6.5	1.8	160	玄武岩	
155	138	35	25	2区 SD1 北側上層	打製石斧	15.8	11.7	2.3	698	玄武岩	
23	139	36	25	2区 SD1 中央上層	磨製石斧	[8.5]	[4.4]	1.25	77.8	塩基性片岩	
112	140	36	25	2区 SD1 南上層	磨製石斧	9.1	4.8	1.8	84	砂岩	
19	141	36	25	2区 SD1 中央上層	磨製石斧	15.3	6.4	-	306	塩基性片岩	
17	142	36	25	2区 SD1 中央上層	磨製石斧	10.5	4.8	2.3	163	塩基性片岩	
63	143	36	25	2区 SD1 北側上層	磨製石斧	9.2	4.4	3.0	206	砂岩	

	No.	挿 図	図 版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考
						長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
12	144	36	25	2区 SD1 中央上層	磨製石斧	[12.1]	[6.8]	4.35	594	凝灰岩	
16	145	36	25	2区 SD1 北上層	磨製石斧 (扁平片刃 石斧)	11.9	4.2	2.8	211	泥岩	
38	146	36	25	2区 SD1 中央上層	磨製石斧	[10.0]	[2.1]	3.2	111.7	頁岩	
10	147	36	25	2区 SD1 北上層	磨製石斧 (柱状片刃 石斧)	9.2	3.1	2.2	111.5	頁岩	
101	148	36	25	2区 SD1 中央上層	磨製石斧 (扁平片刃 石斧)	[4.7]	4.1	1.2	40.5	泥岩	
25	149	37	26	2区 SD1 中央上層	石錘	6.7	5.3	1.6	82.5	玄武岩	
100	150	37	26	2区 SD1 中央上層	石錘	8.2	4.4	2.2	126	玄武岩	
99	151	37	26	2区 SD1 北側上層	石錘	9.1	6.6	2.2	157	玄武岩	
114	152	37	26	2区 SD1 南側上層	石錘	7.9	7.4	1.7	140	玄武岩	
29	153	37	26	2区 SD1 中央上層	石錘	6.9	5.6	2.3	110.5	玄武岩	
31	154	37	26	2区 SD1 南上層	石錘	7.3	6.8	1.4	97.2	玄武岩	
33	155	37	26	2区 SD1 南上層	石錘	8.7	6.7	1.6	94.5	玄武岩	
32	156	37	26	2区 SD1 南上層	石錘	7.8	6.8	2.0	144	玄武岩	
81	157	37	26	2区 SD1 中央上層	石錘	10.0	5.6	2.3	218	凝灰岩	
105	158	37	26	2区 SD1 北側上層	石錘	6.5	6.5	2.0	99	玄武岩	
24	159	37	26	2区 SD1 南上層	石錘	8.7	7.4	2.0	171	玄武岩	
49	160	37	26	2区 SD1 中央上層	石錘	8.1	7.9	2.6	236	玄武岩	
110	161	38	25	2区 SD1 中央上層	敲石	9.8	7.3	6.1	650	安山岩	
22	162	38	25	2区 SD1 中央上層	敲石	11.3	10.0	4.4	941	玄武岩	
109	163	38	25	2区 SD1 中央上層	敲石	9.4	8.3	4.2	518	玄武岩	全周に使用痕
27	164	38	25	2区 SD1 南上層	磨石	11.4	11.0	4.0	758	砂岩	
34	165	38	26	2区 SD1 南上層	石皿	18.0	9.9	4.7	1075	砂岩	
36	166	38	26	2区 SD1 南上層	石皿	[20.3]	22.5	6.3	4000	玄武岩	
9	167	39	26	2区 SD1 中央上層	石包丁	4.1	5.0	0.5	18.5	砂岩	
118	168	39	26	2区 SD1 南上層	磨製石剣	[7.5]	-	-	18.9	粘板岩	関部片
4	170	40	26	2区 遺構検出	打製石鎌	1.0	1.2	0.2	0.1	安山岩	
335	171	40	26	2区 遺構検出	勾玉	[3.1]	最大幅 1.2	最大厚 1.0	6	滑石	SD1 西岸付近から出土
318	189	41	26	3区 遺構検出	敲石	18.4	10.1	5.5	1140	玄武岩	
320	195	42	26	4区 SP56	石皿	27.0	16.3	8.2	5000	玄武岩	
330	196	42	26	4区 遺構検出	打製石斧	9.3	5.6	0.7	65	玄武岩	
328	197	42	26	4区 遺構検出	石錘	5.9	4.8	1.5	67	玄武岩	

IV 本郷遺跡の調査成果

1 遺跡の概要

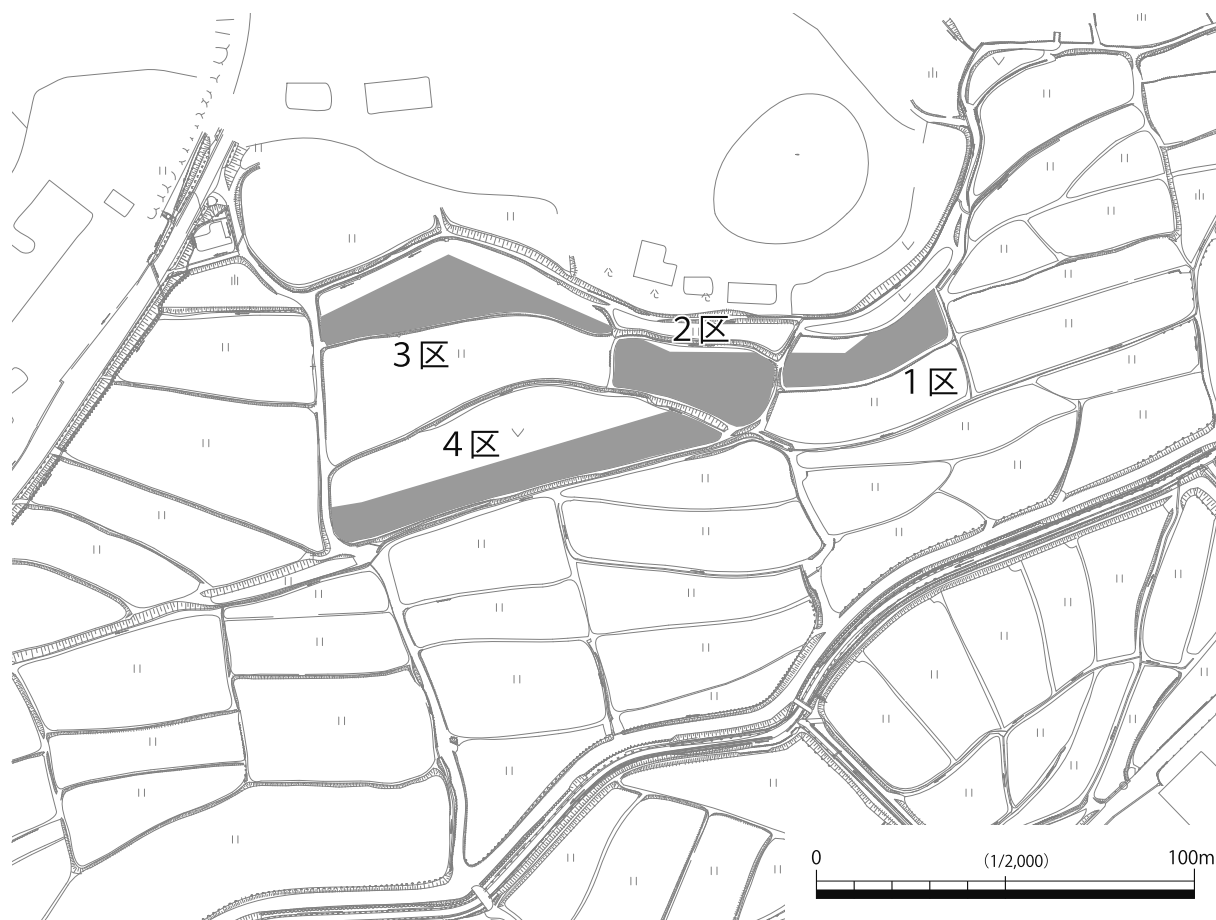
本郷遺跡は本郷盆地の中央東側に立地し、北から舌状に伸びる丘陵の先端部、標高約 25.5 m～24.0 mの平坦面に所在する。調査区は4箇所に分かれることから、それぞれ東から1～4区と呼称している。

今回の調査では1区では遺物包含層、2区では古墳時代中・後期の遺構である柱穴列3条、土坑18基、柱穴約210個、その他の遺構1基を確認した。3区は中央に湿地が検出され、湿地西岸の東西2m余り、南北約5mの範囲に土師器・須恵器等・ミニチュア土器等の集中出土域が確認されたことから、祭祀跡と判断した。4区では2条の溝、土坑1基、柱穴2個が調査された。

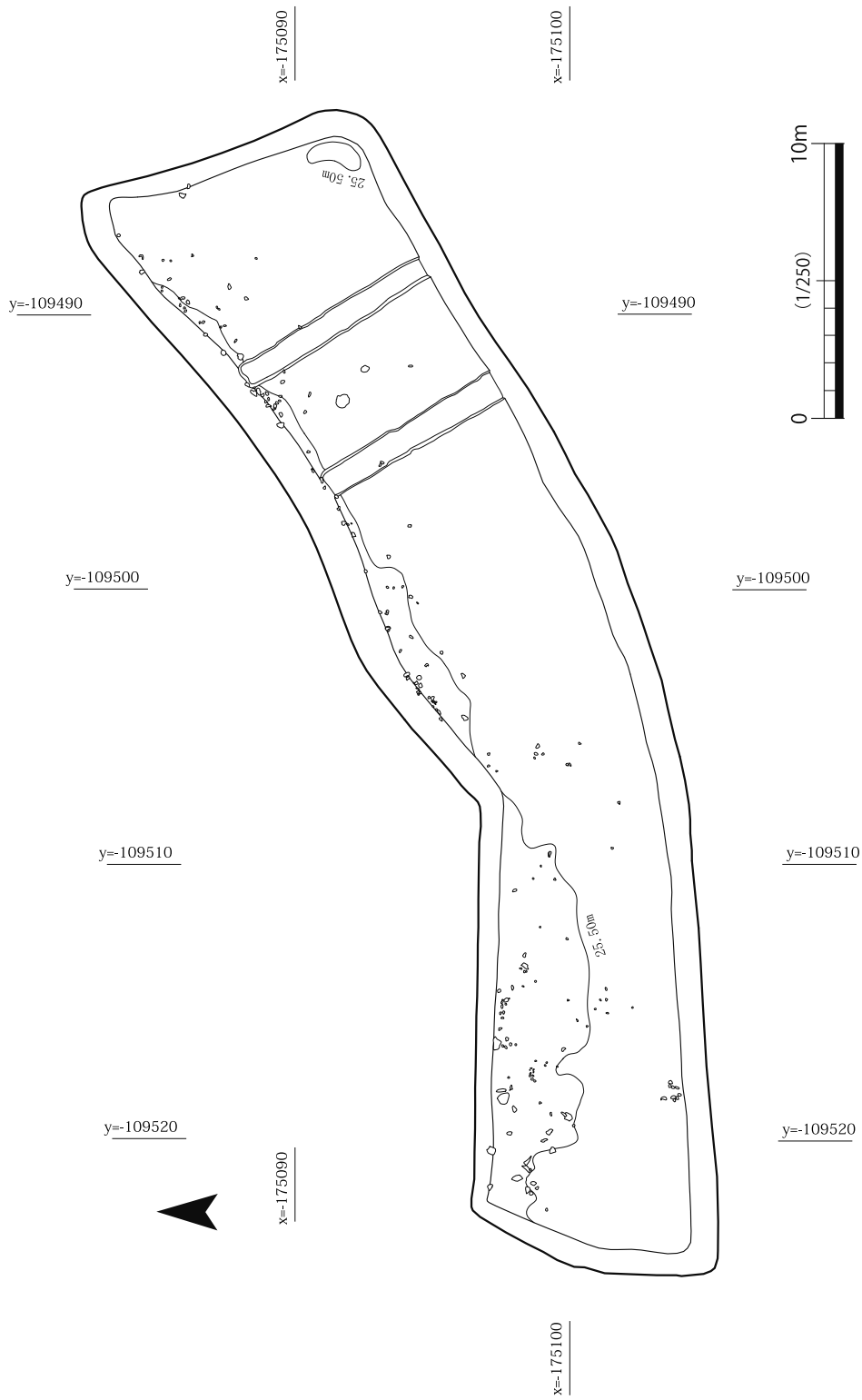
検出した古墳時代の遺構からは、須恵器、土師器が数多く出土している。なかでも3区の祭祀跡からはミニチュア土器の壺・甕・鉢・高杯等が多数出土している。その他にも、調査区全域から、奈良・平安時代から中世の、須恵器、土師器、青磁、白磁、瓦質土器など多くの遺物が出土している。

2 1区の遺構

1区は山裾の緩斜面であり、調査区北部では水田拡大に伴うとみられる角礫を多く含む客土が1m程度堆積していた。客土下には遺物包含層の厚い堆積がみられるものの、明確な遺構は検出され



第43図 本郷遺跡全体図



第44図 1区遺構配置図

なかった。遺構面の標高は約 25 m である。調査区の東部については 2 か所にトレンチを設定して掘り込み、下層遺構が存在しないことを確認した。

遺物包含層は古墳時代から中世にかけての遺物が含まれるが、大半は小破片であり図示可能な遺物は須恵器のみである（第 56 図）。これら須恵器は奈良時代以降のものであることから、背後の丘陵にこの時代の遺構が存在することを示している。

3 2 区の遺構

2 区は 1 区と同様に山裾の緩斜面であり、厚い遺物包含層の下から安定した地山面が検出できた。この地山面を遺構面として、古墳時代中・後期の遺構が比較的良好な状態で残されていた。遺構は調査区中央部北側に密であり、土坑 18 基、柱穴約 210 個、柱列 3 条、その他の遺構 1 基を確認した。なお、遺構は柱穴主体であるが建物跡を復元することはできなかった。遺構面の標高は 1 区と同様の 24 ~ 25 m である。

遺物包含層および遺構からの遺物出土量は比較的多く、5 ~ 6 世紀の土師器・須恵器を主体に、祭祀遺物であるミニチュア土器、滑石製管玉も出土した。また、完形の土器を埋設した柱穴、須恵器平瓶・杯身を集石下に埋納した土坑などの祭祀行為を想定させる遺構の存在も注目される。

(1) 柱穴列

柱穴群西部で東西方向の柱列跡 3 条が確認された。埋土から出土した土器片から、6 世紀の遺構と考えられる。3 条とも水平な地点に構築されており、このうち 2 条（SA 1・2）はほぼ延長線上に位置し、他の 1 条（SA 3）は前 2 者とは 3 ~ 4 m の間隔をもつ。

SA 1（第 46 図、図版 31） 全長 3.1 m、軸方位 N 90° E の柱列跡で、柱間距離は西から 1.4 m、1.7 m である。柱穴は長軸 50 ~ 70 cm でいずれも二段掘りとする。柱は直径 10 cm 程度と推定され、最深の SP62 では現状で遺構面から約 70 cm 掘り込まれている。柱穴最深部の標高差は最大で 15 cm 程度に収まっている。

SP62 から 6 世紀代とみられる土師器片が出土している。

SA 2（第 46 図、図版 31） 全長 5.5 m、軸方位 N 89° E の柱列跡で、柱間距離は西から 1.9 m、1.8 m、1.7 m である。柱穴は長軸 50 ~ 100 cm で SP60 は二段掘りとする。柱は直径 10 cm 程度と推定され、最深の SP61 では現状で遺構面から約 85 cm 掘り込む。柱穴最深部の標高差は最大で 20 cm 程度に収まっている。

SP16 から 6 世紀代とみられる土器が出土している。

その位置関係および主軸方位の一致から、SA 1 と SA 2 は一連の遺構である可能性を有し、その場合は総延長 10.3 m の規模となる。

SA 3（第 46 図、図版 31） 全長 5.9 m、軸方位 N 79° E の柱列跡で、SA 1・2 とは主軸方向がわずかに異なる。柱間距離は西から 2.0 m、1.9 m、2.0 m である。柱穴は長軸 50 ~ 115 cm と不揃いであるがいずれも二段掘りとする。柱は直径 10 ~ 20 cm 程度と推定され、最深の SK13 では現状で遺構面から約 50 cm 掘り込む。柱穴最深部の標高差はほとんどない。

SK12・SK14 埋土から 6 世紀後半の須恵器片が出土している。また、SK14 埋土からはミニチュア土

器片が出土している。

(2) 土坑

土坑は18基確認され、埋土に含まれる土器片から大半は6世紀代の遺構と考えられる。

SK 8 (第46図、図版31) 長軸1.1 m程度の浅い土坑であるが、底面に角礫を据えており、埋土にミニチュア土器を含むた。

なお、土坑として記録したもののうちのいくつかについては、その並び等から柱穴として扱ったものが含まれている。

(3) 柱穴 (第48図)

約210個が比較的密な状態で分布し、埋土に含まれる土師器・須恵器から、5～6世紀の遺構と考えられる。これらのうち、特徴的な遺物出土状況を示すものについて紹介する。

SP87 ほぼ完形の5世紀代の土師器甕 (第57図212・図版33) が斜めに埋置されていた。土器は外面に煤、内面下方に炭化物が付着しており、炊事に使用されたことが明確である。発掘調査時に土器内に空間が存在したことから、本来は完全な状態で木蓋等を用いて密閉されて埋納されたと考えられる。土器内の土を水洗したが遺物・骨片等は発見できなかった。

SP54 底面に接して土師器甕が出土した (図版32)。原位置を保つ破片は一部にとどまるが、埋土中には2個体分 (第57図213・214) が含まれており、214についてはほぼ完形に復元できた。いずれも外面に煤が付着する。213がSP44出土の土器片と接合することが確認できたことから、SP54とSP44は同時期の遺構と判断される。

SP43 埋土中からやや大きな土師器甕体部片が出土した (第48図、図版34)。25×20 cmの大きさがあり柱穴中央の埋土中層から内面側を上に向けて水平な状態で出土したことから意図的な埋納が想定される。

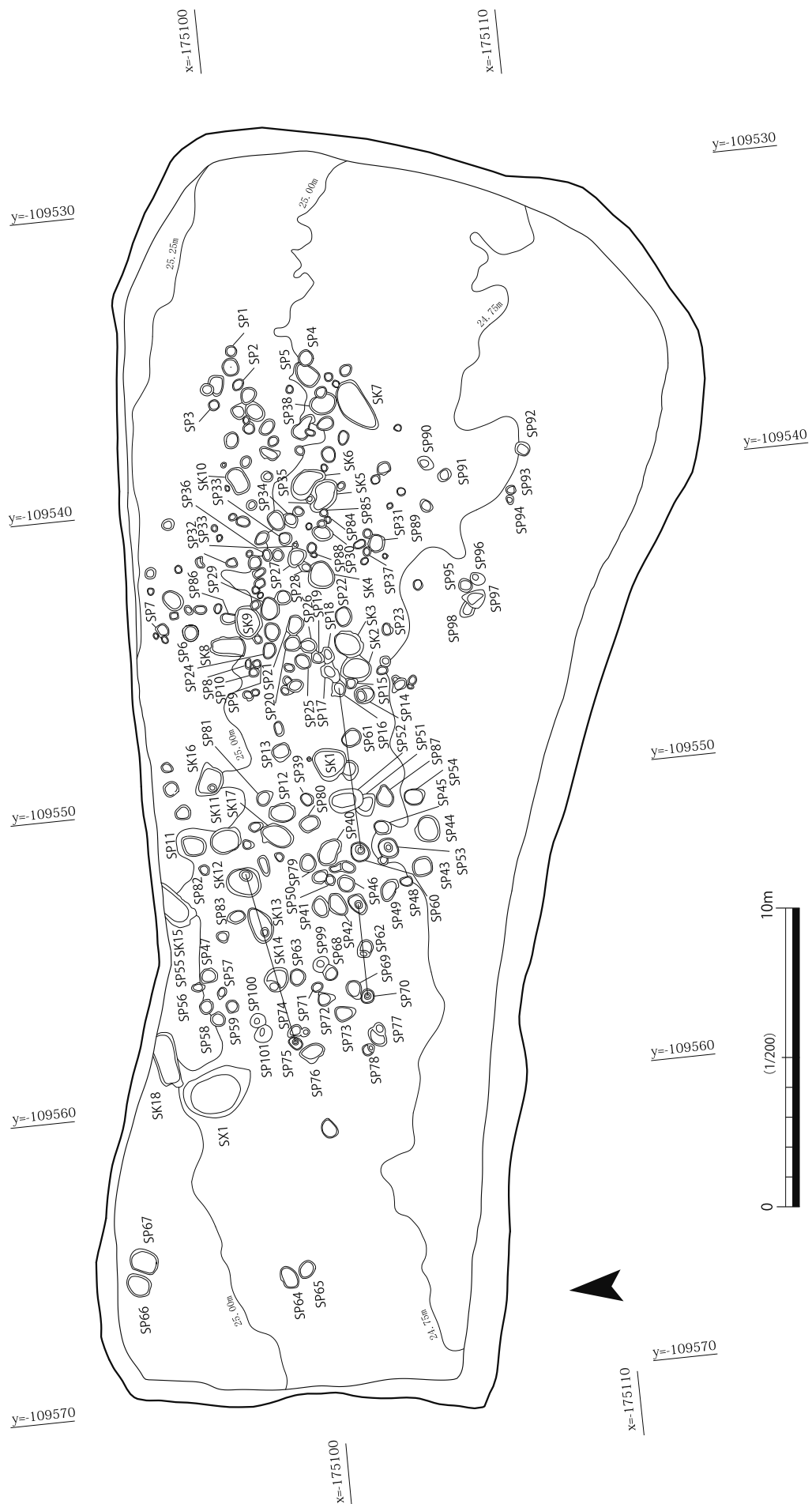
SP44 埋土中からやや大きな土師器甕体部片が出土した。口縁部および底部を欠く破片であるが、20cm四方程度の大きさがあり柱穴中央の埋土中層から出土したことから意図的な埋納が想定される。SP43と異なり、外面を上に向けている。なお、SP44出土の土器片はSP54出土土器 (第57図213) と接合した。

SP52 (第48図、図版33) SA 2を構成する柱穴のひとつであり、2分の1程度を残す須恵器甕 (第59図225) が底面に埋置されていた。底面には須恵器甕に伴って用途不明の50cm弱の木棒が出土した。なお、埋土からは別個体の須恵器甕口縁部 (第59図224) が出土したが、これ以外に須恵器片はほとんど出土していない。

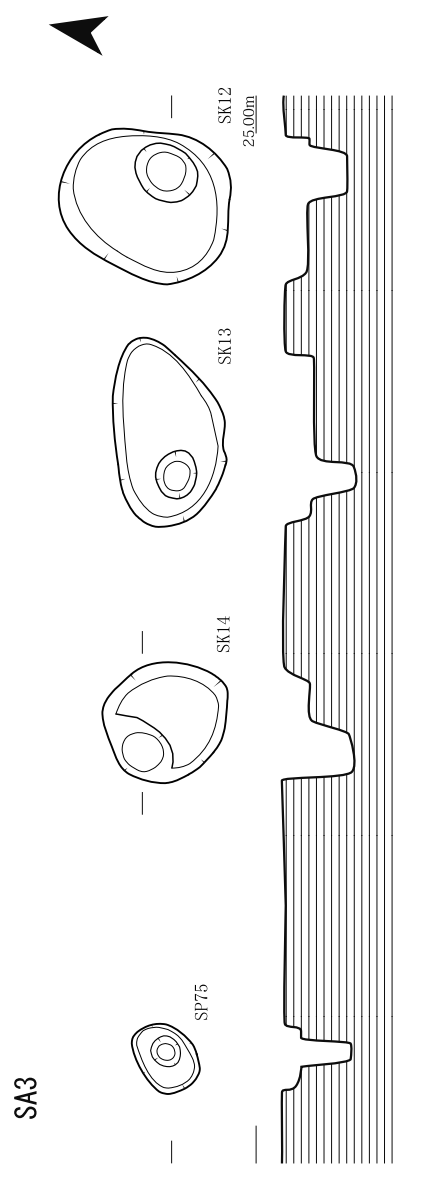
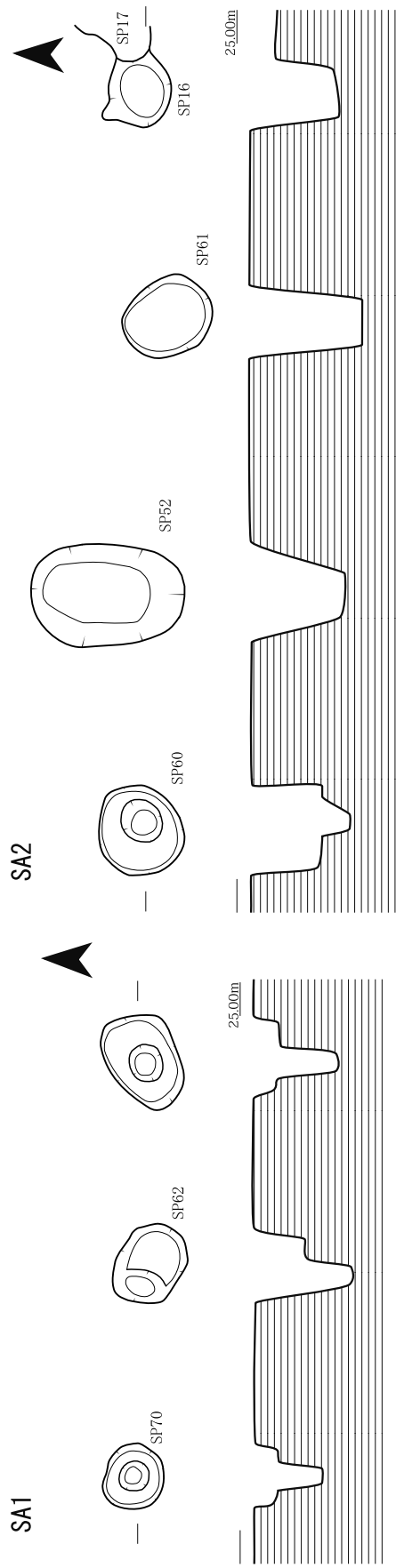
以上に紹介した柱穴5個は半径2 m程度の狭い範囲に分布しており、他の地点に同様の柱穴が集中する傾向はみられない。そして土器の特徴から5世紀代のSP87→SP54・44→SP43・52という構築順が想定されることから、この地点が半世紀以上にわたる特定祭祀空間であった可能性が指摘できる。

SP100 (図版33) 柱穴埋土中から須恵器皿底部が出土した。口縁部～体部を欠くが底部は完存することから、意図的な打ち欠き、埋納が想定される。

上記の柱穴以外にも、SP 1・SP67はその埋土からミニチュア土器 (第57図206・207) が出土し



第 45 图 2 区遺構配置図



第46図 SA 1～3 実測図

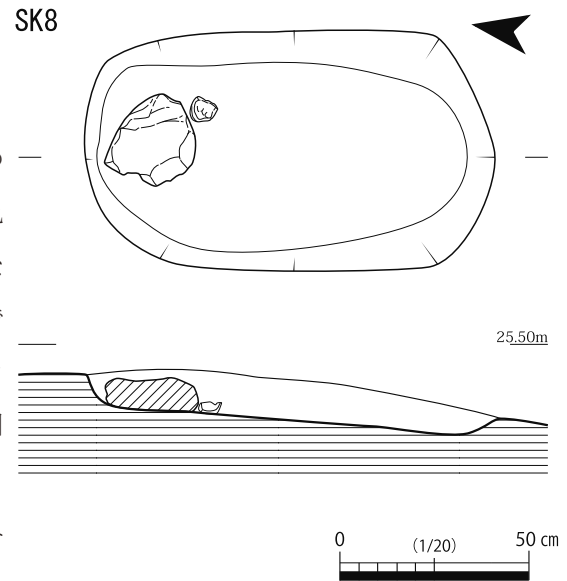
ている。

(4) 不明遺構 (第 49 図、図版 34)

SX 1 長径 2.3 m、短径 1.5 m、最大深さ 0.4 m の土坑であり、北半部に角礫を詰める。埋土は黄灰色粘質土の単層である。角礫は遺跡周辺で採取可能な玄武岩が主体で、大きさは拳大のものから、最大で 40 × 30 cm で厚さ 15cm 程度のもので含む。角礫の集積北東部から須恵器甕の大型破片 (第 59 図 228) が内面を上に向けて水平な状態で出土した。この出土状況は先述の一部の柱穴 (SP43・SP44) でみられる大型土器片埋納に近似する。

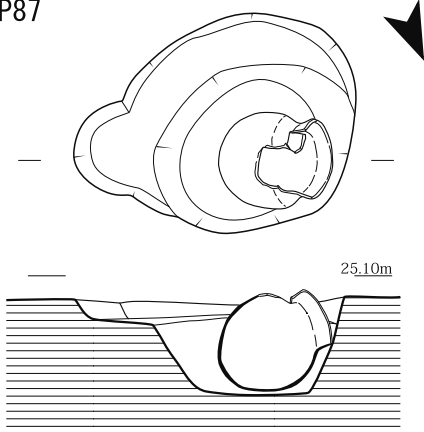
検出時、角礫群は意図的な積み上げ、配置等をうかがわせる状況を示していなかったが、これらを除く過程で、角礫群中およびその下位に須恵器杯身および平瓶が埋納されたことが判明した。杯身 (第 59 図 226) はほぼ完形品で水平・上向きに埋納され、その出土位置は須恵器甕片の直下に当たる。一方、平瓶 (第 59 図 227) は口縁部を打ち欠かれた状態で、底面を上に向けて土坑底面に接して埋納されていた。須恵器はいずれも 6 世紀後半の資料である。なお、埋土中からは平瓶の口縁部片を発見することはできなかった。

本遺構から出土した 3 個体の須恵器は、甕大型破片の水平埋納、杯身完形品の水平埋納、口縁部打ち欠きを行なった平瓶の倒置埋納という 3 様のあり方を見せており、同一遺構でこれが確認された点も注目すべきであろう。具体的な行為は不明であるが、須恵器の特殊な出土状況から、この遺構が何らかの祭祀行為に関わるものであることは明らかであろう。なお、いずれの須恵器からも納入物等は確認されなかった。

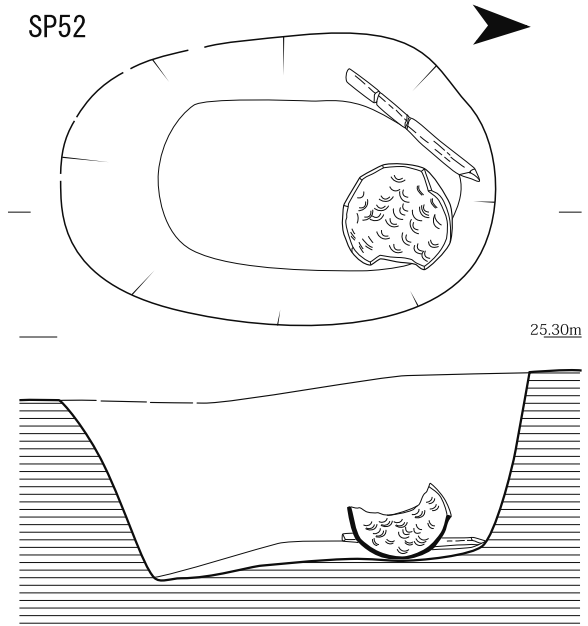


第 47 図 SK 8 実測図

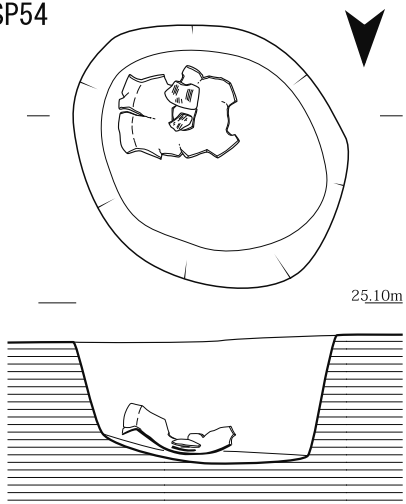
SP87



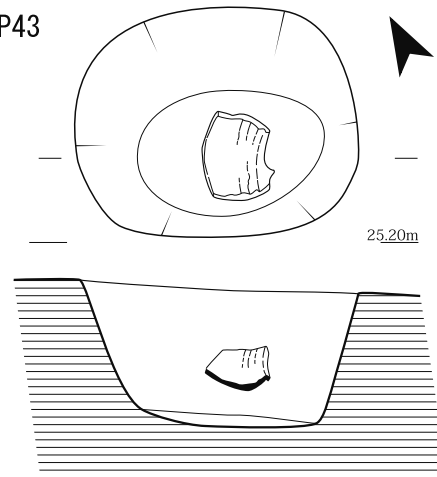
SP52



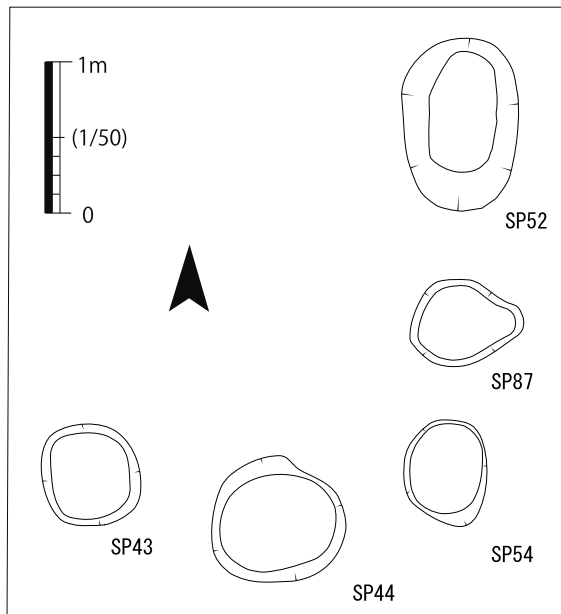
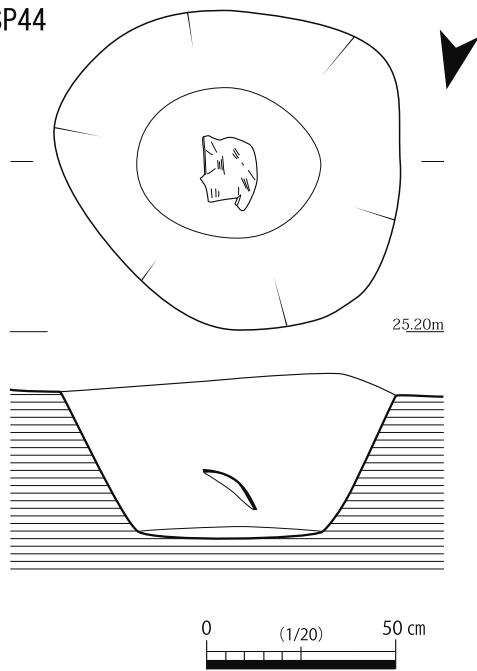
SP54



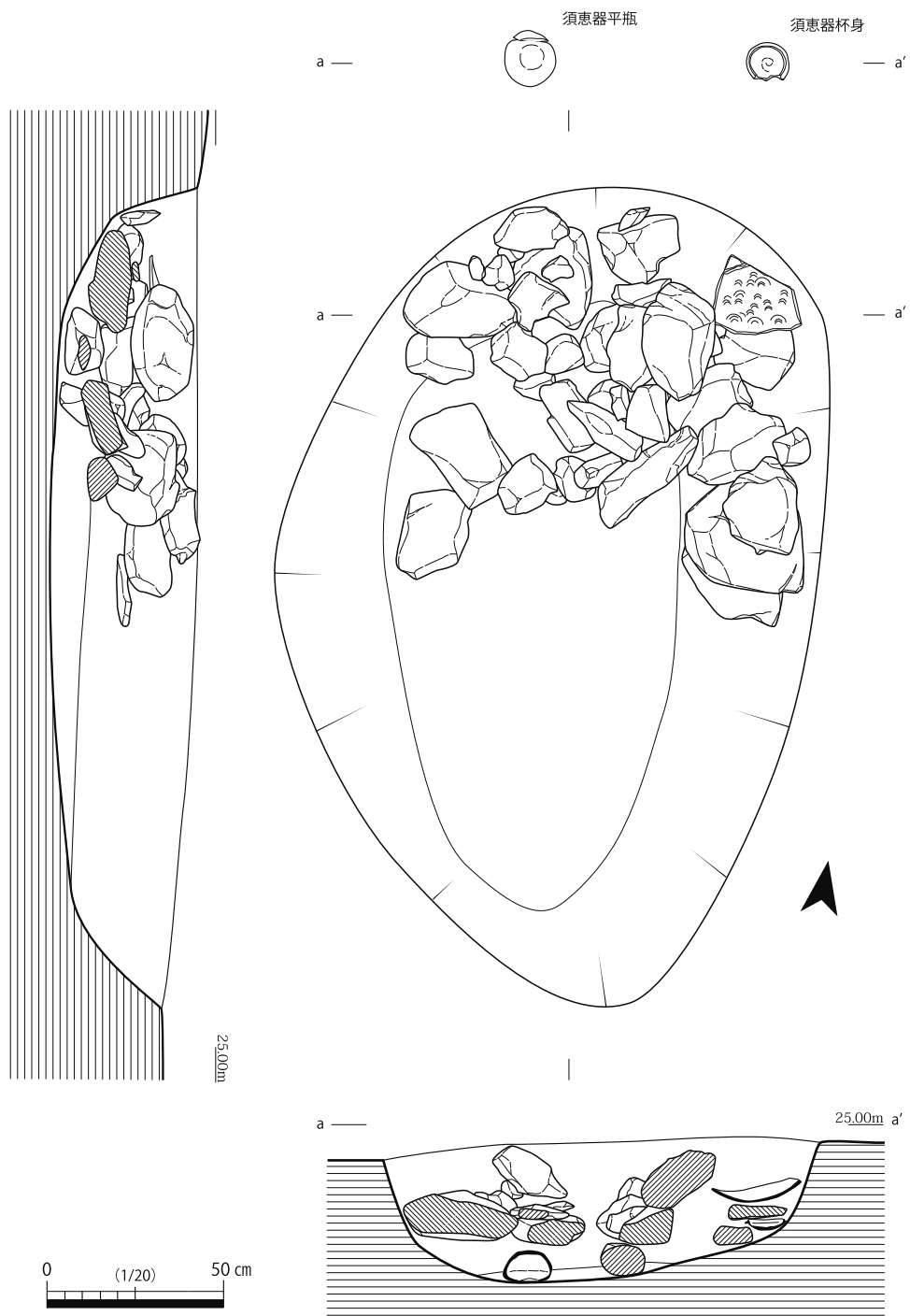
SP43



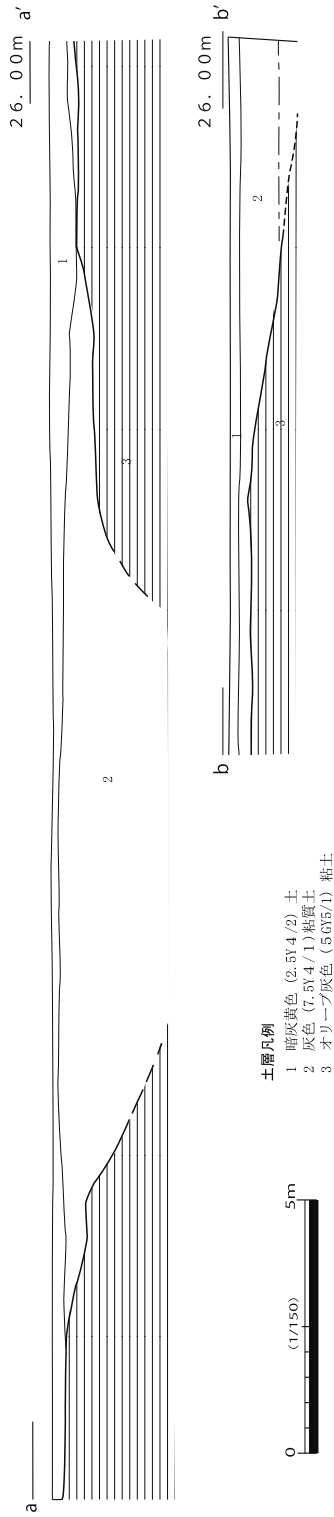
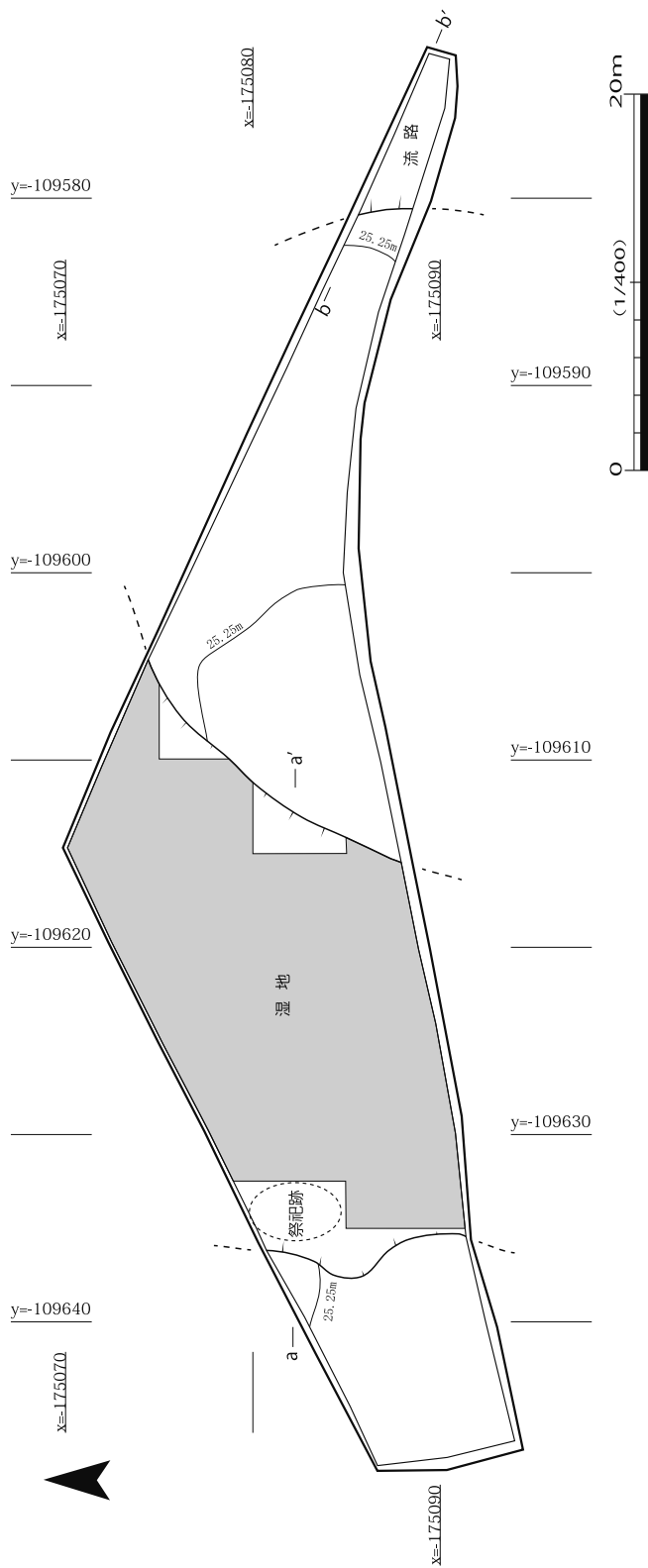
SP44



第 48 图 SP43 · 44 · 52 · 54 · 87 実測図



第 49 図 SX 1 実測図



第 50 図 3 区遺構配置図及び湿地・流路土層略図

4 3区の遺構

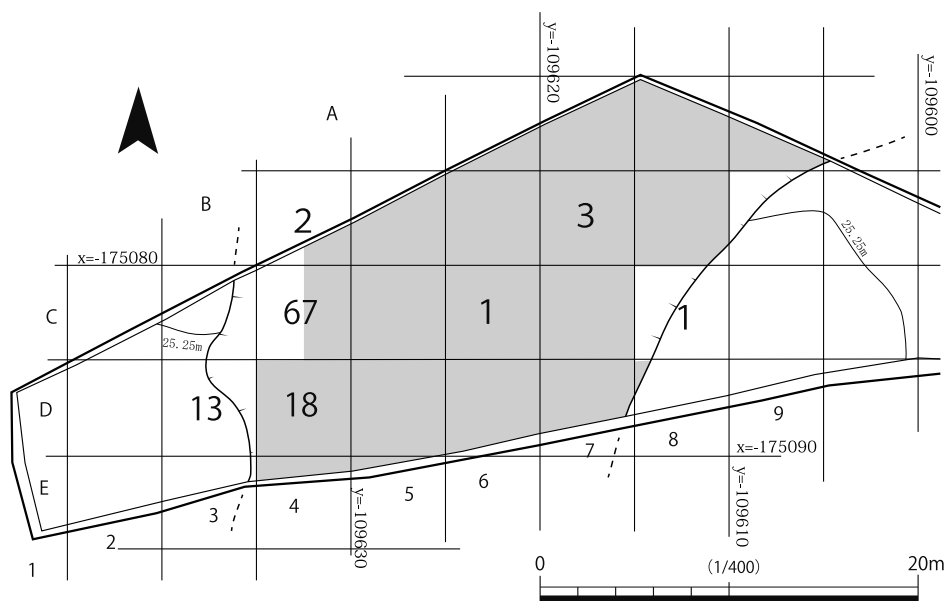
3区は中央に湿地、東端に流路が存在するものの、これを除いた範囲には比較的安定した粘質土の地山が確認できるが、地山を掘り込んだ遺構は検出されなかった。その一方、湿地埋土から比較的多くの遺物が出土することが事前に把握されており、調査によってこれら遺物が古墳時代の祭祀に伴うものであることが判明した。

湿地は東西幅約20mで、調査前の段階でこの部分は湧水の著しい湿田であった。このため多くの暗渠が網目状に設置され、調査期間中も湧水が絶えなかった。

(1) 祭祀跡 (第51～53図、図版35～37)

湿地西岸の東西2m余り、南北約5mの範囲に土師器・須恵器等・ミニチュア土器等の集中出土域が確認され、祭祀跡と判断された。遺物は常に湧水で満たされた粘質土中にあるため掘り込みは困難な作業となり、出土位置を正確に記録できた個体は60点程度となった(第52・53図)。

出土遺物の主体となるのはミニチュア土器であり、壺形・甕形・鉢形・高杯形等がみられ、鉢形が8割以上を占める。なお、268、281は入れ子の状態で出土している。破片を含めた総数は120点を超え、このうち50点余りについて出土位置を記録できた。ミニチュア土器以外には土師器壺・甕・鉢・高杯、須恵器杯・甕、滑石製剣形・小玉も出土している。滑石製小玉はミニチュア土器内部から発見されたものであり、276から4点、268から1点出土している。若干の混入遺物を含むと考えられ、遺存状態の良好な土器から判断すれば5世紀後葉～6世前葉の遺物群と捉えることができよう。

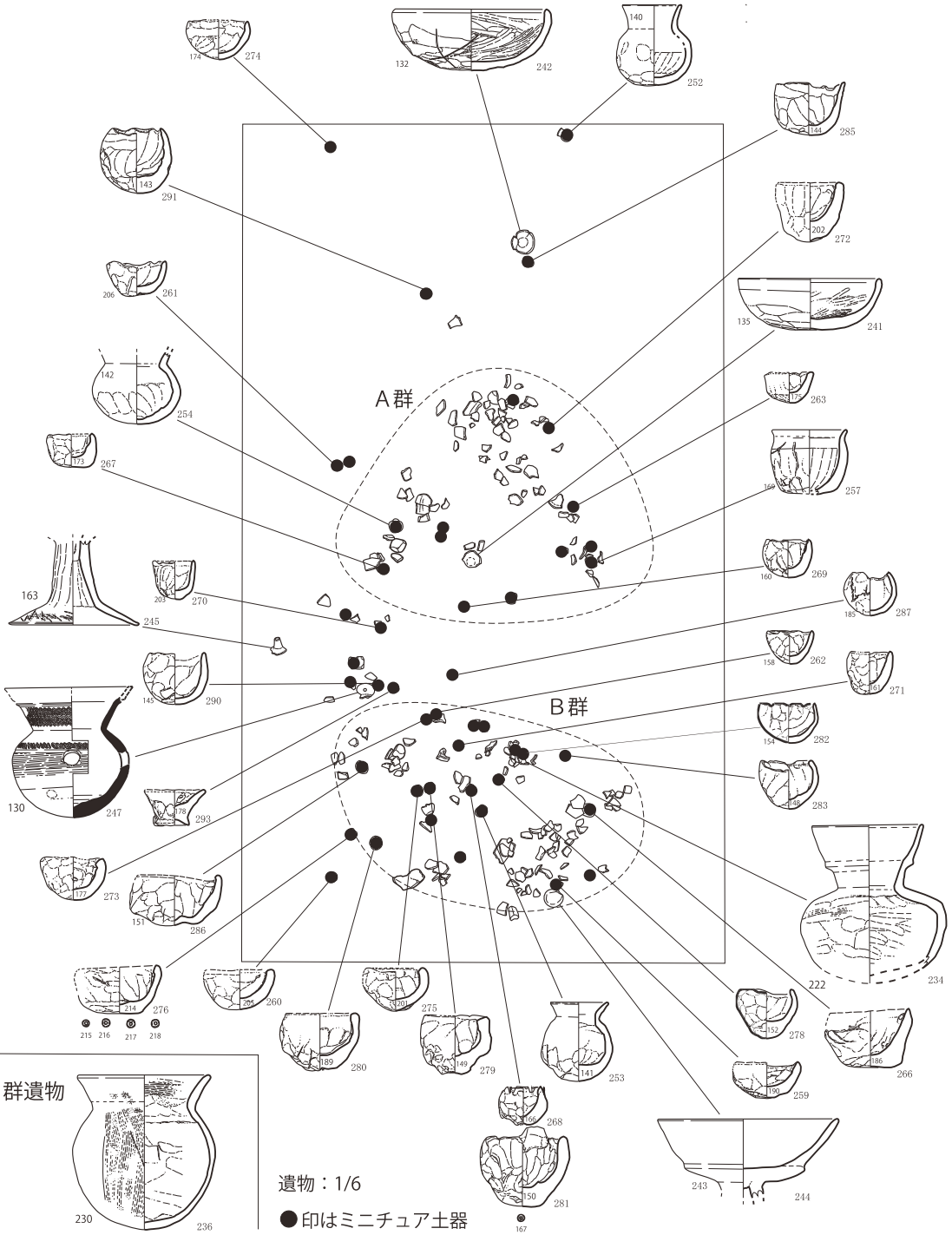
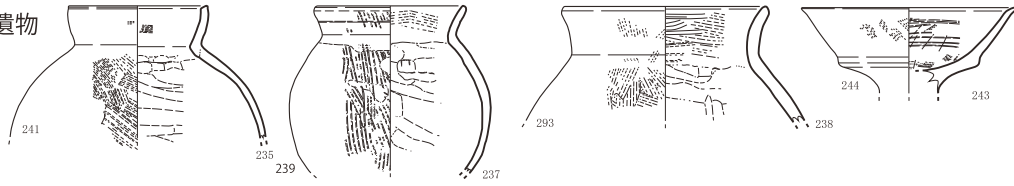


第51図 3区グリッド別ミニチュア土器出土数

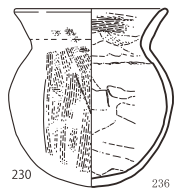


第 52 図 祭祀跡遺物出土状況図

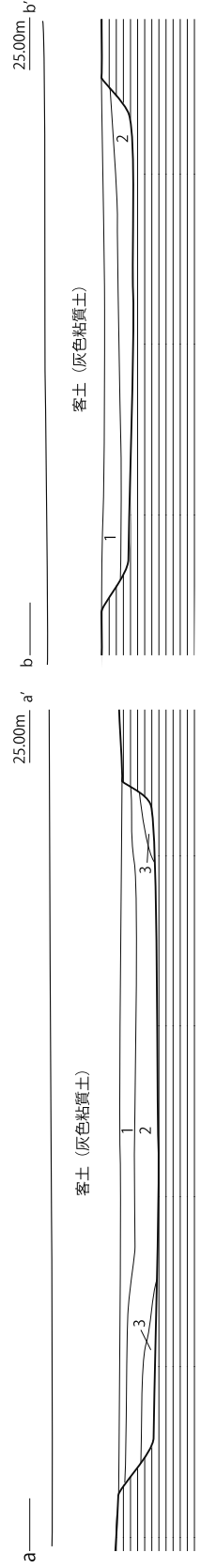
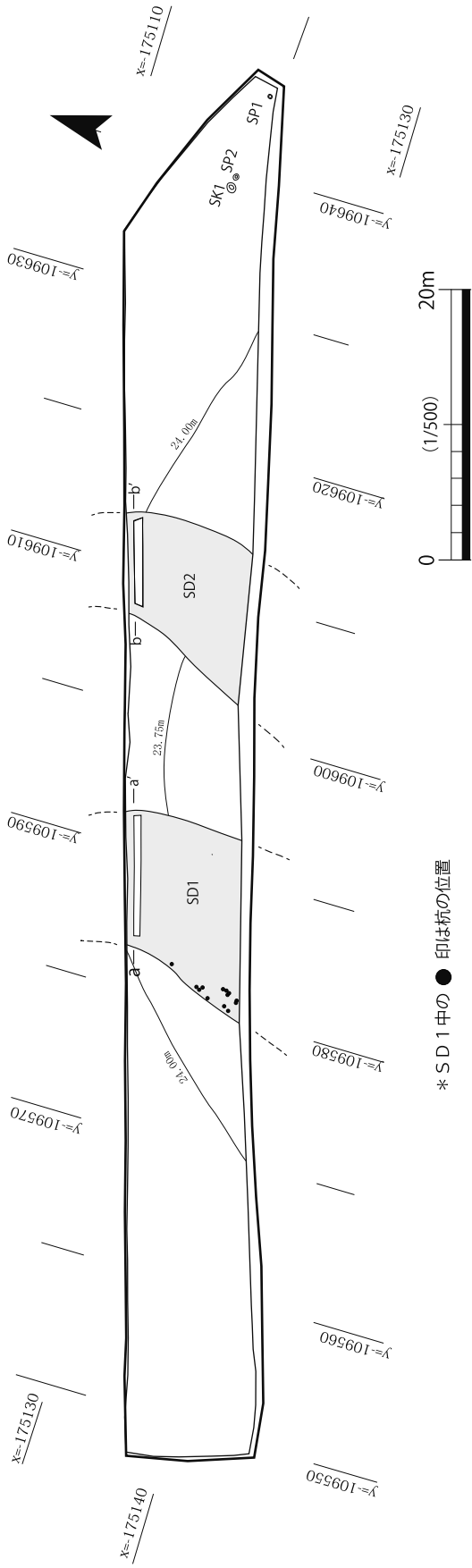
A群遺物



B群遺物



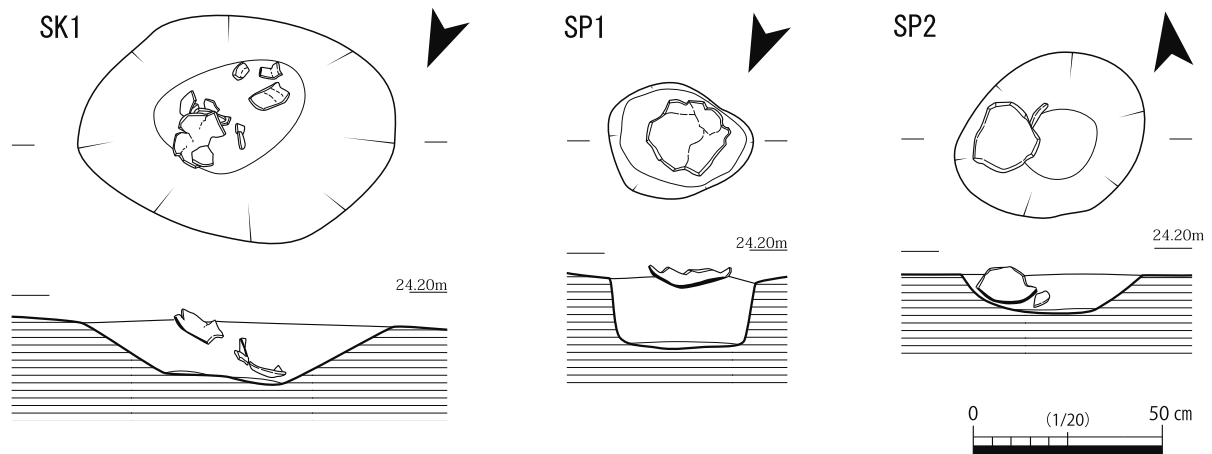
第 53 図 祭祀跡遺物出土位置図



- 土層凡例
- 1 暗灰黄色 (2.5YR5/3) 粘質土
 - 2 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土
 - 3 黒褐色 (10YR3/3) 粘質土



第 54 図 4 区遺構配置図及び溝土層断面図



第 55 図 SK 1・SP 1～2 実測図

出土遺物は基本的に破損した状態であり、その場に据え置かれたものはない。特に中・大型土器は破壊されて小破片を散布したような状況で出土した。これに加え、土器の向きに統一性がなく、器種ごとのまとまりもみられないことから、これら遺物は湿地外にある祭場から運ばれて投棄されたものと考えられる。

なお、湿地東半部からもミニチュア土器が出土することから、祭祀は複数地点で行なわれている可能性がある（第 51 図）。

5 4 区の遺構

4 区には自然流路とみられる 2 条の溝が存在し、2 区に隣接する東端部のみに明確な遺構がみられる。東端部以外では出土遺物は土師器小破片がほとんどであり、図化可能な個体は発見できなかった。

溝以外の遺構としては土坑 1 基、柱穴 2 個のみが確認された。

(1) 溝（第 54 図、図版 38）

SD 1 幅 10～14 m、深さ約 50 cm の流路であり、3 区にみられる湿地の 40 m 南方に当たる。西岸に沿って杭列がみられるが、3 区祭祀跡でみられるような遺物はまったく発見できなかった。埋土に遺物をほとんど含まないため設置時期は不明である。

SD 2 幅 8～11 m、深さ約 40 cm の流路であり、3 区東端にみられる流路の下流に当たる。埋土に板材を含むものの、土器等をほとんど含まないため時期は不明である。

(2) 土坑（第 55 図、図版 38）

SK 1 長径 85 cm の浅い土坑で、埋土に土師器甕片を含む。土器は小破片を集めたような状況で出土し、意図的埋納を示すものとは考えられない。6 世紀の遺構と考えられる。

(3) 柱穴（第 55 図、図版 38）

SP 1 長径 40 cm 弱の小坑で、中央部の埋土中に 20cm 四方程度の土師器甕片を含む。2 区 SP43 に

近似し、祭祀行為をうかがわせる遺構である。同遺構とは15 m程度の距離であることから、一連の祭祀空間を構成していた可能性がある。6世紀の遺構と考えられる。

SP 2 長径50 cm余りの小坑で、底面から土師器甕片が出土しており、2区柱穴における出土状況と共通する。6世紀の遺構と考えられる。

6 遺物

(1) 1区(第56図)

遺物包含層から土師器・須恵器の小片が主に出土したが、図化可能な資料は限られる。

第56図は1区 出土の須恵器である。202は6世紀の壺、203～205は8～9世紀の杯・皿である。

(2) 2区(第57～60図)

柱穴・土坑ほかから5～6世紀を中心とする時期の遺物が多く出土した。

第57～59図は遺構出土遺物である。206～208は土師器ミニチュア土器であり、柱穴・土坑からおのおの単独で出土した。206～214は4～5世紀の土師器である。212は完形品であり、外面に煤が付着し、内面下位に炭化物がみられる。213・214はSP54からの共伴遺物であり、213はSP44出土の破片と接合した。

215～219は6世紀の土師器である。215は還元焼成不良の須恵器の可能性はある。

220～228は6世紀の須恵器である。220・221はSK18出土であるが、221については破片で出土し、土坑周辺出土破片と接合した資料である。224・225はSP52出土の須恵器である。224は埋土中から、225は柱穴底面から出土した。いずれもタタキ成形であるが、外面には224は平行タタキ、225は格子タタキ痕跡を残す。226～228は祭祀に関わる遺構とみられるSX 1から出土した。杯身226はほぼ完形品であり、杯身131はほぼ完形品であり、平瓶227は口縁部を失うものの体部は完存する。

229はSP100出土の焼成不良の皿であり、底部が完存する。8～9世紀の遺物である。

第60図は遺構に伴わない遺物である。230は弥生土器壺であり、口縁端部には凹線と斜行沈線文が施される。231は須恵器甕であり内外面ともタタキ痕跡を消す。232の須恵器は孔が遺存しないが器形から甕と判断した。233は滑石製管玉であり、丁寧な作りである。

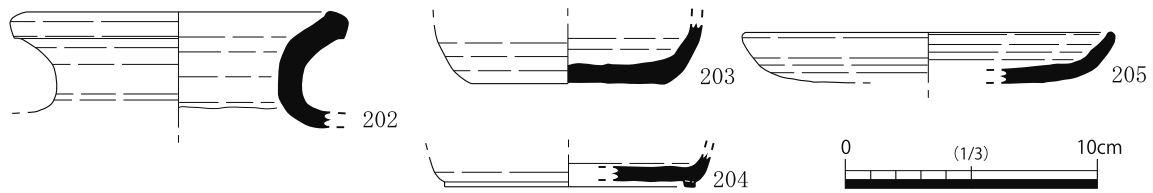
(3) 3区(第61～66図)

祭祀跡を主体に古墳時代後半期の遺物が多く出土した。

第61～64図は祭祀跡とその周辺から出土した遺物である。234～245は土師器であり、壺・甕・鉢・高杯がある。234は体部の一部を欠いており孔の有無を確認できないが、器形から甕である可能性が高い。甕239・240はともに破片となって散布していたが、239は8割程度、240は6割程度まで接合できた。鉢241・242は底部外面をヘラ削りする。高杯は杯部と脚部が連続した個体がなく、脚部を折り取る行為が想定される。

246～251は須恵器であり、甕・杯身・短頸壺がある。247は陶邑TK 47並行期(5世紀後葉～6世紀前葉)の甕である。口縁部を失った状態で出土し、頸部破片が接合した。246・247は接合しないが、同一個体とみられる。杯身133は内面に、134は外面にヘラ記号をもつ。須恵器杯身・短頸壺(248～251)については6世紀後半の遺物であることから、他の遺物との共伴性はない。

252～295は土師器のミニチュア土器であり、壺形(252～256)・甕形(257)・鉢形(258～



第 56 図 1 区出土遺物実測図

291)・高杯形 (292～294)・その他 (295) がある。さらに壺形には体部が球状のもの (252・253) と偏球状のもの (254～256) がある。鉢形には器高の低いもの (258～261)、断面が U 字に近いもの (262～272)、口縁端部を内傾させるもの (273～281)、口縁端部を薄くつくるもの (282～286)、全体が球形に近いもの (287～291) がある。295 は容器の蓋を模したものであろうか。なお、268・284 は入れ子の状態で出土し、268 中には滑石製小玉 1 点 (297) が収められていた。ミニチュア土器には手づくねで粗雑なつくりのものが多く、内面には放射状の肋条を残すものが大半である。252 は例外的に丁寧なつくりとなっている。3 区からは祭祀跡を含め、総数 130 点余りのミニチュア土器が出土している。

第 64 図は滑石製品である。296 は剣形、297～301 は小玉 (白玉) で、いずれも近似した石材を用いる。297 はミニチュア土器 268・284 内部に、298～301 はミニチュア土器 276 内部に納められていた。

第 65・66 図は遺構検出等で発見された遺物であり、祭祀跡に伴うものではない。302～304 は古代 (10～11 世紀) の土器である。302 は内面のみに施釉がみられる緑釉陶器碗、303・304 は土師器碗である。3053～314 は中世 (12～13 世紀) の土器類である。土師器皿・杯・台付杯 (305～307)、白磁碗 (308～311)、青磁碗 (312)、東播系須恵器鉢 (313)、常滑焼片 (314) がある。315～317 は中世の鍋であり、315・316 は長門西部に多くみられる 14 世紀の土師器鍋、317 は 15～16 世紀の瓦質足鍋である。特に中世段階において各地の陶磁器が搬入されていることが注目される。

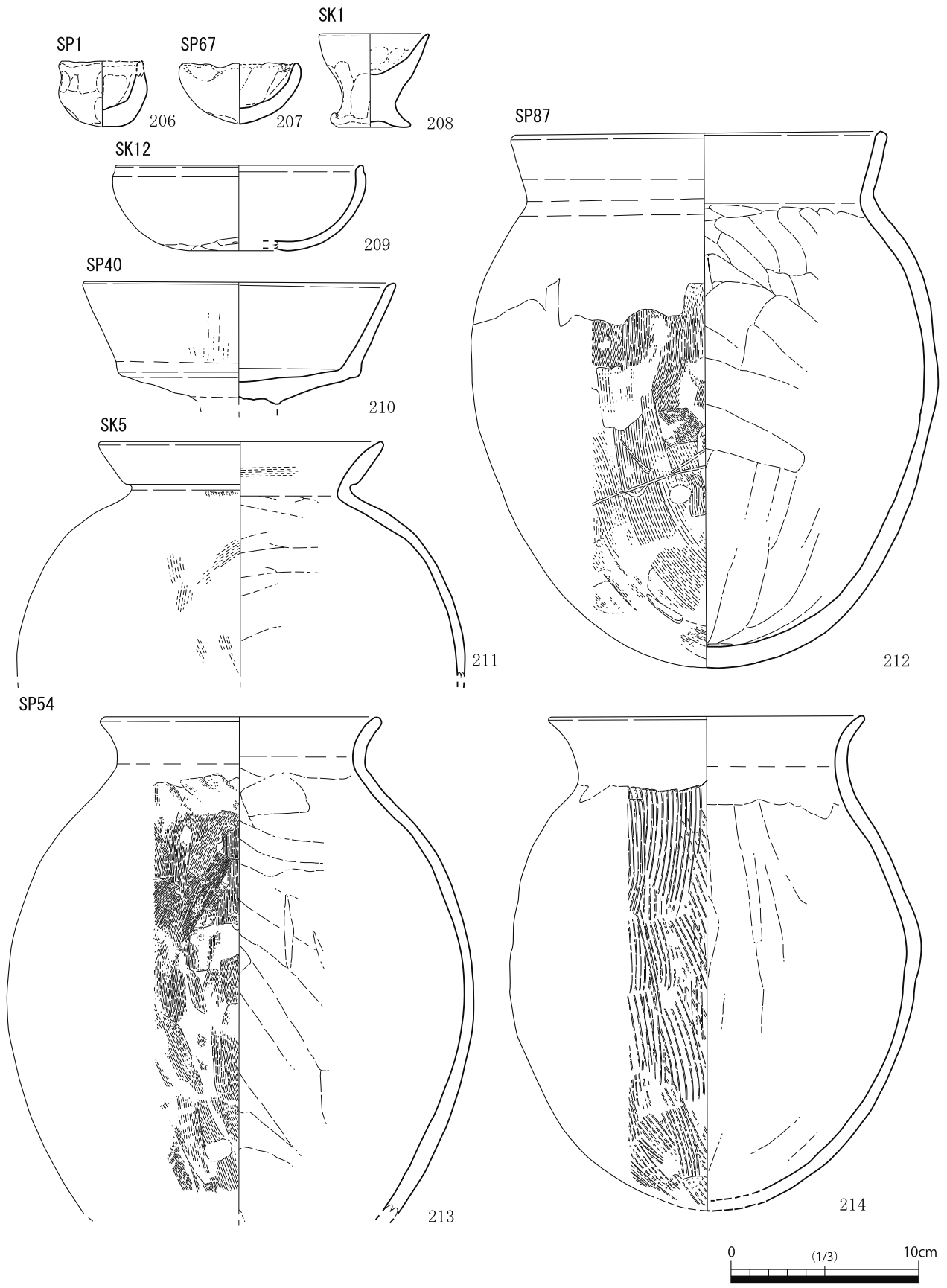
318～321 は祭祀遺物である。318 は鉢形、319 は蓋形のミニチュア土器であり、滑石製小玉 (320・321) は 318 内部に収められていた。

(4) 4 区 (第 67 図)

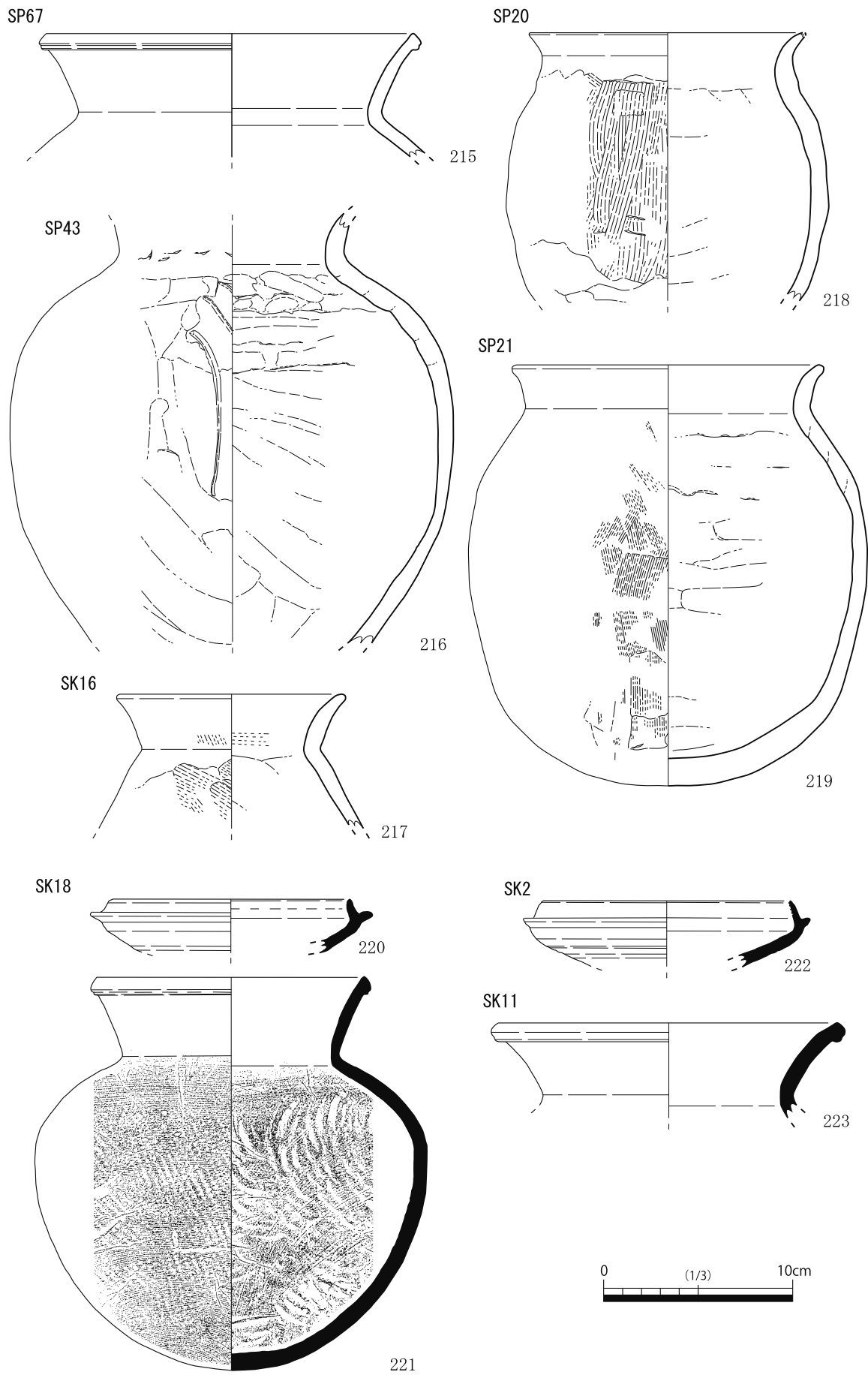
2 条ある溝からは図化可能な遺物は出土していないため、紹介できるのは調査区東端の遺構からの出土品である。第 67 図は 5～6 世紀の土師器甕であり、土坑および柱穴から出土した。323 については柱穴 SP 1 埋土中層に水平に埋置されており、2 区柱穴遺物との共通性がみられる。

(5) 瓦 (第 68 図)

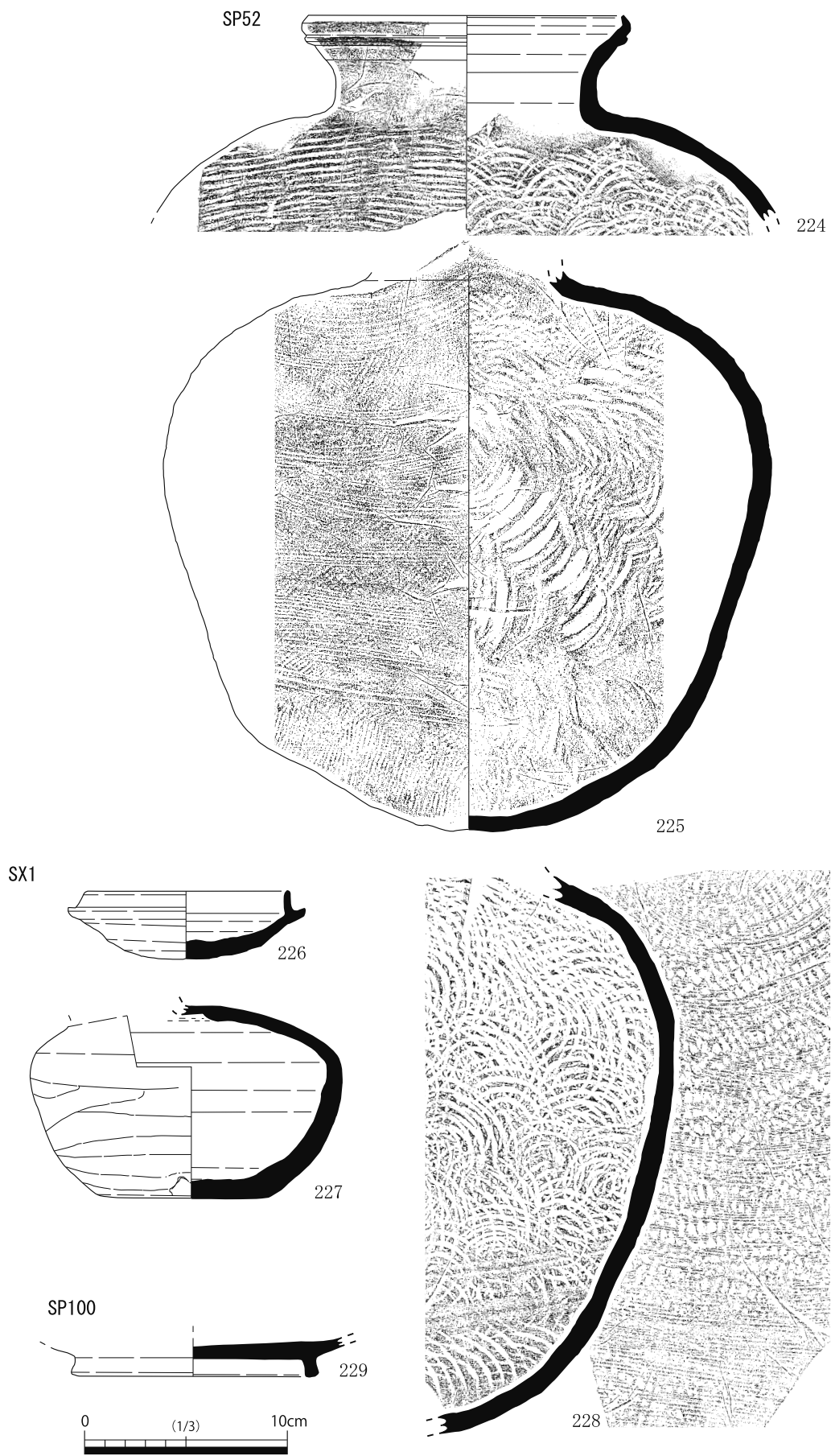
325・326 は軒丸瓦の瓦当部である。325 は中房内が欠損しているため文様は不明で蓮司などは確認できない。中房の径約 5cm を測る。内区は推定径約 16 cm で、単弁 9 葉が認められる。弁に重複部分が認められ、造りはやや粗い。全容は 14～16 葉と推定される。内区外縁に外区との境界痕跡がわずかに確認できるため外区を持つと推定されるが、外区は残存せず文様は不明である。326 は中房内文様が欠損のため不明であるが、内区外縁・外区に珠文が施されることから、中心に三つ巴文が配されるものと推定される。内区外縁の珠文は円形、外区の珠文は菱形のものも見られ、変則的な文様である。327・328 は丸瓦端部片である。329～332 は平瓦である。329・330・332 は縄目タタキ、布目痕がみられる。



第 57 図 2 区出土遺物実測図 (1)

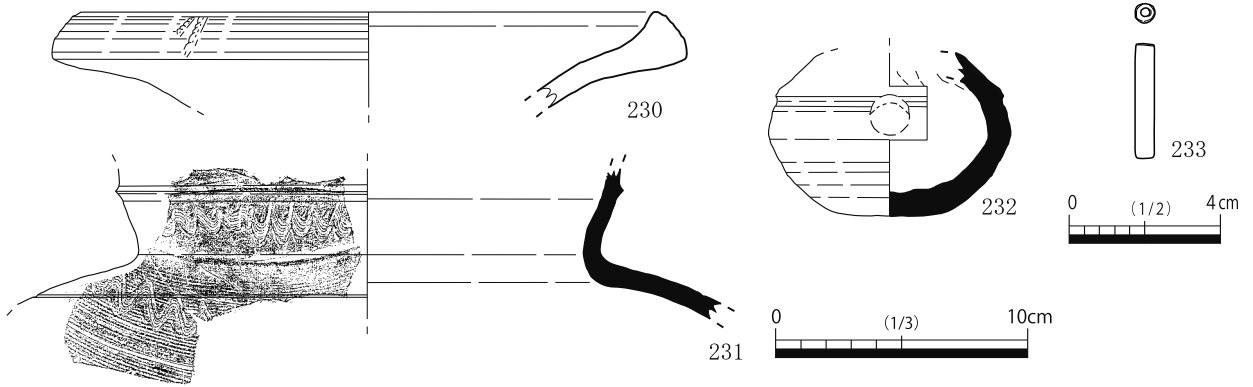


第 58 图 2 区出土遺物実測図 (2)



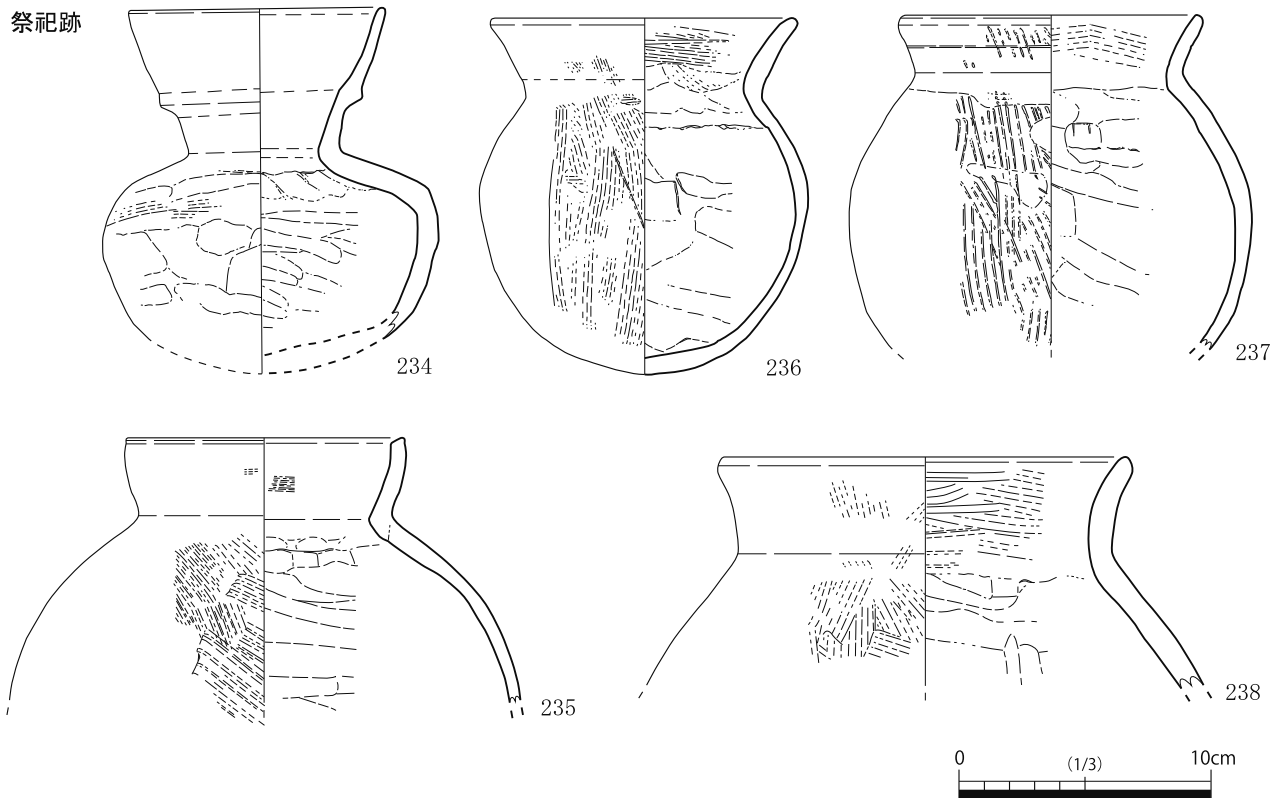
第 59 图 2 区出土遺物実測図 (3)

遺構外



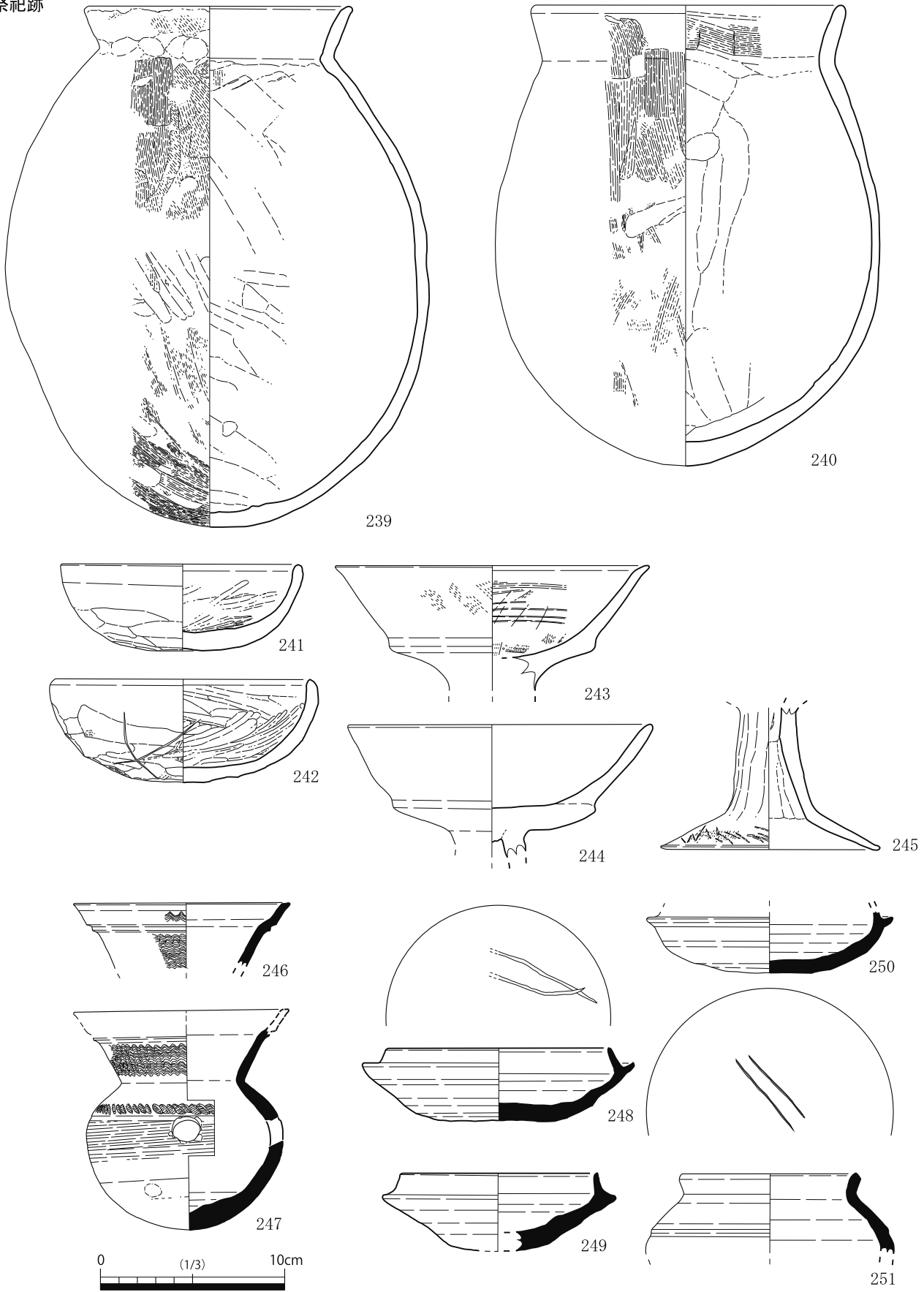
第 60 図 2 区出土遺物実測図 (4)

祭祀跡



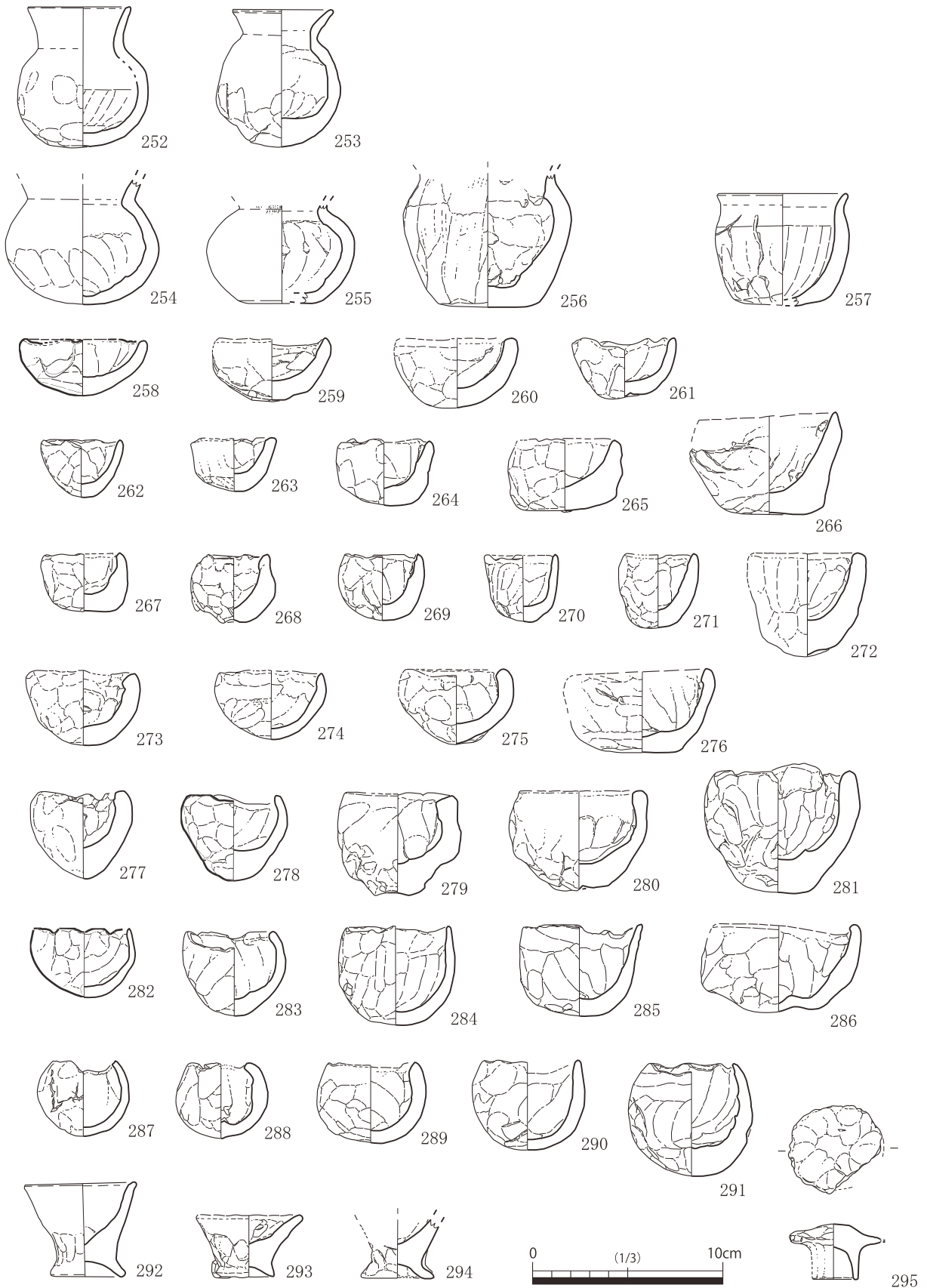
第 61 図 3 区出土遺物実測図 (1)

祭祀跡



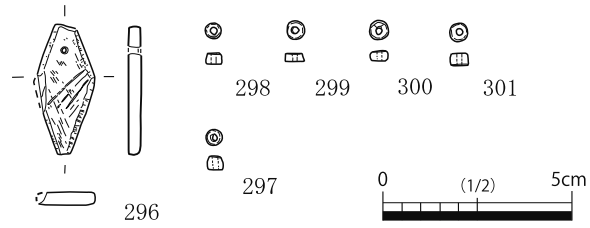
第 62 图 3 区出土遺物実測图 (2)

祭祀跡



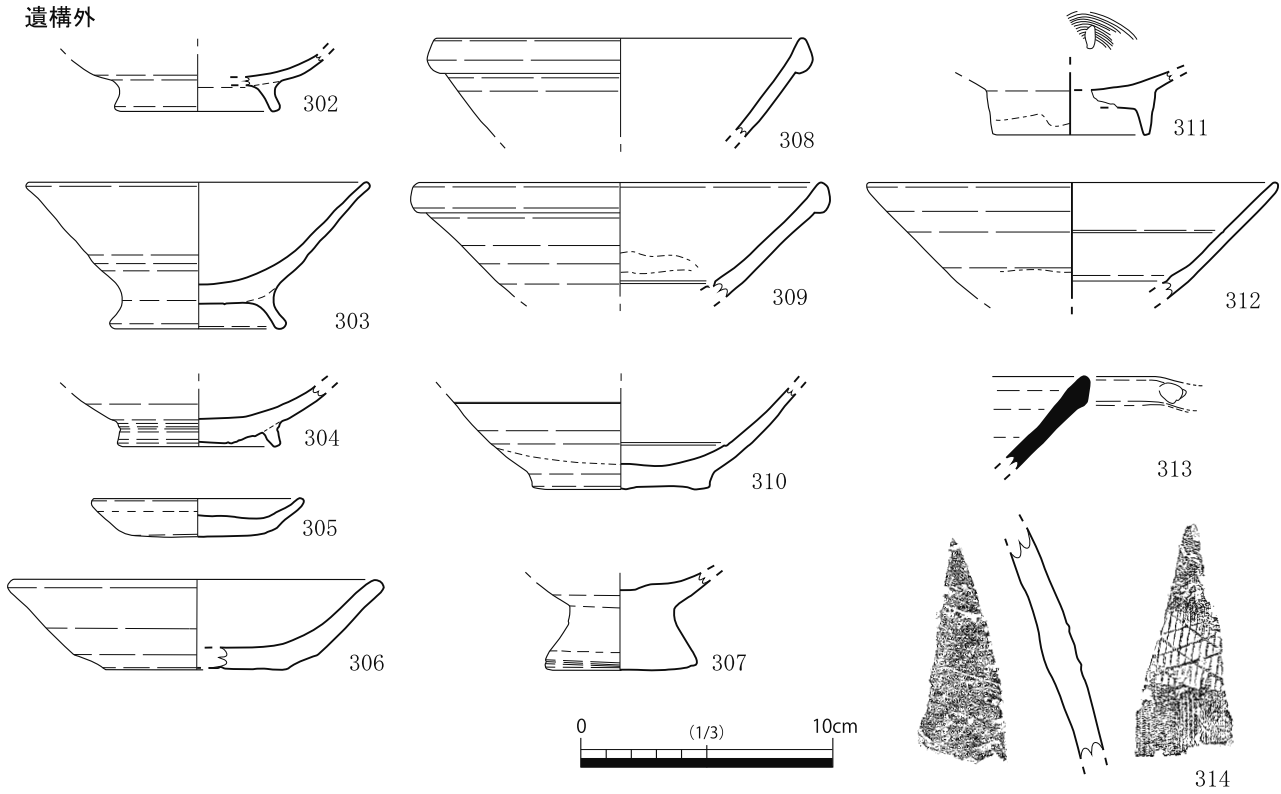
第 63 图 3 区出土遺物実測図 (3)

祭祀跡



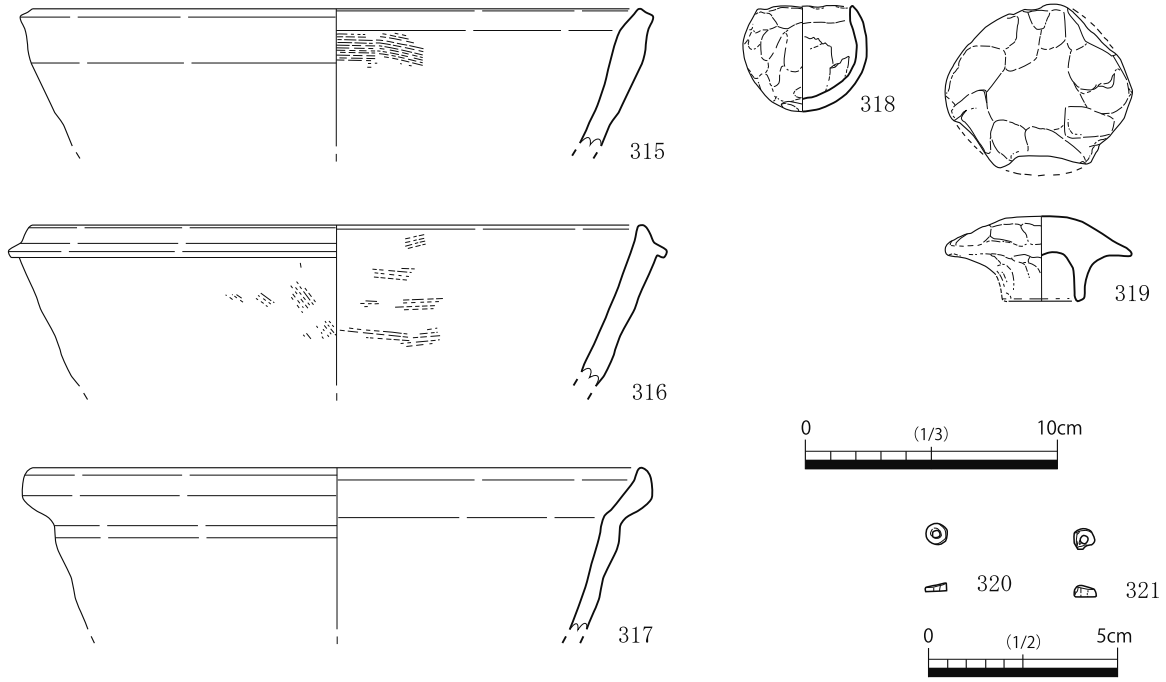
第 64 図 3 区出土遺物実測図 (4)

遺構外

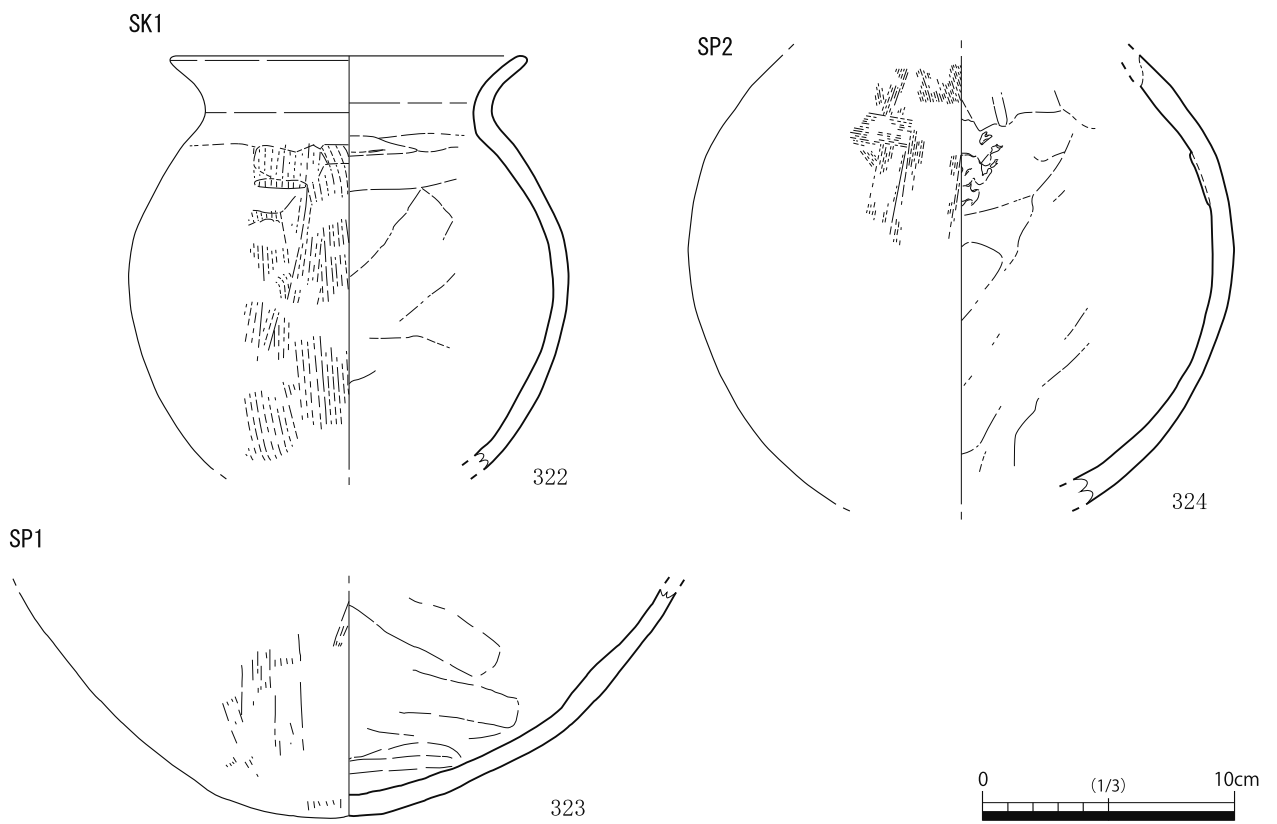


第 65 図 3 区出土遺物実測図 (5)

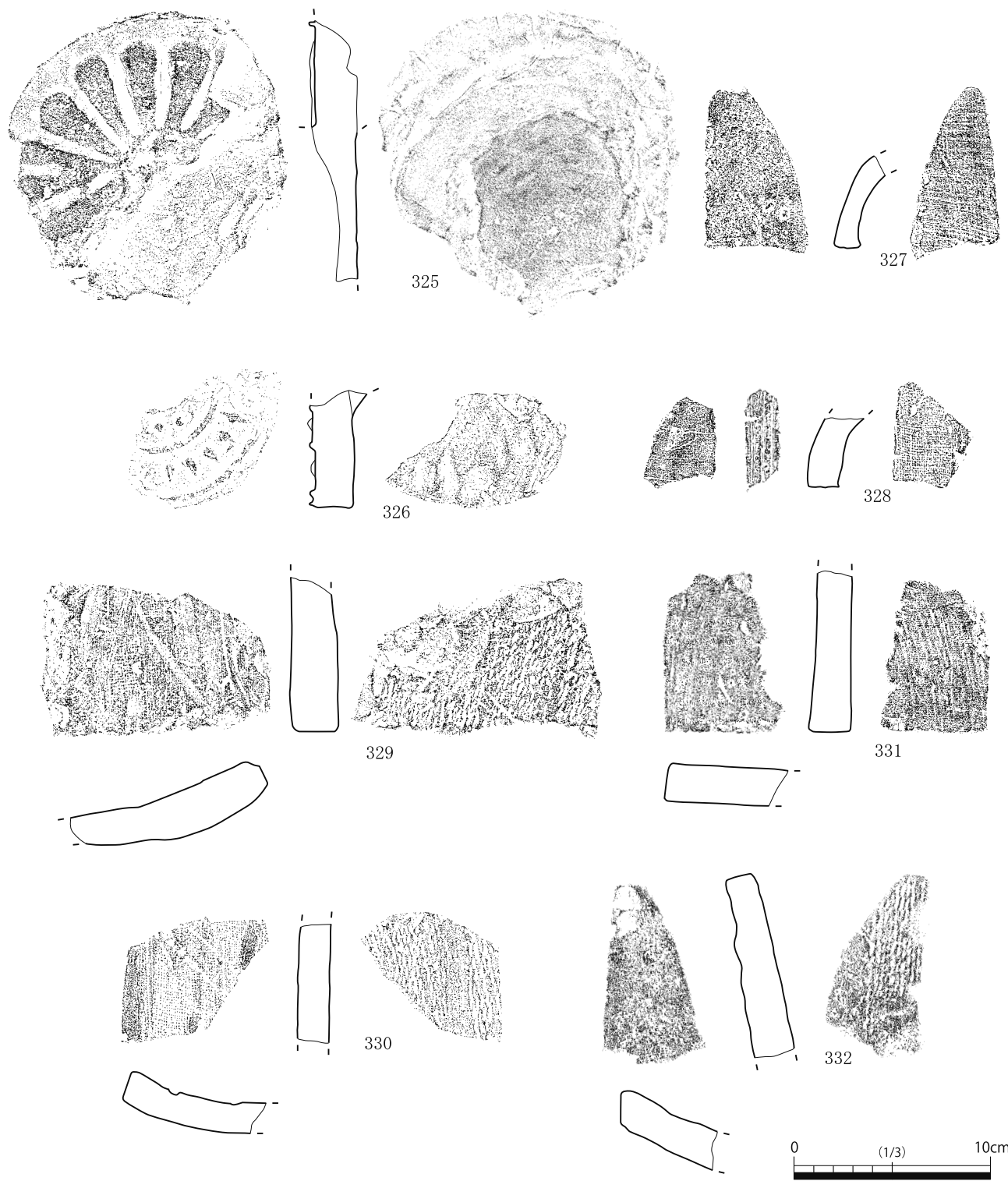
遺構外



第 66 图 3 区出土遺物実測図 (6)



第 67 图 4 区出土遺物実測図



第 68 图 瓦実測图

第4表 本郷遺跡出土土器・土製品観察一覧表

No.	挿 図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	主な調整 (内) (外)	備考	
					口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)						
202	56	40	1区 西側 遺構検出	須恵器	壺	(12.0)	[4.0]	-	やや 精良	やや 良	灰色 N6/1 灰色 N5/1	回転ナデ、当具痕 回転ナデ、平行タタキ	
203	56	40	1区 トレンチ内	須恵器	杯身	-	-	(10.0)	やや 精良	やや 良	オリーブ灰色 2.5GY6/1 オリーブ灰色 2.5GY6/1	回転ナデ 回転ナデ	底部外面に板目
204	56	40	1区 西側 遺構検出	須恵器	杯身	-	[2.2]	(7.6)	やや 精良	良	青灰色 10BG6/1 青灰色 10BG5/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ	
205	56	40	1区 トレンチ内	須恵器	皿	(14.6)	[2.0]	-	精良	やや 良	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ、ナデ	
206	57	40	2区 SP1	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	4.0~4.5	3.5	-	やや 粗	不良	橙色 5YR7/8 淡橙色 5YR8/4	ナデ、ナデ上げ ナデ、指頭痕	
207	57	40	2区 SP67	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	(6.1)	3.3	-	やや 粗	不良	明赤褐色 5YR5/8 明赤褐色 5YR5/6	ナデ、ナデ上げ ナデ、(剥落)	
208	57	40	2区 SK1 上層	土師器	ミニチュア土器 (高杯)	5.7	5.0	4.5	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR6/3	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	
209	57	40	2区 SK12	土師器	鉢	(13.0)	4.5	-	やや 粗	やや 良	浅黄色 2.5Y7/3 浅黄色 2.5Y7/3	ナデ ナデ、粗いナデ、ヘラケ ズリ	
210	57	40	2区 SP40	土師器	高杯	(16.3)	-	-	やや 精良	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい橙色 7.5YR7/4	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ、粗いナデ	
211	57	40	2区 SK5	土師器	高杯	(14.8)	-	-	やや 粗	やや 良	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	ハケ目、ナデ、ヘラケズ リ ハケ目、ナデ	
212	57	40	2区 SP87	土師器	甕	19.3	28.5	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3	ヘラケズリ、ナデ ナデ、ハケ目	内面に炭化物附着
213	57	40	2区 SP54	土師器	甕	14.4	-	-	やや 粗	やや 良	灰白色 2.5Y8/2 にぶい黄褐色 10YR7/3	ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目	SP44 出土破片と接 合
214	57	40	2区 SP54	土師器	甕	16.4	[26.4]	-	やや 精良	やや 良	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	ナデ、ヘラケズリ ハケ目、ナデ	
215	58	41	2区 SP67	土師器	甕	(19.3)	-	-	精良	やや 良	橙色 5YR7/8 橙色 5YR7/8	回転ナデ 回転ナデ	須恵器の焼損じ か?
216	58	41	2区 SP43	土師器	甕	-	-	-	やや 粗	やや 良	橙色 5YR7/8 橙色 5YR7/8	ナデ、指オサエ、ヘラケ ズリ ナデ、ヘラナデ	
217	58	41	2区 SK16	土師器	甕	(11.7)	-	-	やや 粗	やや 良	にぶい橙色 7.5YR7/3 にぶい橙色 7.5YR7/3	ハケ目、ナデ、ヘラケズ リ ハケ目、ナデ	
218	58	41	2区 SP20	土師器	甕	(14.4)	-	-	やや 精良	やや 良	橙色 5YR7/6 にぶい橙色 5YR7/4	ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目、ヘラケズ リ	
219	58	41	2区 SP21	土師器	甕	(15.9)	[22.2]	-	やや 粗	やや 良	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目	
220	58	41	2区 SK18	須恵器	杯身	12.6	[2.8]	-	精良	やや 良	青灰色 5PB5/1 灰色 10Y5/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ	
221	58	41	2区 SK18	須恵器	壺	(14.1)	20.8	-	やや 精良	良	灰色 N6/ 灰色 N6/	タタキ(同心円)、回転 ナデ タタキ(平行)、カキ目、 回転ナデ	
222	58	41	2区 SK2	須恵器	杯身	13.0	[3.4]	-	やや 精良	やや 良	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ	
223	58	41	2区 SK11	須恵器	甕	(17.8)	-	-	やや 粗	良	灰色 N5/ 灰色 N4/	回転ナデ 回転ナデ	
224	59	42	2区 SP52	須恵器	壺	15.6	[10.0]	-	やや 精良	良	灰色 N6/1 灰色 7.5Y4/1	回転ナデ、当具痕 回転、平行タタキ目	
225	59	42	2区 SP52	須恵器	甕	-	[27.5]	-	やや 精良	やや 良	灰色 N6/1 灰オリーブ色 7.5Y6/2	タタキによる当具痕 回転ナデ、タタキ目、カ キ目	
226	59	42	2区 SX1	須恵器	杯身	10.0	3.3	-	やや 精良	良	褐灰色 7.5YR6/1 褐灰色 7.5YR5/1	回転ナデ、静止ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ、指ナデ	
227	59	42	2区 SX1	須恵器	平瓶	-	体部高 9.5	8.5	やや 精良	良	灰色 N5/ オリーブ黒色 10Y3/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ	口縁部を欠失
228	59	42	2区 SX1	須恵器	甕	-	[27.6]	-	やや 精良	良	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y7/1	タタキ目による当具痕、 ナデ タタキ目、カキ目	
229	59	42	2区 SP100	須恵器	皿	-	-	12.1	やや 粗	不良	暗灰色 N3/ にぶい黄褐色 10YR7/4	ナデ (剥落)	生焼け須恵器
230	60	42	2区 北側壁	弥生土 器	壺	(22.8)	[3.8]	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	(ハケ目?) 凹線、貝殻による施文	
231	60	42	2区 中央 遺構検出	須恵器	壺	-	[6.0]	-	精良	やや 良	青灰色 5PB6/1 灰オリーブ色 5Y6/2	回転ナデ 回転ナデ、カキ目、波状 文	
232	60	42	2区 遺構検出	須恵器	甕	(6.4)	-	-	やや 精良	良	灰色 N6/ 灰色 N6/	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ	内側上部にシボリ 痕あり
234	61	43	3区 祭祀跡 B群	土師器	壺	9.9	-	-	やや 精良	やや 良	浅黄褐色 7.5YR8/3 浅黄褐色 7.5YR8/3	ナデ ナデ、ハケ目	甕の可能性あり

No.	挿 図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	主な調整 (内) (外)	備考	
					口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)						
235	61	43	3区 祭祀跡 A群	土師器	甕	(10.8)	-	-	やや 精良	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	ハケ目、ナデ、ヘラケズリ ハケ目、ナデ	
236	61	43	3区 祭祀跡 B群	土師器	甕	(11.7)	14.1	-	やや 精良	良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	ハケ目、ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目	
237	61	43	3区 祭祀跡 A群	土師器	甕	11.6	-	-	やや 精良	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい黄橙色 10YR7/2	ハケ目、ナデ、ヘラケズリ ハケ目、ナデ	ハケの目が非常に 粗い
238	61	43	3区 祭祀跡 A群	土師器	甕	15.8	-	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ハケ目、ナデ、ヘラケズリ ハケ目、ナデ	
239	62	43	3区 C4グ リッド 北 側遺構検出	土師器	甕	14.0	28.3	-	精良	良	浅黄橙色 10YR8/3 浅黄橙色 10YR8/3	ハケ目、ナデ、ヘラケズリ ハケ目、ナデ	
240	62	43	3区 C4グリッド	土師器	甕	(16.6)	25.0	-	やや 粗	良	にぶい黄橙色 10YR7/2 灰黄褐色 10YR6/2	ハケ目、ナデ、ヘラケズリ ハケ目、ナデ	
241	62	43	3区 祭祀跡	土師器	鉢	12.7	4.7	-	やや 粗	やや 良	灰白色 7.5YR8/1 淡褐色 5YR8/3	ナデ、ヘラミガキ ナデ、ヘラケズリ	
242	62	43	3区 祭祀跡	土師器	鉢(椀)	13.8	5.6	-	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ヘラミガキ ナデ、ヘラケズリ	ヘラ記号あり(外 面)
243	62	44	3区 祭祀跡 A群	土師器	高杯	(16.8)	-	-	やや 精良	良	橙色 5YR7/6 ~ 赤褐色 10YR6/6 浅黄褐色 7.5YR8/3 ~ 橙色 5YR7/6	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	赤い印象
244	62	44	3区 祭祀跡 B群	土師器	高杯	16.3	-	-	やや 粗	やや 良	橙色 5YR7/6 橙色 5YR7/6	ナデ ナデ	
245	62	44	3区 祭祀跡	土師器	高坏	-	-	11.4	精良	やや 良	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR8/4	回転ナデ、ヘラケズリ 回転ナデ、ハケ、ヘラケ ズリ	外面脚裾部に擦過 痕または施文あり
246	62	44	3区 D4グリッド	須恵器	甕	(11.5)	-	-	精良	良	灰色 N4/ 灰色 N4/	回転ナデ 回転ナデ	櫛描き波状文施文 (口縁・頸部)
247	62	44	3区 祭祀跡	須恵器	甕	-	体部高 8.1	体部 10.6	やや 精良	良	灰色 N5/ 灰色 N5/	回転ナデ 回転ナデ、カキ目、櫛状 工具による刺突	体部完存(口頸部 を打欠く)
248	62	44	3区 C4グリッド	須恵器	杯身	12.2	4.0	-	やや 精良	やや 良	灰赤色 10R5/2 オリーブ黒色 5Y3/2	回転ナデ、静止ナデ 回転ヘラケズリ、回転ナ デ	底部内側にヘラ記 号
249	62	44	3区 D4グリッド	須恵器	杯身	10.6	4.2	-	やや 粗	不良	灰色 7.5Y5/1 暗オリーブ灰色 2.5GY3/1	回転ナデ、静止ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ	底部内側に静止ナ デ
250	62	44	3区 C4グリッド	須恵器	杯身	-	3.3 (口縁除 く)	-	やや 精良	やや 良	灰黄色 2.5Y7/2 暗灰色 N3	回転ナデ、静止ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズ リ	底部内側に静止ナ デ、底部外側にヘ ラ記号
251	62	44	3区 C4グ リッド北側	須恵器	短頸壺	9.4	[4.1]	-	やや 精良	やや 良	灰色 10Y5/1 灰色 10Y5/1	回転ナデ 回転ナデ	
252	63	44	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (壺)	5.3	7.4	-	やや 精良	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ(ヨコ、ナデ上げ) ナデ、ヘラケズリ	
253	63	44	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (壺)	5.1	7.2	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ ナデ、ヘラケズリ	
254	63	44	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (壺)	-	-	-	やや 粗	やや 良	オリーブ黒色 5Y3/1 オリーブ黒色 5Y3/1	ナデ、指によるナデ上げ ナデ、ヘラケズリ、粗い ナデ	
255	63	44	3区 C4グリッド	土師器	ミニチュア土器 (壺)	-	-	4.4	やや 精良	やや 良	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	ナデ、ナデ上げ ナデ、ハケ目、粗いナデ	
256	63	44	3区 C4グリッド	土師器	ミニチュア土器 (壺)	-	-	5.4	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	粗いナデ、粗いナデ上げ ヘラナデ、粗いナデ	
257	63	44	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	6.6	5.9	5.0	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、粗いヘラケズリ	
258	63	45	3区 C4グリッド	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	6.1	3.0	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/1 灰白色 10YR8/1	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
259	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	(6.5)	3.4	-	やや 粗	やや 良	褐灰色 10YR6/1 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、粗いナデ	
260	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	(5.8)	3.8	-	やや 粗	やや 良	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、指頭痕	
261	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	4.6	3.2	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/1 灰白色 10YR8/1	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ(不明瞭)、 粗いナデ	
262	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.6~3.8	3.0	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ	
263	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.9	2.9	-	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、板目?	
264	63	45	3区 C3グリッド	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	4.0~4.4	3.5	-	やや 精良	やや 良	橙色 5YR7/6 淡褐色 5YR8/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、指頭痕、粗いナデ	
265	63	45	3区 C3グリッド	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	5.3~5.5	3.8	4.9~5.2	やや 粗	やや 良	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ	
266	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	(7.0)	5.4	4.0	やや 粗	やや 良	浅黄褐色 7.5YR8/3 浅黄褐色 7.5YR8/3	ナデ、粗いナデ ナデ	

No.	挿 図	図 版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
267	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	4.0	3.1	3.1 ~ 3.5	やや 粗	やや 良	浅黄橙色 7.5YR8/3 浅黄橙色 7.5YR8/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、指頭痕、不調整 (板 目あり)	
268	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.0 ~ 3.8	3.6	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/3 にぶい黄橙色 10YR7/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、指頭痕、ナデ上げ	
269	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.7	3.5	-	やや 精良	やや 良	浅黄橙色 7.5YR8/4 浅黄橙色 7.5YR8/4	ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
270	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.5	3.5	-	やや 粗	不良	にぶい橙色 7.5YR7/3 にぶい橙色 5YR7/4	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、不調整	
271	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.2 ~ 3.6	4.0	-	やや 粗	やや 良	褐灰色 7.5YR6/1 褐灰色 7.5YR6/1	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
272	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	(5.4)	5.5	-	やや 粗	やや 良	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄色 2.5Y7/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、不調整	
273	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器	5.4	4.0	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄橙色 10YR7/3 にぶい黄橙色 10YR7/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
274	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	(5.2)	3.7	-	やや 精良	やや 良	橙色 5YR7/6 にぶい黄橙色 10YR7/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、ハケ目	
275	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	5.0 ~ 6.0	4.0	-	やや 粗	やや 良	にぶい橙色 5YR7/4 浅黄橙色 7.5YR8/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、粗いナデ	
276	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	(7.1)	4.4	4.5	やや 粗	やや 良	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 7.5YR8/4	ナデ、ナデ上げ ナデ	内部に滑石製小玉 4個
277	63	45	3区 C3グリッド	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.8 ~ 4.1	4.6	-	やや 粗	やや 良	浅黄褐色 7.5YR8/3 浅黄褐色 7.5YR8/3	ナデ、ナデ上げ ナデ (器面剥落)	
278	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	4.4	4.5	-	やや 粗	やや 良	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ	胎土に植物繊維混 入
279	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	5.0	5.4	-	やや 粗	やや 良	灰黄色 2.5Y4/1 灰黄色 2.5Y4/1	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、刺突	
280	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	6.0	5.2	-	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、粗いナデ	
281	63	45	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器	7.0	6.9	4.0 ~ 5.5	やや 粗	やや 良	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ	
282	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	4.9	3.6	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	器壁薄い
283	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	4.5 ~ 5.0	4.4	-	やや 精良	やや 良	にぶい橙色 7.5YR7/3 にぶい橙色 7.5YR7/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
284	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	5.4	5.2	2.5 ~ 2.6	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ	
285	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (甕)	6.0 ~ 6.2	4.9	2.5 ~ 2.7	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
286	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	6.0 ~ 7.0	4.6	-	やや 粗	やや 良	浅黄褐色 7.5YR8/3 浅黄褐色 7.5YR8/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
287	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.4	4.0	-	やや 精良	やや 良	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	ナデ ナデ	
288	63	46	3区 D4グリッド	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.1	4.0	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ	
289	63	46	3区 C4グリッド	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	4.5	4.3	-	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
290	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (甕)	4.6 ~ 5.0	4.7	-	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	
291	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (甕)	4.2 ~ 4.9	5.9	-	やや 精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ上げ ナデ、ナデ上げ、粗いナ デ	口縁部歪む
292	63	46	3区 C4グリッド	土師器	ミニチュア土器 (高坏)	(6.7)	5.0	3.6	やや 精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ ナデ、指頭痕	
293	63	46	3区 祭祀跡	土師器	ミニチュア土器 (高坏)	(5.3)	3.3	3.0	やや 精良	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3	ナデ、ナデ上げ ナデ、指頭痕	
294	63	46	3区 C4グリッド	土師器	ミニチュア土器 (高杯)	-	-	3.9	やや 粗	やや 良	灰黄色 2.5Y7/2 灰黄色 2.5Y7/2	ナデ上げ、指頭痕 ナデ、指頭痕	
295	63	46	3区 C4グリッド	土師器	ミニチュア土器 (蓋) 土製品	-	2.9	2.4	やや 粗	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ、指頭痕 指頭痕	
302	65	46	3区 西側壁	緑釉陶 器	椀	-	-	(6.5)	精良	やや 良	胎土：灰白色 5Y8/1 釉：オリープ灰色 10Y6/2		
303	65	46	3区 B9グリッド	土師器	椀	(13.3)	5.8	(7.0)	やや 精良	やや 良	灰色 N6/ 灰白色 2.5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ、回転糸切り	内黒
304	65	46	3区 西側壁	土師器	椀	-	-	6.4	精良	やや 良	灰白色 10YR8/1 灰白色 10YR8/1	回転ナデ 回転ナデ、回転糸切り	
305	65	46	3区 A7グ リッド 遺構検出	土師器	皿	8.2	1.5	5.3	やや 粗	不良	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ 回転ナデ、回転糸切り	

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
306	65	46	3区 B7グリッド	土師器	杯	(14.2)	3.6	(7.1)	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	回転ナデ 回転ナデ、回転糸切り	
307	65	46	3区 A8グ リッド 遺構検出	土師器	台付杯	-	-	6.0	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ、回転糸切り	
308	65	46	3区 遺構検出	白磁	碗	(14.4)	-	-	やや 精良	良	胎土：灰白色 N8/ 釉：灰白色 10Y8/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
309	65	46	3区 遺構検出	白磁	碗	(15.9)	-	-	やや 粗	不良	胎土：灰白色 2.5Y8/2 釉：淡黄色 7.5Y8/3	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
310	65	46	3区 遺構検出	白磁	碗	-	-	7.0	精良	良	胎土：灰白色 10Y8/1 釉：灰白色 2.5GY8/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
311	65	47	3区 遺構検出	白磁	碗	-	-	(6.2)	やや 粗	良	胎土：灰白色 N8/ 釉：灰白色 10Y8/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	見込に楠描文
312	65	47	3区 遺構検出	青磁	碗	(15.8)	-	-	やや 粗	やや 良	胎土：明緑灰色 7.5GY8/1 釉：灰白色 7.5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
313	65	47	3区 遺構検出	東播系 須恵器	鉢	-	-	-	やや 粗	やや 良	灰色 N5/ 灰色 N6/	回転ナデ 回転ナデ	
314	65	47	3区 B9グリッド	陶器 (常滑)	甕	-	-	-	やや 粗	良	灰色 N6/ 黄灰色 2.5Y5/1	ヘラケズリ ヘラナデ	外面にスタンプ文
315	66	47	3区 北側壁中央	土師器	鍋	(24.0)	-	-	やや 粗	不良	灰白色 7.5Y8/1 灰白色 7.5Y8/1	ナデ、ハケ目 ナデ、粗いナデ	
316	66	47	3区 壁	土師器	鍋	(24.0)	-	-	やや 精良	不良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ハケ目、ナデ ナデ、ハケ目	
317	66	47	3区 北側壁東側	瓦質土 器	鍋	(24.2)	-	-	やや 粗	やや 良	灰色 N4/ 灰色 N4/	ナデ ナデ、粗いナデ	
318	66	47	3区 中央遺構検 出	土師器	ミニチュア土器 (鉢)	3.6	4.2	-	やや 精良	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ、ナデ上げ ナデ、ナデ (指頭痕あり)	
319	66	47	3区 遺構検出	土師器	ミニチュア土器 (蓋)	-	3.4	(3.3)	やや 粗	やや 良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	ナデ ナデ、ナデ上げ、指頭痕	
322	67	47	4区 SK1	土師器	甕	(13.7)	-	-	やや 粗	やや 良	橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR7/8	ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目	
323	67	47	4区 SP1	土師器	甕	-	[8.9]	(26.0)	やや 精良	やや 良	灰黄色 2.5Y6/2 にぶい黄褐色 10YR5/3	ヘラケズリ ハケ目、ナデ	スス付着
324	67	47	4区 SP2	土師器	甕	-	-	-	やや 粗	やや 良	にぶい橙色 10YR7/3 にぶい橙色 7.5YR7/4	ヘラケズリ ハケ目、ナデ	
325	68	48	遺跡西方 表採	瓦	軒丸瓦	瓦当 (16.2)	[13.3]		精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/3 明黄褐色 10YR7/6	単弁 9葉残存 推定 14~ 16葉	厚さ 2.5
326	68	48	3区 D3グリッド	瓦	軒丸瓦	瓦当 (12.2)	[5.0]		精良	良	灰色 N6/ 灰色 N6/	内区：珠文 外区：菱形変形珠文	厚さ 2.1
327	68	48	3区 C4グリッド	瓦	丸瓦	-	高さ [4.7]	幅 [2.6]	精良	良	灰色 10Y5/1 灰色 10Y6/1	布目 自然釉	厚さ 1.4
328	68	48	4区 西方表採	瓦	丸瓦	-	高さ [3.5]	幅 [2.9]	精良	良	灰色 10Y4/1 灰色 10Y4/1	布目 ナデ	厚さ 2.4
329	68	48	3区 遺物包含層	瓦	平瓦	[7.9]	幅 [10.0]		精良	良	灰色 10Y7/1 灰色 10Y7/1	縄目タタキ 布目	厚さ 2.4
330	68	48	3区 北壁中央	瓦	平瓦	[6.1]	幅 [7.2]		精良	良	灰色 10Y6/1 灰色 10Y6/1	縄目タタキ 布目	厚さ 1.8
331	68	48	3区 中央遺構検 出	瓦	平瓦	[8.1]	幅 [6.2]		やや 精良	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4	縄目タタキ 不明	厚さ 2.2
332	68	48	1区 遺物包含層	瓦	平瓦	[9.4]	幅 [4.9]		やや 精良	良	明黄褐色 10YR7/6 明黄褐色 10YR7/6	不明 縄目タタキ	厚さ 2.0

第5表 本郷遺跡出土石製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	法量 (cm)			最大径	重さ (g)	備考
					長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
233	60	47	2区 遺構検出	滑石製 品	管玉	3.0	-	0.51	1.3	孔径 0.28cm 外面一部に擦痕残る 内外面：緑灰色 7.5GY5/1
296	64	47	3区 C4グリッド	滑石製 模造品	剣形	0.35	[0.26]	0.35	2.8	孔径 0.15cm 外面全面に擦痕 内外面：灰色 7.5Y6/1
297	64	47	3区 祭祀跡 G	滑石製 品	小玉	口径 0.17	器高 0.35	最大径 0.42	-	内面 金属工具による穿孔 外面 金属工具によるケズリ
298	64	47	3区 祭祀跡 35玉-1	滑石製 品	小玉	口径 0.14	器高 0.3	最大径 0.41	-	外面擦痕あり 内外面：暗灰緑色 7.5GY4/1
299	64	47	3区 祭祀跡 35玉-2	滑石製 品	小玉	口径 0.13	器高 0.2	最大径 0.44	-	外面擦痕あり 内外面：暗灰緑色 7.5GY4/1
300	64	47	3区 祭祀跡 35玉-3	滑石製 品	小玉	口径 0.12	器高 0.25	最大径 4.7	-	外面擦痕あり 内外面：灰オリーブ色 7.5Y6/2
301	64	47	3区 祭祀跡 3玉-4	滑石製 品	小玉	口径 0.15	器高 0.32	最大径 0.4	-	外面擦痕あり 内外面：暗灰緑色 7.5GY4/1～灰色 10Y4/1
320	66	47	3区 中央遺構検出	滑石製 品	小玉 (玉-1)	口径 0.15	器高 0.2	最大径 0.58	-	外面擦痕 内外面：緑灰色 10GY5/1
321	66	47	3区 中央遺構検出	滑石製 品	小玉 (玉-2)	口径 0.14	器高 0.3	最大径 [0.6]	-	外面擦痕 内外面：オリーブ灰色 10Y5/2

V 自然科学分析

(株) 加速器分析研究所

1 はじめに

本郷山崎遺跡・本郷遺跡は、山口県長門市油谷向津具下地内に所在する。

本郷山崎遺跡から採取された試料の自然科学分析として、炭化材の AMS 法による放射性炭素年代測定、炭化材の樹種同定、土壌サンプルから検出された種実の同定、花粉分析、プラントオパール（植物珪酸体）分析を実施した。

本郷遺跡から採取された試料の自然科学分析として、炭化材の AMS 法による放射性炭素年代測定を実施した。

以下、分析方法や結果について分析項目別に報告する。

2 炭化材の AMS 法による放射性炭素年代測定

(1) 試料

測定対象試料は、本郷山崎遺跡の大溝（SD1）から出土した炭化材 2 点と土坑（SK1）から出土した炭化材 1 点の 3 点、本郷遺跡の土器付着炭化物 1 点、炭化材 1 点、種子 1 点の 3 点、合計 6 点である（第 6 表）。本郷山崎遺跡大溝の試料① AMS-1 は上層、試料① AMS-2 は下層、土坑の試料① AMS-3 は下層から出土している。

(2) 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 6 表に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO²) を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

(6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (第 6 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 6 表に、補正していない値を参考値として第 7 表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第 9 表に、補正していない値を参考値として第 7 表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 7 表に示した。暦年較正年代は、C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(5) 測定結果

本郷山崎遺跡・本郷遺跡の分析試料の測定結果を第 6・7 表に示す。

本郷山崎遺跡の試料の ^{14}C 年代は、① AMS-1 が $2750 \pm 20\text{yrBP}$ 、① AMS-2 が $2910 \pm 20\text{yrBP}$ 、① AMS-3 が $2840 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、① AMS-1 が 915 ~ 845cal BC の間に 2 つの範囲、① AMS-2 が 1127 ~ 1048cal BC の範囲、① AMS-3 が 1041 ~ 943cal BC の間に 2 つの範囲でそれぞれ示される。おおむね縄文時代晩期前葉から中葉頃に相当する (小林 2009、2017、小林編 2008)。

なお、いずれの試料も炭化材と観察されたことから、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる (古木効果)。今回測定された 3 点の試料は樹皮が確認されていないこ

第6表 放射性炭素年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-181115	①AMS-1	遺構:2区 SD1 層位:上層	炭化材	AaA	-26.29 ± 0.22	2,750 ± 20	71.00 ± 0.19
IAAA-181116	①AMS-2	遺構:2区 SD1 層位:下層	炭化材	AAA	-29.24 ± 0.21	2,910 ± 20	69.61 ± 0.19
IAAA-181117	①AMS-3	遺構:2区 SK1 層位:下層	炭化材	AAA	-30.43 ± 0.22	2,840 ± 20	70.18 ± 0.20

[IAA 登録番号 : #9247]

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-181331	②AMS-4	2区 SP54	土器附着 炭化物	AaA	-26.15 ± 0.24	1,620 ± 20	81.79 ± 0.22
IAAA-181332	②AMS-5	2区 SP87 土器内	炭化材	AAA	-26.27 ± 0.22	1,760 ± 20	80.32 ± 0.22
IAAA-181333	②AMS-6	3区 C4 グリッド	種子	AAA	-27.78 ± 0.22	1,250 ± 20	85.55 ± 0.24

[IAA 登録番号 : #9291]

第7表 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-181115	2,770 ± 20	70.82 ± 0.19	2,750 ± 21	915calBC - 891calBC (29.2%) 880calBC - 845calBC (39.0%)	969calBC - 962calBC (1.5%) 934calBC - 832calBC (93.9%)
IAAA-181116	2,980 ± 20	69.01 ± 0.19	2,909 ± 21	1127calBC - 1048calBC (68.2%)	1193calBC - 1143calBC (15.9%) 1132calBC - 1017calBC (79.5%)
IAAA-181117	2,930 ± 20	69.40 ± 0.19	2,844 ± 22	1041calBC - 974calBC (59.1%) 955calBC - 943calBC (9.1%)	1084calBC - 1064calBC (2.6%) 1058calBC - 923calBC (92.8%)

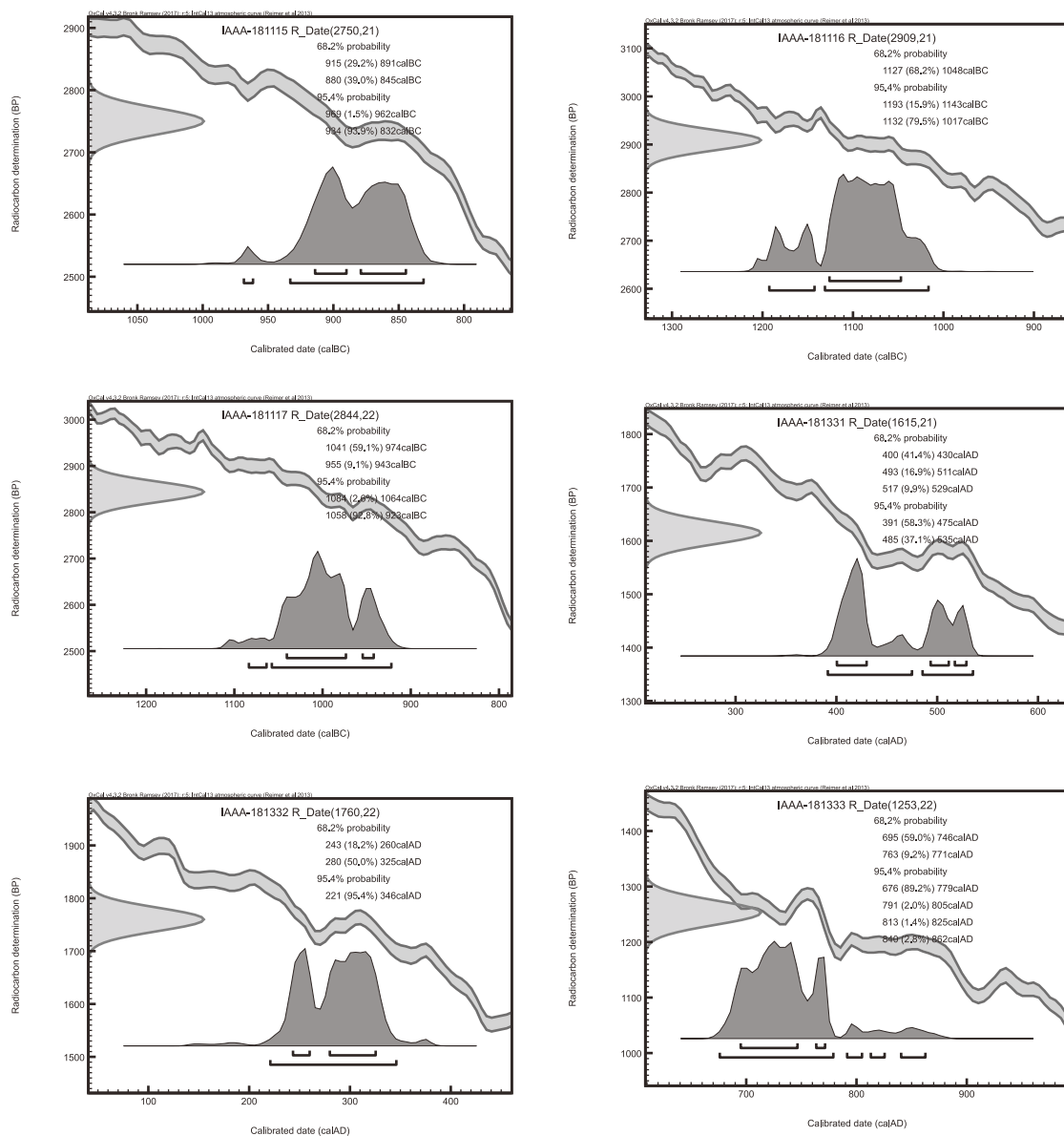
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-181331	1,630 ± 20	81.59 ± 0.22	1,615 ± 21	400calAD - 430calAD (41.4%) 493calAD - 511calAD (16.9%) 517calAD - 529calAD (9.9%)	391calAD - 475calAD (58.3%) 485calAD - 535calAD (37.1%)
IAAA-181332	1,780 ± 20	80.11 ± 0.22	1,760 ± 22	243calAD - 260calAD (18.2%) 280calAD - 325calAD (50.0%)	221calAD - 346calAD (95.4%)
IAAA-181333	1,300 ± 20	85.06 ± 0.24	1,253 ± 22	695calAD - 746calAD (59.0%) 763calAD - 771calAD (9.2%)	676calAD - 779calAD (89.2%) 791calAD - 805calAD (2.0%) 813calAD - 825calAD (1.4%) 840calAD - 862calAD (2.8%)

[参考値]

とから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は① AMS-1 が 68%、① AMS-2 が 78%、① AMS-3 が 60%のいずれも適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

本郷遺跡の② AMS-4 土器附着炭化物試料の ^{14}C 年代は $1620 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は 400 ~ 529cal AD の間に 3 つの範囲で示され 5 世紀から 6 世紀頃の年代値となった。② AMS-5 炭化材の ^{14}C 年代は $1760 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は 243 ~ 325cal AD の間に 2 つの範囲で示され、3 世紀から 4 世紀頃の年代値となった。② AMS-6 種子の ^{14}C 年代は $1250 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は、695 ~ 771cal AD の間に 2 つの範囲で示され、7 世紀末から 8 世紀頃の年代値となった。



第 69 図 暦年較正年代グラフ (参考)

なお、今回測定された炭化材試料が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾寄 2009、坂本 2010 など)。その日本産樹木のデータを用いてこの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

3 炭化材の樹種同定

(1) 試料

樹種同定の試料は、大溝 (SD1) から出土した炭化材2点と土坑 (SK1) から出土した炭化材1点の合計3点である(第8表)。大溝の試料②樹種-1は上層、試料②樹種-2は下層、土坑の試料②樹種-3は上層から出土している。なお、SK1の試料は、当初下層より採取された炭化材1点を対象としたが、この試料は樹皮であったため、上層より採取された代替試料の同定を行った。下層の樹皮試料についても所見を記す。

(2) 分析方法

試料を割り折りして新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柁目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の断面を作製し、落射顕微鏡(OPTIPHOTO-2:Nikon)によって50～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

第8表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を第72図に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Endl. ヒノキ科 (②樹種-2 SD1 下層)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 (②樹種-3 SK1 上層)

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

3) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 (②樹種-1 SD1 上層)

小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に2～数個複合して密に散在する散孔材であ

第8表 樹種同定結果

試料名	遺構名	層位	結果(学名/和名)
②樹種-1	2区 SD1	上層	<i>Aesculus turbinata</i> Blume トチノキ
②樹種-2	2区 SD1	下層	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
		下層	bark 樹皮
②樹種-3	2区 SK1	上層	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ

る。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなる単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。放射断面では放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。

4) 樹皮 bark (②樹種-3 の元試料 SK1 下層)

暗褐色を呈し、やや赤みを帯び、肌目が横に伸びる。

以上の特徴からサクラ属、カバノキ属などに類似するが、不明瞭な点が多く同定には至らなかった。

(4) 考察

同定の結果、本郷山崎遺跡の炭化材は、ヒノキ1点、クリ1点、トチノキ1点、および樹皮1点であった。

ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高く、心材は耐朽・耐湿性が高い。加工工作が容易で、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。また表面仕上がりがきわめて良好で、光沢が出る。山口県の長登銅山跡（古墳時代末期から平安時代初期）では木簡、札、形代、髪飾りなどにヒノキの同定例が見られる（伊藤・山田2012）。

クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。重硬で耐朽性が高く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材である。現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、ほだ木など広く用いられる。

トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は耐朽性、保存性が低いが、軟らかく緻密であり、容器などに用いられる。山口県では挽物の椀に用いられることが多いようである。

ヒノキ、クリ、トチノキはいずれも温帯に広く分布する樹種である。またヒノキは適潤性であるが乾燥した土壌にも耐え、尾根、急峻地または岩盤上にもよく生育する。クリは乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。トチノキは谷沿いなどの湿潤地を好んで生育する。これらの樹木は当時遺跡周辺にも生育する樹木であり、遺跡周辺からか、また流通によって近隣地域よりもたらされたと推定される。

4 種実同定

(1) 試料

分析試料は、2区の大溝SD1上層から採取された土壌1点（試料③-1）、2区SK1の上層より採取された土壌1点（試料③-2）、SK2上層より採取された土壌1点（試料③-3）の計3点である。

(2) 分析方法

試料（土壌）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 試料試料③-1は500cm³、③-2・3は200cm³に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(3) 結果

試料③-1 は炭化材片などは複数確認できるが種実には検出されなかった。試料となった土壤に本来種実が含まれていなかったか、種実などの有機質遺体が分解される堆積環境であったと考えられる。

(1) 分類群

樹木 15、草本 3 の計 17 分類群が同定される。学名、和名および粒数を第 9 表に示し、主要な分類群を第 73 図に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima 果皮 ブナ科

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 果皮 ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、殻斗壁が厚い。

コナラ属 *Quercus* 果皮 (破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

カジノキ *Broussonetia papyrifera* Vent. 種子 (完形・破片) クワ科

黄褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面にはいぼ状の隆起がある。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

クスノキ *Cinnamomum camphora* S. 種子 (完形・破片) クスノキ科

黒褐色で球形を呈す。一条の稜線が走りその中央が突起する。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* 核バラ科

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

キイチゴ属 *Rubus* 核バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* S. et Z. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 (破片) トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

モチノキ *Ilex integra* Thunb. 種子 (破片) モチノキ科

種子は浅赤黄色で楕円形を呈し、V字状の溝があり、縁は鋭く、光沢はない。鋭い隆条や凹凸が多く、粗面。

サカキ *Cleyara japonica* Thunb. 種子 ツバキ科

広卵状円形、円形、楕円形などを呈する。へその一端近くは嘴状。側面は狭倒卵形、倒卵形、長

楕円形（やや両凸レンズ状）である。種皮は平滑で表皮下に楕円状の網目模様が見られる。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. 種子 ツバキ科

種子は心臟形を呈する。背面は長楕円状・狭三角形など種々な形がある。どの形もへその方に薄い。へそを中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* 種子 クマツヅラ科

淡褐色で楕円形や狭楕円形を呈し、側面は三日月形で背面は丸みがあり、腹面方向に湾曲する。腹面の縁は薄く、一段高く隆起し、その中央にへそがある。背面は平滑で、腹面は粗面。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核 スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

[草本]

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

アブラナ科 Cruciferae 種子

茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。

(2) 種実群集の特徴

1) SK1 上層：③-2

樹木種実のコナラ属アカガシ亜属 1、コナラ属破片 85、カジノキ 136、破片 38、ヤマグワ 6、クスノキ 1、破片 8、サクラ属サクラ節 1、キイチゴ属 3、カラスザンショウ 2、アカメガシワ破片 2、モチノキ破片 1、サカキ 1、ヒサカキ 11、ムラサキシキブ属 1、ニワトコ 4、草本種実のカヤツリグサ科 1、タデ属 1、アブラナ科 1 が検出された。

2) SK2 上層：③-3

樹木種実のスダジイ 1、コナラ属破片 74、カジノキ 52、破片 16、ヤマグワ 2、サクラ属サクラ節 1、キイチゴ属 2、ヒサカキ 3、ムラサキシキブ属 2 が検出された。

(4) 考察

1) SK1 上層：③-2

樹木種実のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属は一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、クスノキは温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。カジノキ、ヤマグワは陽樹で適潤地を好み、サクラ属サクラ節は排水の良い斜面地に分布する。

キイチゴ属は暖地の山地や丘陵の木陰に生える常緑小低木である。またカラスザンショウ、アカメガシワ、ニワトコ、ムラサキシキブ属は林縁を好み、カラスザンショウ、アカメガシワ、ニワトコは二次林種であり、モチノキは温帯を中心に広く分布する落葉または常緑広葉樹である。サカキ、ヒサカキは温帯に広く分布する。草本種実のカヤツリグサ科、タデ属、アブラナ科は日当たりの良い乾燥地に生育する。

第9表 種実同定結果

分類群		部位	③-2	③-3
学名	和名		SK1 上層	SK2 上層
Arbor	樹木			
<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ	果皮		1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	果皮	1	
<i>Quercus</i>	コナラ属	果皮(破片)	85	74
<i>Broussonetia papyrifera</i> Vent.	カジノキ	種子	136	52
		(破片)	38	16
<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマグワ	種子	6	2
<i>Cinnamomum camphora</i> S.	クスノキ	種子	1	
		(破片)	8	
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>	サクラ属サクラ節	核	1	1
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	3	2
<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> S. et Z.	カラスザンショウ	種子	2	
<i>Mallotus japonicus</i> Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子(破片)	2	1
<i>Ilex integra</i> Thunb.	モチノキ	種子(破片)	1	
<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	種子	1	
<i>Eurya japonica</i> Thunb.	ヒサカキ	種子	11	3
<i>Callicarpa</i>	ムラサキシキブ属	種子	1	2
<i>Sambucus sieboldiana</i> Blume ex graedn	ニワトコ	核	4	
Herb	草本			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
Cruciferae	アブラナ科	種子	1	
Total	合計		304	154

(200cm³中0.25mm篩)

2) SK2 上層 : ③-3

樹木種実のスダジイは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。SK1 同様にカジノキ、ヤマグワは陽樹で適潤地を好み、サクラ属サクラ節は排水の良い斜面地に分布する。キイチゴ属は暖地の山地や丘陵の木陰に生える常緑小低木である。ヒサカキは、温帯に広く分布する。ムラサキシキブ属は林縁を好む。

5 花粉分析

(1) 試料

分析試料は、2区の大溝SD 1上層から採取された土壌1点(試料③-1)、2区SK1の上層より採取された土壌1点(試料③-2)、SK2上層より採取された土壌1点(試料③-3)の計3点である。

(2) 分析方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す

6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理

7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

（3）結果

（1）分類群

試料③-1 で出現した分類群は、樹木花粉 14、草本花粉 8、シダ植物孢子 2 形態の計 24 である。これらの学名と和名および粒数を第 10 表に示し、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 70 図に示す。なお、主要な分類群は顕微鏡写真を第 74 図に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。また、参考のため珪藻分析を実施した。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ノグルミ、ハシバミ属、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、ムクロジ属、グミ属

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、セリ亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

試料③-2、③-3 で出現した分類群は、樹木花粉 24、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、草本花粉 4、シダ植物孢子 2 形態の計 31 である。これらの学名と和名および粒数を第 10 表に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 70 図に示す。なお、主要な分類群は顕微鏡写真を第 74 図に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。また、参考のため珪藻分析を追加したが、これも検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ハンノキ属、

カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ、アカメガシワ、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、グミ属、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、ギシギシ属、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

1) 2 区の SD 1 (試料③-1) において、花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する (第 74 図)。

出現した分類群は少ないが、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、85%を占める。シイ属が高率に出現し、ついでクリの出現率が高く、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属が低率に伴われる。草本花粉では、イネ科 (イネ属型を含む)、セリ亜科、ヨモギ属が出現する。また、珪藻の破片 1 が検出された。

2) SK1 上層 : ③-2

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、98%を占める。樹木花粉では、シイ属が高率に出現し、コナラ属アカガシ亜属が伴われる。他にマツ属複維管束亜属、ハシバミ属、クリ、エノキ属ームクノキが低率に出現する。草本花粉はほとんど検出されず、イネ科、ギシギシ属、ヨモギ属が極わずかに出現するのみである。参考に行った珪藻分析では、密度が低く珪藻は検出されなかった。

3) SK2 上層 : ③-3

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、94%を占める。樹木花粉では、シイ属が高率に出現し、コナラ属コナラ亜属が伴われる。他にマツ属複維管束亜属、スギ、クリ、ハシバミ属が低率に出現する。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属がわずかに出現する。参考に行った珪藻分析では、密度が低く珪藻は検出されなかった。

(4) 考察

1) SD 1 上層 : 試料③-1

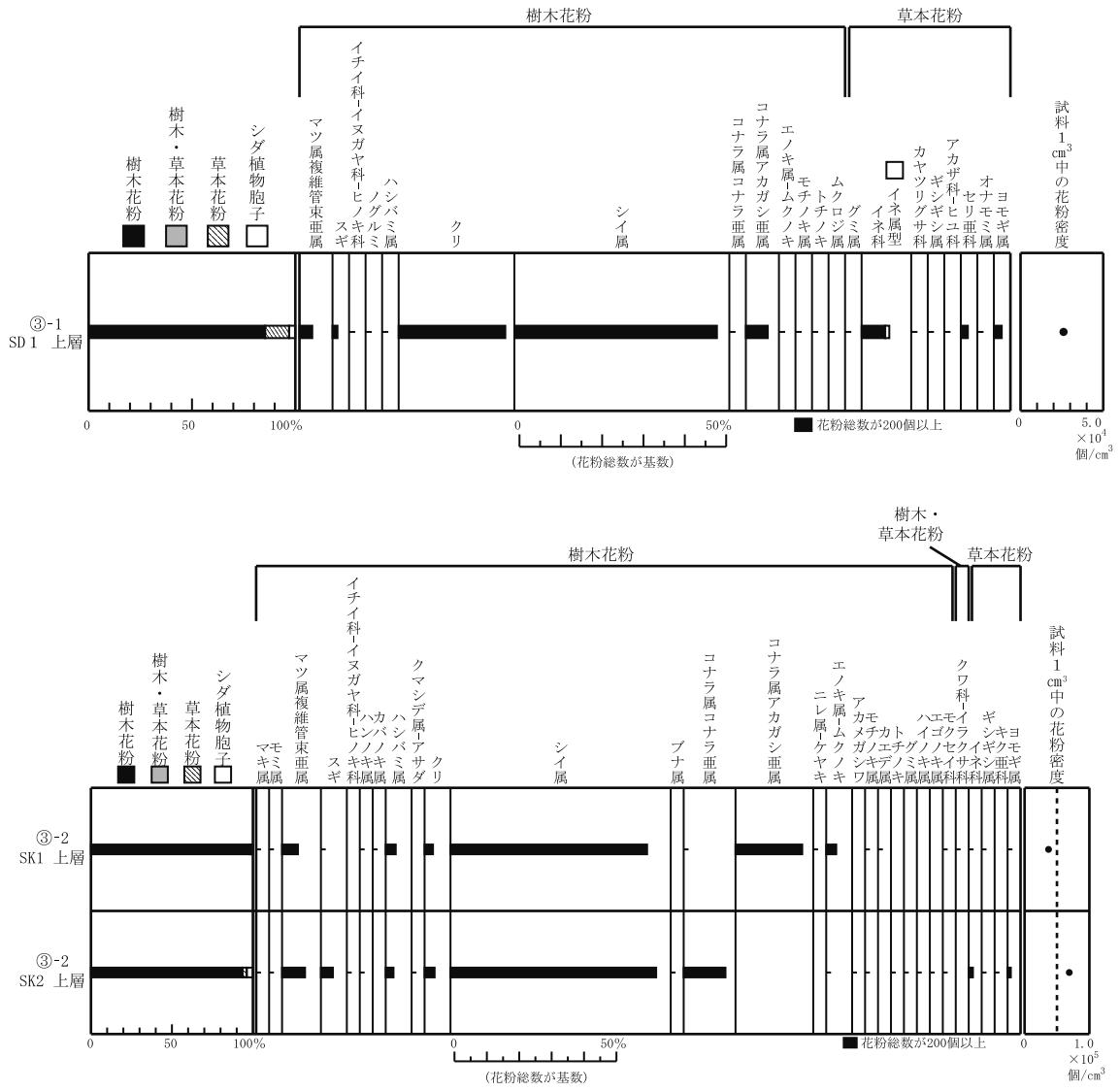
樹木花粉の占める割合が高く、周辺には、シイ属を主としコナラ属アカガシ亜属を要素とする照葉樹林が分布していたとみなされる。周囲には乾燥を好むクリ林が分布する。比率は低いがいネ科にはイネ属型が伴われる。珪藻の密度が極めて低く、珪藻の生育できない乾燥した環境や短期間に乾湿を繰り返す不安定な環境だった可能性がある。

2) SK1 上層 : ③-2

樹木花粉の占める割合が極めて高く、堆積地はほとんど草本が分布していない森林の状態であったと推定され、シイ属を主要素とし、コナラ属アカガシ亜属を構成要素とする照葉樹林が分布していたとみなされる。他に低率に出現するハシバミ属、クリ、エノキ属ームクノキは二次林要素であり、照葉樹林の構成要素であったと考えられる。やや遠方にはマツ林 (マツ属複維管束亜属) の分布も

第 10 表 花粉分析結果

分類群		③-1	③-2	③-3
学名	和名	SD1 上層	SK1 上層	SK2 上層
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Podocarpus</i>	マキ属		1	1
<i>Abies</i>	モミ属		1	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	13	19	27
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	5	3	14
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1		2
<i>Platycarya strobilacea</i>	ノグルミ	1		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		1	1
<i>Betula</i>	カバノキ属		1	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	12	9
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	108	10	12
<i>Castanopsis</i>	シイ属	205	233	242
<i>Fagus</i>	ブナ属			1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	2	2	49
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	22	79	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	3	12	3
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ			1
<i>Ilex</i>	モチノキ属	1	2	1
<i>Acer</i>	カエデ属		1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	2		1
<i>Sapindus</i>	ムクロジ属	3		
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	1		1
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属			1
<i>Styrax</i>	エゴノキ属			1
Oleaceae	モクセイ科		1	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		2	
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	24	1	5
<i>Oryza type</i>	イネ属型	4		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1		
<i>Rumex</i>	ギンギン属	1	1	1
Asteroidae	キク亜科			1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3		
Apioidae	セリ亜科	7		
<i>Xanthium</i>	オナモミ	2		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	8	1	4
Fern spore	シダ植物孢子			
Monolate type spore	単条溝孢子	9	1	11
Trilate type spore	三条溝孢子	4	2	4
Arboreal pollen	樹木花粉	368	379	371
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	2	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	50	3	11
Total pollen	花粉総数	418	384	382
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	2.6	3.7	6.9
		×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉	4	8	9
Fern spore	シダ植物孢子	13	3	15
Parasite eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(++)	(<+)	(<+)
微細植物遺体(Charcoal・woods fragments)	(×10 ⁵)			
未分解遺体片		0.7	1.8	5.2
分解質遺体片		63.9	2.7	1.0
炭化遺体片(微粒炭)		0.4	0.0	0.0



第 70 図 花粉分析ダイアグラム

想定される。

3) SK2 上層：③-3

SK1 同様シイ属を主要素とする照葉樹林が分布しているとみなされるが、コナラ属コナラ亜属のナラ林が混在する。地域的な森林要素として二次林のマツ属複維管束亜属、スギ林が分布する。草本はわずかで土坑周囲にイネ科、ヨモギ属の陽当たりの良い乾燥した環境を好む草本が生育していたと考えられる。

6 プラントオパール分析

(1) 試料

分析試料は、2区の大溝SD 1上層から採取された土壌1点(試料③-1)、2区SK1の上層より採取された土壌1点(試料③-2)、SK2上層より採取された土壌1点(試料③-3)の計3点である。

(2) 分析方法

プラントオパール(植物珪酸体)の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

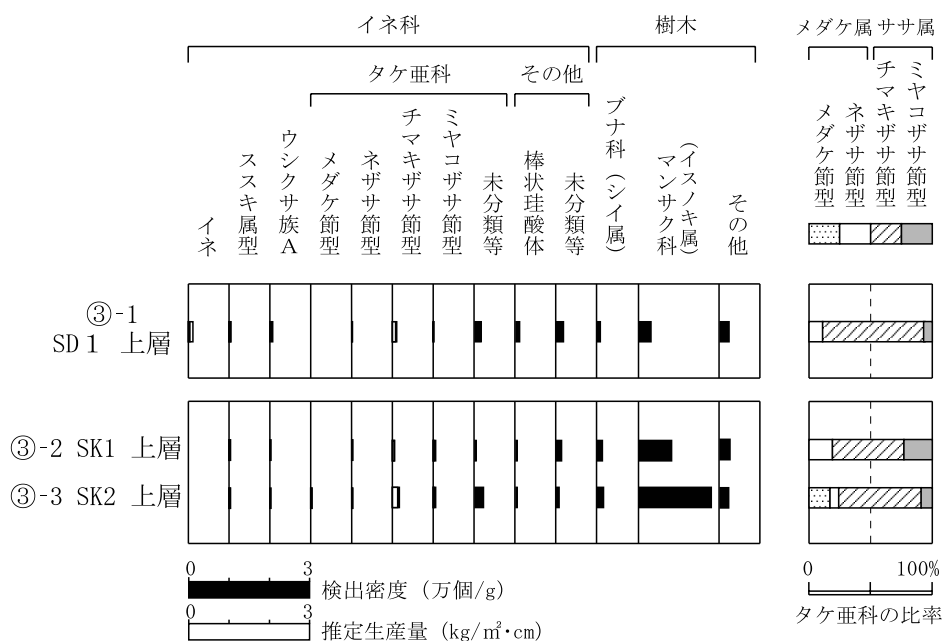
(3) 結果

(1) 分類群

試料③-1で検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第11表および第71図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を第75図に示す。

[イネ科]

イネ、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)



第 71 図 珪酸体分析結果

第 11 表 珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料		
		③-1 SD 1	③-2 SK1 上層	③-3 SK2 上層
イネ科	Gramineae			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	4		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	4	3	3
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type	7	3	3
タケ亜科	Bambusoideae			
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>			3
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	2	3	3
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	11	6	18
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	2	6	6
未分類等	Others	15	3	21
その他のイネ科	Others			
棒状珪酸体	Rodshaped	9	3	3
未分類等	Others	17	12	6
樹木起源	Arboreal			
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	7	12	15
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	28	79	177
その他	Others	22	24	21
植物珪酸体総数	Total	128	156	277

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.13		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.05	0.04	0.04
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>			0.03
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.01	0.01	0.01
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.08	0.05	0.13
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.01	0.02	0.02

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>			17
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	11	19	7
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	83	58	67
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	7	23	9
メダケ率	Medake ratio	11	19	24

〔イネ科－タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、その他

試料③-2・3で検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第11表および第71図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を第75図に示す。

〔イネ科〕

ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、その他

（2）植物珪酸体の検出状況

試料③-1では、イネ科、イネ、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。樹木では、ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、これらも少量である。イネが検出されたが、その密度は400個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g（状況により3,000個/gとする場合もある）を下回っている。

SK1（上層:③-2）とSK2（上層:③-3）では、イネ科ではススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。樹木では、マンサク科（イスノキ属）が比較的多く、とくにSK2（上層:③-3）では密度が17,700個/gと高い値である。また、ブナ科（シイ属）なども認められた。

（4）考察

SD 1（試料③-1）では、少量ながらイネが検出された。このことから、当時は周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で大溝内にイネの植物珪酸体が混入した可能性がある。また、ここで検出されたイネについては、周辺で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。

当時の遺構周辺は、少量ながらススキ属、ウシクサ族、竹笹類などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、イスノキ属などの樹木（照葉樹）が分布していたと推定される。

SK1（上層：③-2）とSK2（上層：③-3）の土壌の堆積当時は、少量ながらススキ属、ウシクサ族、竹笹類などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺には樹木（照葉樹）のイスノキ属をはじめシイ属なども分布していたと推定される。

7 まとめ

本郷山崎遺跡の2区SD1上層（試料③-1）で種実同定、花粉分析、植物珪酸体分析、珪藻分析を行った結果、周辺にはシイ属の照葉樹およびクリ林が分布していた。シイ属もクリも乾燥を好み二次林を形成する樹種でもあり、周囲で活発な人間活動が行われていた可能性がある。他にコナラ属アカガシ亜属やイスノキ属などの照葉樹も分布する。また、周囲にはススキ属、ウシクサ族、竹笹類などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境も分布し、周辺地域には水田が存在した可能性がある。

SD1上層の環境としては、花粉分析および植物珪酸体分析で水生植物の出現はなく、種実および珪藻が検出されないことから分解が示唆されるため、やや乾燥した環境や短期間に乾湿を繰り返す環境が考えられる。常時は滞水がなく、短期間の流水（人為的な引水を含む）などの可能性が考えられる。

本郷山崎遺跡における樹種同定の結果、SD1の上層でトチノキ、下層でヒノキ、SK1上層でクリが検出された。いずれも温帯域に生育する落葉広葉樹と針葉樹である。

SK1上層とSK2上層の各植物遺体群集は類似し、シイ属を中心にイスノキ属、コナラ属アカガシ亜属、クスノキの照葉樹林の分布が示唆された。また、カジノキ属やヒサカキ、ニワトコ、アカメガシワなど二次林およびススキ属、ウシクサ族、竹笹類などの二次植生も、大きくはないが分布していたと考えられる。

引用参考文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, 15-29

藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, 73-85

伊東隆夫・山田昌久 2012 木の考古学 出土木製品用材データベース。海青社。

- 笠原安夫 1985 日本雑草図説, 養賢堂, 494p
- 笠原安夫 1988 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, 131-139
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林謙一 2017 縄文時代の実年代 —土器型式編年と炭素14年代—, 同成社
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- 中村純 1967 花粉分析. 古今書院, 82-102
- 中村純 1977 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, 21-30
- 中村純 1980 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p
- 佐伯浩・原田浩 1985 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, 20-48
- 佐伯浩・原田浩 1985 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, 49-100
- 島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
- 杉山真二 1999 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38(2), 109-123
- 杉山真二 2000 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, 189-213
- 杉山真二 2009 植物珪酸体と古生態. 人と植物の関わりあい④. 大地と森の中で—縄文時代の古生態系—. 縄文の考古学Ⅲ. 小杉康ほか編. 同成社, 105-114
- 杉山真二・藤原宏志 1986 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, 69-84



横断面
ヒノキ SD1下層

0.1mm



放射断面

0.1mm



接線断面

0.1mm



横断面
クリ SK1上層

0.1mm



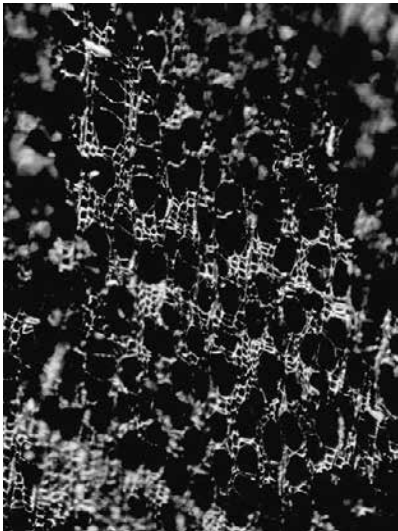
放射断面

0.1mm



接線断面

0.1mm



横断面
トチノキ SD1上層

0.1mm



放射断面

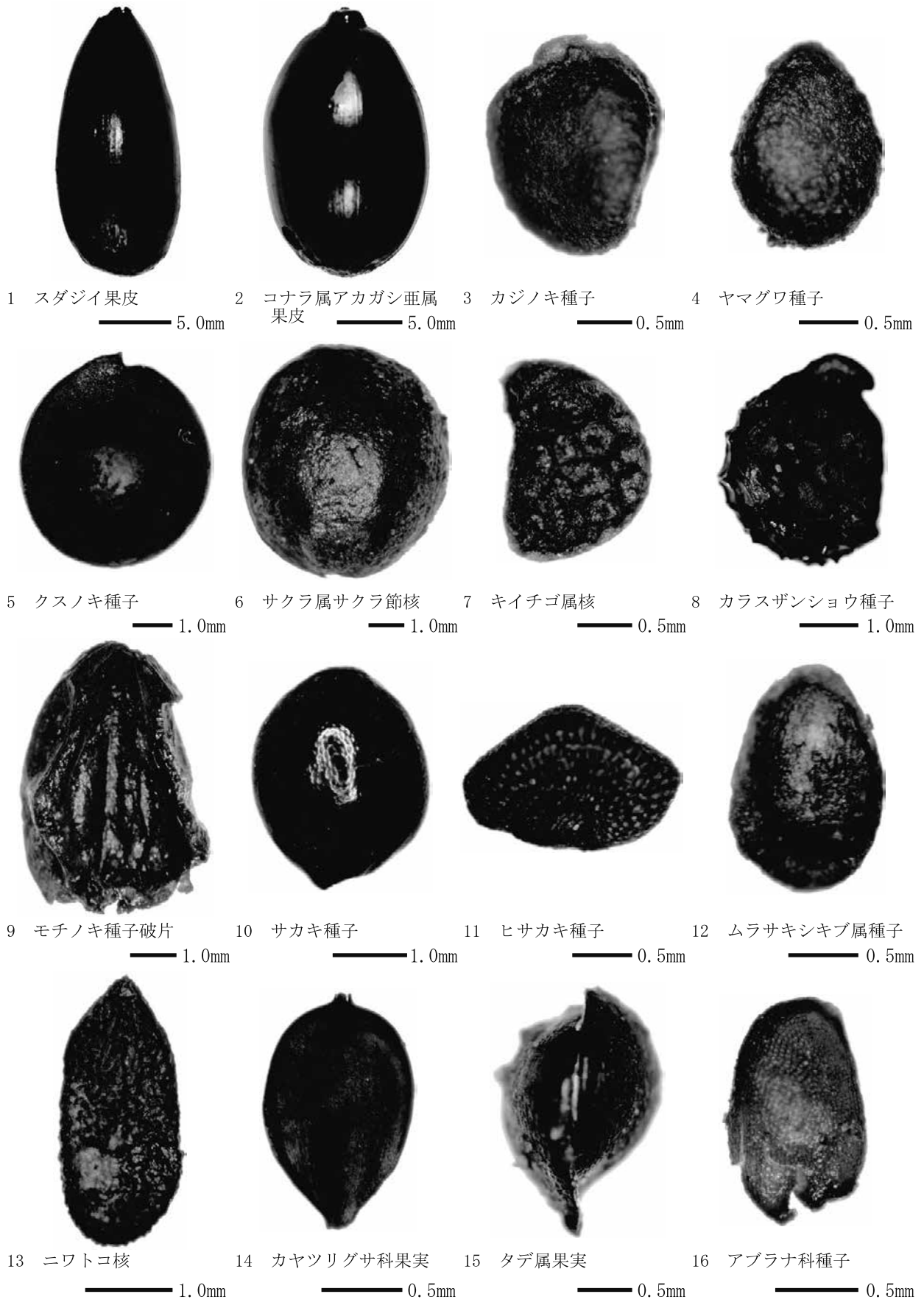
0.1mm



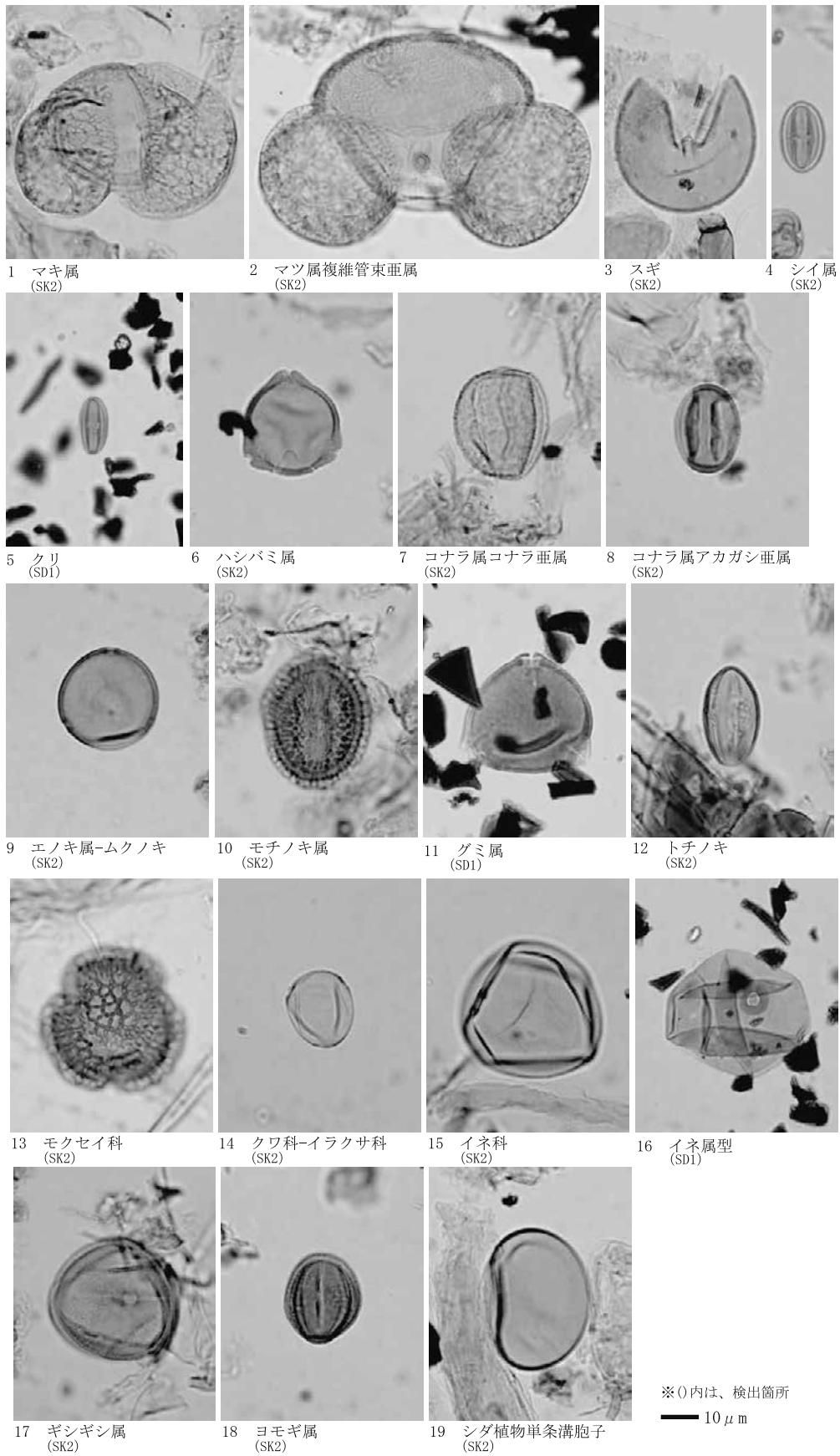
接線断面

0.1mm

第 72 図 本郷山崎遺跡の木材



第 73 図 本郷山崎遺跡の種実



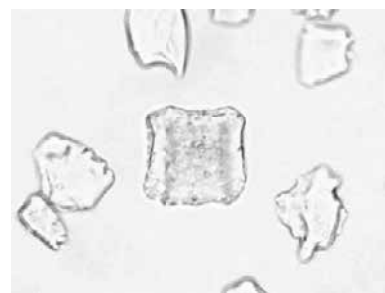
第 74 図 本郷山崎遺跡の花粉



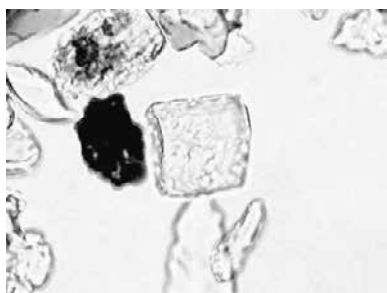
イネ
SD1



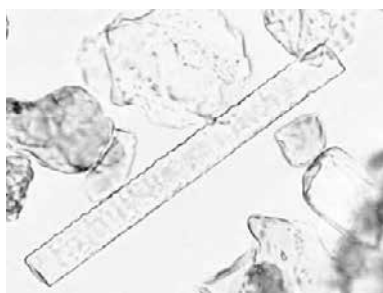
ススキ属型
SD1



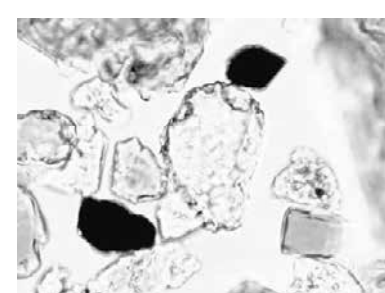
ウシクサ族A
SD1



ウシクサ族A
SD1



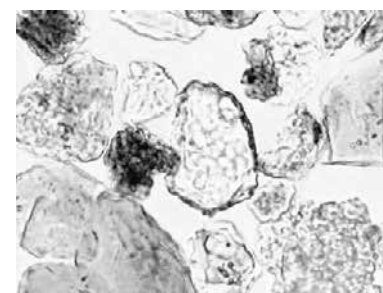
棒状珪酸体
SD1



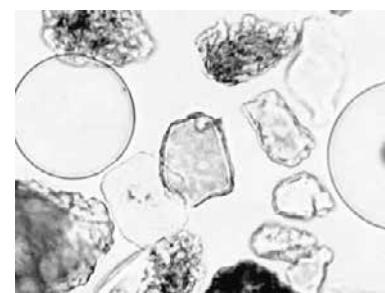
メダケ節型
SK2



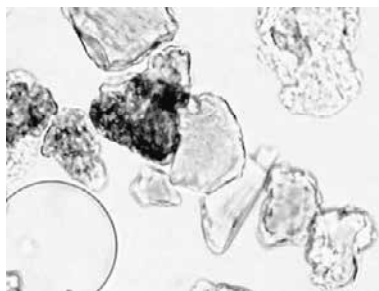
ネザサ節型
SK2



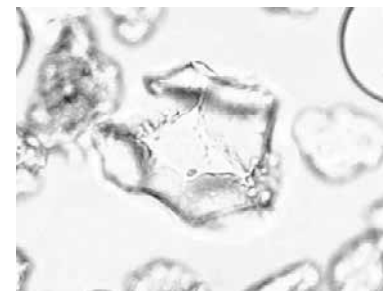
チマキザサ節型
SK2



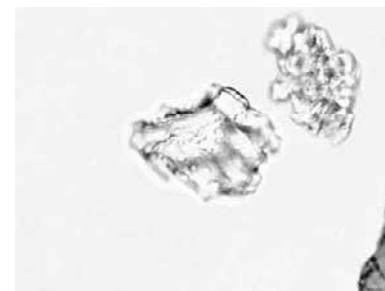
ミヤコザサ節型
SK2



ミヤコザサ節型
SK2



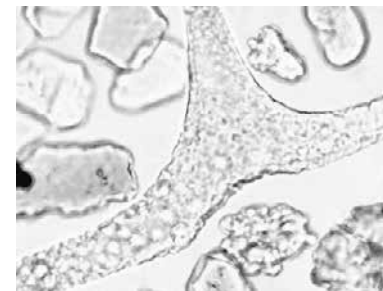
ブナ科 (シイ属)
SK1



ブナ科 (シイ属)
SK1



マンサク科 (イスノキ属)
SK1



マンサク科 (イスノキ属)
SK2

50 μm

第 75 図 本郷山崎遺跡の植物珪酸体

VI 総括

平成 29 年度は本郷山崎遺跡 (4,088 m²)、30 年度は本郷遺跡 (2,785 m²) の 2 遺跡において、合計 6,873 m² の調査を実施した。その結果、縄文時代晩期から弥生時代前期、古墳時代後期、奈良・平安時代から中世に至る多くの遺構・遺物を検出した。

本郷山崎遺跡では、2 区で検出された大溝 (SD1)、1・2 区で検出された谷 (SX 1) などから、縄文時代晩期から弥生時代前期前半の土器、石器類が多量に出土した。

本郷遺跡では、古墳時代後期の集落跡と、湿地を利用した祭祀跡が検出された。

ここでは、本郷山崎遺跡・本郷遺跡の調査成果をまとめ、得られた成果について述べてみたい。

1 本郷山崎遺跡

1 区では弥生時代の溝・土坑・谷・柱穴、中世以降の土坑・柱穴、2 区では弥生時代の大溝 (以下、SD 1・大溝とは 2 区 SD 1 を指す)、奈良時代以降の土坑群、3 区では遺物包含層、4 区では中世の掘立柱建物 5 棟、柱穴など、弥生時代前期 (大溝・谷)、奈良・平安時代から中世 (土坑・柱穴など) までの幅広い時代の遺構が検出された。遺構の分布は、弥生時代前期前半の遺構は、2 区大溝 (SD 1)、その底面から検出された土坑 3 基 (SD 1～3)、1・2 区にまたがって検出された谷 (SX1)、1 区で検出された土坑 2 基である。弥生時代前期前半は 1・2 区と東側に分布し、遺物の出土についても、それらの遺構からのものが大半を占める。奈良時代以降の遺構は調査区全域にわたって検出されている。

弥生時代前期前半の遺構は、調査区東側の 1・2 区で検出されている (第 76 図)。なかでも、2 区を南北に縦断する大溝 (SD1) が注目される。南北長約 26m、東西幅約 5.2m、深さ約 85 cm の大型の溝で、底は幅約 4 m を測り、底面は平坦で、底面標高は南へ緩やかに傾斜して調査区外に至る。調査区南約 90 m に現在の本郷川が流れていることから、環濠といった防衛用途ではなく、本郷川へ向かう灌漑用と想定される。

大溝の埋土は上下 2 層に大別され、上層からは弥生時代前期前半、なかでも北部九州の影響の強い土器 (板付Ⅱ a 式併行) が多量に出土した。下層には縄文時代の晩期を中心に、突帯文土器などが多く出土している。また、土器以外の収穫具である石包丁や漁具の石錘、大陸系磨製石器類などの石器類も多量に出土した。

大溝 (SD 1) の底部で検出された 3 基の土坑 (SK1～3) は、いずれも多量のドングリを含んでいた。大溝の底部に設けられ、流水によってドングリのアクを抜くための貯蔵施設と考えられる。

1 区西端と 2 区東端では、谷 (SX 1) が検出された。谷の埋土からは弥生時代前期の土器が多量に出土し、大溝と同時期の弥生時代前期に埋まったものと考えられる。

1 区で検出された長軸約 2 m を測る隅丸方形の 2 基の土坑 (SK1・2) は、前述の谷 (SX1) の北側に位置する。弥生時代前期の土器が出土していることから、同時代のものと考えられるが、用途は不

明である。

大溝とその底部から検出された土坑（SK1）については、その土壌から放射性炭素年代測定、樹種同定、種実同定、花粉分析、プラントオパール分析などの自然科学の分析をおこなった（詳細は第V章参照）。その結果、放射性炭素年代測定では、 ^{14}C 年代は、SD1上層が $2750 \pm 20\text{yrBP}$ 、SD1下層が $2910 \pm 20\text{yrBP}$ 、SK1が $2840 \pm 20\text{yrBP}$ という数値が得られた。暦年較正年代（ 1σ ）は、SD1上層が915～845cal BCの間に2つの範囲、SD1下層が1127～1048cal BCの範囲、SK1が1041～943cal BCの間に2つの範囲でそれぞれ示される。おおむね縄文時代晩期前葉から中葉頃に相当するという分析結果で、弥生時代前期よりもやや古めの年代を示している。

また、年代が新しい順に並べると、SD1上層→SK1→SD1下層となり、溝下層よりも、さらに底面から検出された土坑に含まれる炭化材が新しいものである、といった結果も得られた。

SK1・2の種実同定の結果、コナラ属の果皮破片が多く認められ、ドングリ等を採取し、アク抜きを行っていたことが想定される。

また、花粉分析、プラントオパール分析の結果、SD1上層の分析結果から、周辺で活発な人間活動が行われていた可能性も示され、周辺は日当たりの良い比較的乾燥した環境が分布し、周辺域には水田が存在した可能性も示された。また、SD1上層はやや乾燥した環境で、常時は滞水がなく、短期間の流水（人為的な引水などを含む）などの可能性が示された。大溝の上層には、多量の弥生土器が廃棄されていた。下層は縄文土器を主体とする。これらのことから、2区SD1は弥生時代前期前半の稲作導入に伴って、もともとあった自然流路に手を加え、稲作時期に利用するなど、その主な用途は灌漑用であると考えておきたい。

今回の調査では、竪穴建物跡などの直接的な居住痕跡はみつからず、弥生時代前期前半の溝・土坑・谷が検出され、その出土遺物から、弥生時代前期に稲作の技術を持った集団が近隣に集落を形成し、本郷盆地で稲作を営んでいたことが明らかとなった。



第76図 弥生時代の遺構（本郷山崎遺跡1・2区）

山口県内の弥生時代前期前半の遺跡分布（第77図）をみると、本郷山崎遺跡は響灘と日本海の合流点に位置する。響灘沿岸では、角島、土井ヶ浜で同時代の痕跡が確認されており、北部九州から響灘、日本海へとさまざまなモノやヒトが動いていたことが想定され、本郷山崎遺跡はその拠点集落であった可能性が高い。

奈良・平安時代以降、中世の本郷山崎遺跡については、4区で掘立柱建物が5棟検出されるなど、西側に遺構、遺物が多く検出された。

2区で数多く検出された土坑は、用途については不明である。しかし、畿内系土師器皿（173）や、瓦質土器、青磁、白磁などの遺物が出土しており、一部には奈良・平安時代ものも含まれる。

出土した遺物は、縄文時代晩期から弥生時代前期、古墳時代、奈良・平安時代、中世までの幅広い時期にわたる。

大溝の中からは縄文時代晩期の土器が多く、周辺に縄文時代の集落があった可能性を示す。出土

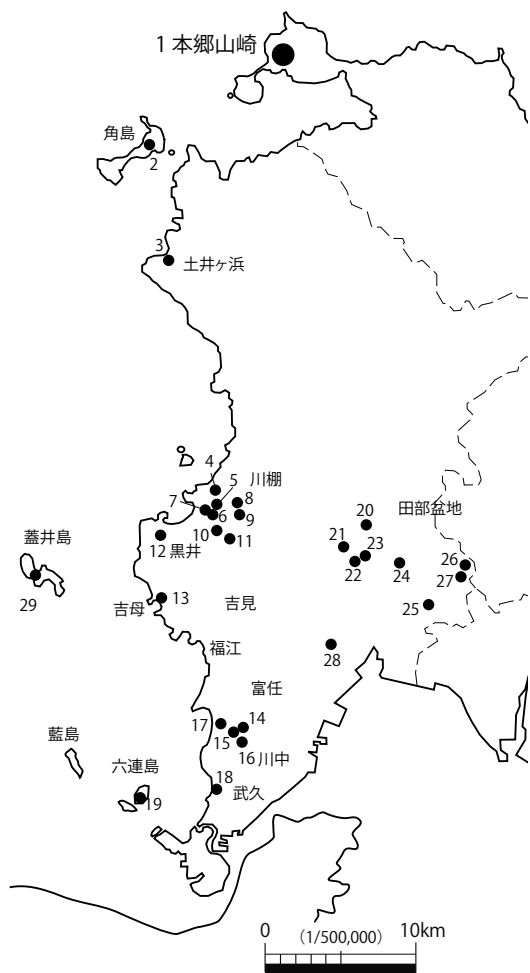
した弥生土器の大半は大溝や谷から出土したもので、縄文系の土器（突帯文土器）の深鉢・浅鉢や、北部九州の影響の強い土器（板付Ⅱa式併行）の壺や甕などを中心とする。

この他、穂摘具である石包丁、伐採具の太形蛤刃石斧、工具片刃石斧などの大陸系磨製石器が出土し、これらは稲作とともに大陸から伝わった道具類である。加えて、石鏃や打製石斧、石皿などの縄文系の石器もあわせて出土していることから、縄文的な狩猟採集生活の痕跡も色濃く残しているものと想定される。

また、石錘も多く出土することから、漁労活動にも積極的に携わっていたことが推定される。

その他、安山岩や大分県姫島産の黒曜石といった、地元で採れない石器の素材となる石材がみられることから、それらが交易によって数多くもたらされていることを示している。

土坑群や柱穴からは中世の瓦質土器の風炉（茶道の用具）や東播系須恵器のこね鉢、備前焼や輸入磁器である龍泉窯系の青磁など、広域的な流通品が出土しており、平安時代に文献に登場する荘園、向津奥庄の中心部が本郷山崎遺跡、本郷遺跡周辺であった可能性も非常に高いといえる。



- 1 本郷山崎 2 沖田 3 土井ヶ浜 4 中ノ浜 5 田島ヶ丘
- 6 無田 7 山の神 8 川棚条里 9 高野 10 吉永 11 大門
- 12 法仙庵 13 吉母浜 14 綾羅木郷 15 伊倉 16 延行条里
- 17 梶栗浜 18 武久浜 19 六連島 20 坂ノ上 21 山ノ口
- 22 下七見 23 岸本 24 上原 25 堂ノ尾山 26 松ヶ坪
- 27 柳瀬 28 新張 29 下り

第77図 長門北浦地域における弥生時代前期主要遺跡分布図
(田畑 2003 を一部改変)

2 本郷遺跡

本郷遺跡は古墳時代後半期の集落遺跡であり、柱列跡3条、土坑19基、柱穴約210個、その他の遺構1基を検出した。集落跡とそれに伴う祭祀跡を同一遺跡で確認できる点が重要であり、以下、祭祀に関わる所見を中心に総括する。

2区遺構群の評価

2区で確認された遺構は5～6世紀の柱列跡・土坑・柱穴ほかであり、堅穴建物跡や掘立柱建物跡は確認されなかった。こうした状況はこの場所が一般的な集落とは異なることを示している。さらにSX1や柱穴における祭祀行為の痕跡、ミニチュア土器など祭祀遺物の出土を考え合わせるなら、2区は祭祀に関わる場所であったと考えざるを得ない。

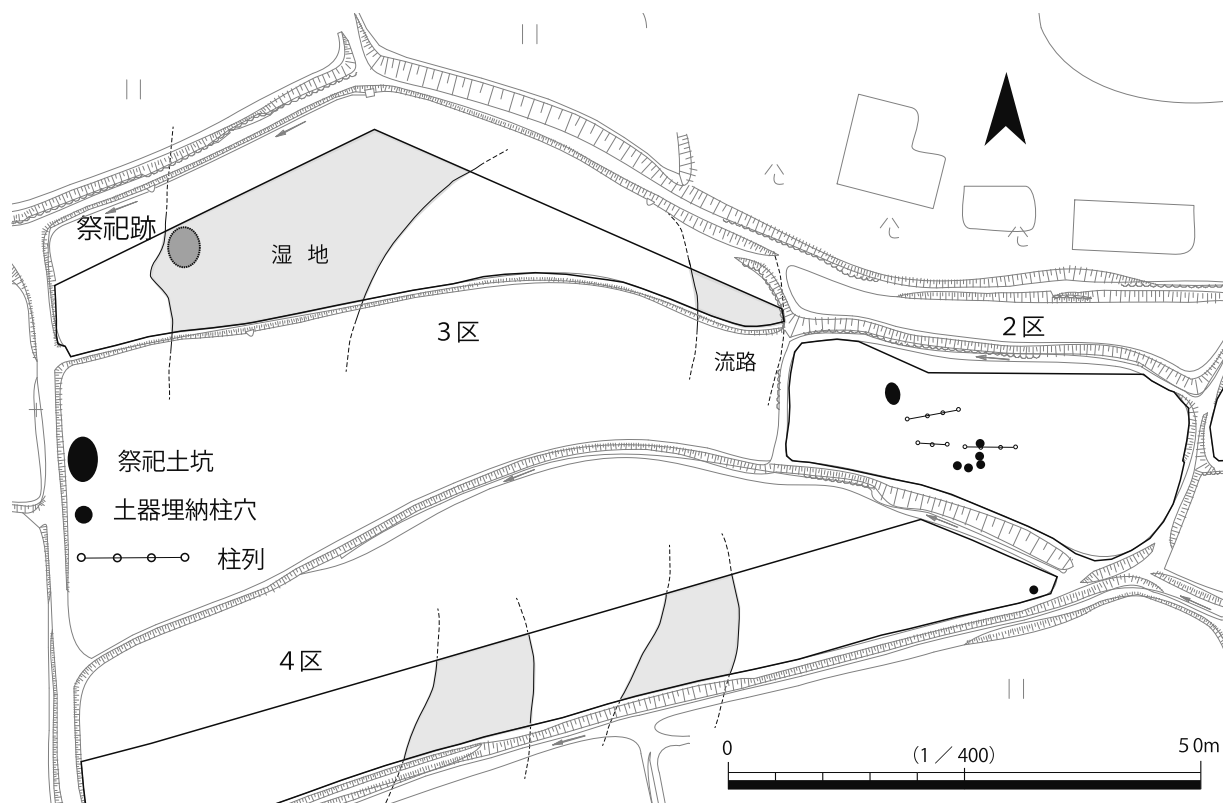
問題となるのは3区祭祀跡との関連である。後述するように3区祭祀跡は5世紀後葉～6世紀前葉と考えられ、2区の存続時期と重なる。また、3区祭祀跡出土品と2区出土の土師器やミニチュア土器には差異がみられない。したがって、2区に遺構を残した人々が3区において祭祀を行ったと考えることが自然である。ただし、3区における祭祀行為が5世紀後葉～6世紀前葉であるのに対して2区には柱列跡やSX1のように6半世紀後半以降のものを含んでいる。このことから、2区に遺構を残した人々が執り行う多くの祭祀の一端を3区において祭祀跡として垣間見ることができたと理解すべきであろう。

3区祭祀跡について

まず祭祀跡出土遺物の年代について検討する。祭祀跡は湿地中に形成されているため、後世の遺物が混入することは避けられない。時期を考える上で最も重要なものは須恵器甕（遺物番号247）であり、陶邑窯におけるTK47並行期（5世紀後葉～6世紀前葉）の資料と判断できる。これに対し杯および短頸壺（遺物番号248～251）は6世紀後半の年代が与えられる資料であり、年代幅が生じる。しかし、後者は硬質な須恵器であるにもかかわらず他の土師器と比較しても端部の欠損が多いこと、土師器類の多くが接合するのに対してこれらはほとんど接合しないこと、同時期の土師器が出土していないことなどから、後者は混入品と判断される。

以上のことから祭祀跡の形成は5世紀後葉～6世紀前葉とみることができるが、甕を用いない祭祀が別次に行われた可能性もあり、祭祀跡が複数回の祭祀行為を反映している可能性は否定できない。

次に祭祀の内容について検討する。本遺跡3区の祭祀跡は湿地の西岸近くに形成されており、いわゆる水辺祭祀に関わるものである。ミニチュア土器を祭具の中心とし模造品類がほとんどみられない点が特徴である。県内で類例を求めるなら、土井ヶ浜南遺跡（下関市豊北町）祭祀跡および植島遺跡（美祢市美東町）VI地区祭祀跡がある。いずれも5世紀の遺構であり、前者は水辺の落ち込み際、後者は集落の立地する微高地と湿地の境界に位置する。また福岡県北九州市でも4世紀終末～5世紀初頭のあまづみふるたち蜷住古立遺跡1区祭祀遺構があり、洞海湾最奥部における海人居住集落での水辺祭祀とされている。しかし、これら3遺跡ではミニチュア土器を用いるものの、これを多用する傾向



第 78 図 祭祀関連遺構配置図

はみられない。ミニチュア土器を多用する点では本遺跡 3 区祭祀跡と同時期の広島県北広島町岡の段遺跡 C 地点 SX 3 祭祀跡が近似する例であり、ここでは甗を含む須恵器が使用されている。この遺跡の祭祀跡は広島県内で最大規模のものとされている。ただし、この遺跡は内陸部の丘陵上に立地することから水辺祭祀とは直接結びつかない。

以上 4 遺跡の類例からは、5 世紀頃に各地で似通った祭祀が行われたことが看取でき、水辺祭祀を含む各種祭祀においては、祭具の構成等が祭祀の内容や地域によって少しずつ異なっていたと捉えることができよう。そして 3 区祭祀跡で祭具のひとつとして用いられた須恵器甗は陶邑窯産ないしこれに酷似するものであり、同種のものが全国的にも有数の規模と内容を持つ広島県岡の段遺跡祭祀跡でも用いられることから、これらは畿内政権の祭祀が西日本に広く浸透していたこと示している。したがって本遺跡 3 区で執り行われた水辺祭祀もまた、畿内政権の祭祀に則ったものであったと考えられる。

2 区における祭祀痕跡

すでに触れたように、2 区においても祭祀の痕跡とみられるものが存在する。注目されるのは SX 1 であり、同一遺構で須恵器甗大型破片の水平埋納、須恵器杯身完形品の水平埋納、口縁部打ち欠きを行なった平瓶の倒置埋納がみられる。平瓶の口縁打ち欠きは 3 区祭祀跡の甗と共通する行為である。柱穴にも完形品の土師器甗を埋納したもの (SP87)、土師器甗大型破片を埋土中に水平埋納するもの (SP43)、2 分の 1 程度を残す須恵器甗を底に据えたもの (SP52) などが半径約 2 m の範囲に

集中する。柱穴に土器を埋納する行為は中世後半では比較的多く発見されるが、古墳時代では類例に乏しく特異な在り方である。このほか、ミニチュア土器が土坑や柱穴から出土することも意図的なものと考えらるべきであろう。

引用・参考文献

- 大阪府立近つ飛鳥博物館 1997 『まつるかたち ―古墳・飛鳥の人と神―』
- 小南裕一 2007 「西部瀬戸内の縄文晩期土器」『縄文後晩期の西部瀬戸内地方』第18回中四国縄文研究会発表・集成資料集 中四国縄文研究会
- 小南裕一 2012 「環瀬戸内における縄文・弥生移行期の土器研究」『山口大学考古学論集 中村友博先生退任記念論文集』中村友博先生退任記念事業会
- 小南裕一 2014 「関門周辺地域における縄文晩期後葉文化の様相」『中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』第25回中四国縄文研究会資料集 中四国縄文研究会
- 小南裕一 2005 「北部九州地域における弥生文化成立前後の土器編年」『古文化談叢』九州古文化研究会
- 小南裕一・田村裕一 2005 「綾羅木郷遺跡出土の石器資料2」『研究紀要』第9号 下関市立考古博物館
- 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2007 『蜷住古立遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第360集）
- 財団法人広島県埋蔵文化財センター 1994 『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（IV）』（広島県埋蔵文化財センター調査報告書第132集）
- 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 1997 『植島遺跡 ―平成8年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告―』（山口県埋蔵文化財調査報告 第183集）
- 田畑直彦 2000 「関門地域における弥生文化の成立」『弥生文化の成立』第47回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 田畑直彦 2000 「西日本における初期遠賀川式土器の展開」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 田畑直彦 2003 「長門北浦地域における弥生文化の成立」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会
- 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム2000 『土井ヶ浜南遺跡』（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第19集）
- 深澤芳樹・庄田慎矢 2009 「先松菊里式・松菊里式土器と夜白式・板付式土器」『弥生文化誕生』弥生時代の考古学2 同成社
- 深澤芳樹 1985 「土器のかたち ―畿内第Ⅰ様式古・中段階について―」『財団法人東大阪市文化財協会 紀要Ⅰ』（財）東大阪市文化財協会
- 深澤芳樹 2000 「刻目段甕のゆくえ ―前期弥生土器における広域編年の試み―」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集
- 古庄浩明 2000 「土井ヶ浜南遺跡の祭祀」『祭祀考古 第18号』祭祀考古学会
- 古庄浩明 2001 「突帯文から綾羅木式へ ―沖田遺跡における前期弥生式土器の編年―」『法政考古学 第27集』法政考古学会

本郷山崎遺跡



本郷盆地遠景（上空から）

図版 2



本郷盆地遠景（南上空から）



本郷盆地遠景（西上空から）



遺跡遠景（南から）



調査区全景

図版 4



1・2区遠景（南から）



1・2区全景（北から）



3・4区全景



1区全景（西から）



1区 SD1 土層堆積状況（西から）



1区 SK1 土層堆積状況（南東から）



SK3 完掘（南西から）



1区 SK2 土層堆積状況（南西から）

図版 6



1区 SX1 と2区 SD1



1区 SX1 土層堆積状況（北西から）



1区 SX1 遺物出土状況（南から）



2区全景



2区全景（北東から）

図版 8



2区 SD1 全景（北東から）



2区 SD1 完掘（南西から）



2区 SD1 中央部遺物出土状況（南から）



2区 SD1 中央部遺物出土状況（西から）



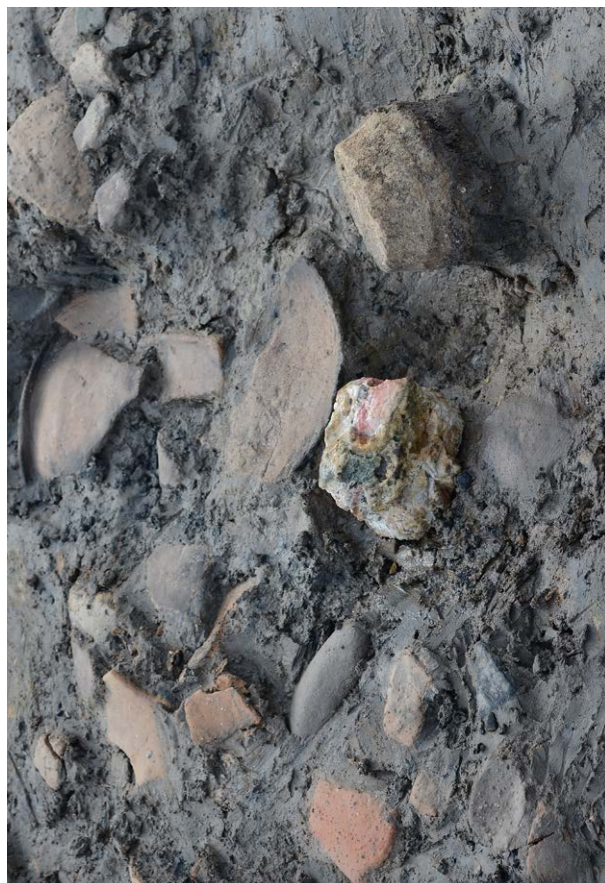
2区 SD1 石器類出土状況（西から）



2区 SD1 下層自然木出土状況（西から）



2区 SD1 弥生土器壺出土状況（南から）



2区 SD1 メノウ出土状況（南から）



2区 SD1 土層 (b-b') 堆積状況 (南から)



2区 SD1 土層 (c-c') 堆積状況 (南から)



2区 SD1 土層 (d-d') 堆積状況 (北から)



2区 SK1 土層堆積状況 (南から)



2区 SK1 完掘状況 (南から)



2区 SK1・2 検出状況 (東から)



2区 SK1 ドングリ出土状況 (南から)



2区 SK2 土層堆積状況 (南から)



2区 SK3 完掘 (南から)



2区 SK2 検出状況 (南西から)



2区 SK3 土層堆積状況 (南から)

図版 14



2区土坑群（北西から）



2区 SK6 土層堆積状況（南から）



2区 SK7 土層堆積状況（南から）



2区 SK10 土層堆積状況（南から）



2区 SK11 土層堆積状況（南から）



2区 SK64 土層堆積状況 (南から)



2区 SK64 完掘 (西から)



2区 SK10 完掘 (西から)



2区 SK20 完掘 (西から)



2区 SK11 完掘 (南から)



2区 SK34 完掘 (西から)



2区 SK16 完掘 (南東から)



2区 SK16 土器出土状況 (南東から)



3区全景（南西から）



3区南西部土層堆積状況（東から）



4区全景



4区 SP57 根石検出状況（南東から）



4区 SP56 詰石検出状況（東から）



4区 SP100 根石検出状況（東から）



4区 SP69 根石検出状況（北から）

图版 18



本郷山崎遺跡出土遺物 (1)



本郷山崎遺跡出土遺物 (2)

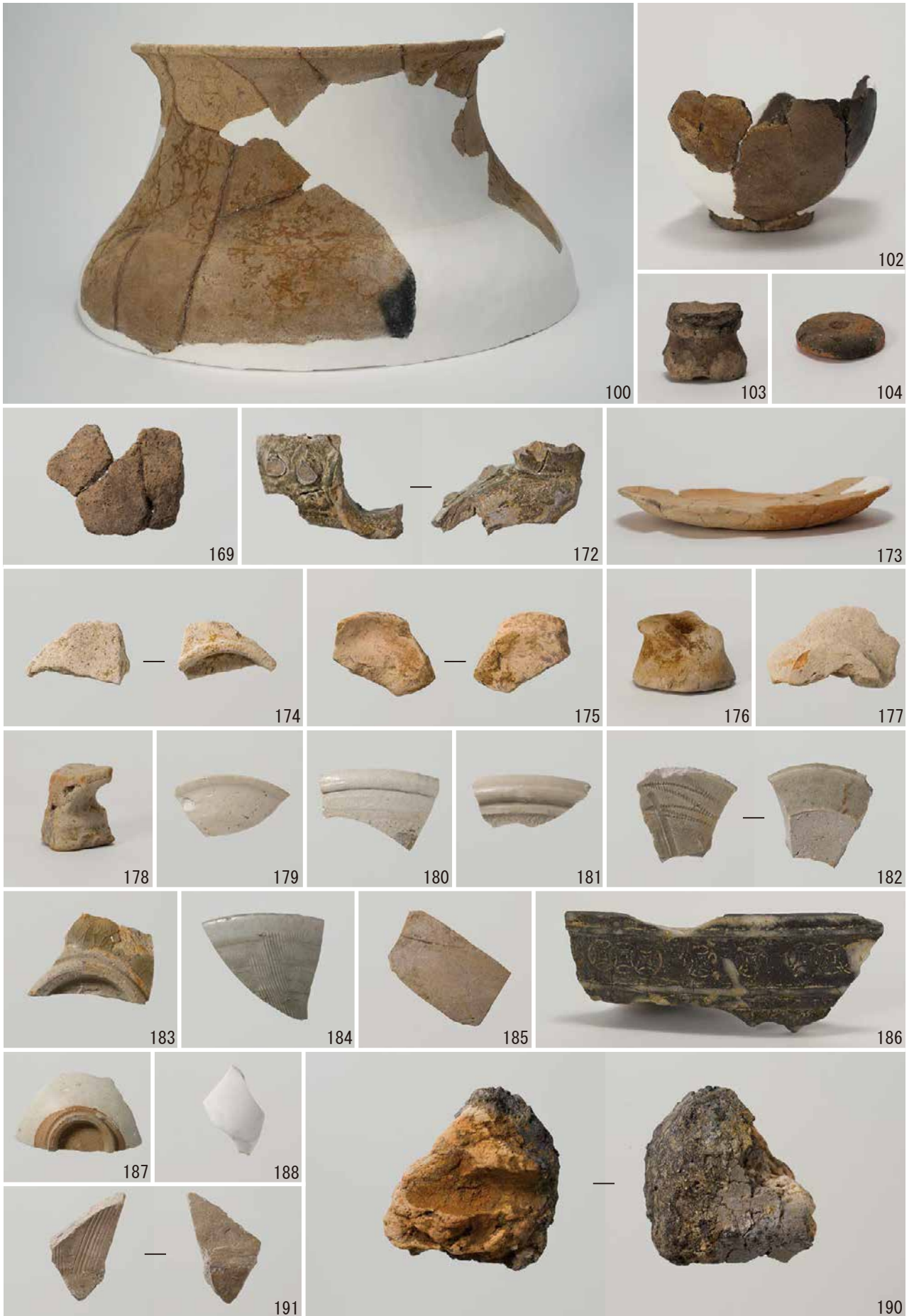
図版 20



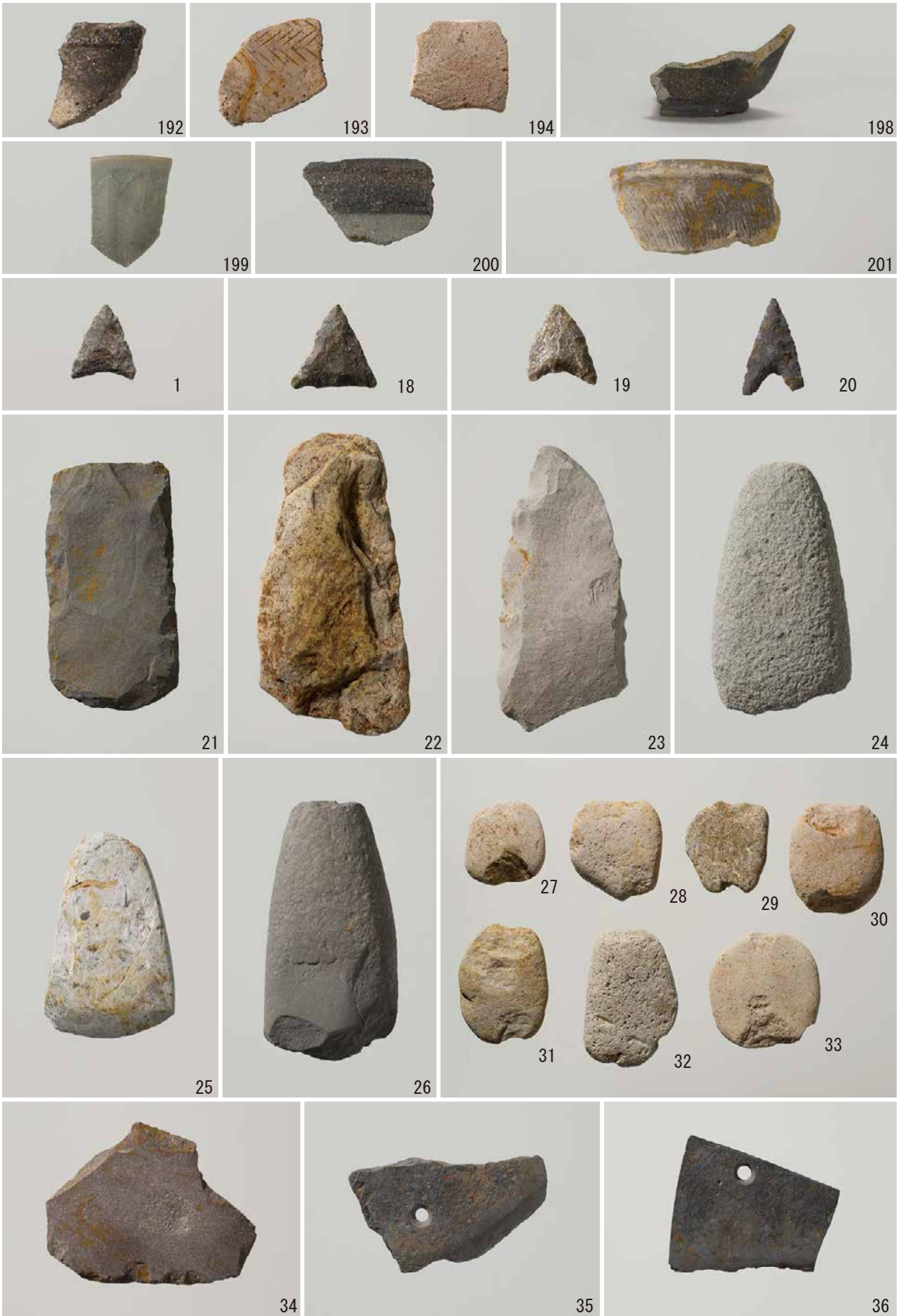
本郷山崎遺跡出土遺物 (3)



本郷山崎遺跡出土遺物 (4)



本郷山崎遺跡出土遺物 (5)

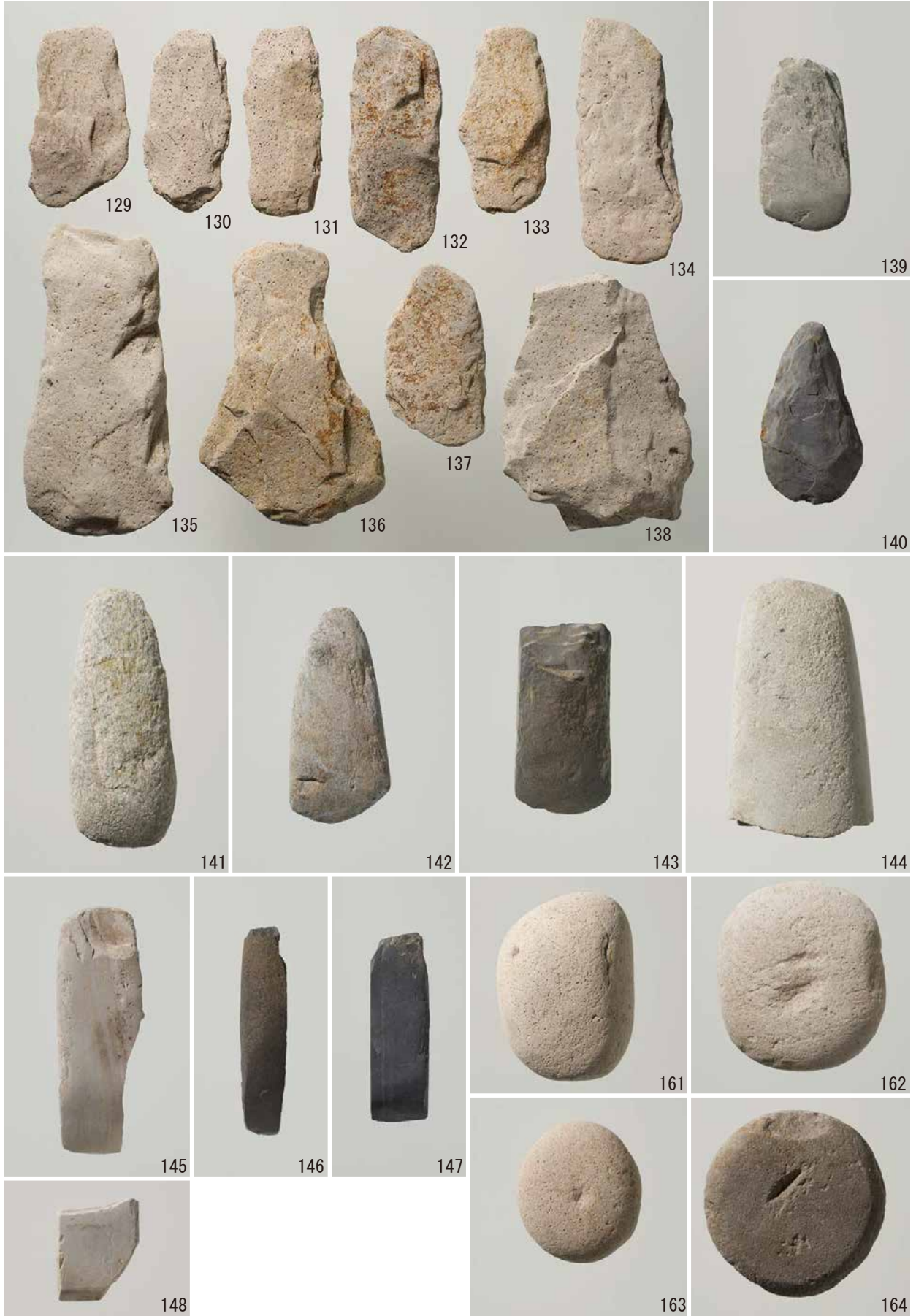


本郷山崎遺跡出土遺物 (6)

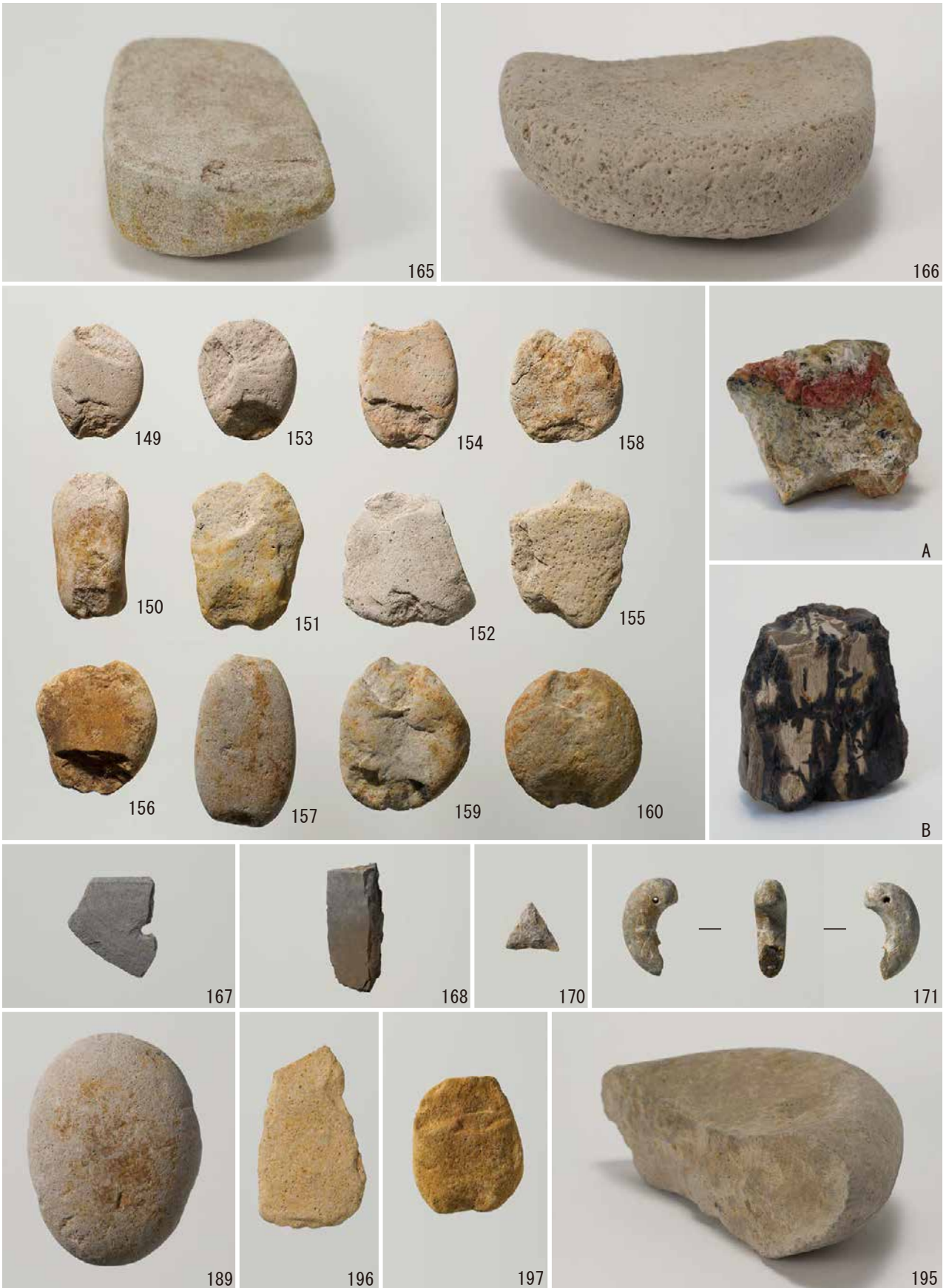
图版 24



本郷山崎遺跡出土遺物 (7)



本郷山崎遺跡出土遺物 (8)



本郷山崎遺跡出土遺物 (9)

本郷遺跡



本郷盆地と油谷湾（北上空から）



本郷遺跡及び本郷山崎遺跡遠景（南上空から）



調査区全景（南上空から）



調査区全景（上空から）



調査区全景（西上空から）



調査区全景（東上空から）



1・2区全景（南西から）



3・4区全景



2区全景（西から）



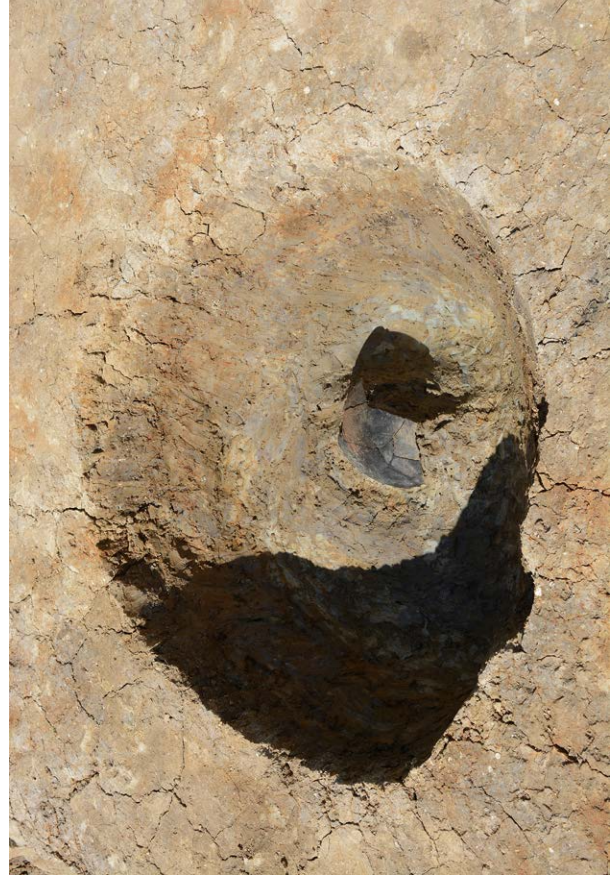
2区 SA1・2 全景（西から）



2区 SA3 全景（西から）



2区 SK8 完掘状況 (西から)



2区 SP44 土器出土状況 (東から)



2区中央部柱穴群



2区 SP54 土器出土状況 (南西から)



2区 SP87 土器出土状況（南から）



2区 SP100 土器出土状況（西から）



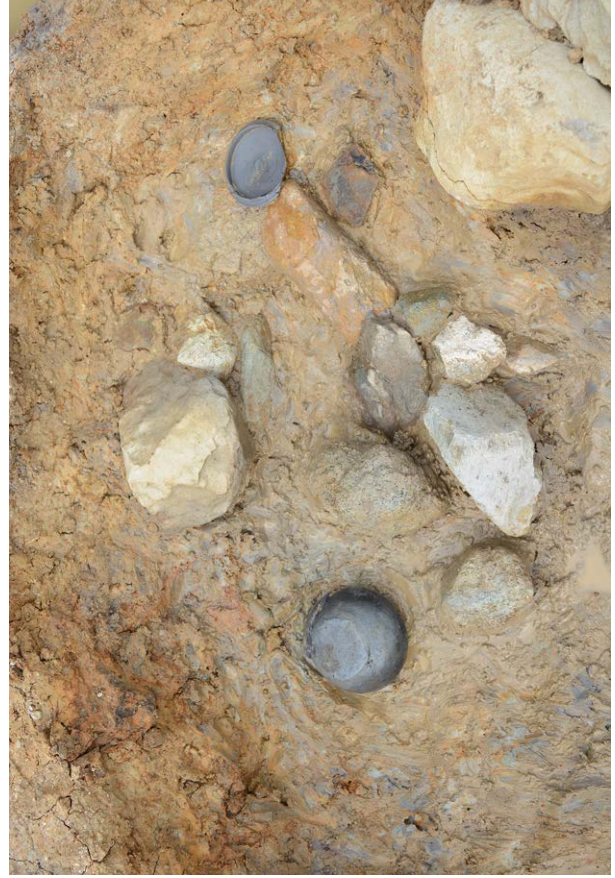
2区 SP43 土器出土状況（西から）



2区 SP52 遺物出土状況（南から）



2区 SX1 集石と土器出土状況（北から）



2区 SX1 下層土器出土状況（南から）



2区 SX1 全景（南西から）



2区 SX1 集石下の土器出土状況（南から）



3区祭祀跡全景（北から）



3区祭祀跡土器出土状況（北から）



3区祭祀跡土器出土状況（北から）



3区祭祀跡土器出土状況（南から）



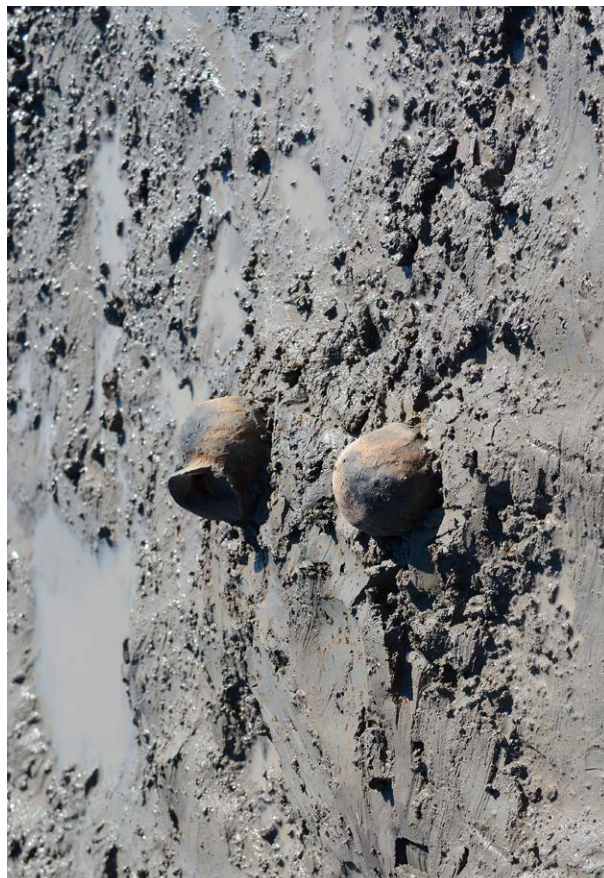
3区祭祀跡土器出土状況（北から）



3区祭祀跡土器出土状況（北から）



3区祭祀跡ミニチュア土器出土状況（西から）



3区祭祀跡ミニチュア土器出土状況（北西から）



3区祭祀跡須恵器・ミニチュア土器出土状況（北から）



3区祭祀跡土師器鉢出土状況（北から）



4区 SD1 全景 (北東から)



4区 SD1 土層堆積状況 (南西から)



4区 SD2 全景 (北西から)



4区 SD1 杭列検出状況 (北から)



4区 SK1 土器出土状況 (南西から)



4区 SP2 土器出土状況 (南から)



4区 SK1 土器出土状況 (南西から)



4区 SP1 土器出土状況 (北から)

图版 40



本郷遺跡出土遺物 (1)







图版 44

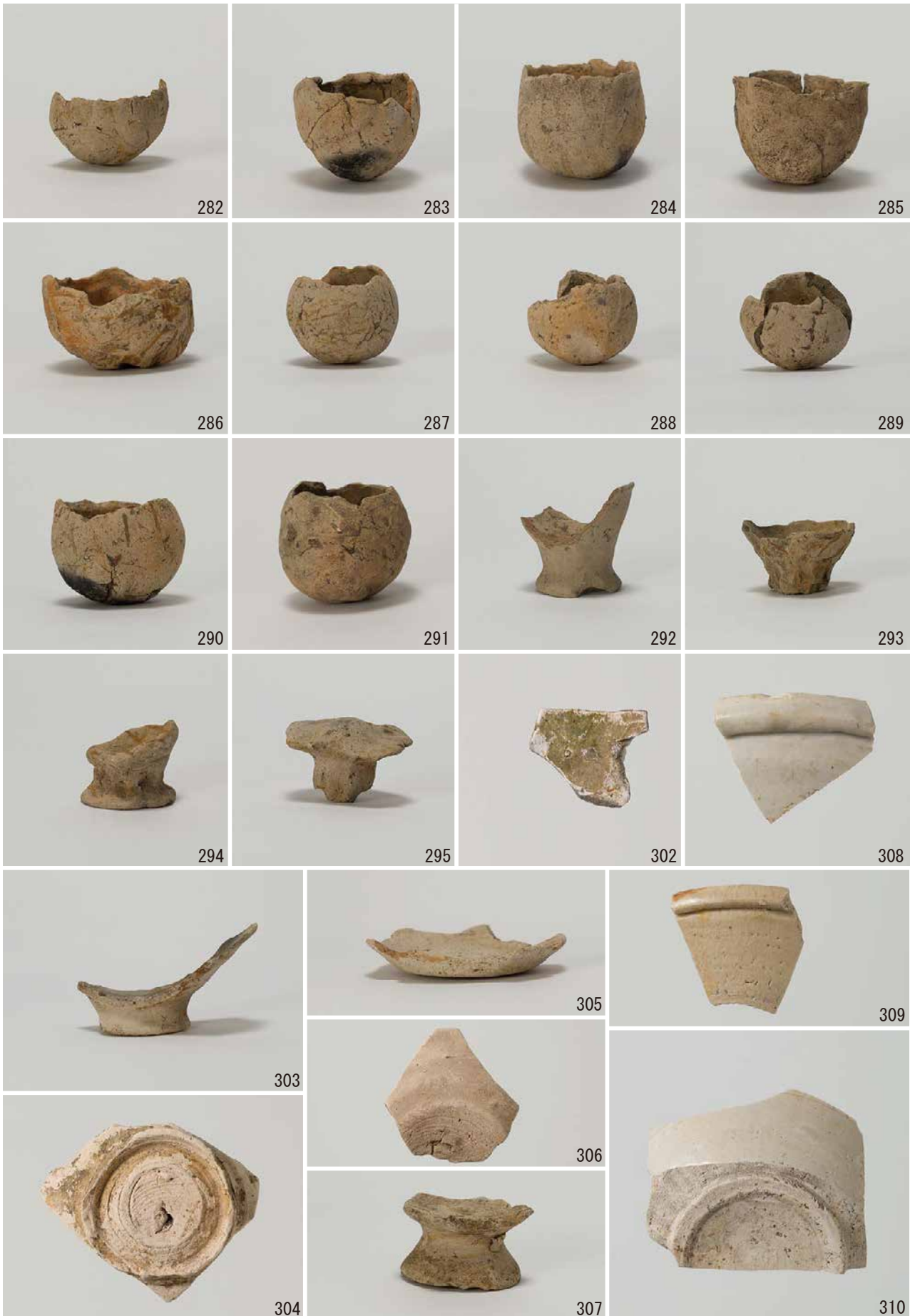


本郷遺跡出土遺物 (5)



本郷遺跡出土遺物 (6)

図版 46



本郷遺跡出土遺物 (7)



本郷遺跡出土遺物 (8)



本郷遺跡出土遺物 (9)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほんごうやまさきいせき ほんごういせき	
書名	本郷山崎遺跡 本郷遺跡	
副書名		
巻次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	
シリーズ番号	第101集	
編集著者名	宮下孝優 岩崎仁志 大矢健太郎	西本達夫
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	長門市教育委員会
所在地	〒753-0073	〒759-4101
	山口県山口市春日町3番22号	山口県長門市東深川2660番地4
	TEL 083-923-1060	TEL 0837-23-1264
発行年月日	西暦2019年3月20日(平成31年3月20日)	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな所 在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
本郷山崎 遺跡	やまぐちけん 山口県長門市 油谷向津具下	352110		34° 24' 51"	130° 58' 16"	20171010) 20180316	4,088 ㎡	ほ場 整備
本郷遺跡	やまぐちけん 山口県長門市 油谷向津具下	352110		34° 24' 56"	130° 58' 29"	20180510) 20181024	2,785 ㎡	ほ場 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本郷山崎遺跡	集落	弥生) 中世	掘立柱建物5棟、溝3条、土坑71基、谷1箇所、柱穴約210個	縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	大溝(2区SD1)を中心とする弥生時代前期の集落、奈良・平安時代から中世集落を検出 縄文時代晩期から弥生時代前期の土器・石器が多量に出土
本郷遺跡	集落	古墳) 古代 ・ 中世	柵列3列、溝2条、土坑19基、不明遺構1基、柱穴約210個、湿地に伴う祭祀跡	弥生土器、石器、土師器、須恵器、ミニチュア土器、瓦質土器、青磁、白磁、輸入陶器、滑石製模造品、瓦	古墳時代後期の柱列跡、集落跡と湿地での祭祀跡を検出 須恵器やミニチュア土器、滑石製模造品などが出土

要 約	<p>本郷山崎遺跡は、弥生時代前期の大溝(2区SD1)、谷(1・2区SX1)が検出され、多量の弥生土器・石器類が出土した。調査区の東側は弥生時代前期を主体とする集落跡の一部と推定される。遺物は突帯文土器、板付Ⅱa式期併行の弥生土器が大溝、谷からまとまって出土しており、当該期の良好な一括資料が得られた。本郷山崎遺跡は、弥生時代前半の本州への稲作伝播ルートを考える上で、重要な拠点集落であった可能性が高い。奈良・平安時代では、土坑から都城系の都城系の土師器皿等が出土しており、中世では掘立柱建物が5棟復元され、白磁や青磁などが出土する。</p> <p>本郷遺跡は、古墳時代後半期の集落遺跡で、柱列跡、土坑、柱穴などが確認された。3区の湿地においては、多数のミニチュア土器を含む祭祀跡が検出されたことにより、集落跡とそれに伴う祭祀跡を同一遺跡で確認できた。</p>
-----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第101集

本郷山崎遺跡 本郷遺跡

2019年3月20日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号
長門市教育委員会
〒759-4101 山口県長門市東深川2660番地4号

印刷 山口印刷工業株式会社
〒753-0043 山口県山口市宮島町5番11号